

上武道路・旧石器時代遺跡群(2)

萱野Ⅱ遺跡
亀泉坂上遺跡

堤沼上遺跡
上泉唐ノ堀遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

上武道路・旧石器時代遺跡群(2)

萱野Ⅱ遺跡
亀泉坂上遺跡

堤沼上遺跡
上泉唐ノ堀遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



- 1 今井道Ⅱ遺跡 2 美帆北三木堂Ⅱ遺跡 3 富田宮下遺跡
- 4 富田西原遺跡 5 富田高石遺跡 6 富田漆田遺跡
- 7 富田下大日遺跡 8 江木下大日遺跡 9 豊野Ⅱ遺跡
- 10 堤沼上遺跡 11 亀泉坂上遺跡 12 上泉唐ノ瀬遺跡

赤城山は、長く緩やかにのびる裾野をもつことで知られる。南麓では、いくつもの小河川が流れ下り、ローム台地と低地が混在する地形的様相を見せる。

この地域は、数多くの旧石器時代遺跡が存在することで有名である。上武道路(国道17号バイパス)建設に伴い、さらに多くの石器群が加わることとなった。

(伊勢崎市上空より北方を望む)



萱野Ⅱ遺跡 上段：第1文化層 下段：第2文化層



萱野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点 接合資料(黒色安山岩)



亀泉坂上遺跡
第2文化層 接合資料



上泉唐ノ掘遺跡

第1文化層

上段：尖頭器 ナイフ形石器
下段：エンドスタイルバー等

上泉唐ノ掘遺跡
第2文化層
雲母石英片岩製の資料





上泉唐ノ堀遺跡
第2文化層 ナイフ形石器



上泉唐ノ堀遺跡
第2文化層 石刃

土層堆積の様子
上泉唐ノ堀遺跡

ローム層が厚く堆積する様子が観察できる。ローム層中には、赤城火山、榛名火山、浅間火山を供給源とするロームカルテラと、始良Tn火山灰(AT)が認められる。



序

通称「上武道路」は、一般国道17号線のバイパスとして計画され、埼玉県熊谷市と本県前橋市を結ぶ基幹道路です。既に平成4年2月には、熊谷から国道50号に至るまでの区間が供用開始されています。この区間では、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査を実施し、35遺跡の存在が明らかになり、その発掘成果については調査報告書として公表いたしました。

平成11年からは、国道50号以北の建設工事が始まり、当事業団が主体となり埋蔵文化財の発掘調査を進めております。そこでは、旧石器時代から近世に至るまで、実に多くの遺構・遺物が発見されています。本書では、特に旧石器時代の遺物についてまとめました。前橋市江木町の萱野団地から上泉町に至るまでの事業区間から発見された4遺跡を対象として、旧石器時代の石器群を報告しています。

上武道路が通過する赤城山南麓地域では、これまでも数多くの旧石器時代の遺跡が確認されています。この地で岩宿遺跡の調査研究が実践され、旧石器時代研究の扉を開いたことは、日本の歴史学にとっても特筆すべきことです。今回、ここに新たな資料が加わることにより、旧石器時代の地域社会を考える上で大きく寄与できるものと考えております。

発掘調査から報告書刊行まで、国土交通省関東地方整備局高崎工事事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様には、ひとかたならぬご指導、ご協力を賜りました。厚く感謝の意を表します。

最後に、本報告書が、地域の歴史解明のために、多くの人々によって有効に活用されることを願い序といたします。

平成22年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 栄一

例 言

1 本書は一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う発掘調査報告書であり、旧石器時代を対象として収録した。旧石器時代の石器群は、今井道上Ⅱ遺跡・荒砥北三木堂Ⅱ遺跡・富田宮下遺跡・富田西原遺跡・富田高石遺跡・富田漆田遺跡・富田下大日遺跡・江木下大日遺跡・萱野Ⅱ遺跡・堤沼上遺跡・亀泉坂上遺跡・上泉唐ノ堀遺跡で検出された。そのうち本書は、萱野Ⅱ遺跡・堤沼上遺跡・亀泉坂上遺跡・上泉唐ノ堀遺跡を対象として収録した。

今井道上Ⅱ遺跡・荒砥北三木堂Ⅱ遺跡・富田宮下遺跡・富田西原遺跡・富田高石遺跡・富田漆田遺跡・富田下大日遺跡・江木下大日遺跡については、既刊、「上武道路・旧石器時代遺跡群(1)」を参照されたい。

2 遺跡の所在地 萱野Ⅱ遺跡-前橋市江木町・堤町、堤沼上遺跡-前橋市堤町、亀泉坂上遺跡-前橋市亀泉町、上泉唐ノ堀遺跡-前橋市上泉町

3 事業主体 国土交通省

4 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

5 調査期間 萱野Ⅱ遺跡-H13/4/1~H14/3/31・H14/10/1~H15/3/31・H15/4/1~H16/3/31、堤沼上遺跡-H14/12/1~H15/3/31・H15/4/1~H16/3/31、亀泉坂上遺跡-H14/12/1~H15/3/31・H15/4/1~H16/3/31・H16/4/1~H17/3/31、上泉唐ノ堀遺跡-H14/10/1~H15/3/31・H15/4/1~H15/11/30・H16/4/1~H17/3/31

6 調査組織 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

小野宇三郎(理事長)、吉田 豊・赤山容造(常務理事)、神保佑史(事業局長)、住谷 進(管理部長)、巾隆之・能登 健(調査研究部長)、大島信夫(総務課長)、真下高幸・小山友孝(調査研究課長)、笠原秀樹・小山建夫・須田朋子・吉田有光・森下弘美・片岡徳雄・今井もと子・内山佳子・若田 誠・佐藤美佐子・本間久美子・北原かおり・狩野真子・松下次男(事務担当)

7 調査担当 萱野Ⅱ遺跡-女屋和志雄・洞口正史・井上昌美・新井秀樹・井原陽一・青木さおり・津島秀章、堤沼上遺跡-女屋和志雄・洞口正史・田村公夫・平方篤行・岡部 豊・青木さおり・新井秀樹、亀泉坂上遺跡-女屋和志雄・田村公夫・平方篤行・岡部 豊・青木さおり・新井秀樹、上泉唐ノ堀遺跡-女屋和志雄・青木さおり・新井秀樹

8 整理主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

9 整理期間 平成20年4月1日~平成22年3月31日

10 整理組織 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 高橋勇夫 須田栄一(平成21年7月~)

常 務 理 事 津金澤吉茂(平成20年度) 木村裕紀

事 業 局 長 相京建史(平成21年度)

総 務 部 長 笠原秀樹(平成21年度)

調 査 研 究 部 長 飯島義雄

資 料 整 理 部 長 相京建史(平成20年度) 石坂 茂(平成21年度)

総務・経理 G L 笠原秀樹(平成20年度) 佐嶋芳明

資 料 整 理 G L 大木紳一郎

事 務 担 当 須田朋子・斉藤恵利子(平成20年度)・柳岡良宏・矢島一美・齋藤陽子(平成20年度)・高橋次代(平成21年度)・田口小百合(平成21年度)・今井もと子・若田 誠・

佐藤美佐子・本間久美子・北原かおり・狩野真子・武藤秀典

整理担当 津島秀章

- 11 本書作成の担当者は次のとおりである。

編集 津島秀章

執筆 第7章「亀泉坂上遺跡におけるテフラ分析」-株式会社古環境研究所、第8章「赤碧玉・褐色碧玉について」-飯島静男、第8章「上武道路・旧石器時代遺跡群出土石器の使用痕分析」-石田典子、第8章「萱野Ⅱ遺跡他出土黒曜石製石器の産地推定」-株式会社パレオ・ラボ
上記以外 津島秀章

遺物写真 佐藤元彦

器械実測 伊東博子 岸 弘子 田所順子

- 12 テフラ分析は、株式会社古環境研究所に委託した。黒曜石製石器の原産地分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。また、石器の使用痕分析に関しては石田典子氏に依頼した。
- 13 出土遺物と整理済み記録資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管し、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が管理している。
- 14 本書の作成にあたっては、次の方々に有益な指導と助言を賜った。記して感謝の意を表す次第である。
会田容弘 飯島静男 池田朋生 石田典子 稲田孝司 小畑弘己 鹿又喜隆 栗島義明 小菅将夫
橋本勝雄 羽石智治 森崎秀一 山田しょう

凡 例

- 1 石器の出土地点は、国家座標(旧座標第Ⅸ系)に基づいた数値である。日本平面直角座標系第Ⅸ系の原点、緯度36°0'0"0000、経度139°50'0"000を(0,0)とした数値である。遺物分布図等に見受けられる座標軸の数値は、この日本平面直角座標系第Ⅸ系上の値である。
- 2 個々の石器にはそれぞれ固有の石器番号がついている。文章中、石器実測図、各種図表に記載されている石器番号は、石器に付けられたその固有の番号である。
- 3 石器石材の鑑定は、飯島静男氏(群馬地質学研究会員)による。
黒曜石製、黒色安山岩製と記載された石器については、石材同定は本書の編集者である津島秀章がおこなった。なお、黒色安山岩という石材名は、中東・飯島1984による。
- 4 本文中において記述されたテフラの名称は、以下による。

浅間Bテフラ	As-B	赤城-小沼ラビリー	Ag-KLP	榛名-二ツ岳伊香保テフラ	Hr-IP
浅間C軽石	As-C	赤城-鹿沼テフラ	Ag-KP	榛名-二ツ岳渋川テフラ	Hr-FA
浅間-総社軽石	As-SJ	赤城-湯の口軽石	Ag-UP	榛名箱田テフラ	Hr-HA
浅間-板鼻黄色軽石	As-YP			榛名-八崎軽石	Hr-HP
浅間-大窪沢第1軽石	As-Ok1				
浅間-白糸軽石	As-Sr			北橋スコリア	HkS
浅間-板鼻褐色軽石	As-BP			始良Tn火山灰	AT
浅間-室田軽石	As-MP				

目 次

口絵
序
例言
凡例

第1章 遺跡群をとりまく環境

- 1 遺跡群の位置 …………… 1
- 2 発掘調査に至る経緯・経過 …………… 1
- 3 遺跡群周辺の地理的環境 …………… 1
- 4 赤城山南麓の旧石器時代遺跡の概要 …… 2

第2章 遺跡群の概要

- 1 旧石器時代の調査の方法 …………… 7
- 2 基本層序 …………… 7
- 3 石器の分類 …………… 8
- 4 旧石器時代の文化層 …………… 10

第3章 萱野Ⅱ遺跡

- 1 概要 …………… 12
- 2 萱野Ⅱ遺跡・第1文化層 …………… 17
 - I 出土石器
 - II 石器の分布
- 3 萱野Ⅱ遺跡・第2文化層 …………… 27
 - I 出土石器
 - II 石器の分布
- 4 萱野Ⅱ遺跡・第3文化層 …………… 51
 - I 出土石器
- 5 萱野Ⅱ遺跡・第4文化層A地点 …… 54
 - I 出土石器
 - II 石器の分布
- 6 萱野Ⅱ遺跡・第4文化層B地点 …… 66
 - I 出土石器
 - II 石器の分布

- 7 萱野Ⅱ遺跡・第4文化層C地点 …… 104
 - I 出土石器
 - II 石器の分布
- 8 萱野Ⅱ遺跡・第4文化層D地点 …… 106
 - I 出土石器
 - II 石器の分布

第4章 堤沼上遺跡

- 1 概要 …………… 108
- 2 堤沼上遺跡・第1文化層 …………… 112
 - I 出土石器
 - II 石器の分布
- 3 堤沼上遺跡・第2文化層 …………… 114
 - I 出土石器
 - II 石器の分布

第5章 亀泉坂上遺跡

- 1 概要 …………… 128
- 2 亀泉坂上遺跡・第1文化層 …………… 133
 - I 出土石器
 - II 石器の分布
- 3 亀泉坂上遺跡・第2文化層 …………… 141
 - I 出土石器
 - II 石器の分布
- 4 亀泉坂上遺跡・第3文化層 …………… 182
 - I 出土石器
 - II 石器の分布

第6章 上泉唐ノ掘遺跡

1	概要	187
2	上泉唐ノ掘遺跡・第1文化層A地点	191
	Ⅰ 出土石器	
	Ⅱ 石器の分布	
3	上泉唐ノ掘遺跡・第1文化層B地点	240
	Ⅰ 出土石器	
	Ⅱ 石器の分布	
4	上泉唐ノ掘遺跡・第2文化層	247
	Ⅰ 出土石器	
	Ⅱ 石器の分布	
5	上泉唐ノ掘遺跡・第3文化層	415
	Ⅰ 出土石器	
	Ⅱ 石器の分布	
6	参考資料	417

第7章 自然科学分析

1	亀泉坂上遺跡におけるテフラ分析	418
---	-----------------	-----

第8章 考察

1	萱野Ⅱ遺跡他出土黒曜石製石器の産地推定	427
2	黒色安山岩製石器の原産地分析	436
3	赤碧玉・褐色碧玉について	飯島静男 440
4	上武道路・旧石器時代遺跡群出土石器の使用痕分析	石田典子 442

引用文献一覧

出土石器一覧表

写真図版

報告書抄録

第1章 遺跡群をとりまく環境

1. 遺跡群の位置

遺跡群は、関東平野最奥部の赤城山南麓地域に位置する。一般国道17号(上武道路)については、埼玉県深谷市方面から前橋市今井町の国道50号線合流点に達する第I期計画路線区間は、昭和48年度から昭和63年度にかけて埋蔵文化財調査が実施され、調査報告書も刊行済みである。本書で扱う遺跡群は、上武道路第II期計画路線区間に相当し、国道50号線合流点より北に延び前橋市上泉町に達する区間に立地する。この区間の上武道路は、赤城山の南麓地域を南東から北西方向に貫くよう走向しており、したがって遺跡地もこれをトレスするように立地する。行政組織でいうと、本書で扱う遺跡群は、すべて前橋市に所在する。

2. 発掘調査に至る経緯・経過

一般国道17号(上武道路)改良工事は、群馬県内に関しては、埼玉県深谷市との県境から前橋市田口町に至るまでの区間として計画されている。すでに、前橋市今井町の国道50号線に至るまでのI期工事が完了し、平成4年度に供用が開始されている。I期工事については、昭和48年度から昭和63年度にわたって、群馬県教育委員会および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって発掘調査がおこなわれた。その遺跡数は35遺跡、調査面積は534,000㎡に及ぶ。これらの遺跡の整理作業は、昭和56年度から平成7年度にかけて財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。その成果は、26冊の発掘調査報告書として刊行されている。

国道50号線以北の工事区間は、全体計画の第7工区に相当する。第7工区建設工事に先立ち、建設省(現国土交通省)関東地方整備局と群馬県教育委員会との間で、埋蔵文化財の保護に関する協議が交わされ、工事に伴い埋蔵文化財が破壊される地域については事前に発掘調査をおこなうこととなった。平成11年4月1日付けで、建設省(現国土交通省)関東地方整備局と群馬県教育委員会および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団による協定書が交わされた。発掘調査は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託され、国道50号線から前橋市上泉町に至るまでの区間は、平成11年度から平成16年度まで実施された。

その出土遺物等の整理作業については、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省関東地方整備局の委託を受け、平成15年度より開始された。その後、事業の進捗に伴い、協定書変更の必要が生じ、平成16年11月10日付けで、次いで平成20年12月8日付けで新しい協定書が交わされた。

本書では、第7工区の諸遺跡の中で、旧石器時代の遺物が出土した遺跡を報告している。その整理作業は、平成17年度から平成21年度にかけて実施された。報告書は、今井道Ⅱ遺跡から江木下大日遺跡に至るまでの第7工区(その1)に相当する部分を第1分冊(既刊)とし、堂野Ⅱ遺跡から上泉唐ノ堀遺跡に至るまでの第7工区(その2)に相当する部分を第2分冊として刊行した。本書は、その第2分冊に相当する。

3. 遺跡群周辺の地理的環境(図2)

遺跡群は、赤城山の南麓地域に位置する。赤城山は、裾野が緩やかに長くのびる山体を呈することで有名であり、山麓とはいいいながらも傾斜は緩やかで、生活に適した土地が広がっている。遺跡群は、このような地域の標高90~135mの範囲に立地する。

赤城山は、群馬県のほぼ中央に位置する第四紀火山である。赤城火山の活動の始まりは、約40~50万年前と考えられており、活動の歴史は、古期成層火山形成期、新时期成層火山形成期、中央火口丘形成期に三期区

分されている(群馬県史編纂委員会 1990)。

古期成層火山形成期では、約20～30万年前に発生した梨木泥流が注目すべき現象である。これは、山体崩壊による大規模な岩屑なだれであり、東麓から南東麓にかけての地域と南西麓の地域といった広い範囲に認められる。その地域には、現在でも、この岩屑なだれに起因する「ながれ山」と称される丘陵がいくつもみられる。今井三騎堂遺跡(〔財〕群理文2004b)・今井見切塚遺跡(〔財〕群理文2007)が立地する多田山丘陵は、その代表的なものである。古期成層火山形成期は、約13万年前まで続いたと考えられている。

新期成層火山形成期は、主に溶岩流とテフラの噴出からなり、浸食の進んだ古期の火山体を覆っている。この活動期は、火砕流を伴う噴火が多く、南麓地域に認められる大胡火砕流はその一つである。新期成層火山の形成は、約4.5万年前まで続いたとされる。

中央火口丘形成期には、山頂部にカルデラが形成されるとともに、赤城鹿沼軽石が噴出された。この鹿沼軽石を伴う噴火の後に、カルデラの中では地蔵岳、長七郎山などの中央火口丘群が形成された。現在、長七郎山の西に小沼と呼ばれる小さな湖がある。これは、約25万年前の水蒸気爆発によって生まれた火山湖であり、その爆発に伴って小沼ラピリが噴出した。それは、東麓から南西麓にかけて堆積が認められる。その後、現在に至るまでの赤城火山の地形変遷は、浸食作用が卓越している。浸食により削られた土砂は山麓に堆積し、白川扇状地、荒砥川扇状地、粕川扇状地を形成している。本遺跡群の中で、今井道上Ⅱ遺跡と荒砥北三木堂Ⅱ遺跡は荒砥川の左岸側に立地し、後期更新世前半に形成された扇状地に位置する。その他の各遺跡(富田宮下遺跡・富田西原遺跡・富田高石遺跡・富田漆田遺跡・富田下大日遺跡・江木下大日遺跡・堂野Ⅱ遺跡・堤沼上遺跡・亀泉坂上遺跡・上泉唐ノ塚遺跡)は、約5万年前に発生した大胡火砕流の堆積が認められる範囲に立地している。

遺跡群が位置する地域では、荒砥川、大泉坊川、木船川、寺沢川などの小河川が南流する。これらの河川は、広瀬川低地帯を流れる広瀬川に合流する。そして、広瀬川は、このように赤城山南麓を流れ下る諸河川の水を集め、群馬県伊勢崎市にて最終的に利根川に至る。当該地域では、前述した小河川により開析された低地および湧水起源と考えられる低地が樹枝状に入り組み、それとローム台地とが複雑に混在する地形的様相を呈している。

4. 赤城山南麓の旧石器時代遺跡の概要(図1、表1)

赤城山南麓地域は、相沢忠洋氏による岩宿遺跡(杉原1956)の発見に代表されるように、日本の旧石器文化研究にとって重要な意味をもつ地域である。岩宿遺跡の発見を端緒とし、相沢氏が同地域をフィールドとして精力的に研究活動を行ったことは学史上の特筆すべき出来事である。

現在に至るまで、この地域において、数多くの旧石器時代の遺跡が確認されている。明治大学考古学研究室によって、武井遺跡(杉原1977)や藪塚遺跡(須藤1986)の調査が実施された。また、昭和49年から昭和63年にかけての一級国道17号(上武道路)第Ⅰ期建設工事に伴う発掘調査により、書上本山遺跡(〔財〕群理文1992)や、堀下八幡遺跡(〔財〕群理文1990)など8ヶ所で旧石器時代の遺跡が発見された。大型環状ブロック群である下牛伏遺跡(〔財〕群理文1986)や三和工業団地Ⅰ遺跡(〔財〕群理文1999b)も当該地域に立地する。

群馬の東部地域では、後期旧石器時代に相当するローム層では、一般的に一つの暗色帯が認められる。これをテフラとの関係でとらえると、暗色帯の上位付近か、あるいはその直上層の下位付近にATの極大部分が観察できる。また、暗色帯の直下層の上位にAg-KPやHr-HAが位置する(〔財〕群理文1989、〔財〕群理文1992d、〔財〕群理文1999b)。このような層位的な事実からすると、この地域の暗色帯は、後期旧石器時代の

前半期に形成された土層と考えられる。赤城山南麓地域では、以上のようないわゆるAT下暗色帯に出土層位が求められる石器群が最も多く存在する。その代表的なものとして、日本の旧石器研究の扉を開いた岩宿I石器群(杉原1956)、大規模環状ブロック群が確認された下触牛伏遺跡第2文化層石器群((財)群埋文1986)と三和工業団地I遺跡第4文化層石器群((財)群埋文1999b)、環状礫群が確認された武井I石器群(杉原1977、加部・小菅1995)などがあげられる。当該層位に含まれる石器群には、剥片生産技術の違いやナイフ形石器などの主要器種における技術形態的な差違が認められることから、形成時期の異なる石器群として少なくとも2段階に分別される可能性が高い。

AT降下以後の段階としては、帰属層位がATとAs-BPとの間に求められる石器群がくる。当該地域では該当する石器群が少なく、現段階では、波志江西宿遺跡第2文化層石器群や江木下大日遺跡石器群などが上げられる((財)群埋文2004a、2008、桜井2005)。これらの石器群では、石刃や縦長剥片を素材とするエンドスクレイパーを特徴的に組成する。ところで、群馬県西部地域ではテフラの供給源である浅間火山に近いことから、ATとAs-BPとの間にAs-MPが一次堆積の状態と認められる。東部地域とは異なる状況をみせている。西部地域では、As-BPとAs-MPとの間の層位から、多胡蛇黒遺跡第1文化層石器群と白岩民部遺跡第1文化層石器群が検出されている((財)群埋文1993、2000)。前述した波志江西宿遺跡第2文化層石器群と江木下大日遺跡石器群は、これらの石器群と主要器種の技術形態的な特徴が共通しており、編年的に同じ段階と理解することができる。

群馬県では、As-BPを含むローム層から検出される石器群が特に少ない。当該期は、学史的に「岩宿II段階」として有名である。群馬の東部地域では、供給源である浅間火山から距離が遠いためにAs-BPの堆積状況が良好でなく、当該期の石器群を層位的に細分することにも限界がある。赤城山南麓地域では、飯土井中央遺跡((財)群埋文1991)、十二社遺跡(加部・大工原・町田1992)などで、共に約100点の石器がAs-BPを含むローム層から検出されている。近年、東長岡戸井口遺跡、今井三騎堂遺跡、荒砥北三木堂II遺跡などでも、出土層位からすると当該期と考えられる石器群が検出されており類例が増えつつある((財)群埋文1999、2004b、2008)。また、富田宮下遺跡では、古代の住居跡からの出土であるが、国府型ナイフ形石器に関連する石器(黒曜石製)が1点出土しており、当該期に含まれる可能性をもつ資料として注目される((財)群埋文2008)。

As-OkIを含むローム層中からは、槍先形尖頭器を組成する石器群が出土している。当該期の石器群に関しては、石刃技法の出現頻度やナイフ形石器の組成割合あるいは尖頭器の技術形態的特徴などを指標とすると、形成時期の異なるものとして、いくつかの段階に分別して理解することができる。武井II石器群(杉原1977)、下触牛伏遺跡第1文化層石器群((財)群埋文1986)、東長岡戸井口遺跡第1文化層石器群((財)群埋文1999a)、今井三騎堂遺跡第2文化層石器群((財)群埋文2004b)などで、出土点数が数千点に及ぶ大規模石器群が認められる。その一方、三和工業団地I遺跡第2文化層石器群((財)群埋文1999b)、清水遺跡第1文化層石器群(萩谷1995)、上植木光仙房遺跡石器群((財)群埋文1988)のように槍先形尖頭器を中心とした器種に組成が限定される小規模な石器群が存在している。また、近年、富田下大日遺跡では、桶状剥片をもつ尖頭器を組成する良好な石器群が検出されている((財)群埋文2008)。

細石刃文化期の石器群は、層位的には、As-SP降下前後からAs-YP降下前までに位置づけられる。代表的な遺跡として、杵形遺跡(宮城村教育委員会1981、相沢・関矢1988)、市之間前遺跡(宮城村教育委員会1991)、三和工業団地IV遺跡(伊勢崎市教育委員会2004)、柏倉吉見沢遺跡(前橋市教育委員会2005)、頭無遺跡(前原・関根1988)、鳥取福蔵寺II遺跡(前橋市教育委員会1998・北関東細石器研究グループ2007)などが挙げられる。頭無遺跡、鳥取福蔵寺II遺跡では、硬質頁岩製の荒屋型彫刻刀形石器を組成する石器群が確認されている。

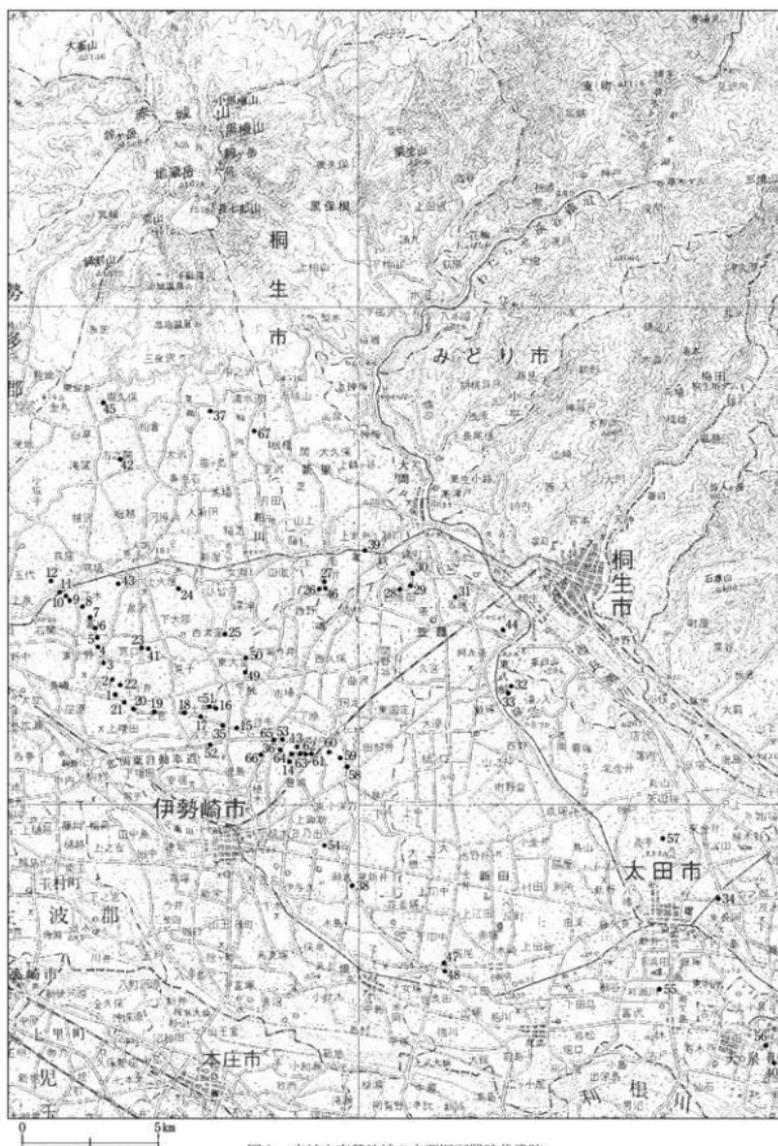


図1 赤城山南麓地域の主要旧石器時代遺跡

4. 赤城山南麓の旧石器時代遺跡の概要

表1 赤城山南麓地域の主要旧石器時代遺跡一覧

番号	遺跡	石器群の帰属層位 (ロームに含まれるテフラを指標)						その他	文献
		As-YP~As-Ok1	As-Ok1-Ok2	As-Ifgroup	As-MP~AT	ATF褐色層	褐色層下部~下層		
1	今井遺上Ⅱ				●	●	●		(財) 群文2006c
2	鹿越北三本堂Ⅱ	●			●	●	●	縄文ブロック群	(財) 群文2006a (財) 群文2006b
3	雷田宮下			●		●	●		(財) 群文2006c (財) 群文2006a
4	雷田西原					●	●		(財) 群文2006c
5	雷田高石					●	●		(財) 群文2006c
6	雷田津田					●	●		(財) 群文2006c
7	雷田下大目		●			●	●		(財) 群文2006c
8	江木下大目					●	●		(財) 群文2006c
9	堂野Ⅱ		★	★	★	★			本報古書
10	堤沼上		★			★			本報古書
11	亀京坂上		★			★			本報古書
12	上泉野ノ原		★			★	★		本報古書
13	三組工業団地Ⅰ	●	●		●	●	●	縄文ブロック群	(財) 群文1999b (財) 群文1992a
14	青上本山					●	●		(財) 群文1990
15	瀬下八幡					●	●		(財) 群文1990
16	下船平伏		●			●	●	縄文ブロック群	(財) 群文1986
17	観土舟二本松		●			●	●		(財) 群文1991b
18	観土舟中央				●	●	●		(財) 群文1991a
19	二之宮千足				●	●	●		(財) 群文1992c
20	二之宮谷地					●	●		(財) 群文1994b
21	今井遺上・道下					●	●		(財) 群文1995
22	鹿越北三本堂					●	●		(財) 群文1993d
23	柳久保					●	●		富岡市埋蔵文化財発掘調査団1985
24	鶴の穴Ⅱ					●	●		富岡市埋蔵文化財発掘調査団1991
25	内原					●	●		第22回埋蔵文化財調査(ハツフレット)
26	十二社	●		●		●	●		加東・大工工-町田1992
27	武舟		●			●	●	縄文遺跡	村坂1987 加東-小宮1985
28	稻田	●				●	●		笠原村協議委員会1990
29	神社裏					●	●		笠原町教育委員会1995
30	清水		●			●	●		組合1995
31	野原			●		●	●		杉原1956 島田2000
32	敷塚					●	●		藤原1986
33	敷塚白山地点					●	●		敷塚遺跡白山山点発掘調査団1990
34	家長戸舟口		●	●	●	●	●		(財) 群文1999a
35	渡北江六反田					●	●		(財) 群文1992c
36	上榎木光徳所	●				●	●		(財) 群文1988 (財) 群文12007d
37	秩形	●				●	●		宮城村教育委員会1981 相沢・渡辺1988
38	下瀧名塚越	●				●	●		(財) 群文1991c
39	光原		●			●	●		相沢・渡辺1988
40	御三作		●			●	●		大泉町教育委員会1984
41	旗原	●				●	●		渡辺・渡辺1988
42	市之岡前田	●				●	●		宮城村教育委員会1991
43	三ツ屋		●			●	●		相沢・渡辺1988
44	笠原北山	●				●	●		群馬県立編纂委員会1990
45	柏倉吉見沢	●				●	●		編研1991 前編町教育委員会2005
46	基原	●	●			●	●		群馬県立編纂委員会1990
47	中江田AⅡ			●		●	●		新田町協議委員会1987
48	中江田B			●?		●	●		
49	今井見切塚	●	●			●	●	縄文ブロック群?	(財) 群文2005c
50	今井三輪堂	●	●	●		●	●	縄文ブロック群?	(財) 群文2004b
51	吾妻					●	●		第15・16号(中)縄文遺跡調査会1998
52	渡北江西原		●			●	●	縄文ブロック群	(財) 群文2004a 相澤2005
53	舞台	●				●	●	一部帰属層位不明	(財) 群文2005a
54	八寸長瀬					●	●		(財) 群文2001
55	高林三八					●	●		(財) 群文2005b
56	間之塚		●			●	●		(財) 群文2006b
57	葛山			●		●	●		(財) 群文2009c
58	下田	●				●	●		(財) 群文2007c
59	塚下					●	●		(財) 群文2007b
60	前道下		●	●		●	●	一部帰属層位不明	(財) 群文2008d
61	大上		●	●		●	●	縄文ブロック群	(財) 群文2006e
62	火ヶ尾	●	●			●	●	縄文ブロック群	(財) 群文2008c
63	香上			●		●	●	縄文ブロック群	(財) 群文2008f
64	三組工業団地古	●	●			●	●		伊勢崎市教育委員会2004
65	光徳所	●	●			●	●		(財) 群文2003
66	本間町古墳群		●	●		●	●	縄文ブロック群	(財) 群文2008g
67	神野				●	●	●		(財) 群文2007e

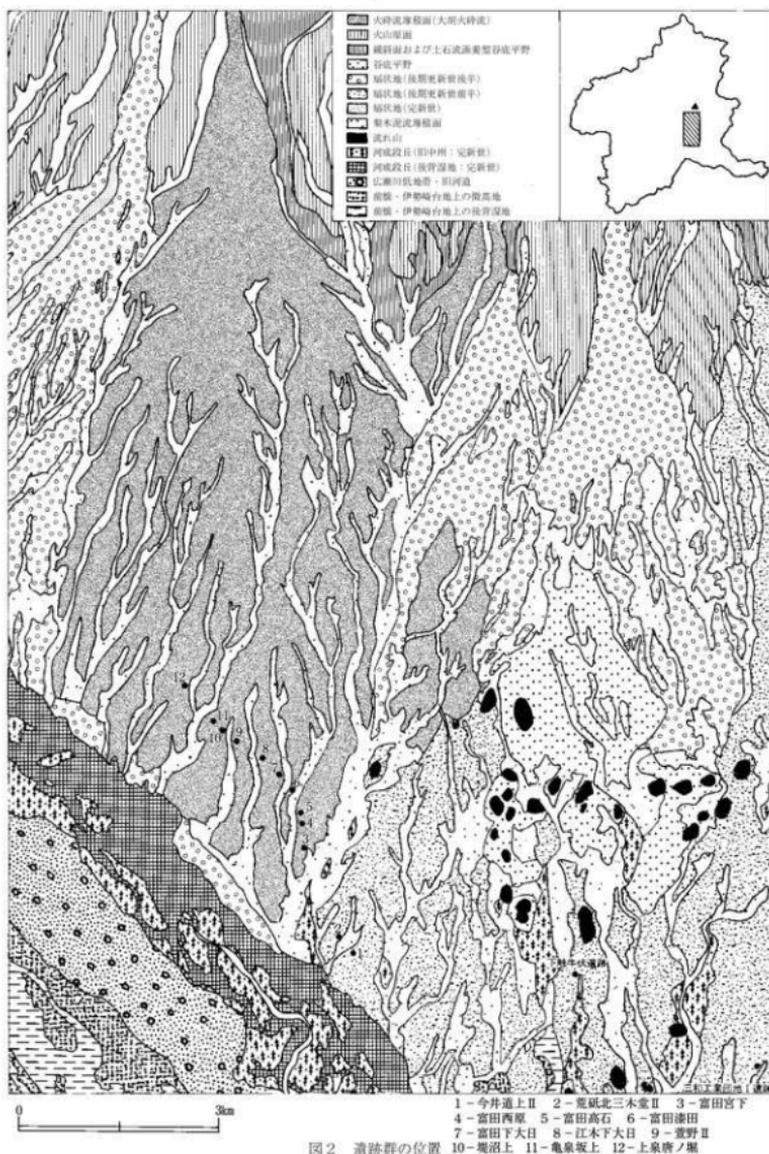


図2 遺跡群の位置

第2章 遺跡群の概要

1. 旧石器時代の調査の方法

各遺跡では、縄文時代以降の調査が終了した段階で、旧石器時代を対象とした試掘調査を実施した。試掘は、ローム層への漸移層あるいはローム層の最上層より開始された。試掘グリッドは基本的に2×5mの大きさとし、全体の調査範囲に均等に配置されるように留意した。試掘調査に際しては、石器の出土層位及び出土範囲を把握するように努めた。試掘は、基本的にHr-HPを面的に確認するまでおこなった。また一部では、Hr-HP下層の暗褐色ローム層(XI層)まで試掘をおこなっている。

旧石器時代を対象とした本調査を実施するにあたっては、試掘で石器が出土したグリッドを中心に発掘範囲を拡張させていった。その際、石器の分布状況を把握することに最大の注意を払い、石器の広がりや予想される範囲はすべて調査するよう努めた。出土した全ての石器には番号を付し、出土位置、出土標高、出土層位を記録した後、取り上げた。また、石器以外にも炭化物等の有機質遺物に細心の注意を払い、出土が認められた場合は、石器同様に出土地点に関する情報を記録した上でサンプリングした。

2. 基本層序

土層の観察、分層に際しては、色調、粒度、粘性といった層自身のもつ特性以上に、テフラと土層との関係をとらえることを最優先とした。遺跡群が立地する地域の台地上では、厚く堆積するローム層が確認された。土層の堆積状況をみると、遺跡間でテフラの検出状況及び残存状態に若干の違いが認められる。

これらのローム層中には、浅間火山、榛名火山、赤城火山を供給源とするローカルテフラと、広域火山灰であるATが認められる。台地上で検出されたテフラの多くは、一次堆積の状態ではなく、ローム層中に散在するかたちで観察された。As-YPとAs-BP groupは、残存状況の良い場所では、ローム層中にブロック状に存在している様子が認められた。Hr-HAはすべての地点ではなく、いくつかの地点で確認された。また、Hr-HPは層厚約20cm程度の一次堆積の状態を観察された。ATの極大層は、暗色帯の直上層である漸移層(V層)に位置する。群馬県下では、暗色帯の上位部分あるいはその直上層下位部分でAT極大層が観察されてきたが、この結果は、これまでの層位的事実を支持する結果となっている。

遺跡群の南端、荒砥川の左岸側に位置する今井道上II遺跡・荒砥北三木堂II遺跡では、Hr-HPの堆積は認められたが大胡火砕流堆積物は確認していない。これらの荒砥川左岸側では、後期更新世前半に形成された扇状地(荒砥川扇状地)の存在が指摘されている(群馬県史編纂委員会 1990)。よって、遺跡群が立地する地域において、特に、荒砥川左岸については、Hr-HPより下層の堆積状況が他地域とは異なる可能性も考えられる。

次に、ローム台地部分の基本層序を記す。

基本層序

表土層	現代の耕作土
I a 層 黒褐色土	
I b 層 暗褐色土	ローム層への漸移層
II 層 黄褐色ローム層	As-YPを含む。地点によってAs-YPを含む量に差がある。残存状況が良好な地点ではブロック状に散在する様子が観察される。その一方で、As-YPが全く観察できない場所も認められ、そのような地点では、本層自体が欠落する。

第2章 遺跡群の概要

- III a 層 黄褐色ローム層 As-SrとAs-Ok1を含む。これらのテフラは層全体に散在するように認められる。本層は、やや暗い色調を呈し固くしまっている。地点によっては、As-Ok2の可能性のあるものを含む場合がある。
- III b 層 黄褐色ローム層 特にテフラを含まない層。遺跡群全体で認められるだけでなく、ごく限られた地点に存在する。
- IV a 層 黄褐色ローム層 As-BPを含む。As-BPの残存状況は、地点によって若干の違いはあるが、比較的良好である。残存状況が特に良好な地点では、ローム層中にブロック状に散在する様子が観察される。これはAs-BP groupの中・上部に同定される(第7章・自然科学分析参照)。
- IV b 層 黄褐色ローム層 As-BPを少量含む。As-BPの残存状況は不良であり、軽石の粒がローム層中に散在する程度である。
- V 層 褐色ローム層 AT極大層。暗色帯への漸移層。地点によっては、本層中にAs-MPを含む場合がある。群馬県下において、テフラの堆積状況が良好な地点では、ATの上位に薄い土壌を挟んでAs-MPが観察される。
- VI 層 暗褐色ローム層 ローム層暗色帯、いわゆるAT下暗色帯の上位部分層。
- VII 層 暗褐色ローム層 ローム層暗色帯。VI層よりもやや暗い色調で、より固くしまっている。AT下暗色帯の下位部分層。富田漆田遺跡では、ローム台地から低地への移行部分において、本層基底部付近よりHr-HAが一次堆積の状態で見出された(既刊『上武道路・旧石器時代遺跡群(1)』第11章・自然科学分析参照)。
- VIII 層 黄褐色ローム層 亀泉坂上遺跡では、本層上部でHr-HAが見出されている(第7章・自然科学分析参照)。また、富田漆田遺跡では、本層中より詳細不明な褐色スコリア(仮称:富田スコリア)を見出している(既刊『上武道路・旧石器時代遺跡群(1)』第11章・自然科学分析参照)。
- IX 層 黄褐色ローム層 VII層よりやや明るい色調で、より固くしまっている。
- X 層 Hr-HP 遺跡間で層厚に若干の違いはあるが、おおむね層厚20cm程度の一次堆積の状態で見られる。
- XI 層 暗褐色ローム層 暗い色調
- XII 層 暗褐色ローム層 XI層よりやや明るい色調。
- XIII 層 黄褐色ローム層 北橋スコリア(HkS)を少量含む。
- XIV 層 黄褐色ローム層
- XV 層 大胡火砕流堆積物 荒砥川左岸に立地する今井道上II遺跡・荒砥北三本堂II遺跡では確認していない。富田漆田遺跡では、本層中より大山倉吉軽石(DKP)を見出している(既刊『上武道路・旧石器時代遺跡群(1)』第11章・自然科学分析参照)。

3. 石器の分類

出土石器は、以下に示す基準にしたがって器種分類した。

- 石 核 折断面や微細剥離痕を除いた最終剥離面がネガティブであって、かつその剥離面が小形製品の素材となりうる大きさ以上(最大長20mm程度以上)である石器。

剥片	折断面や微細剥離痕を除いた最終剥離面がポジティブである最大長が20mm以上の石器。
微細剥片	最大長が20mm未満の剥片。
石刃	剥離長が剥離幅のほぼ2倍以上で、両側片と背面の稜線がほぼ平行関係にある剥片。折断面が認められる資料に対しても、以上のような特徴が認められると予想される資料は石刃とした。
刃部磨製石斧	石器の全面あるいはその一部に及ぶ加工によって平面形が斧形に整形された石器であって、その端部に刃部と想定される部位をもつ石器。なおかつ刃部を中心とした箇所部分的な研磨痕が認められるもの。
石斧	石器の全面あるいはその一部に及ぶ加工によって平面形が斧形に整形された石器であって、その端部に刃部と想定される部位をもつ石器。
台形様石器	剥片を素材とし、二次加工技術(刃つぶし状の二次加工、面的な平坦剥離、素材剥片の折断加工)によって台形様に整形された石器であって、その一部に素材の鋭い縁辺部(刃部)を残存させる石器。
ナイフ形石器	剥片または石刃を素材とする。素材剥片(石刃)の一部に刃つぶし状の二次加工が施され、ナイフ状に整形されたもので、素材剥片の鋭い縁辺部を残存させる石器。破損した資料であっても、認定可能なものはナイフ形石器として分類した。
尖頭状石器	剥片または石刃を素材とし、刃つぶし状の周辺加工によって整形し尖頭部を作らせた石器。
彫刻刀形石器	剥片または石刃の端部に、一条または数条の槌状の二次加工痕を有する石器。
彫刻刀削片	彫刻刀面作出の際に生じる削片と判断される石器。背面に、彫刻刀形石器の素材主要剥離面を残していることが、器種認定の上で大きな判断基準となる。
尖頭器	面的な加工が石器の全面あるいはその一部に施され、平面形が木葉形、柳葉形に整形された石器。
エンドスクレイパー	剥片または石刃を素材とする。素材剥片(石刃)の端部に連続的な二次加工を加えることで、機能部と想定される急角度の部位を作らせた石器。
両極剥離痕ある石器	対向する部位に両極打法によると思われる剥離痕やつぶれ痕が認められる石器。あるいは、両極打法によると考えられる剪断面(岡村 1995)の認められる石器。両極剥離痕ある石器は、「両極打法によって作られた道具であるか、あるいは使用の結果できたものか、またはその両者の複合であるか」あるいは「両極石核であるか」、その「製作と使用のメカニズムを明らかに」する必要性が指摘されている(岡村 1995)。本石器群では、単に両極打法によると考えられる剥離痕の認められる石器をそのように呼称している。
両極剥片	両極剥離に伴う「破碎現象」(岡村 1995)によって生じたと考えられる剥片は、両極剥片とした。単独の資料では器種としての認定が難しく、多くの場合、両極剥離痕ある石器と接合した資料において両極剥片の認定が可能であった。
二次加工ある剥片	剥片の一部に不規則な二次加工が施される石器で、定形的な形態を呈する石器としてとらえられないもの。この場合、折断面は二次加工と認識していない。

微細剥離痕ある剥片 剥片の一部に二次的な微細剥離痕の認められる石器。微細剥離痕は「肉眼もしくはルーペにおいて観察される範囲の、長、幅ともに4.0mm以下の剥離痕」(鈴木 1994)とする。ここでは、微細な剥離痕のある石器に対して頓着に見受けられる「使用痕ある剥片」という語は採用しなかった。それは、微細剥離痕が石器を使用した痕跡であると確認されていない段階で、使用痕という直截的に機能を意味する名称を用いるのは不適切と判断したためである。石器に微細な剥離痕が形成される要因として、勿論、石器の使用も上げられようが、二次的な加工、石器を管理保持する際の破損、あるいは土中に埋没中の石器に対する物理的な圧力といった要因も否定できない。また、剥片剥離時の偶発的要因によっても剥片に微細剥離痕が形成されることが実験的に確認されている(西秋 1994、御堂島 1996)。

礫

剥片石器の石材としては適さない粗粒の材質の石であって、ほぼ全面が自然面に覆われている最大長3cm以上のもの。本遺跡群から検出された礫はその大きさ及び形態が多様であって、機能的に分類されるべきグループが分離されずに含まれている可能性が考えられる。

礫

片 剥片のなかで特に粗粒の材質であり、剥片石器の素材として不適であると判断されたものを礫片として分類した。背面の大部分が自然面で覆われている資料が多い。

本書で報告する各遺跡からは、結晶片岩製の資料が出土している。これらの資料は、粗粒の石材であり剥片石器の材料としては不向きであることから、礫片として扱った。

ハンマーストーン 石器製作に関与したと想定される敲打痕が端部に認められる礫。

4. 旧石器時代の文化層

文化層を設定するにあたっては、石器の出土層位を最大限に考慮した。このような層位的な事実と、剥片剥離技術の特徴や主要器種の技術形態の特徴が整合関係にあるかどうか吟味した上で、石器群の文化層を設定した。各遺跡から発見された石器群は、その帰属層位から判断すると、大きくみて六つの段階に分類することが可能である。

表2に、各遺跡の文化層の分類とその帰属層位について表した。この表は、特に帰属層位を根拠として各文化層の大まかな形成時期を示すものである。したがって、同じ帰属層位にある文化層どうしが、編年的に同一段階にあるということを意味しているわけではない。たとえば、帰属層位がVI-VII層(AT下暗色帯)にある文化層どうしを比較すると、剥片剥離技術の特徴や主要器種の技術形態の特徴が異なる様相を示すもの

表2 各遺跡に認められる文化層

文化層の帰属層位	遺跡	今井遺上 II	茨城北三木堂 II	富田宮下	富田西原	富田高石	富田清田	富田下大日	江木下大日	豊野 II	境原上	亀泉原上	上泉原ノ場
層位	テフラ層												
II	As-YF含石		第1文化層										
IIIa	As-Sr・Ok1含石						第1文化層			第1文化層	第1文化層	第1文化層	第1文化層
IIIa	As-Srの中・上位含石		第2文化層	第1文化層						第2文化層			
IIIb-V	V層-AT含石	第1文化層										第2文化層	
VI-VII	AT下暗色帯	第2文化層	第3文化層	第2文化層			第2文化層			第4文化層	第2文化層		第2文化層
VI-X		第3文化層	第4文化層									第3文化層	第3文化層
X	Hr+P層												

既刊で報告(財)群理文2008a)

本書で報告

が認められるケースがある。この場合は、層的根拠によって時期差として認識することができない石器群どうしであっても、考古学的にみると形成時期の異なる段階に分別される可能性が高いということである。

ところで、今井道上Ⅱ遺跡、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡、亀泉坂上遺跡、上泉唐ノ堀遺跡では、Ⅶ～Ⅸ層に帰属層位がくる文化層が認められた。Ⅶ・Ⅸ層は、AT下暗色帯より下層に相当する。これまでの群馬県下の層位的な関係からすると、この文化層は、後期旧石器時代初頭あるいはそれをさかのぼる可能性がある。これらの資料の使用石材をみると、剥片石器には不向きな軟弱で粗粒な石材(結晶片岩類)に限定される。亀泉坂上遺跡でその他の石材の礫・礫片が若干伴うだけであり、他の石材で製作された石器は全く組成しないという特徴がある。これと同様な内容をもつものとして、群馬県渋川市の房谷戸遺跡第Ⅲ文化層((財)群理文1992b)が上げられる。

第3章 萱野Ⅱ遺跡

1. 概要

萱野Ⅱ遺跡は、赤城山南麓の標高約119mの地点に立地する。赤城山の南麓地域では低地とローム台地が混在する様相をみせるが、遺跡はそのような二つの低地域に挟まれたローム台地上に立地する(図4)。旧石器時代の石器は、このようなローム台地上から出土した。出土石器は、4つの文化層に分類された。

第1文化層は、As-Ok1を含むローム層中に帰属層位をもつ。出土点数は少ないが、珪質頁岩製の石器を主体とするものでナイフ形石器を組成する。第2文化層は、旧石器時代では群馬県でも出土例の少ないAs-BP group降下期に相当するもので、黒色安山岩製石器を主体として豊富な接合資料が認められる。主要な器種としては、ナイフ形石器やエンドスクレイパーなどを組成する。第3文化層は、IVb層(As-BPを少量含む)～V層(AT極大層)にかけて出土した石器群である。出土点数も少なく、主要な器種としては石刃が上げられる。第4文化層はAT下暗色帯に帰属層位をもつもので、4つの地点(A～D)において確認された。A地点の石器群は黒色頁岩製石器を主体とし、ナイフ形石器を組成する。B地点石器群は黒色安山岩製石器を主体として、豊富な接合資料が認められる。C・D地点石器群はともに出土点数が少ない(3点・1点)、ナイフ形石器を組成する。



図3 萱野Ⅱ遺跡の文化層



遺跡遠景



調査風景

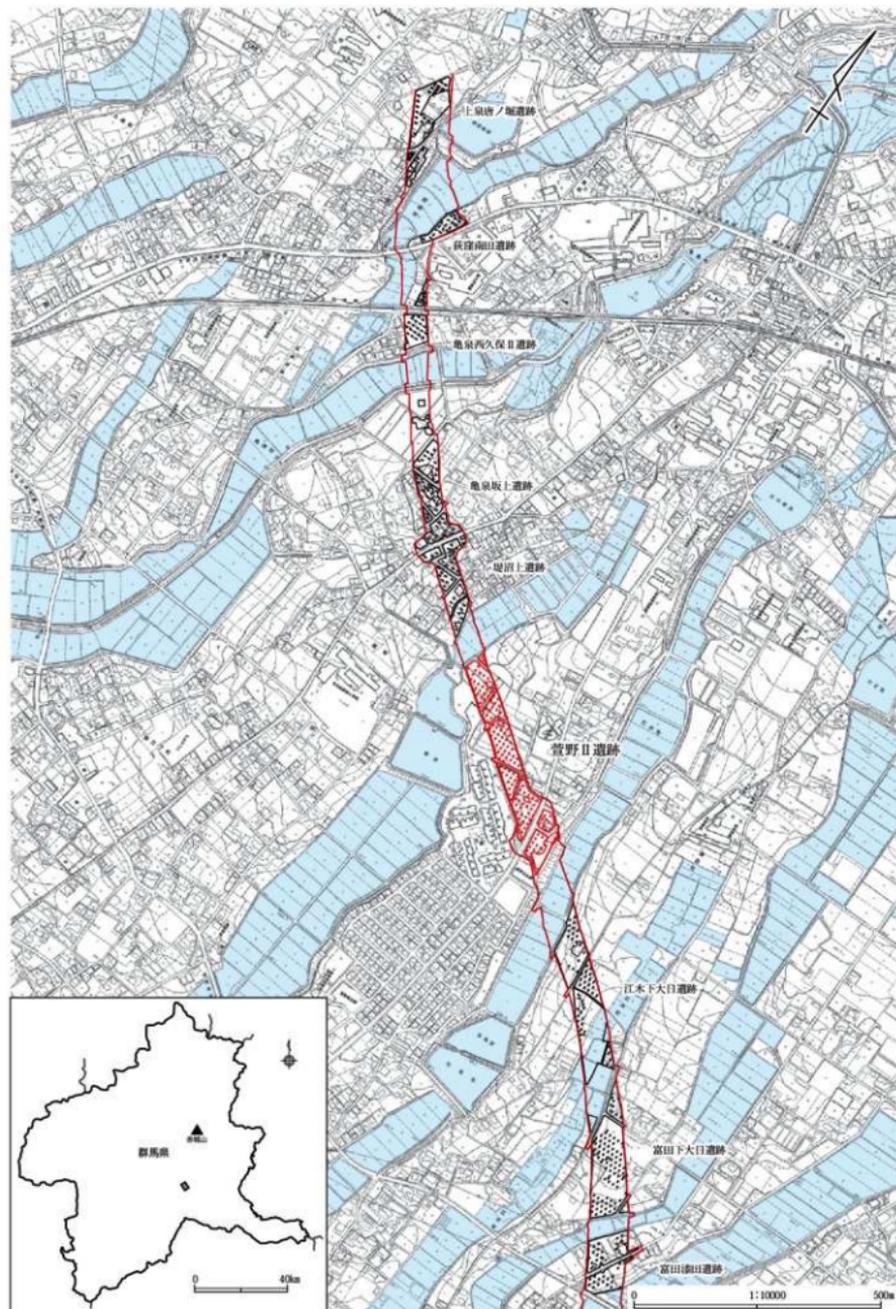


図4 萱野II遺跡の位置

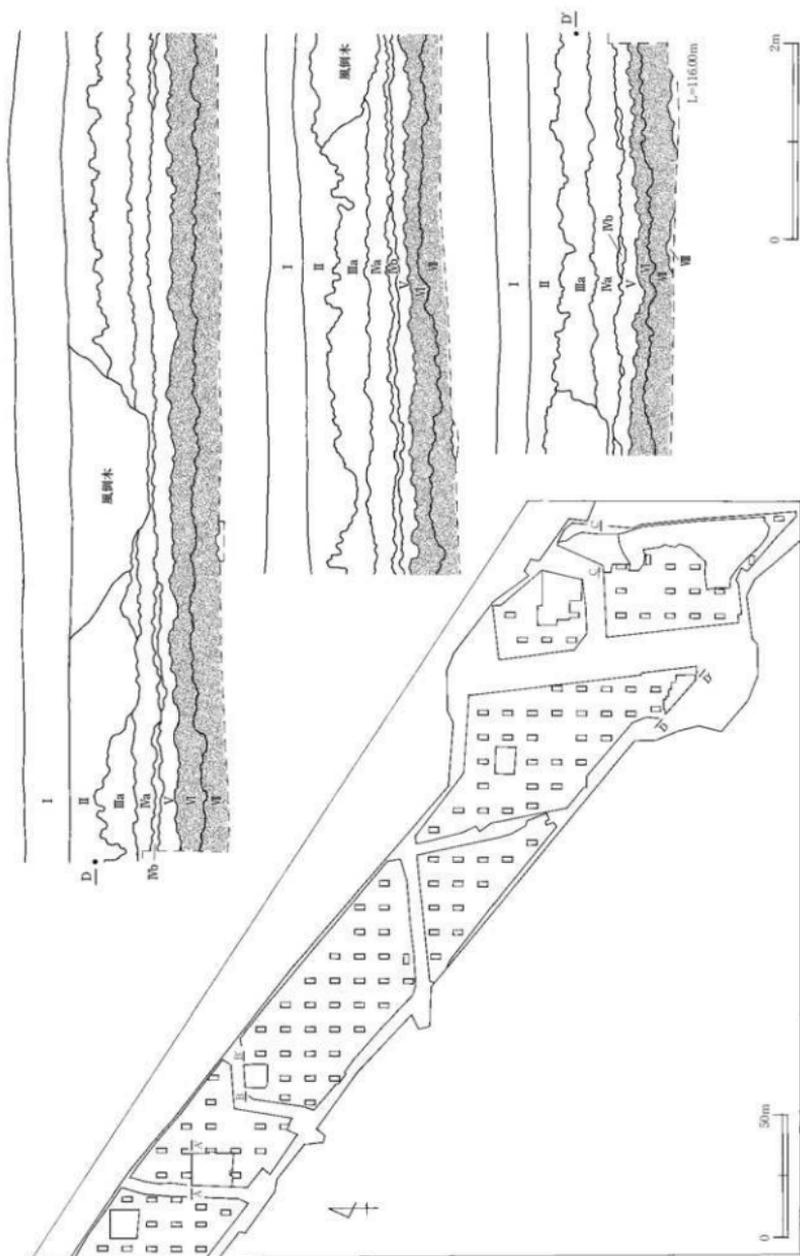


图6 董呼 II 遗址 土層堆积状况(2)

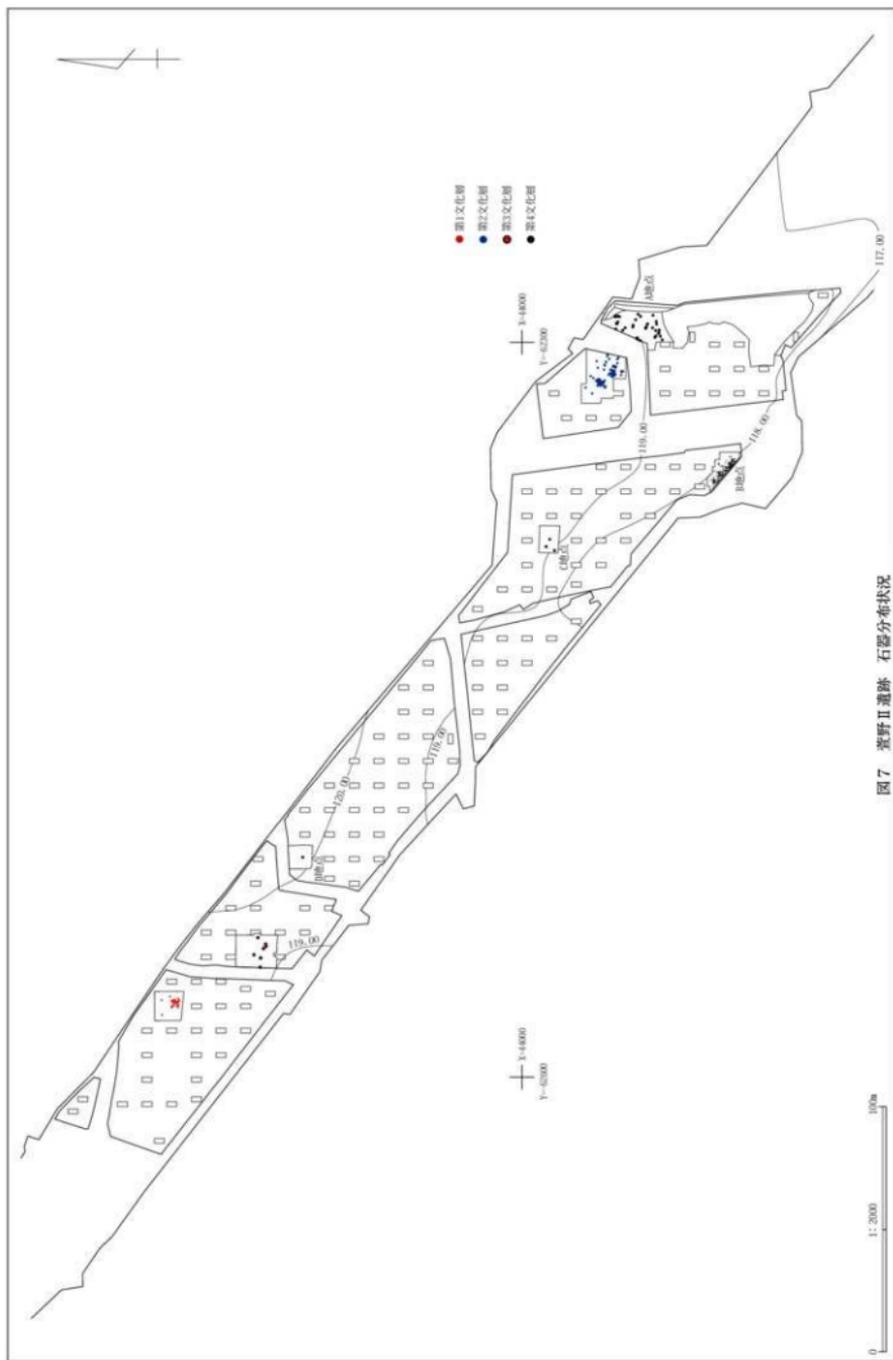


图7 荒野II遗址 石器分布状况

2. 萱野Ⅱ遺跡・第1文化層

I. 出土石器

第1文化層石器群の出土地点は、西方に向かって緩やかに傾斜した場所であり、西の間近に低地帯をひかえている。この文化層は29点の石器からなる。石器は、As-Ok1を含むⅢa層から出土していることから、As-Ok1降下を相前後する時期に形成されたと考えられる。出土点数は少ないが、珪質頁岩製の石器を主体とするもので、剥片生産に關係する接合資料が認められる。主要な器種としては、ナイフ形石器を組成する。

表3 萱野Ⅱ遺跡
第1文化層
層位別出土点数

層位	点数
Ⅲa	25
不明(試掘)	4
総計	29

表4 萱野Ⅱ遺跡 第1文化層 器種と石材

器種	石材				総計
	黒色頁岩	珪質頁岩	ぎよくずい	粗粒輝石安山岩	
ナイフ形石器		3			3
スクレイパー		1	1		2
二次加工ある剥片		2			2
微細剥離痕ある剥片		1			1
剥片		11			11
微細剥片	1	1			2
礫				6	6
礫片				2	2
総計	1	19	1	8	29

(1) 各器種

ナイフ形石器(図8-22・24・29)

3点出土。No.29は珪質頁岩製。縦長剥片を素材として二側縁に二次加工痕が認められる。先端付近の刃部と想定される部分に、連続的な微細剥離痕が観察できる。No.22は珪質頁岩製。縦長剥片を素材として二側縁に二次加工痕が認められる。主要剥離面側の基部付近の一部にも二次加工痕が認められる。No.24は珪質頁岩製。縦長剥片を素材として二側縁に二次加工痕が認められる。

スクレイパー(図8-18・23)

2点出土。No.18はぎよくずい製。素材剥片の形態的特徴については不明である。石器の端部に、急角度の連続的な二次加工痕が認められる。No.23は珪質頁岩製。素材剥片の形態的特徴については不明である。石器の端部に、急角度の連続的な二次加工痕が認められる。

二次加工ある剥片(図8-11・17)

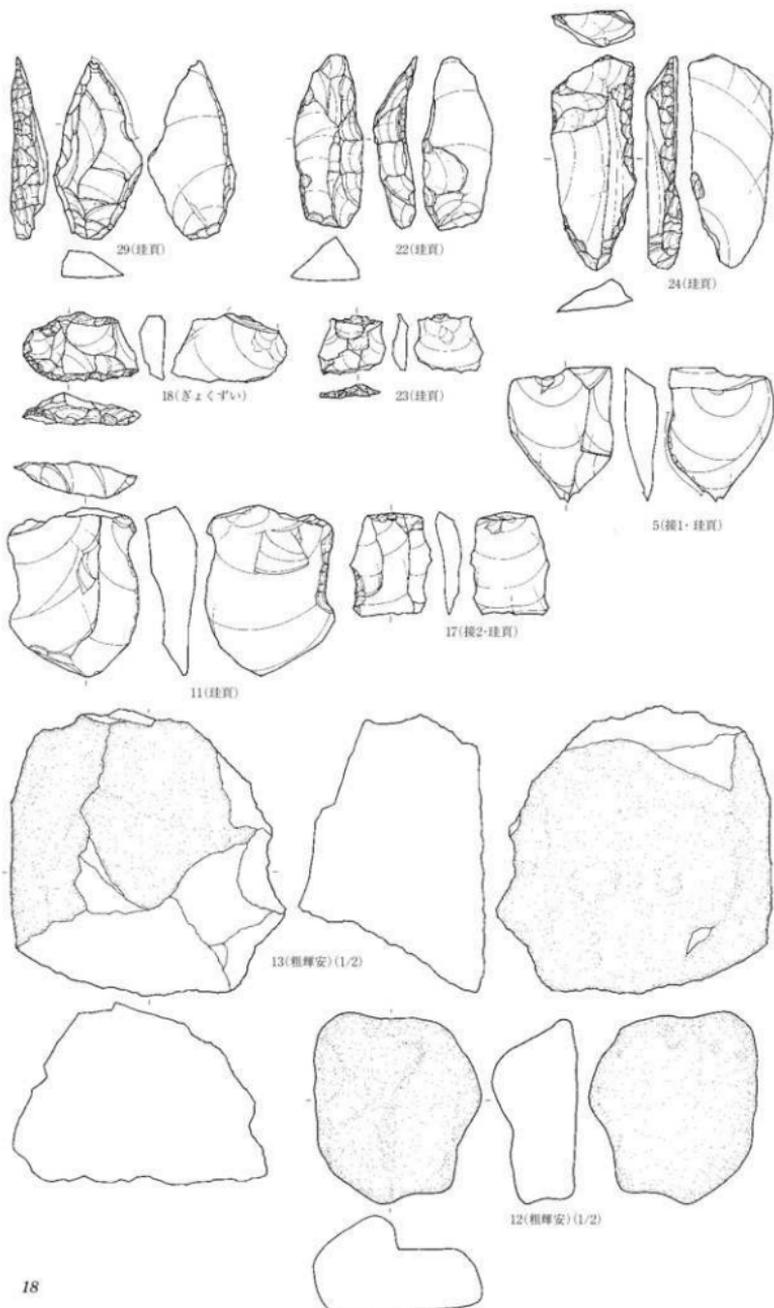
2点出土。No.11は珪質頁岩製。主要剥離面側に連続的な二次加工痕が認められる。No.17は珪質頁岩製。接合2に含まれる資料である。背面側の先端付近に二次加工痕が認められる。

微細剥離痕ある剥片(図8-5)

1点出土。珪質頁岩製。接合1に含まれる資料である。主要剥離面側の一側縁に連続的な微細剥離痕が認められる。

礫(図8-12・13、図9)

6点出土。角礫～亜角礫の形状を呈する。いずれも粗粒輝石安山岩製である。この石材は赤城火山に由来する石材であることから、遺跡の立地場所を考慮すると遺跡周辺で採取されたものと考えられる。



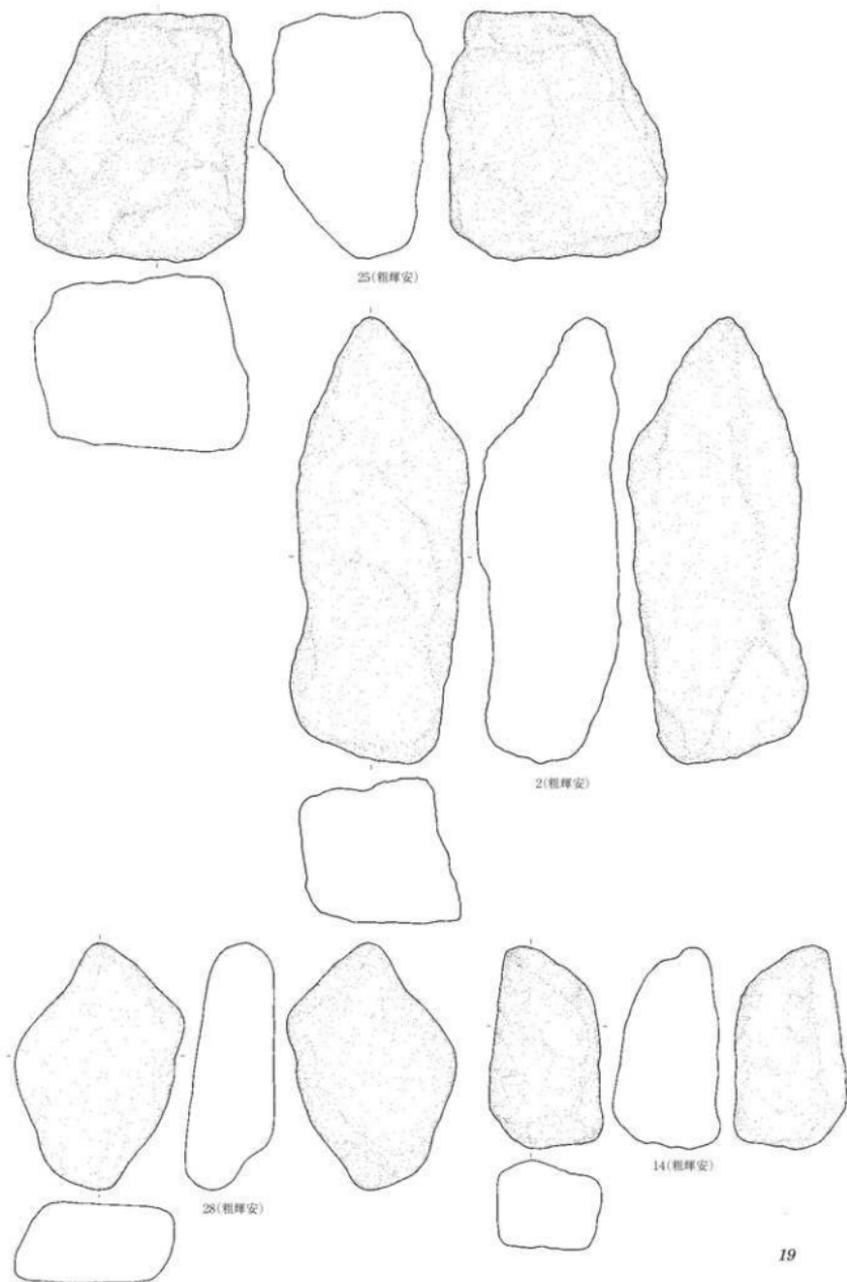


图9 荻野Ⅱ遺跡 第1文化層(縮尺1/2)

(2) 接合資料

接合資料は4個体認められた。接合資料に含まれる石器は、合計で13点である。使用石材は珪質頁岩が主体であり、視覚的な特徴で石器を分類することが困難であることから、母岩分類は不可能であると判断した。

接合1(図10) 珪質頁岩製。微細剥離痕ある剥片1点、剥片5点、微細剥片1点が接合。原石の大きさ・形状は不明である。同一打面から小形剥片を連続剥離する様子が観察される。

接合2(図10) 珪質頁岩製。二次加工ある剥片1点、剥片1点が接合。原石の大きさ・形状は不明である。同一打面から小形剥片を連続剥離する様子が観察される。

接合3(図10) 珪質頁岩製。剥片2点が接合。原石の大きさ・形状は不明である。小形剥片を連続剥離する様子が観察される。

接合4(図10) 粗粒輝石安山岩製。礫片2点が接合。大きさは不明であるが、円礫を利用している。粗粒輝石安山岩は赤城火山に由来する石材であり、遺跡の立地を考慮すると遺跡周辺で採取したものと考えられる。

表5 萱野Ⅱ遺跡 第1文化層 接合資料の器種組成

接合資料 No	石材	器種		二次加工ある剥片 大きさ	微細剥離痕ある剥片	剥片	微細剥片	礫片	総計	
		形状	大きさ							
1	珪質頁岩	-	-			1	5	1	7	
2	珪質頁岩	-	-	1		1			2	
3	珪質頁岩	-	-			2			2	
4	粗粒輝石安山岩	円礫	-					2	2	
総計					1	1	8	1	2	13

II. 石器の分布

第1文化層石器群の出土地点は、西方に向かって緩やかに傾斜した場所であり、西の間近に低地域をひかえている(図7)。

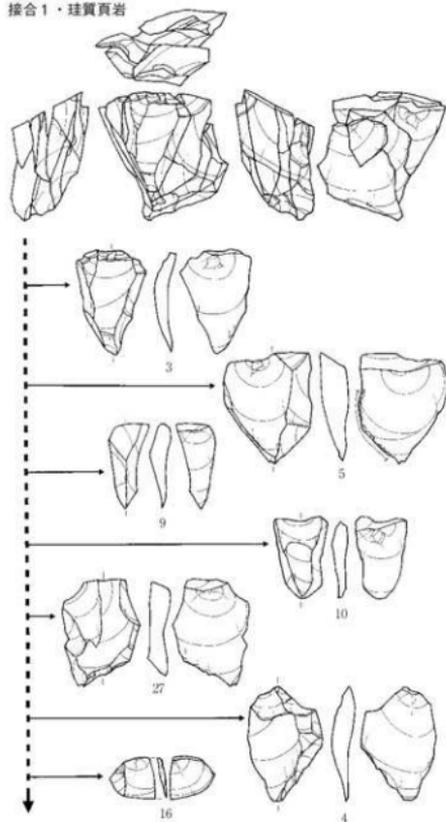
石器分布状況(図11) 石器の出土状況を見ると、直径約5mの範囲に集中分布する様子が観察できる。

接合資料の分布状況(図12) 剥片剥離に関する接合資料(接合1～3)が、石器集中部に分布する。この石器集中部は、剥片生産を主な活動として形成されたと判断できるであろう。

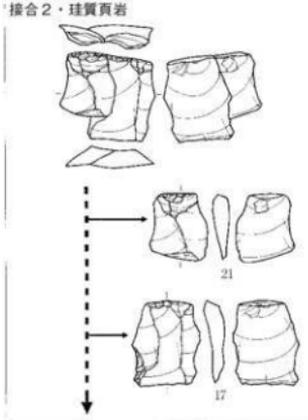
器種別石器の分布状況(図13、図14) 石器集中部内に各種製品類(ナイフ形石器・スクレイパー・二次加工ある剥片・微細剥離痕ある剥片)や礫が分布する様子からすると、この石器集中部では、剥片生産以外のなんらかの活動が展開されていたと判断できる。

石材別石器の分布状況(図15) 石器群が珪質頁岩を主体とするものであることから、集中部には、珪質頁岩製石器を中心に分布している。そこに黒色頁岩製石器とぎょくずい製石器がともに1点ずつ加わる。また、粗粒輝石安山岩製の礫(6点)及び礫片(2点)も分布している。

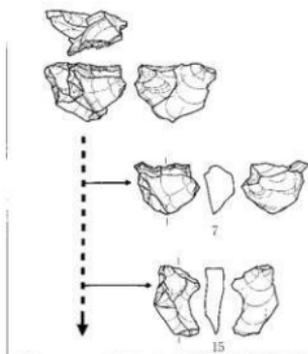
接合1・珪質頁岩



接合2・珪質頁岩



接合3・珪質頁岩



接合4・粗粒輝石安山岩

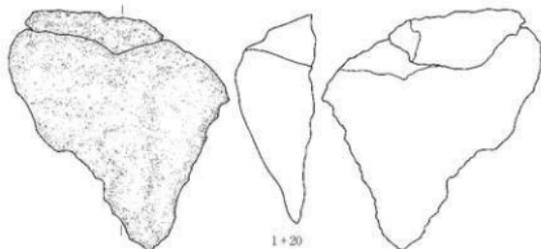


图10 荻野II遺跡 第1文化層(縮尺2/3)

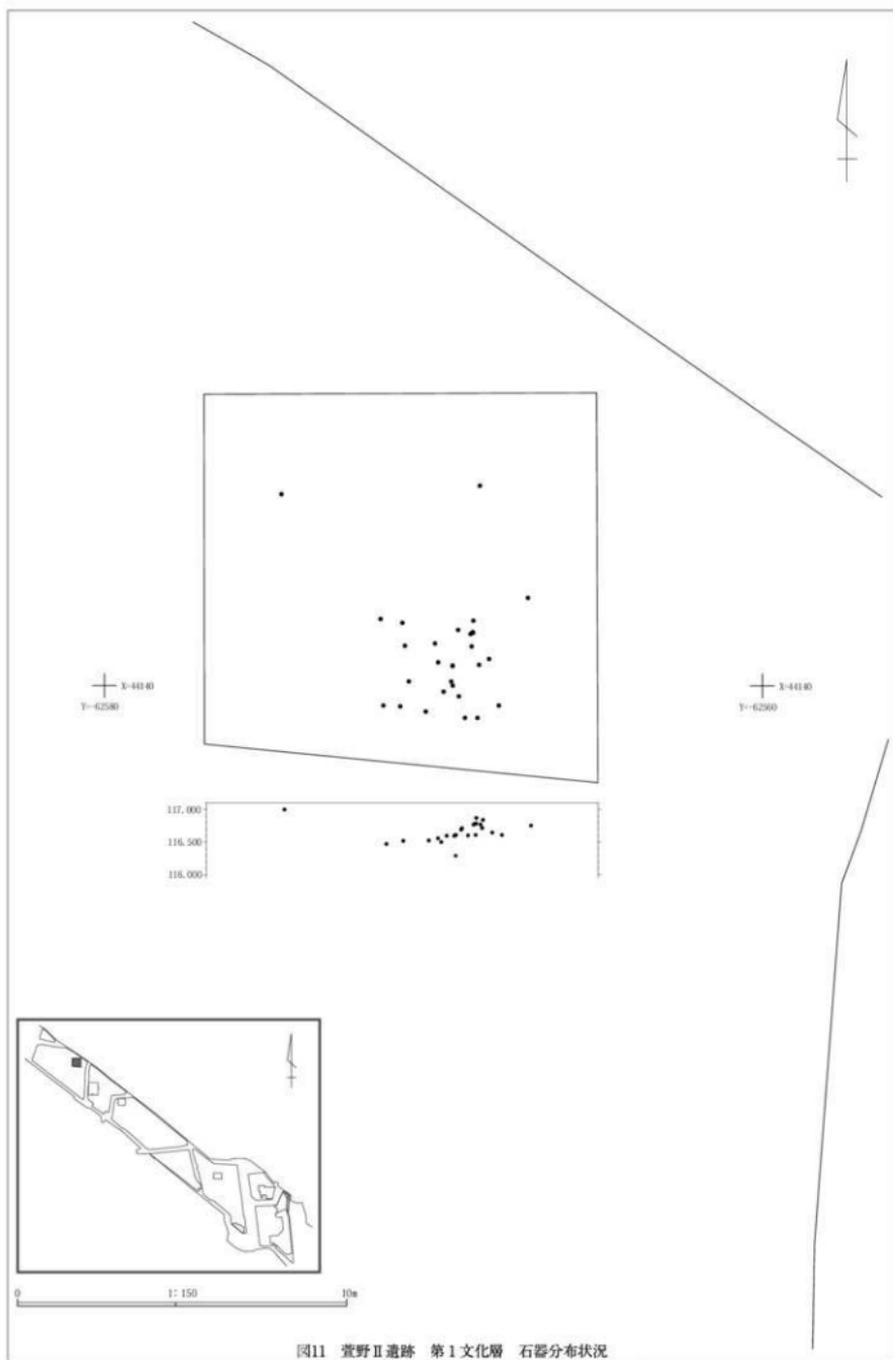


図11 萱野Ⅱ遺跡 第1文化層 石器分布状況

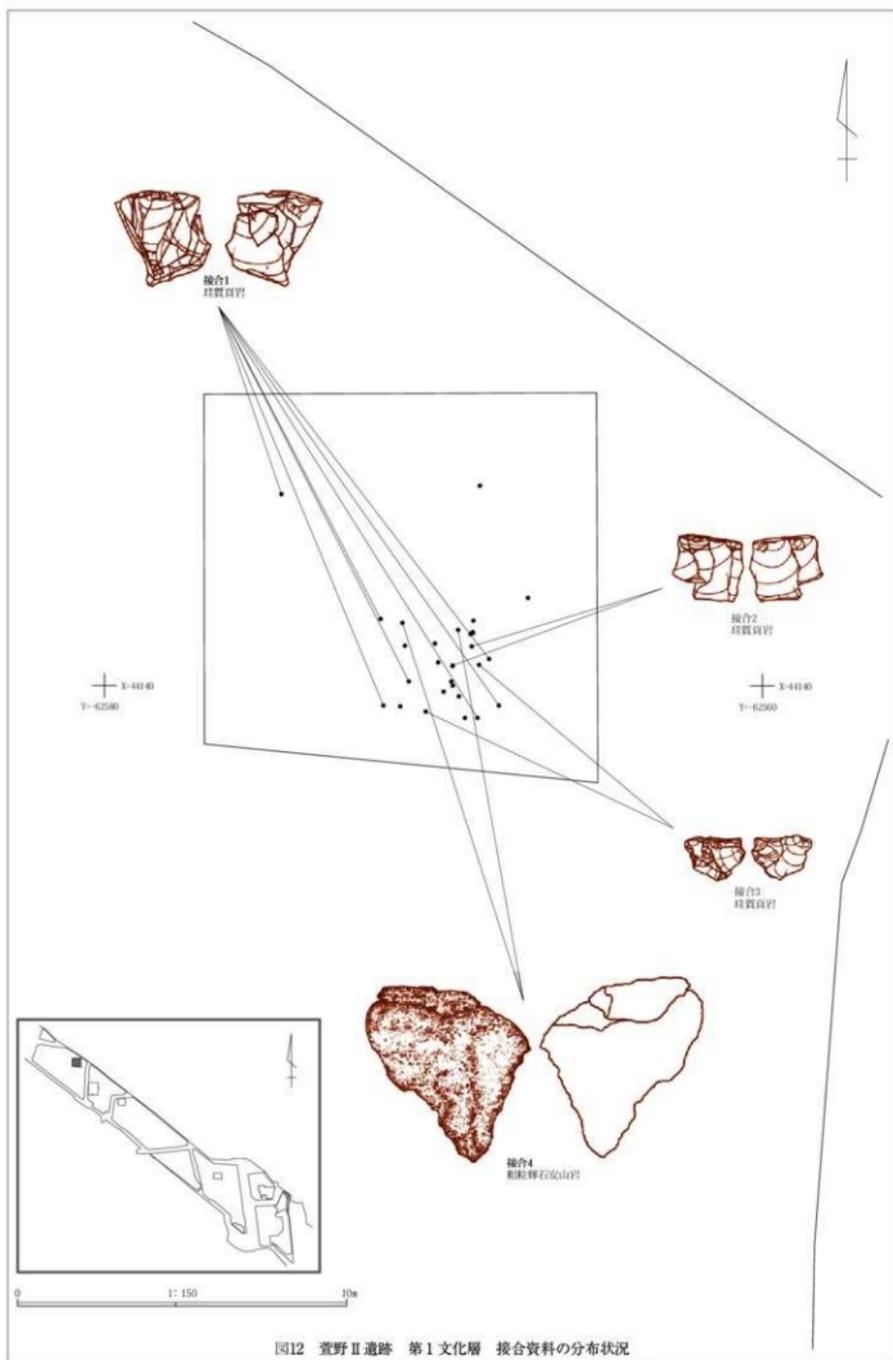


図12 萱野Ⅱ遺跡 第1文化層 接合資料の分布状況

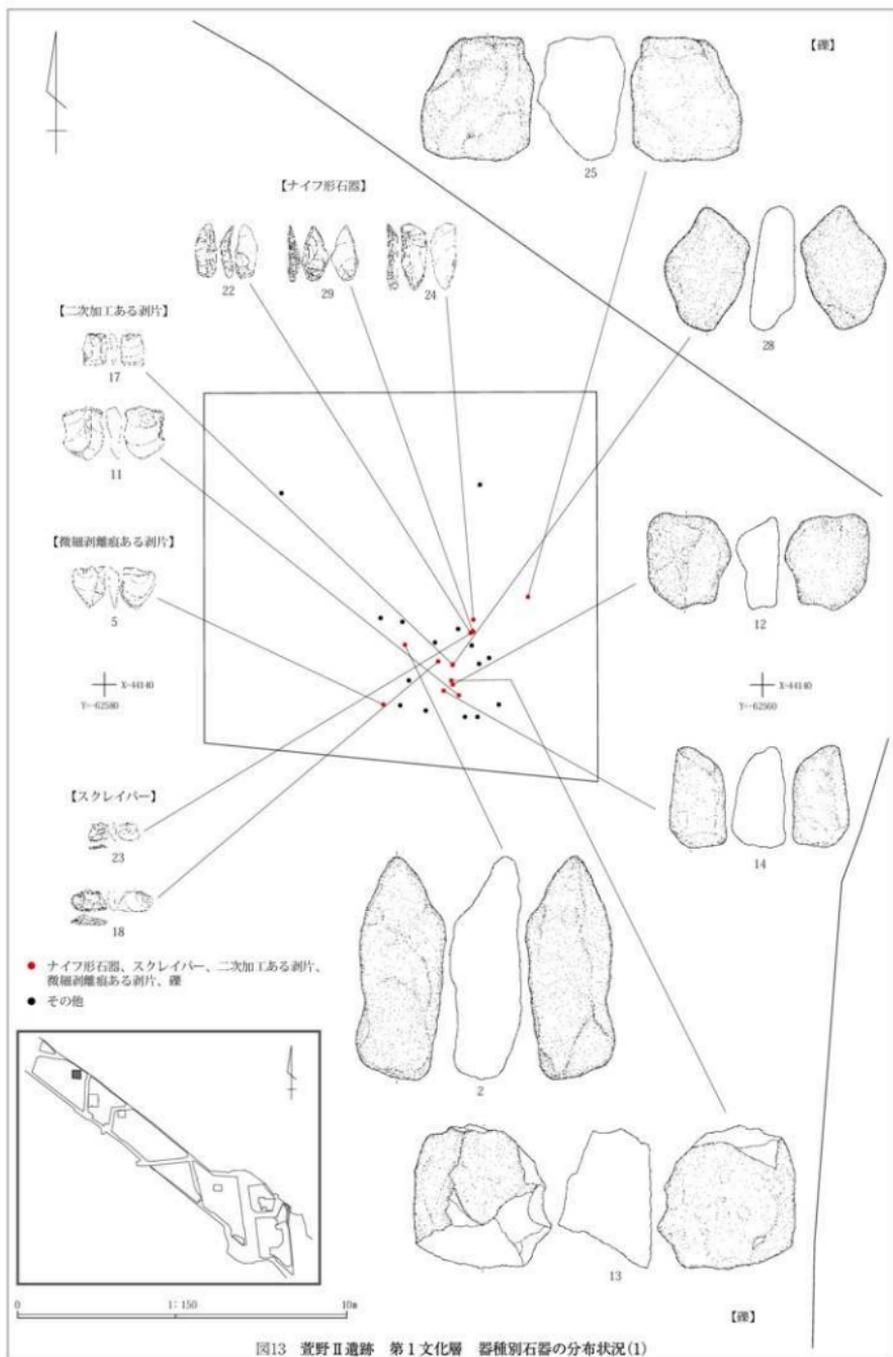


図13 萱野Ⅱ遺跡 第1文化層 器種別石器の分布状況(1)

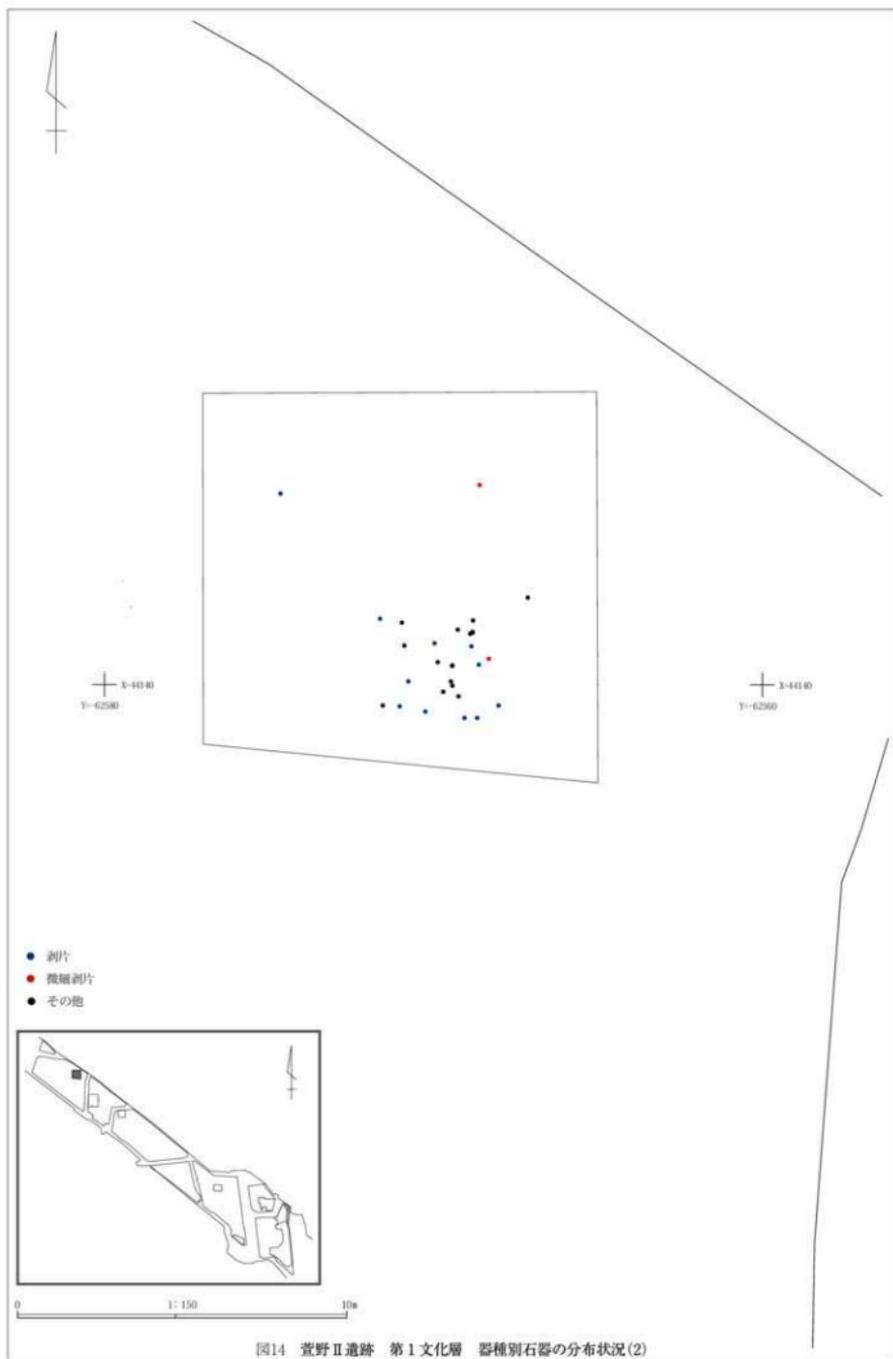


図14 萱野Ⅱ遺跡 第1文化層 器種別石器の分布状況(2)

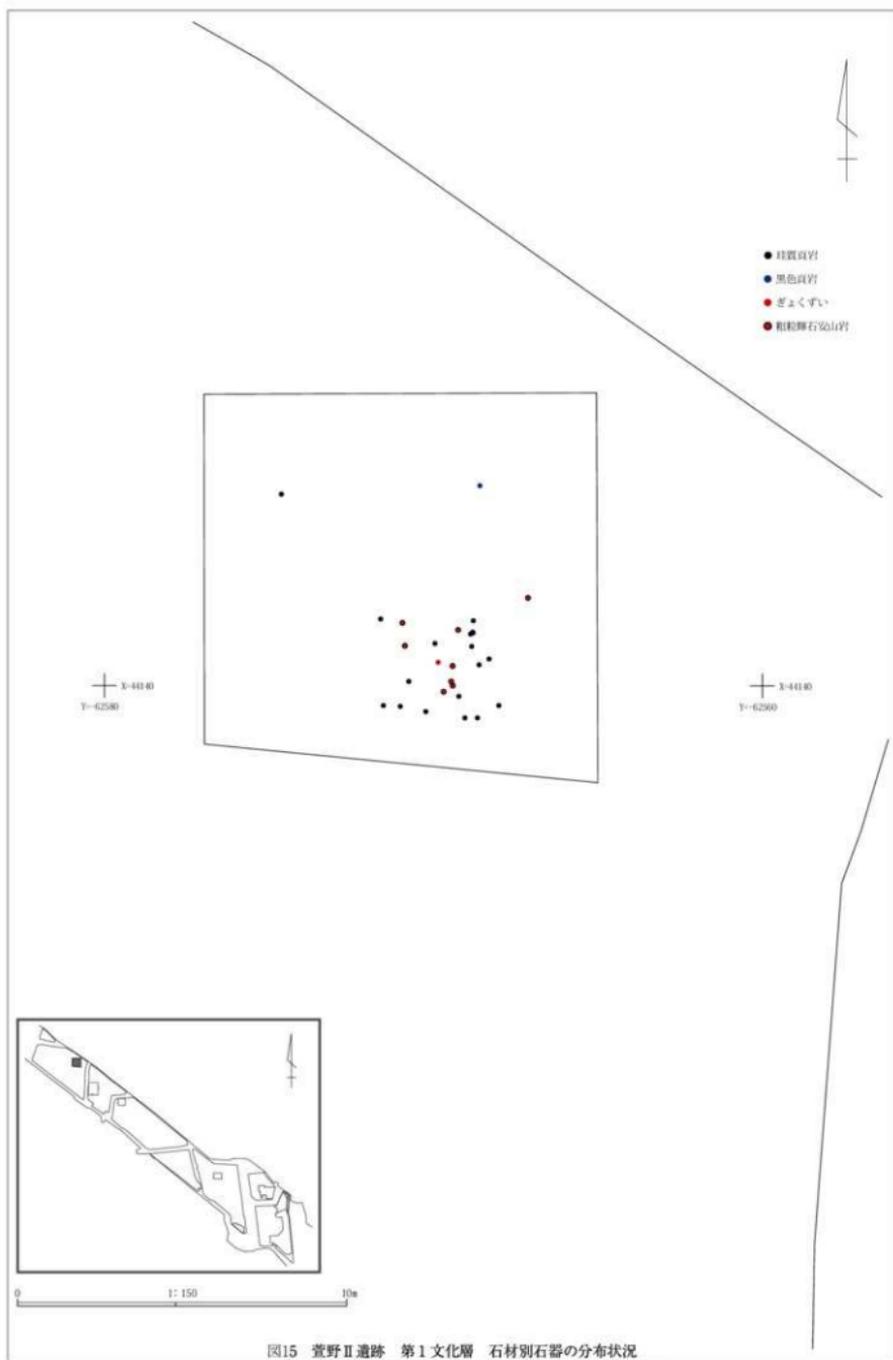


図15 萱野Ⅱ遺跡 第1文化層 石材別石器の分布状況

3. 萱野Ⅱ遺跡・第2文化層

I. 出土石器

赤城山南麓地域においては、いくつもの低地域がほぼ南北に樹枝状に延びる。第2文化層の石器群は、このような低地域に挟まれたローム台地上のほぼ頂部にあたる地点より出土した。南に向かって緩やかに傾斜した場所から石器の出土が確認された。第2文化層は、284点の石器からなる。石器はⅣa層より最も多く出土しており、As-BP group中・上位の降下時期に生活面を設定することができる。これまでの出土例によれば、群馬県で最も種類の少ない時期の石器群の一つといえる。主要な器種としては、小形のナイフ形石器とエンドスクレイパーが上げられる。使用石材は黒色安山岩が中心であり、それに黒色頁岩・チャート・黒曜石などが若干量加わる。黒曜石製石器は1点(ナイフ形石器)確認されており、原産地分析の結果、信州和田産と同定された(第8章考察参照)。また、接合資料は16点確認された。剥片剥離に関係する接合資料が数多く認められ、剥片生産活動を色濃く反映した石器群と評価できる。

表6 萱野Ⅱ遺跡
第2文化層
層別出土点数

層位	点数
Ⅲa	24
Ⅳa	79
Ⅳb	12
Ⅳa・b	155
V	7
Ⅵ	6
不明	1
総計	284

表7 萱野Ⅱ遺跡 第2文化層 器種と石材

器種	石材	黒色安山岩	黒色頁岩	チャート	黒曜石	巻粒輝石安山岩	ひん岩	輝緑凝灰岩	総計
ナイフ形石器		4			1				5
エンドスクレイパー		1							1
二次加工ある剥片		13	2						15
剥片		109	8	1					118
微細剥片		121	5	4				1	131
石核		5	1						6
礫						2	1		3
礫片						5			5
総計		253	16	5	1	7	1	1	284

(1) 各器種

ナイフ形石器(図16-25+52・74・86・171) 5点出土(折断面で接合することによって個体としては4点確認)。No.171は黒曜石製。縦長剥片を素材としており、二側縁に二次加工痕が認められる。原産地分析の結果、信州和田産と同定された(第8章考察参照)。No.86は黒色安山岩製。接合5に含まれる資料である。縦長剥片を素材とし、素材剥片の打面部分を大きく残す。両側縁に二次加工痕が認められる。No.74は黒色安山岩製。接合1に含まれる資料である。接合資料での展開を見ると(図21)、横長剥片を素材として折断後に二次加工を加えて成形していることがわかる。素材剥片の打面部分を残す。No.25+52は黒色安山岩製。接合1に含まれる資料である。接合資料を見ると(図20)、ブランディングチップが2点接合しており、横長剥片を素材としていることがわかる。一側縁に入念に二次加工を施すことによって、素材剥片の幅を減じて縦長の器形に仕上げていることが理解される。素材剥片の打面部分を大きく残す。

エンドスクレイパー(図16-26) 1点出土。黒色安山岩製。接合1に含まれる資料である。接合資料を見ると(図22)、器種成形途中で生じた微細剥片が2点接合しており、縦長剥片を素材としていることがわかる。

二次加工ある剥片(図16-3+4・27・29・83+104+108・182・199・236+254、図17-18①+115・116・205・208・224) 15点出土(折断面で接合することによって個体としては12点確認)。No.83+104+108は黒色安山岩製。接合1に含まれる資料である。縦長剥片を素材としており、打面付近に二次加工痕が認められる。No.27とNo.29は黒色安山岩製。ともに接合1に含まれる資料である。接合資料を見ると(図21)、この2点は、もとは同一の縦長剥片であったが、二次加工→折断→二次加工という工程を経るなかで生じた2点の器種であることが理解される。No.3+4は黒色安山岩製。接合1に含まれる資料である。横長剥片を素材としており、

端部に大きな二次加工痕が認められる。No.236+254は黒色安山岩製。接合2に含まれる資料である。縦長剥片を素材としており、一側縁に散発的な二次加工痕が認められる。No.182は黒色安山岩製。接合3に含まれる資料である。接合資料を見ると(図25)、二次加工の際に生じた微細剥片が4点接合している。幾度となく二次加工を繰り返すことによって、素材剥片の形態を大きく変形していることが理解される。No.199は黒色安山岩製。接合3に含まれる資料である。両側縁に二次加工痕が認められる。No.18①+115は黒色安山岩製。この2点によって接合9を構成している。両側縁と打面部に二次加工痕が認められる。二つの個体に折断後、一方の個体にはさらに二次加工を加える様子が観察される。No.224は黒色安山岩製。接合8に含まれる資料である。接合資料を見ると(図26)、二次加工の際に生じた微細剥片が1点接合している。一側縁から先端部にかけて二次加工痕が認められる。No.116は黒色安山岩製。折断により全体の様相は不明である。No.208とNo.205は黒色頁岩製。ともに接合14に含まれる資料である。接合資料を見ると(図28)、大形の縦長剥片素材の石核から生産された剥片を素材としていることがわかる。いずれも散発的な二次加工痕が認められる。

石核(図17-114・125・247・249、図18-112・248) 6点出土。No.114は黒色安山岩製。一方に自然面を大きく残し、その反対の面には球心的な剥片剥離痕が認められる。No.248とNo.249は黒色安山岩製。ともに接合2に含まれる資料である。接合資料を見ると(図23)、この二つの石核は、もとは一つの大形剥片を素材としている。剥片生産→分割→それぞれの個体で剥片生産、という工程を経るなかで生じた二つの石核であることが理解される。そこで生産された剥片は、いずれも小形剥片である。No.125は黒色安山岩製。接合1に含まれる資料である。接合資料を見ると(図21)、この石核はもとは分割された大形の個体を素材としており(図19)、多くの剥片を生産していることが理解される。最終的な形態は、角錐状石器にも似た形態を呈するが、そのような工程をふまえれば石核と理解するのが妥当であろう。No.247は黒色安山岩製。接合2に含まれる資料である。接合資料を見ると(図25)、拳大の円礫から多くの剥片を生産したものが最終的にこの石核に至っていることが理解される。No.112は黒色頁岩製。石核と分類したが、角錐状石器に類する資料と理解される可能性もある

礫(図18-174・216・240+250+251+252+276) 3点出土。No.174は粗粒輝石安山岩製の重円礫。No.240+250+251+252+276は粗粒輝石安山岩製の重円礫。ともに接合16に含まれる資料である。粗粒輝石安山岩は赤城火山を起源とする石材であることから、遺跡の立地を考慮すると、遺跡周辺で採取されたものと考えられる。No.216はひん岩の円礫。

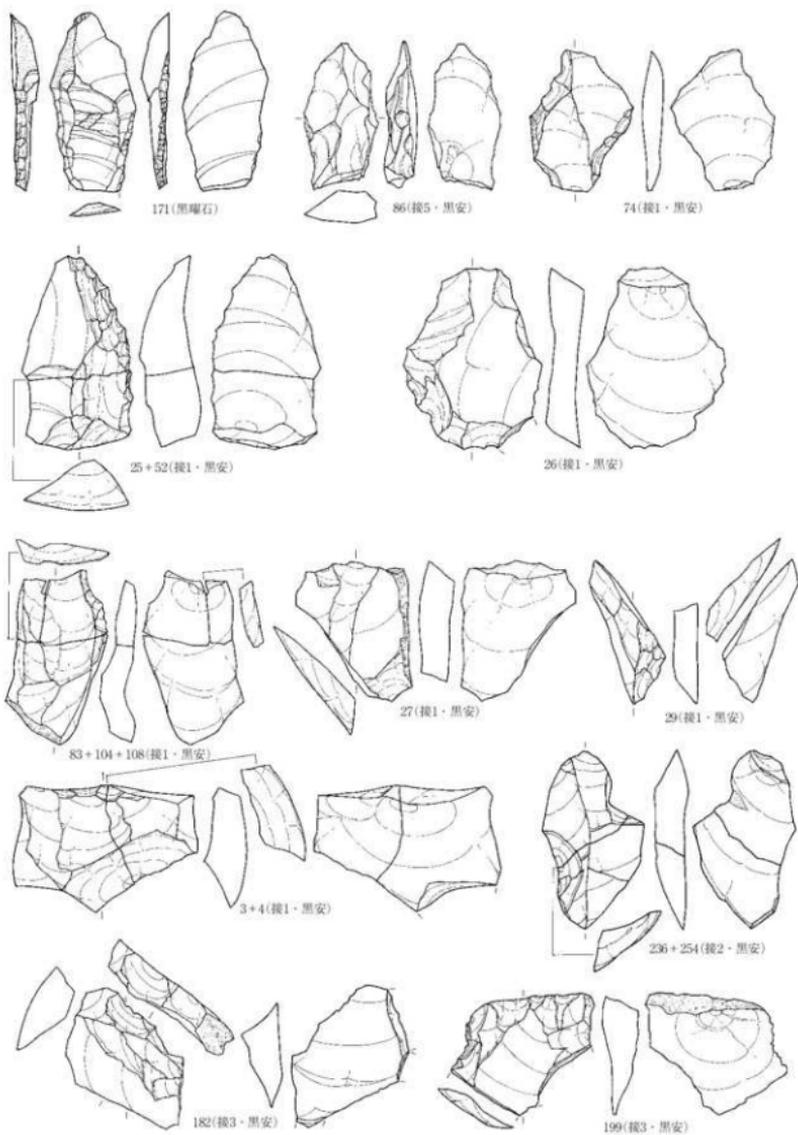


图16 壹野II遺跡 第2文化層(縮尺4/5)

第3章 壹野Ⅱ遺跡

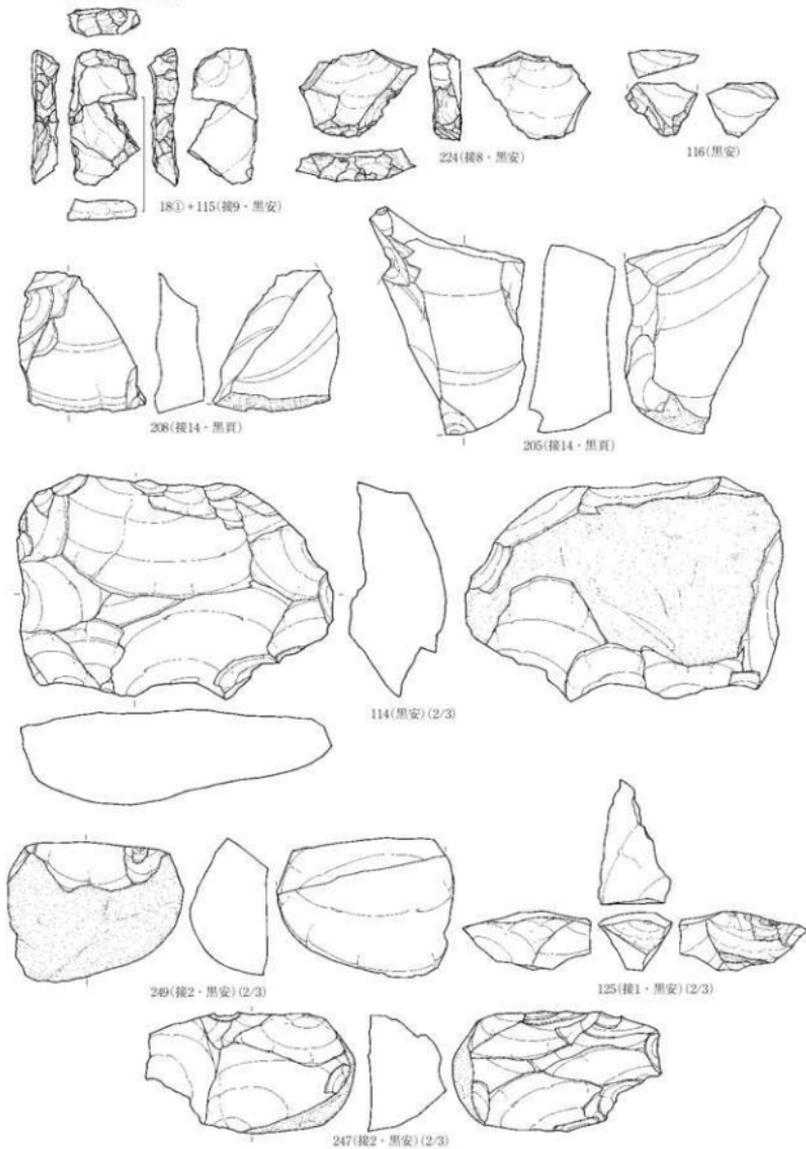


図17 壹野Ⅱ遺跡 第2文化層(縮尺4/5、下の石核4点は2/3)

3. 萱野II遺跡・第2文化層

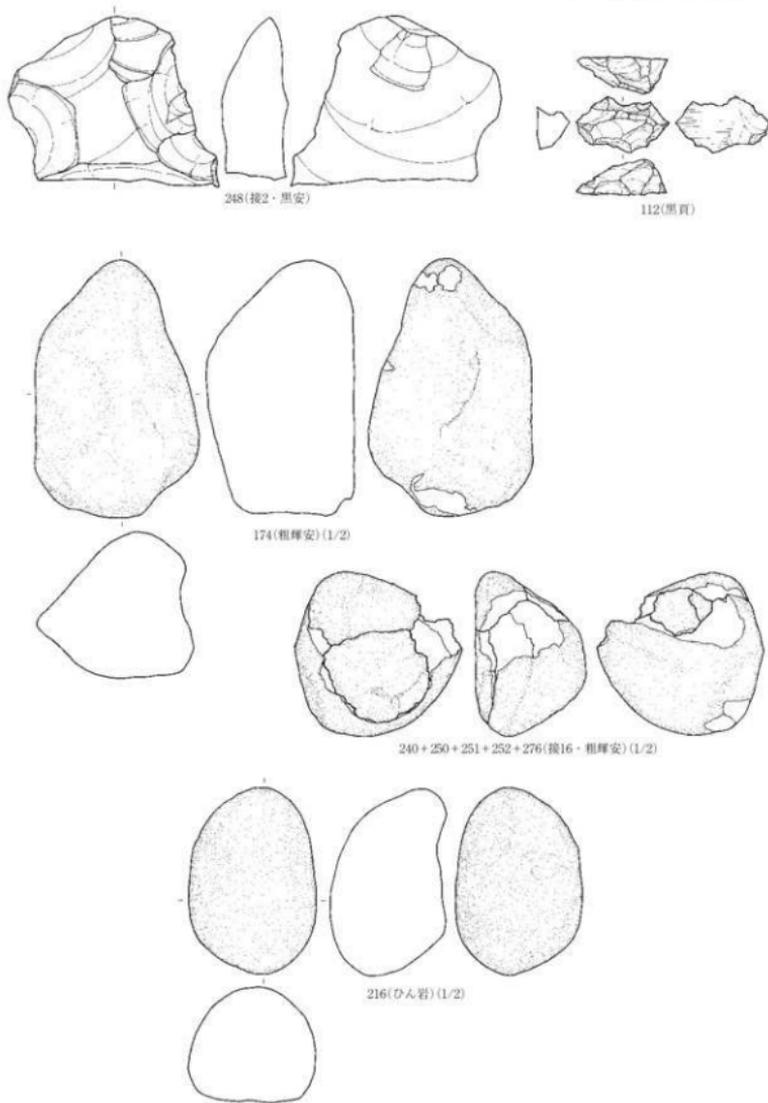


図18 萱野II遺跡 第2文化層(縮尺2/3、下の礫3点は1/2)

(2) 接合資料

接合資料は16個体認められた。接合資料に含まれる石器は、合計で161点である。本石器群は黒色安山岩製石器が主体であることから、視覚的特徴から母岩分類は不可能と判断した。

接合1 (図19、図20、図21、図22) 黒色安山岩製。ナイフ形石器2点、エンドスクレイパー1点、二次加工ある剥片6点、剥片45点、微細剥片22点、石核1点の合計77点の資料が接合。乳児頭大の円礫を利用している。いくつかの小形剥片を生産した後、三つの個体に分割する。そのうちの一つの個体の剥片剥離の痕跡は遺跡内に全く認められない(図19※1の工程)。残りの二つの個体で剥片剥離を進行させている(図19※2・※3)。一方の個体では(※2の工程)、多くの小形剥片を生産した後、最終的に角錐状の石核(図21-125)が生じている。もう一方の個体では(※3の工程)、やはり多くの剥片を生産しそのなかには二つのナイフ形石器(図20-25+52、図21-74)と一つのエンドスクレイパー(図22-26)の素材剥片も含まれる。この個体からの石核は認められない。

接合2 (図23、図24、図25) 黒色安山岩製。二次加工ある剥片2点、剥片26点、微細剥片11点、石核3点の合計42点の資料が接合。拳大の円礫を利用している。剥片剥離工程の最後に石核が1点残されている(図25-247)。この工程から生産される剥片の形態は一定せず、比較的大形の剥片を石核の素材(図23)として利用する様子が観察できる。この剥片素材の石核を見ると、小形剥片(図23-282)を剥離した後、二つの個体に折断しそれぞれの個体で小形剥片を生産している(図23-232・261と図23-187・253・211)。それぞれの個体について石核が認められる(図23-249と図23-248)。

接合3 (図25) 黒色安山岩製。二次加工ある剥片2点、剥片3点、微細剥片2点の合計7点の資料が接合。円礫を利用している。図25-182の二次加工ある剥片には、二次加工に生じた剥片類が4点(図25-188・244・176・267)接合している。これを見ると、二次加工によって、素材剥片の形態を大きく変化させている様子が観察できる。

接合4 (図26) 黒色安山岩製。剥片2点が接合。円礫を利用している。同一の打面より、剥片を剥離する様子が観察される。

接合5 (図26) 黒色安山岩製。ナイフ形石器1点と剥片1点が接合。原石の大きさ・形状は不明である。ナイフ形石器(図26-86)は縦長剥片を素材として、基部付近に二次加工痕が認められる。素材剥片の打面部分を大きく残す。

接合6 (図26) 黒色安山岩製。剥片2点が接合。原石の大きさ・形状は不明である。同一打面より剥片を連続剥離する様子が認められる。

接合7 (図26) 黒色安山岩製。剥片1点と微細剥片2点が接合。原石の大きさ・形状は不明である。同一打面より剥片を連続剥離する様子が認められる。

接合8 (図26) 黒色安山岩製。二次加工ある剥片1点と微細剥片2点が接合。原石の大きさ・形状は不明である。同一打面より剥片を連続剥離する様子が観察される。二次加工ある剥片(図26-224)には、二次加工の際に生じた微細剥片(図26-257)が接合する。

接合9 (図27) 黒色安山岩製。二次加工ある剥片が折断面で接合した資料である。原石の大きさ・形状は不明である。両側縁と打面部に二次加工痕が認められる。二つの個体に折断後、一方の個体にはさらに二次加工を加える様子が観察される。

接合10 (図27) 黒色安山岩製。剥片1点と微細剥片1点が接合。原石の大きさ・形状は不明である。ナイフ形石器加工時のブランディングチップどうしが接合した資料と考えられる。

接合11(図27) 黒色安山岩製。剥片1点と微細剥片1点が折断面で接合した資料である。円礫を利用して
いる。

接合12(図27) 黒色安山岩製。剥片1点と微細剥片1点が折断面で接合した資料である。原石の大きさ・
形状は不明である。

接合13(図27) 黒色安山岩製。剥片1点と微細剥片1点が折断面で接合した資料である。原石の大きさ・
形状は不明である。

接合14(図28) 黒色頁岩製。二次加工ある剥片2点、剥片2点、微細剥片1点が接合。円礫を利用して
いる。剥片素材の石核から小形剥片(図28-204・229)を生産した後、三つの個体に折断する。そのうちの二つ
の個体(図28-205・208)には、折断後の二次加工痕が認められる。また、残りの一個体では、剥片剥離を
行わせて剥片(図28-209)を生産している。この個体では、石核は残されていない。

接合15(図27) 黒色頁岩製。剥片2点、微細剥片1点が接合。原石の大きさ・形状は不明。小形剥片を連
続剥離する様子が観察される。

接合16(図27) 粗粒輝石安山岩製。一個体の礫が復元された資料である。礫は円礫であり、拳大の大きさ
である。

表8 萱野Ⅱ遺跡 第2文化層 接合資料の器種組成

接合資料 No	器種		ナイフ形石器	エンドスクレイパー	二次加工 ある剥片	剥片	微細剥片	石核	礫	礫片	総計	
	石材	形状										大きさ
1	黒色安山岩	円礫	乳児頭大	2	1	6	45	22	1		77	
2	黒色安山岩	円礫	拳大			2	26	11	3		42	
3	黒色安山岩	円礫	-			2	3	2			7	
4	黒色安山岩	円礫	-				2				2	
5	黒色安山岩	-	-	1			1				2	
6	黒色安山岩	-	-				2				2	
7	黒色安山岩	-	-				1	2			3	
8	黒色安山岩	-	-			1		2			3	
9	黒色安山岩	-	-			2					2	
10	黒色安山岩	-	-				1	1			2	
11	黒色安山岩	円礫	-				1	1			2	
12	黒色安山岩	-	-				1	1			2	
13	黒色安山岩	-	-				1	1			2	
14	黒色頁岩	円礫	-			2	2	1			5	
15	黒色頁岩	-	-				2	1			3	
16	粗粒輝石安山岩	円礫	拳大						1	4	5	
	総計			3	1	15	88	45	4	1	4	161

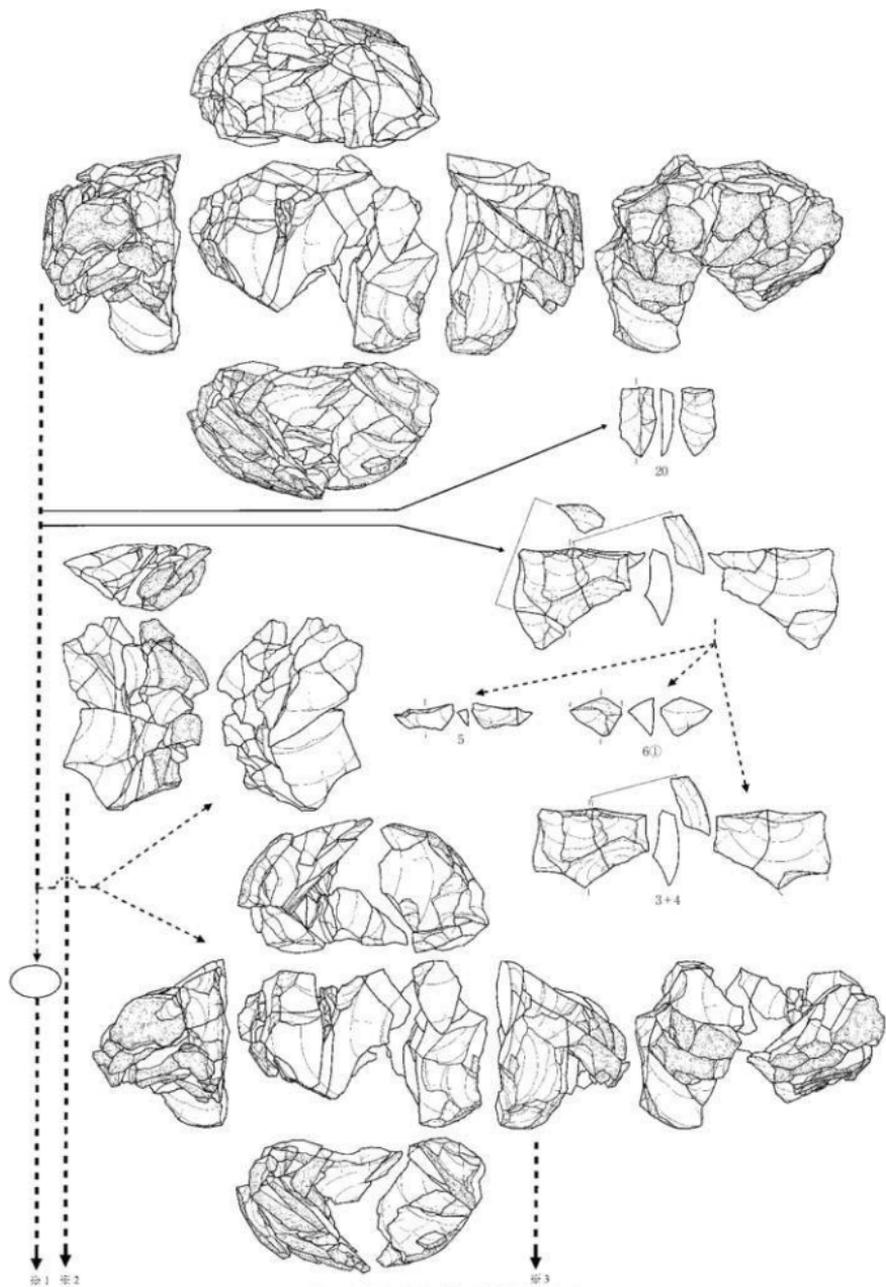
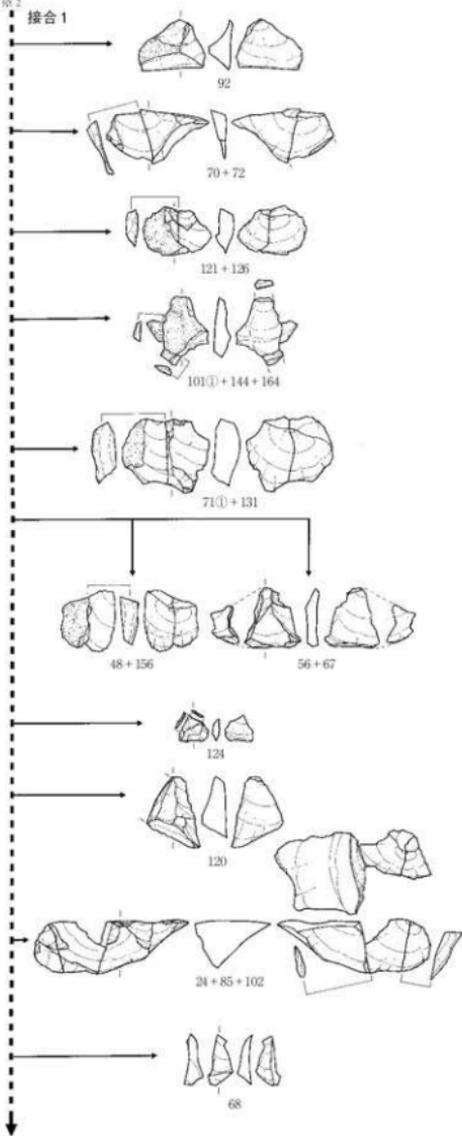


图19 壹野Ⅱ遺跡 第2文化層(縮尺1/2)

图 1 图 2

接合 1



3. 壹野 II 遺跡・第 2 文化層

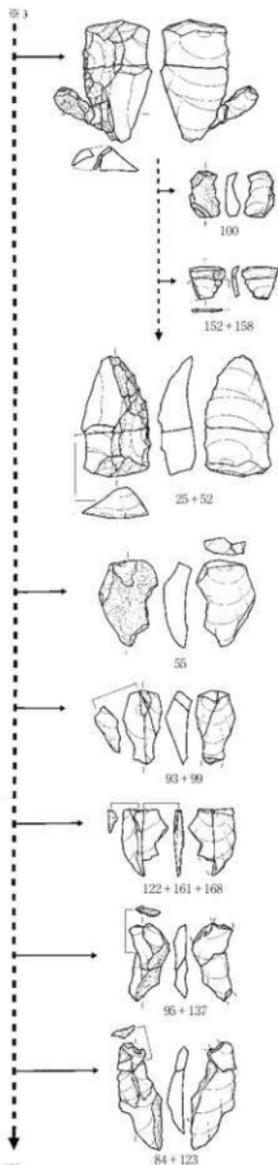


图 20 壹野 II 遺跡 第 2 文化層 (縮尺 1/2)

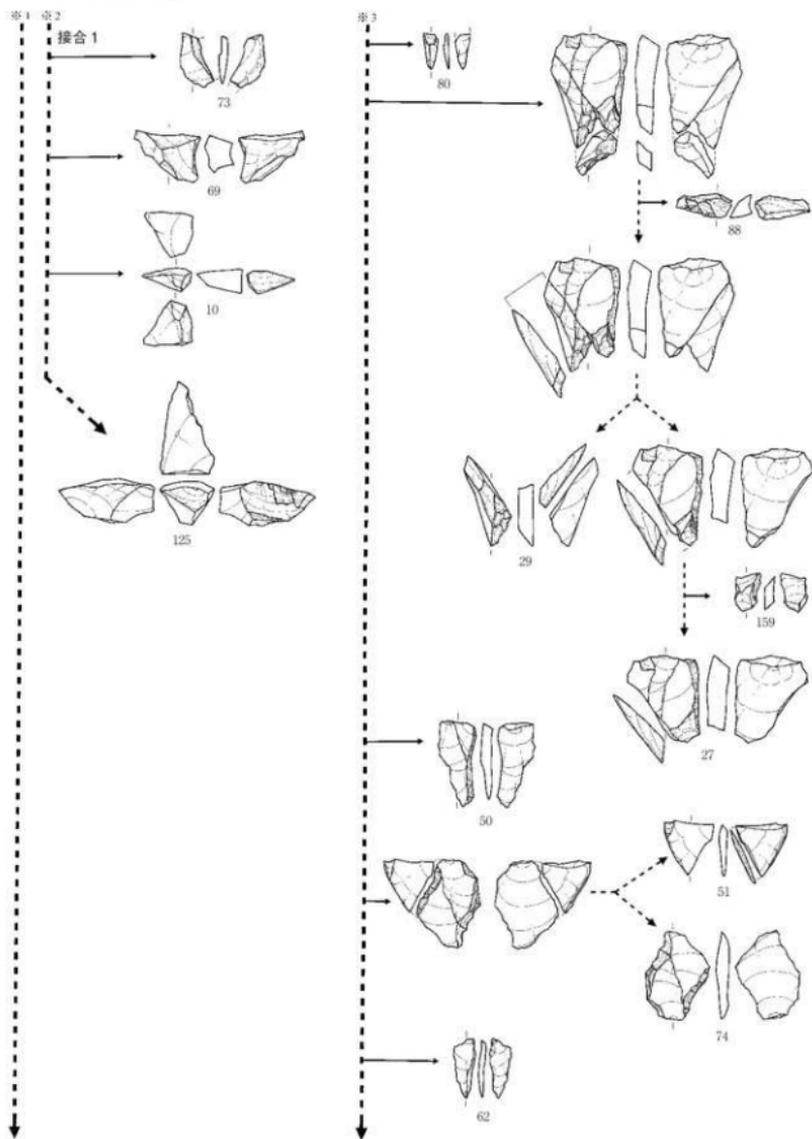


图21 壹野II遺跡 第2文化層(縮尺1/2)

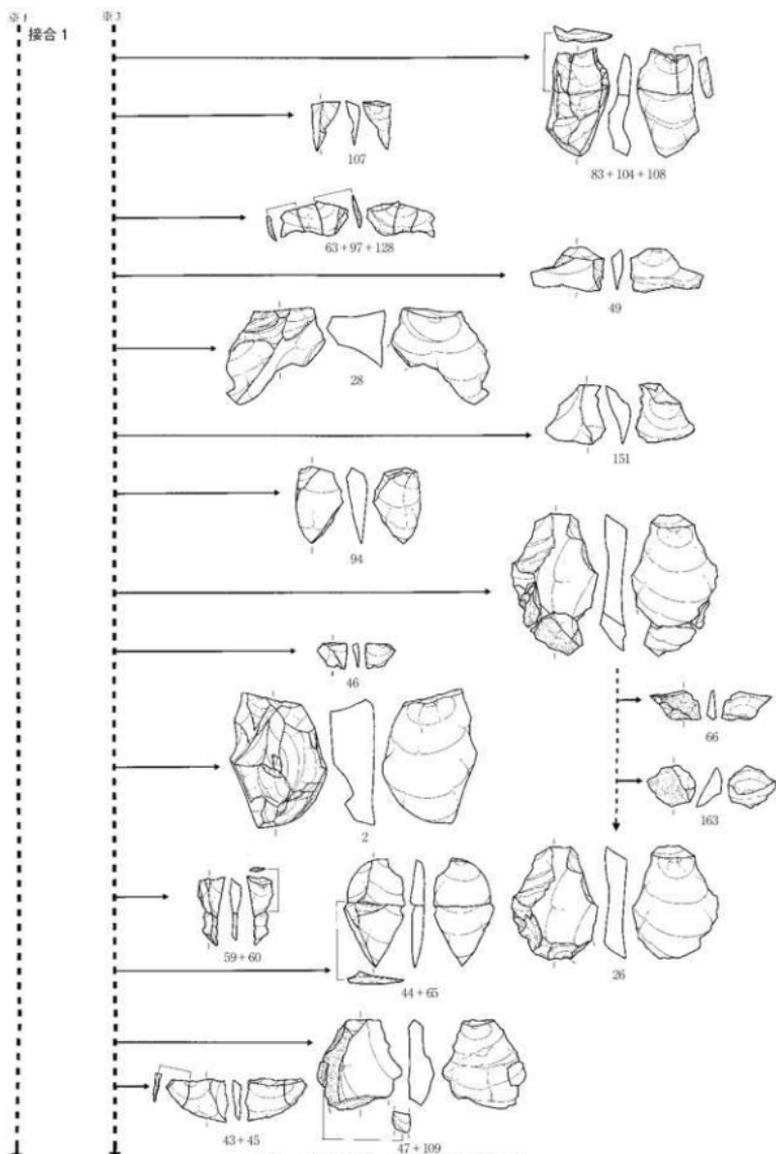
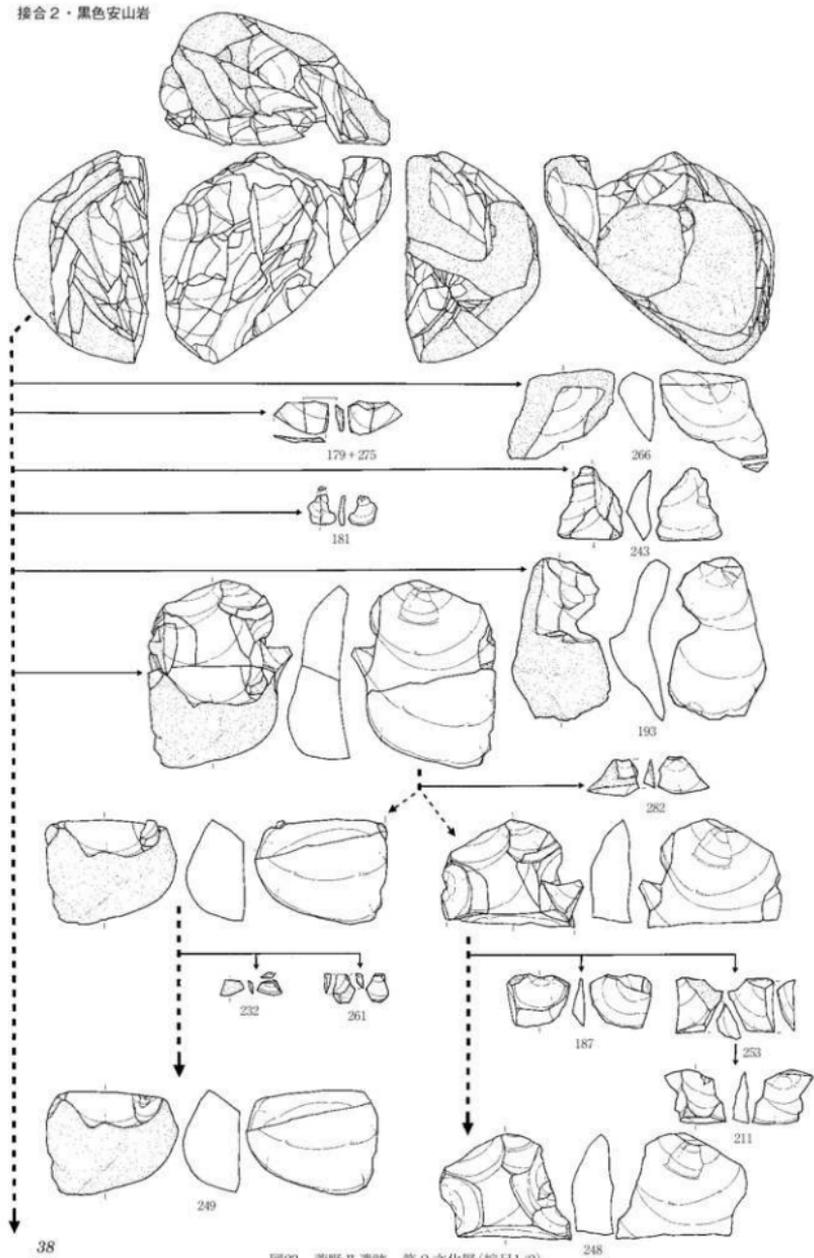


图22 壹野II遺跡 第2文化層(縮尺1/2)



接合2

3. 壹野II遺跡・第2文化層

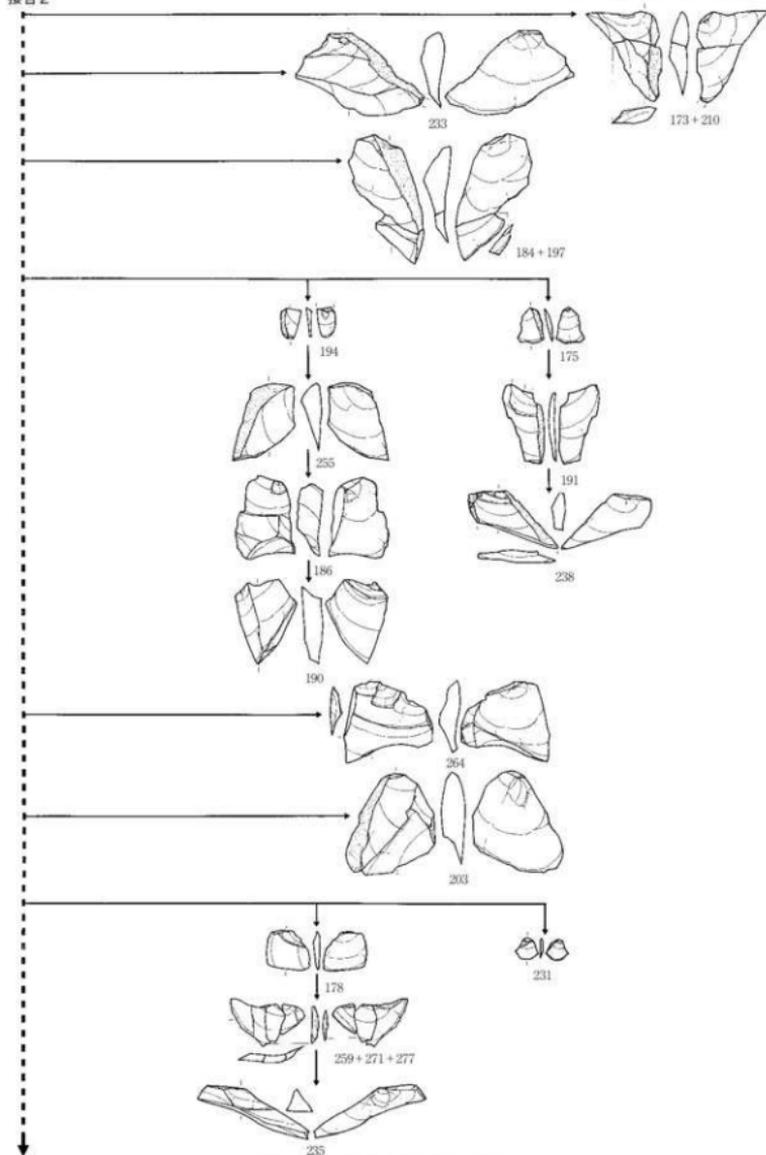


图24 壹野II遺跡 第2文化層(縮尺1/2)

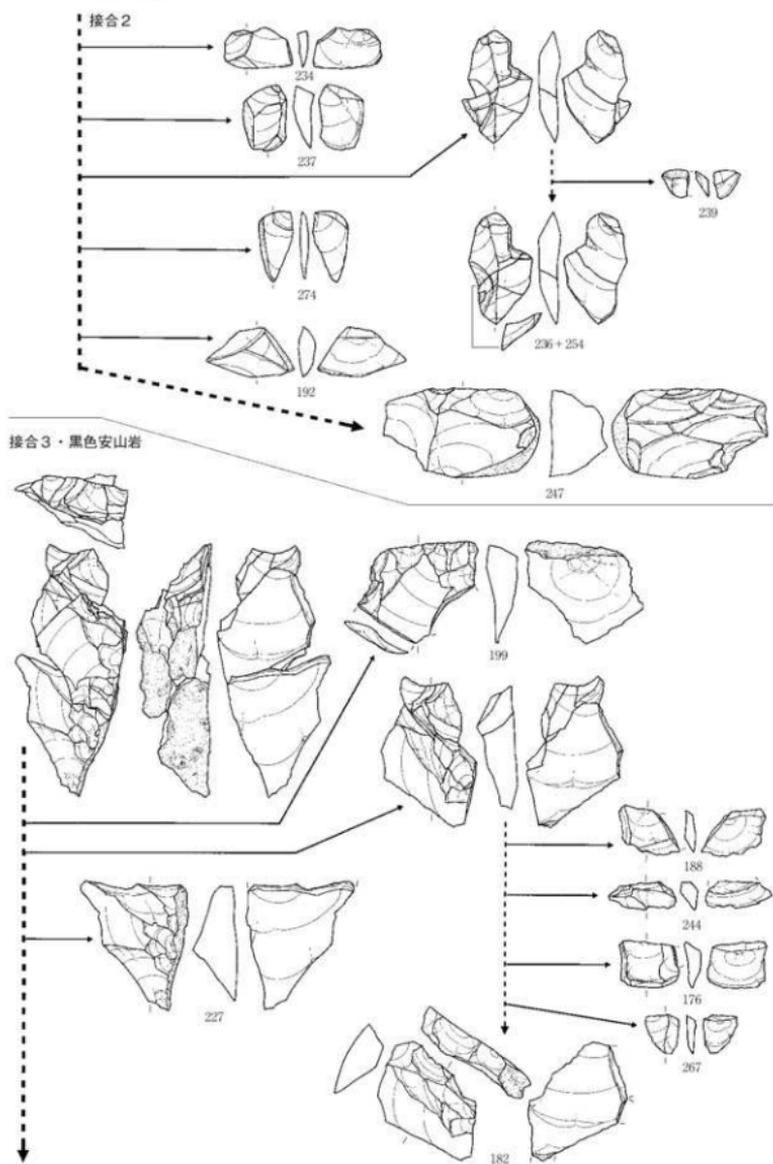


図25 壹野II遺跡 第2文化層(縮尺1/2、接合3(1+2/3))

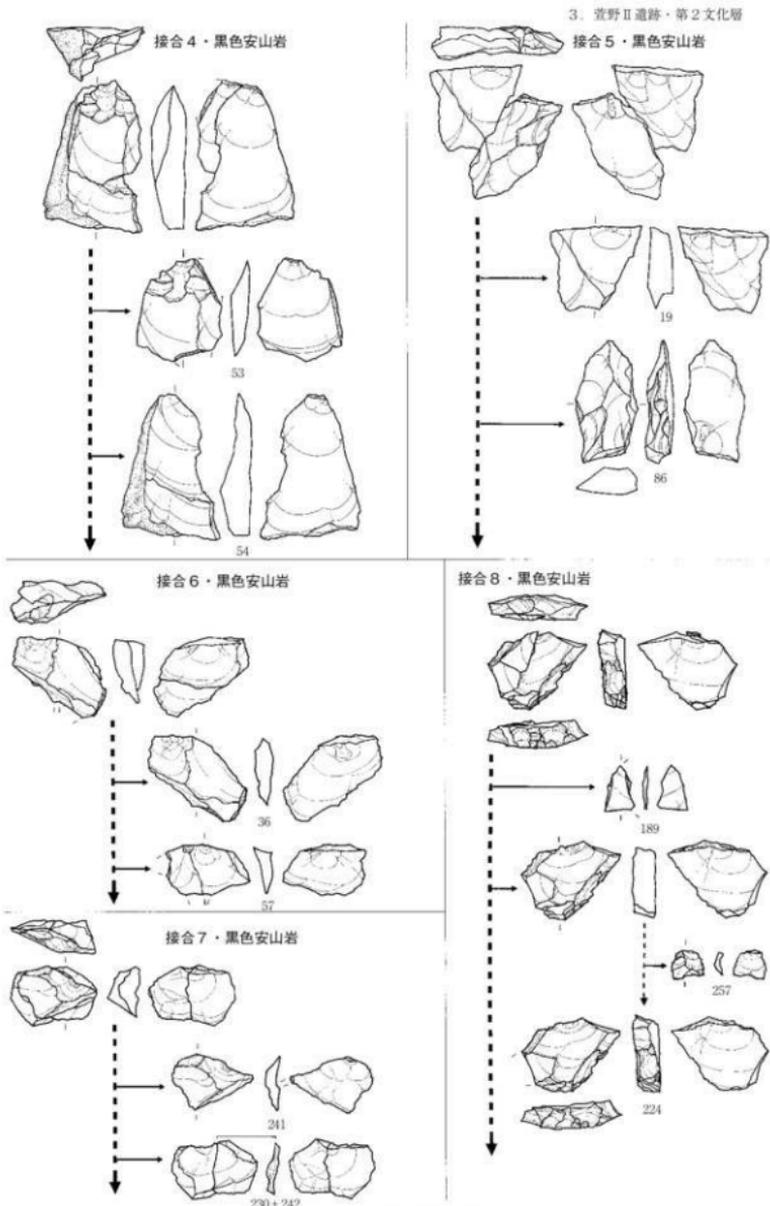
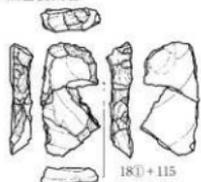


図26 荻野II遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

接合9・黑色安山岩



接合10・黑色安山岩



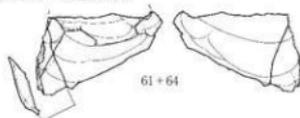
接合11・黑色安山岩



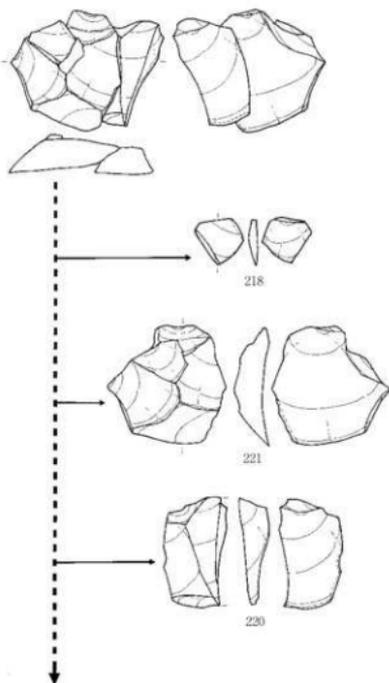
接合12・黑色安山岩



接合13・黑色安山岩



接合15・黑色頁岩



接合16・粗粒輝石安山岩

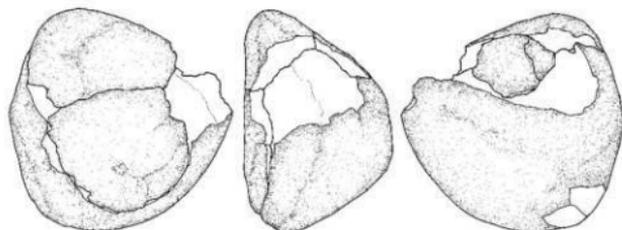


图27 壹野II遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

接合14・黒色頁岩

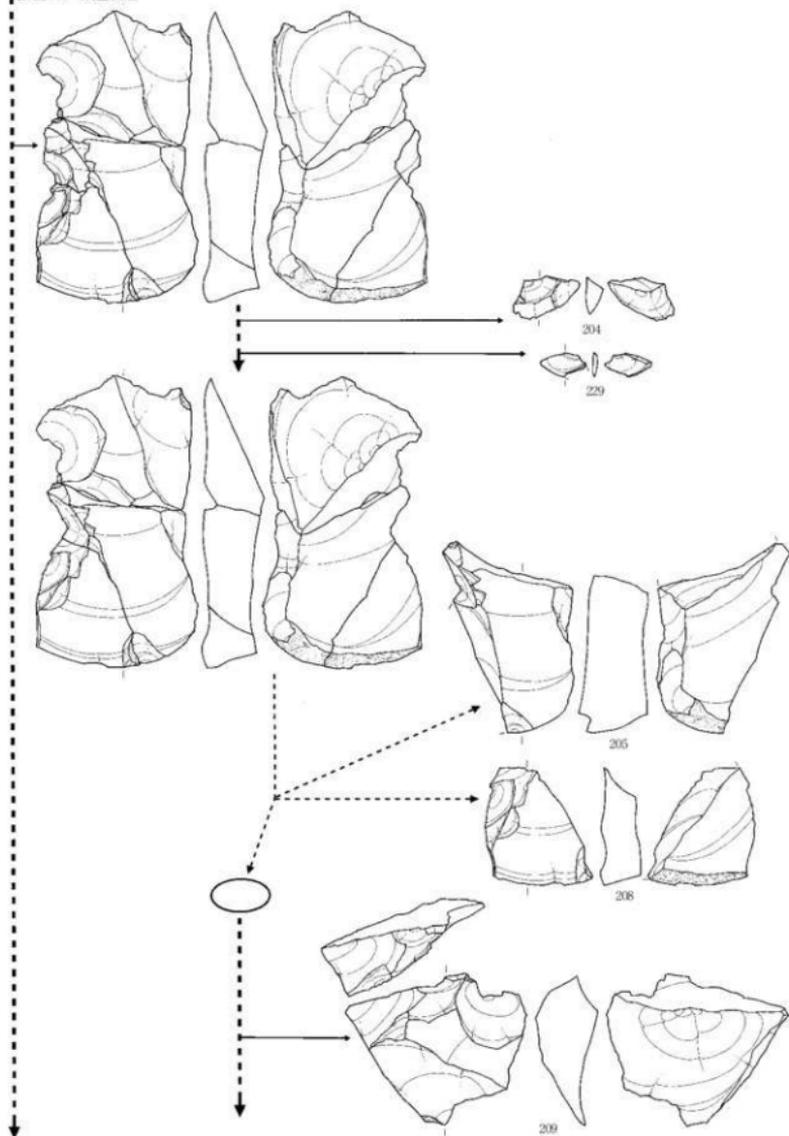


图28 壹野II遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

II. 石器の分布

赤城山南麓地域においては、いくつもの低地域がほぼ南北に樹枝状に延びる。第2文化層の石器群は、このような低地域に挟まれたローム台地上のほぼ頂部にあたる地点より出土した(図7)。南に向かって緩やかに傾斜した場所から石器の出土が確認された。

石器分布状況(図29) 石器の平面的な分布状況を見ると、大きく二つの集中域に分別して理解できそうである。これらの石器集中地点はおおよそ8m離れている。

接合資料の分布状況(図30) 接合資料は16点確認された。接合資料は、二つの石器集中域のそれぞれの地点に集中して分布している。この二つの石器集中域を橋渡しするような接合資料は認められない。接合資料の分布をみる限りでは、二つの集中域はそれぞれが独立的な存在として理解できる。それぞれの集中地点には剥片剥離に関する接合資料が数多く分布していることから、剥片生産活動を色濃く反映した地点として指摘できる。

北西部の集中地点には接合2という個体が認められ、南東部の集中地点には接合1という個体が認められる。この二つの接合資料は、どちらも原石状態のほぼ半分程度にまで復元されており、どちらの集中地点でも剥片剥離工程の早い段階からの工程が展開していることになる。

器種別石器の分布状況(図31、図32) 製品類の分布をみると(図31)、特定の器種の偏在傾向は認められない。二つの石器集中地点に関しても、分布の傾向に大きな違いは認められない。しかし、南東部に位置する集中地点の方に、ナイフ形石器・エンドスクレイパーの主要器種がまとまる様子が認められる。

剥片と微細剥片の分布をみると(図32)、二つの集中地点それぞれに剥片と微細剥片が数多く分布しており、それぞれの地点が石器製作活動を色濃く反映した地点として指摘できる。

石材別石器の分布状況(図33、図34) この石器群は黒色安山岩を主要な使用石材とする。二つの集中地点には黒色安山岩製石器が集中しており、その周辺に黒色頁岩製石器が散在する傾向が認められる(図33)。また、チャート製石器(5点)と黒曜石製石器(1点)が少量出土しており、黒色頁岩製石器と同様に二つの石器集中域の周辺に散在する様子が観察できる(図34)。

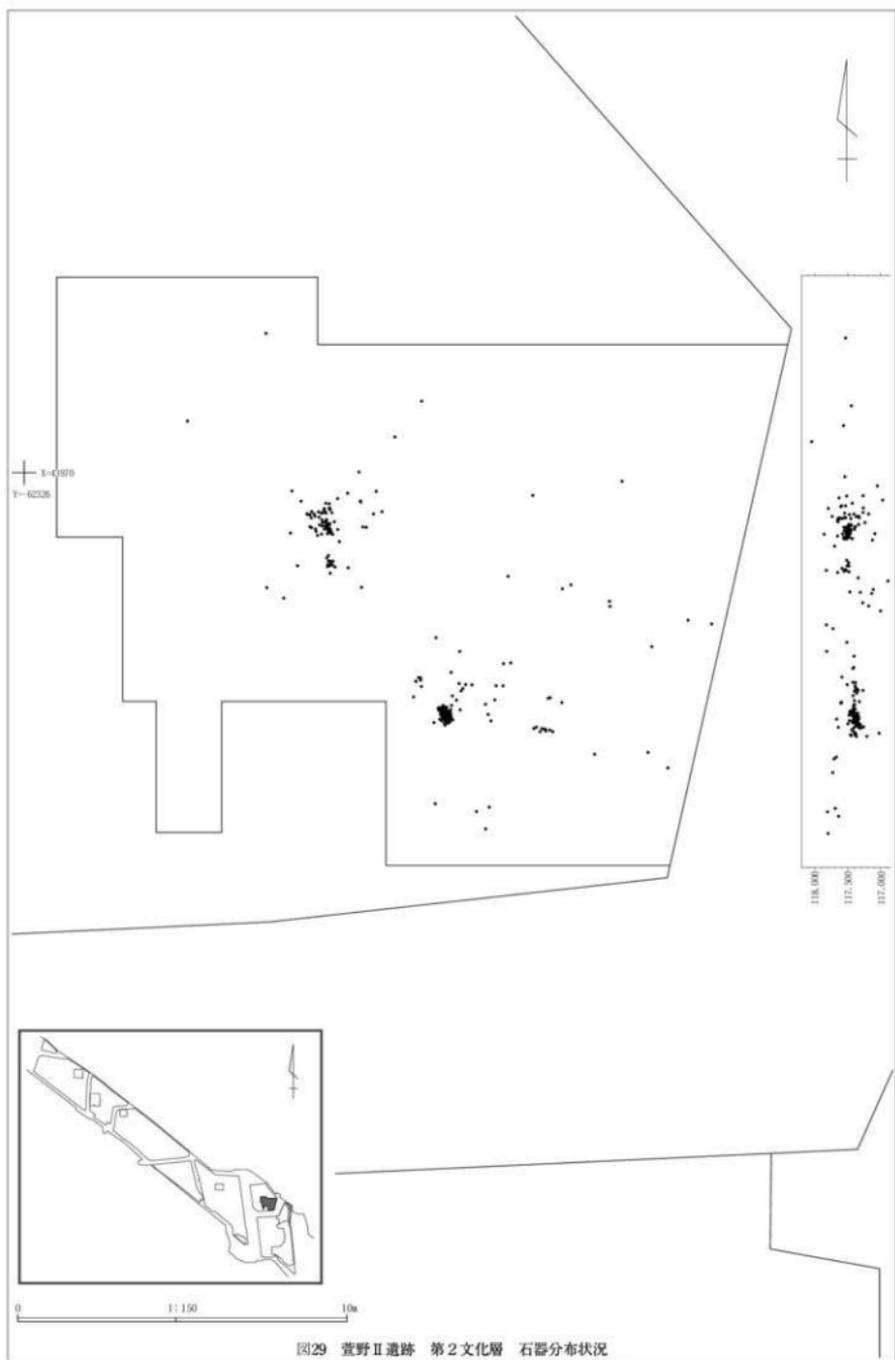


图29 壹野Ⅱ遺跡 第2文化層 石器分布状況

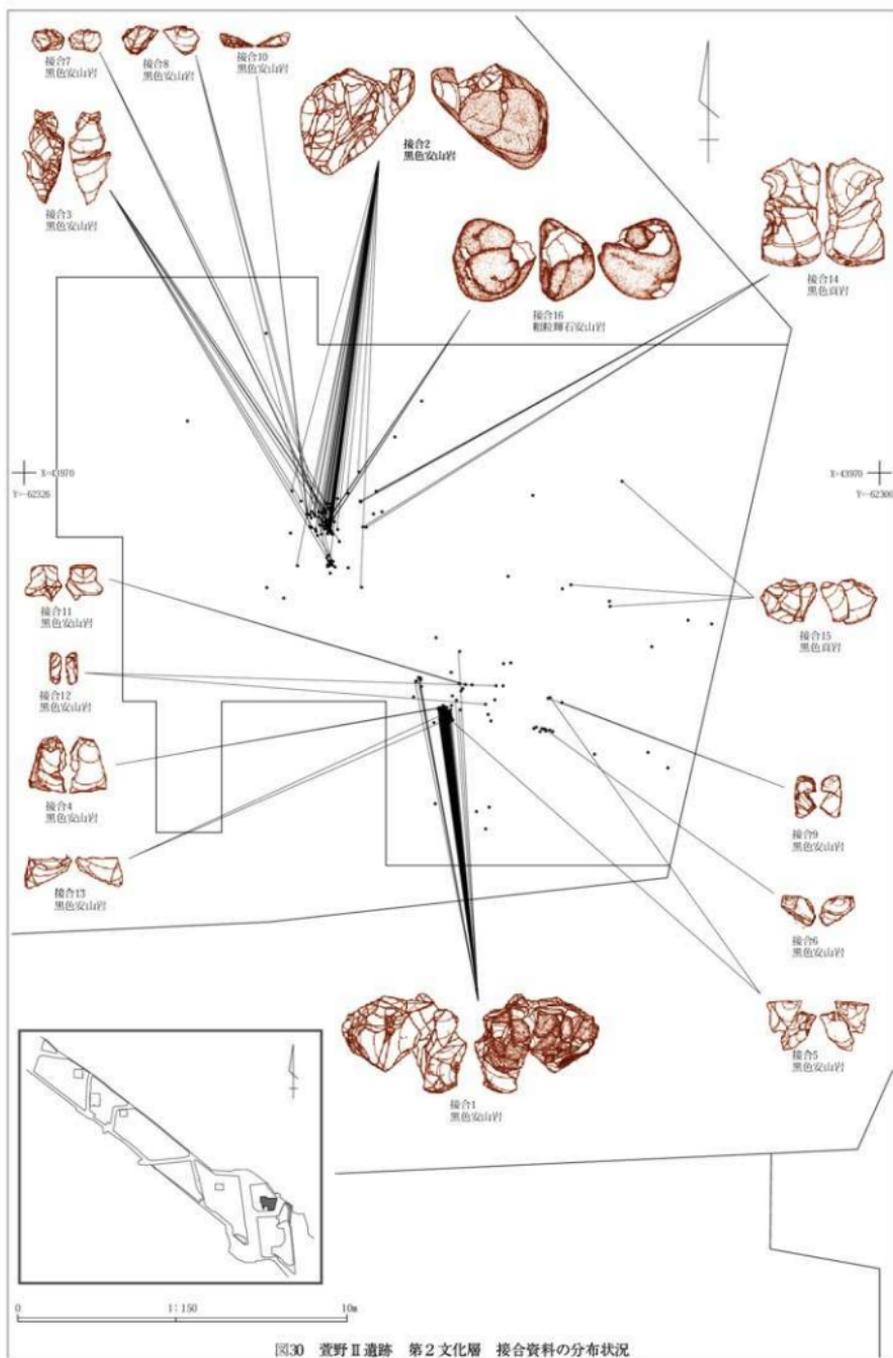


図30 萱野Ⅱ遺跡 第2文化層 接合資料の分布状況

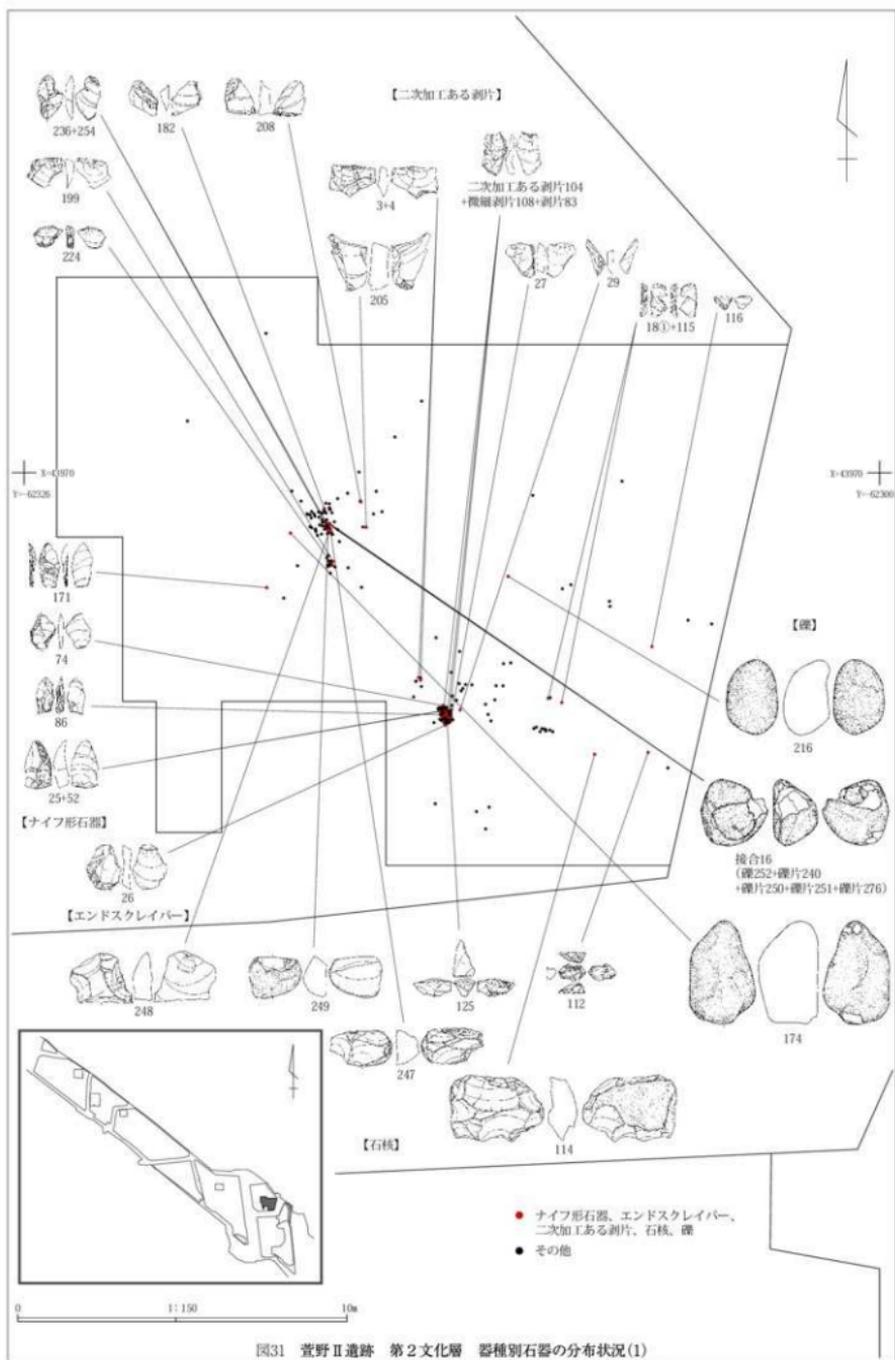


図31 萱野Ⅱ遺跡 第2文化層 器種別石器の分布状況(1)

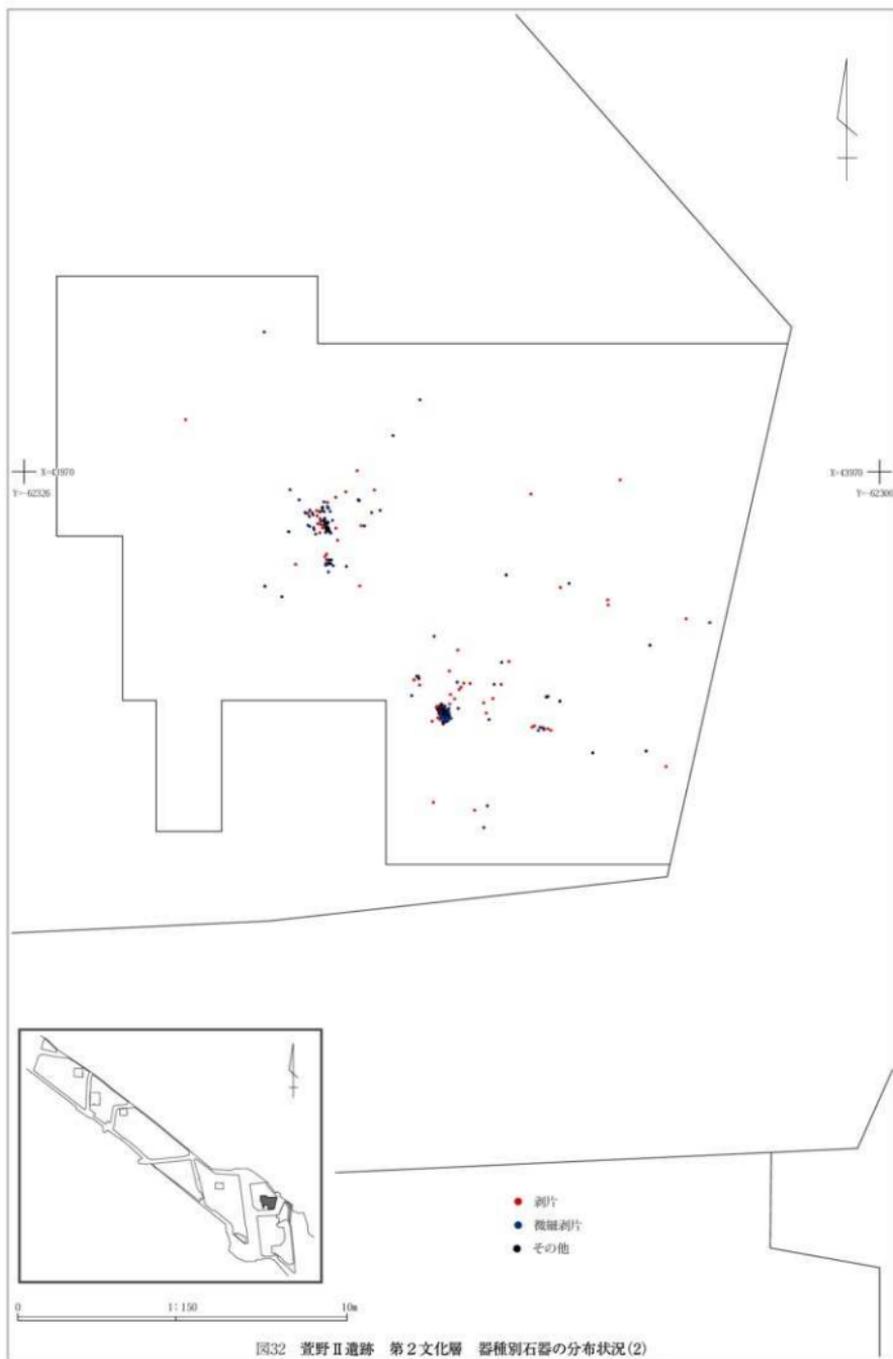


図32 萱野Ⅱ遺跡 第2文化層 器種別石器の分布状況(2)

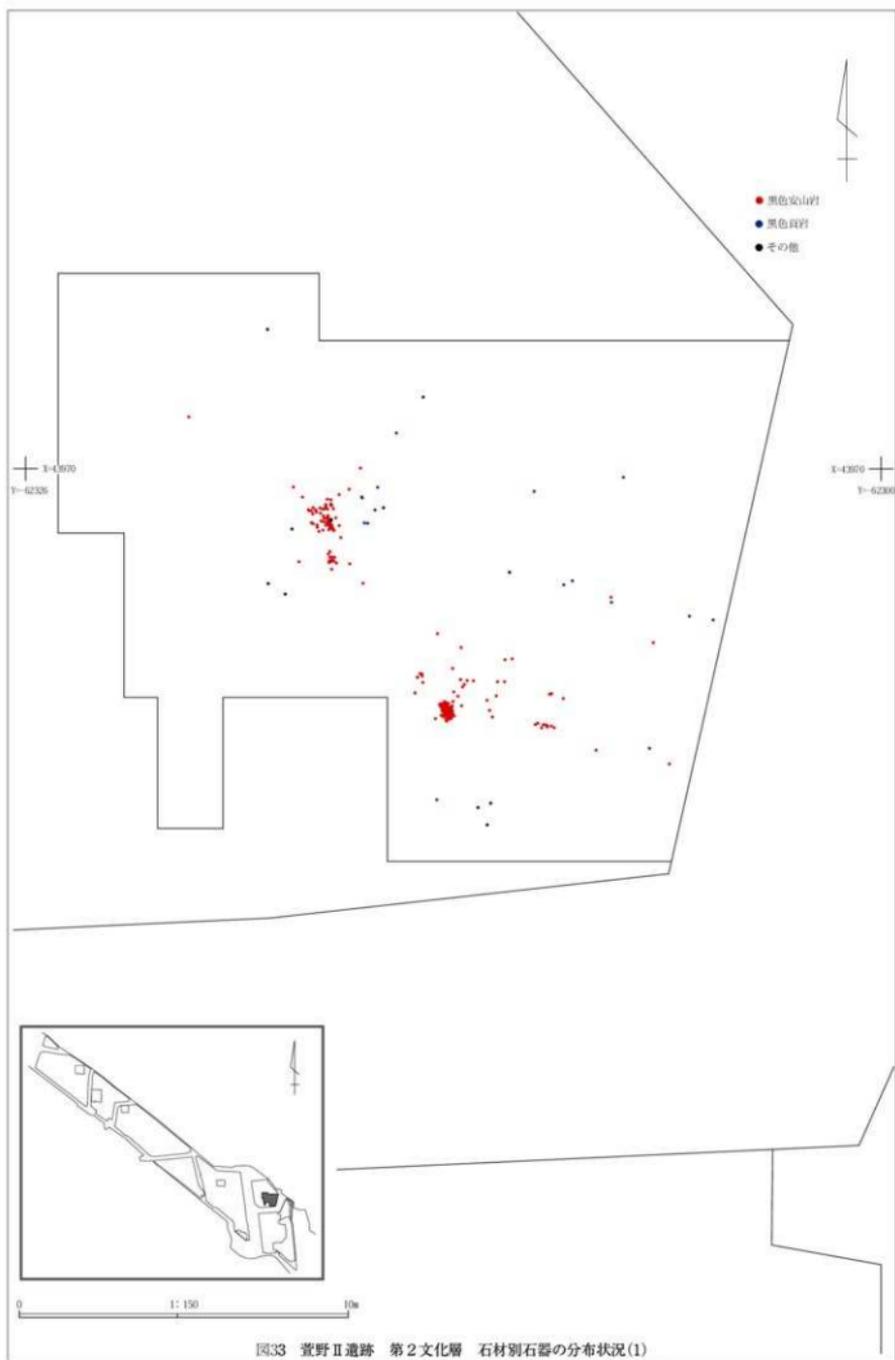
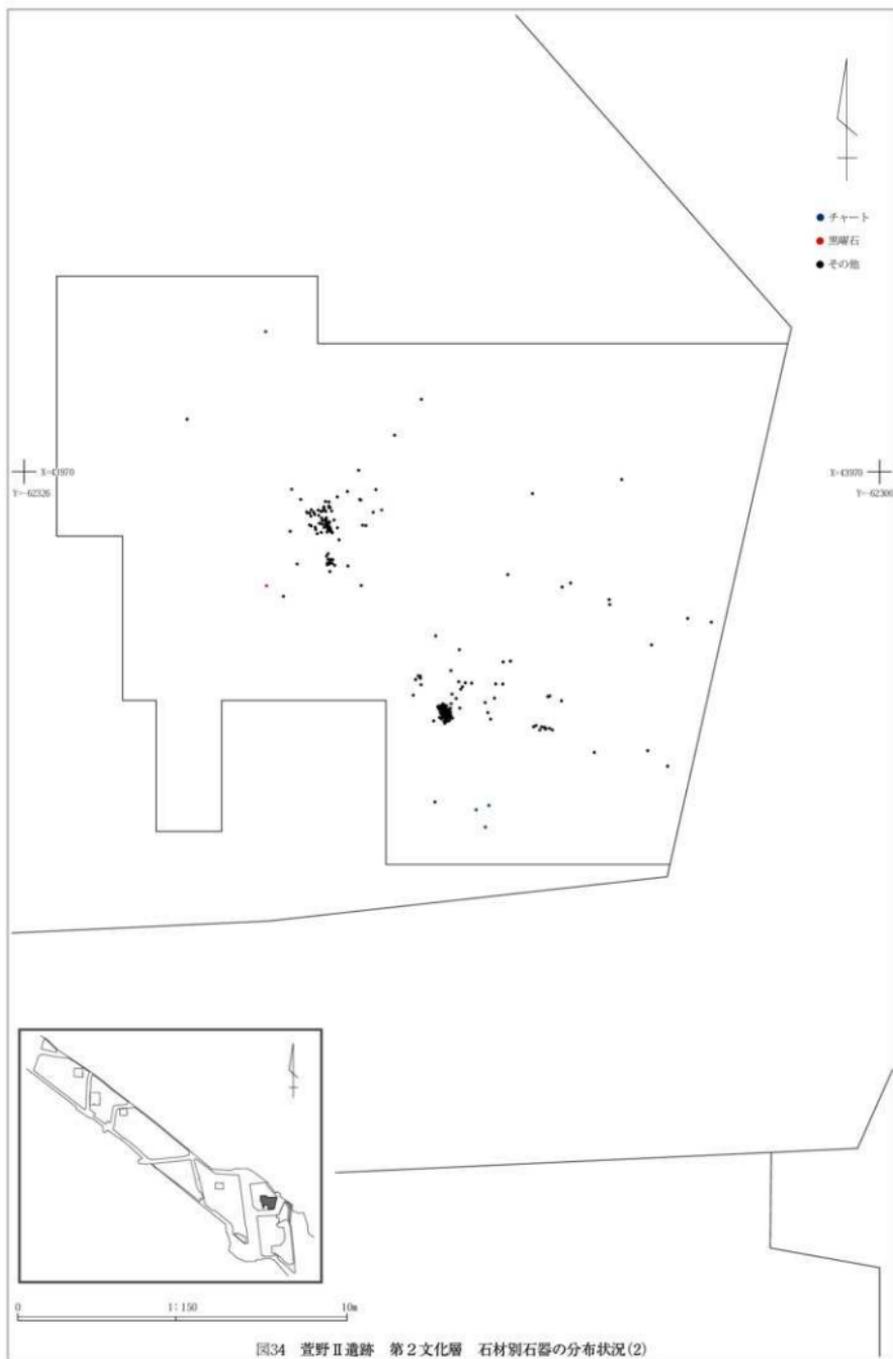


図33 萱野Ⅱ遺跡 第2文化層 石材別石器の分布状況(1)



4. 萱野Ⅱ遺跡・第3文化層

I. 出土石器

第3文化層は、西に向かってやや傾斜した地点より出土した。この文化層は8点の石器からなる。出土層位をみると、IVb層より最も多くの石器が出土していることから、As-BP group下部の降下期に生活面を設定することができる。特徴的な器種としては、黒色安山岩製の石刃が1点認められる。また、黒曜石製の石器が1点確認されており(微細剥離痕ある剥片)、原産地分析の結果、信州蓼科産と同定された(第8章考察参照)。

表9 萱野Ⅱ遺跡
第3文化層
層位別出土点数

層位	点数
IVb	7
V	1
総計	8

表10 萱野Ⅱ遺跡 第3文化層 器種と石材

器種	石材				総計
	黒色安山岩	黒曜石	雲母石英片岩	粗粒輝石安山岩	
石刃	1				1
微細剥離痕ある剥片		1			1
礫片			4	2	6
総計	1	1	4	2	8

(1) 各器種

石刃(図35-5) 1点出土。黒色安山岩製。背面の先行剥離痕をみると、主要剥離面と同じ方向の剥離面で構成されており、単設の石刃石核より剥離されたことがうかがわれる。

微細剥離痕ある剥片(図35-1) 1点出土。黒曜石製。器種のほぼ中央に折断痕が認められる。側縁と先端の背面側に微細剥離痕が集中する。原産地分析の結果、信州蓼科産と同定された(第8章考察参照)。

礫片(図35-2・3・4・8) 6点が出土。そのうち4点が結晶片岩類(雲母石英片岩)、これを図示した。いずれも粗粒で軟弱な石質であり、剥片石器の石材としては適さないものである。結晶片岩類は、群馬県南西部の三波川帯に主産地があり自然的要因で赤城山南麓地域に混入することは考えられない石材である(津島2008)。

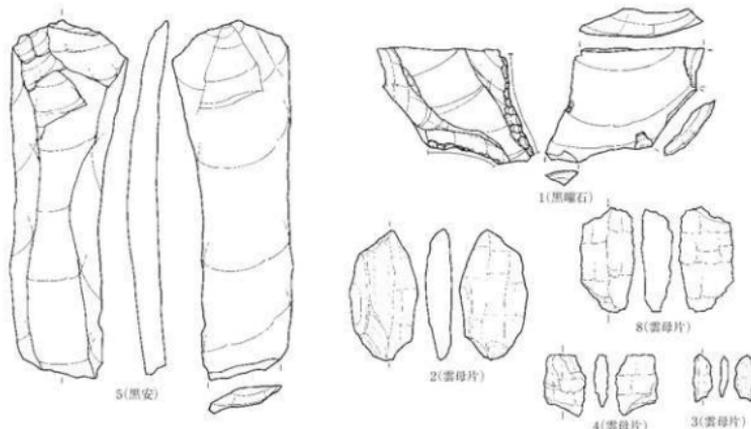


図35 萱野Ⅱ遺跡 第3文化層(縮尺4/5)

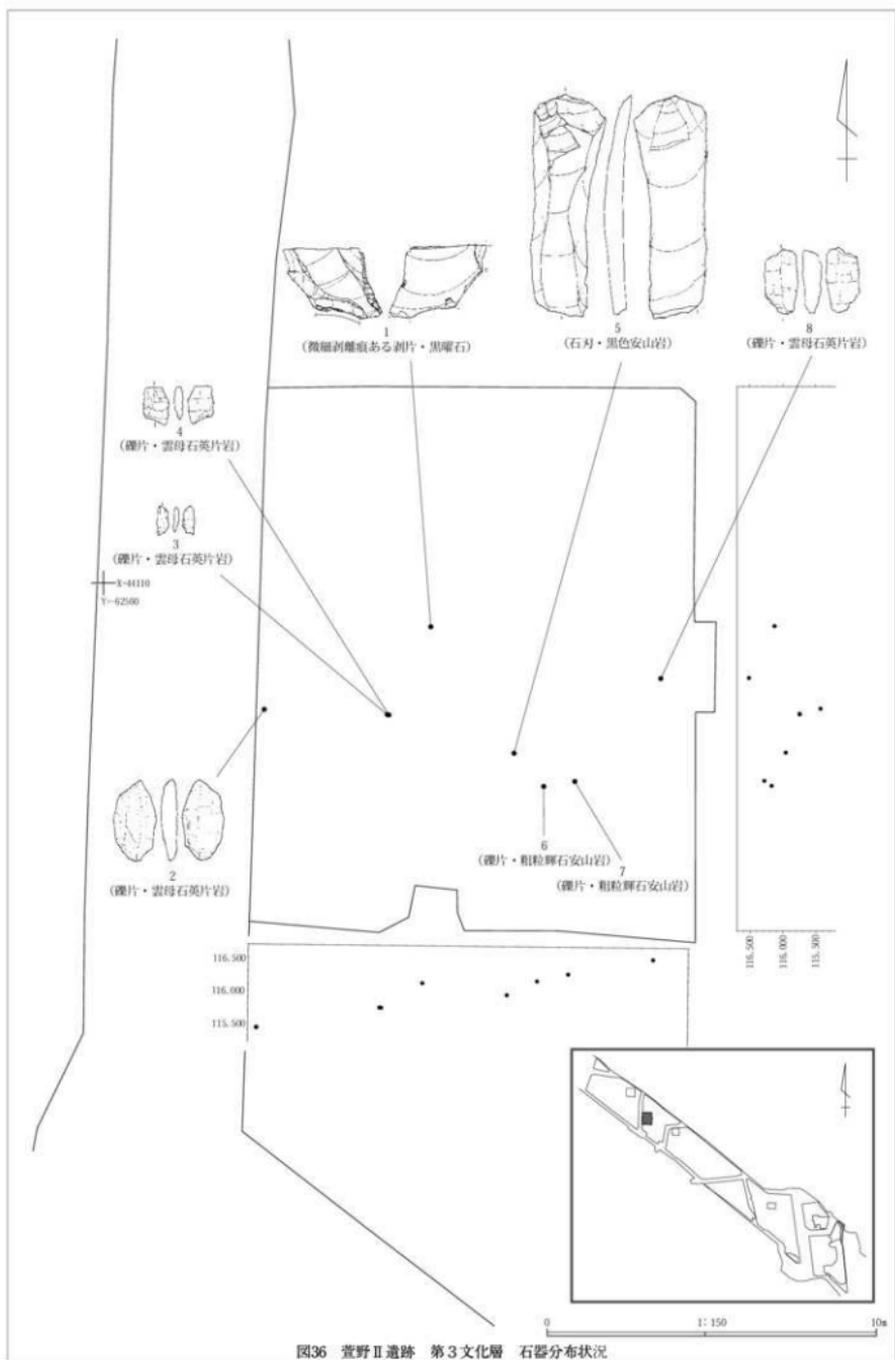


图36 萱野II遺跡 第3文化層 石器分布状況

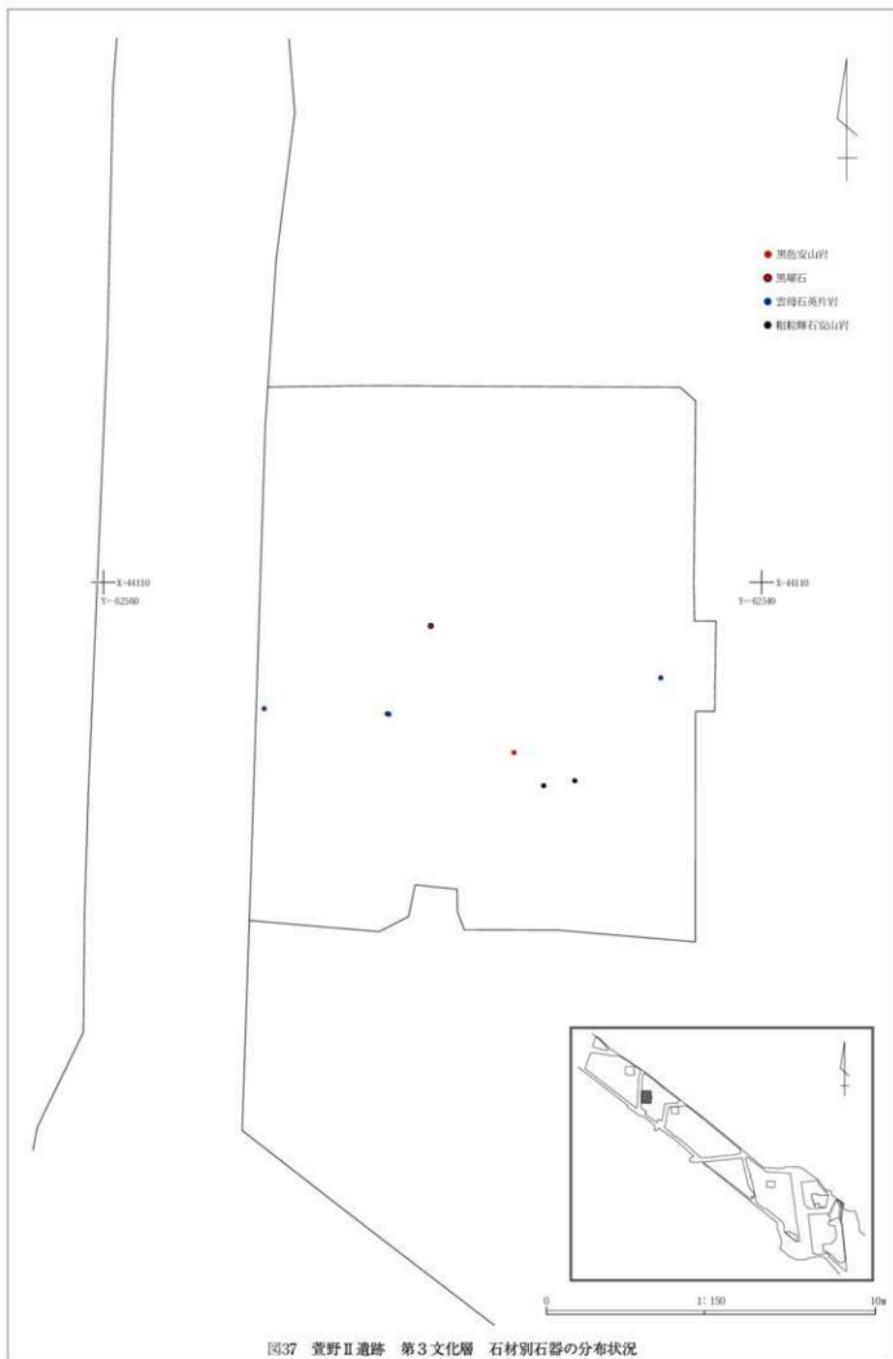


図37 萱野Ⅱ遺跡 第3文化層 石材別石器の分布状況

5. 萱野Ⅱ遺跡・第4文化層A地点

I. 出土石器

第4文化層A地点の石器群は、南東に向かって緩やかに傾斜した地点より出土した(図7)。この石器群は39点の石器からなる。出土層位をみると、Ⅵ・Ⅶ層から多くの石器が出土しており、AT下暗色帯に帰属する石器群と考えられる。尖頭状石器・ナイフ形石器を組成し、黒色頁岩を使用石材の主体とする。黒曜石製の石器は6点出土しており、原産地分析の結果、そのうちの2点は信州諏訪産、4点は信州和田産と特定された(第8章考察)。

表11 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層A地点
層位別出土点数

層位	点数
V	15
Ⅵ	10
Ⅶ	14
総計	39

表12 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層A地点 器種と石材

器種	石材	黒色安山岩	黒色頁岩	珪質頁岩	黒曜石	灰色安山岩	粗粒輝石安山岩	変珪岩	溶結凝灰岩	総計
ナイフ形石器			1		1					2
尖頭状石器				1						1
二次加工ある剥片			1		1					2
剥片		1	18		3	1				23
微細剥片			1							1
微細剥離痕ある剥片			1		1					2
石核				1						1
礫							2		1	3
礫片							3	1		4
総計		1	22	2	6	1	5	1	1	39

(1) 各器種

尖頭状石器(図38-A14) 1点出土。珪質頁岩製。素材剥片の形状は不明である。石器の全体に二次加工痕が認められ、先端部を作出している。一個縁は主に主要剥離面側からの二次加工によって整形されているが、もう一方の側縁では主に背面側からの二次加工によって整形される様子が観察される。

ナイフ形石器(図38-A10・A27) 2点出土。A10は黒曜石製。信州諏訪産と特定された(第8章考察参照)。石刃を素材として、基部付近と先端部に主要剥離面側からの二次加工が認められる。A27は黒色頁岩製。接合1に含まれる資料である。石刃を素材として、基部付近と先端部に主要剥離面側からの二次加工が認められる。

二次加工ある剥片(図38-A15・A32) 2点出土。A15は黒色頁岩製。先端部付近に二次加工痕が認められる他、折断部分にも二次加工痕が観察される。A32は黒曜石製。接合3に含まれる資料である。原産地分析の結果、信州和田産と特定された(第8章考察参照)。石刃を素材として、先端部に二次加工痕が認められる。

微細剥離痕ある剥片(図38-A2・A36) 2点出土。A36は黒曜石製。接合3に含まれる資料である。原産地分析の結果、信州和田産と特定された(第8章考察参照)。石刃を素材として、先端と側縁に微細剥離痕が認められる。A2は黒色頁岩製。接合1に含まれる資料である。縦長剥片を素材として、側縁に微細剥離痕が認められる。

石核(図39-A33) 1点出土。珪質頁岩製。自然面を大きく残し、円礫を利用していることが分かる。打面を上下両端に設定して縦長剥片を剥離した様子が観察される。

礫(図39-A4・A21・A29) 3点出土。A21は粗粒輝石安山岩製の円礫。A29は溶結凝灰岩製の垂円礫。A4は粗粒輝石安山岩製の垂角礫。

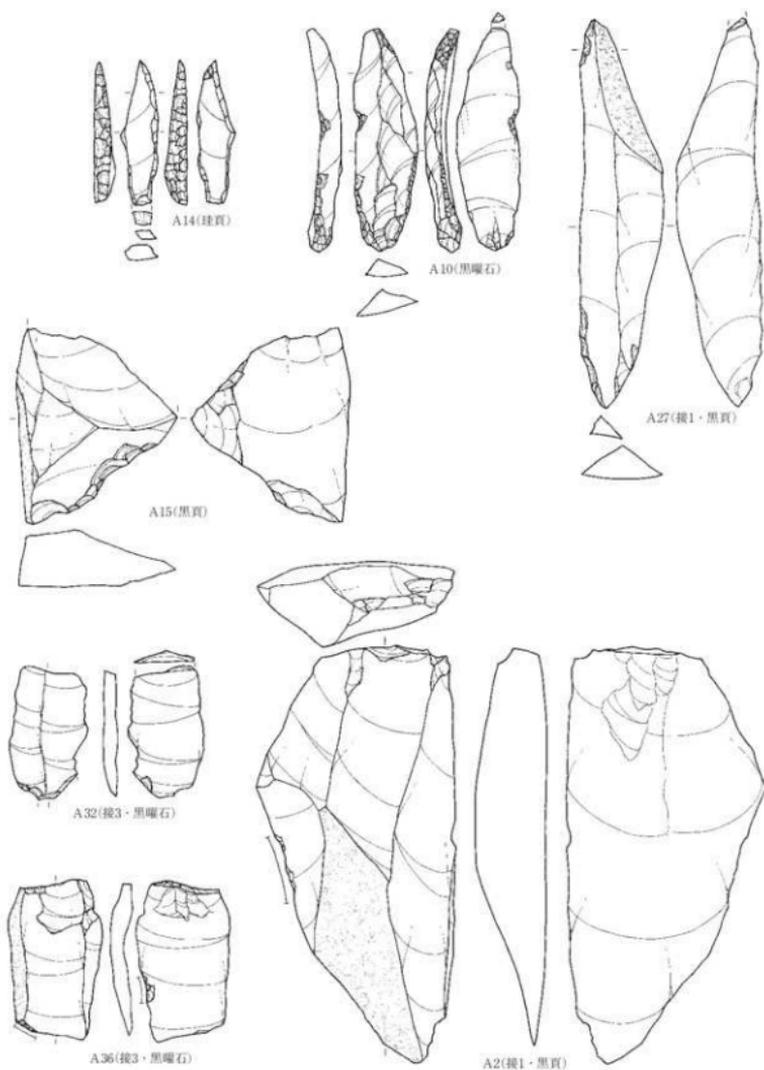
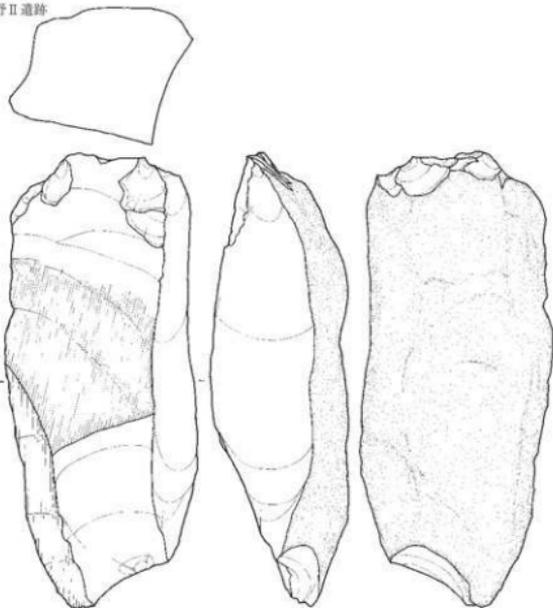
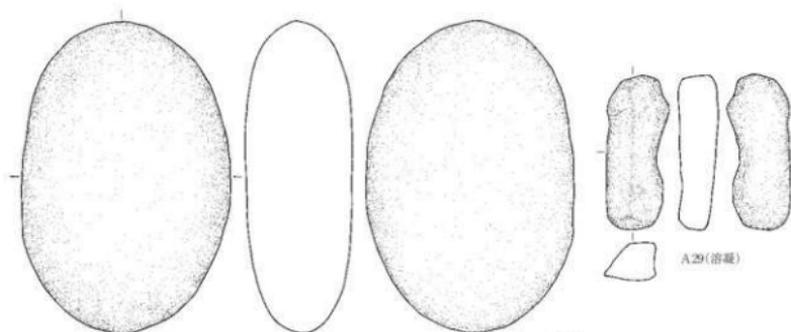


図38 菅野Ⅱ遺跡 第4文化層A地点(縮尺4/5)

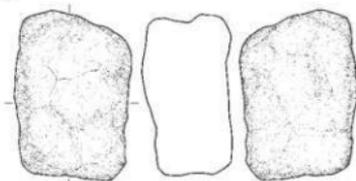
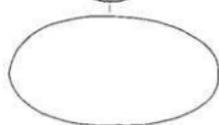


A30(柱石)(2/3)



A21(粗輝安)

A29(滑凝)



A4(粗輝安)

図39 菅野Ⅱ遺跡 第4文化層A地点
(縮尺1/2、上の石核は2/3)

(2) 接合資料

接合資料は3個体認められた。接合資料に含まれる石器は、合計で6点である。本文化層から出土した石器に関して、視覚的特徴から分類することは困難であることから母岩分類は不可能と判断した。

接合1 (図40) 黒色頁岩製。凹礫を利用しているが礫の大きさは不明。ナイフ形石器1点と微細剥離痕ある剥片1点が接合。ナイフ形石器は石刃を素材としており、この接合資料に関しても剥片剥離技術として石刃技法の範疇でとらえられる。この接合資料をみる限りは、単設打面より石刃生産が展開されることが理解され、打面調整の痕跡が認められる。ナイフ形石器(A27)は、素材石刃の形態をあまり変形することなく、部分的な二次加工痕が認められる。微細剥片(A2)は縦長剥片を素材として、側縁に微細剥離痕が認められる。

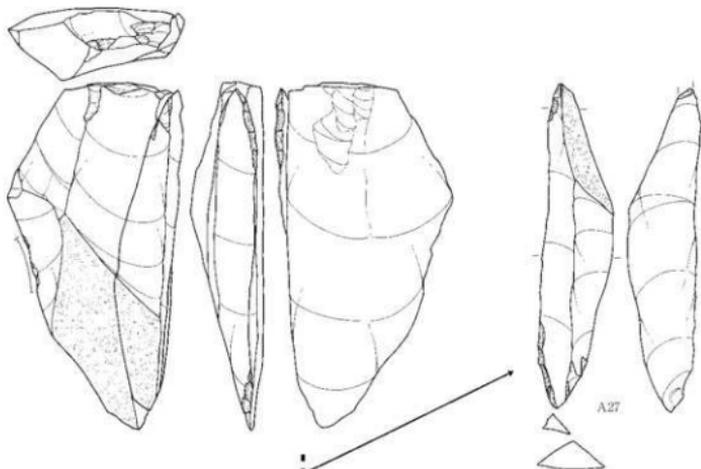
接合2 (図41) 黒色頁岩製。凹礫を利用しているが礫の大きさは不明。剥片2点が折断面で接合する資料である。この折断面は、剥片の打点部より縦方向に認められることから、剥片剥離時の同時割れと考えられる。

接合3 (図40) 黒曜石製。凹礫を利用しているが礫の大きさは不明。この接合資料は原産地分析の結果、信州和田産と同定された(第8章考察参照)。二次加工ある剥片1点と微細剥離痕ある剥片1点が接合。いずれも石刃を素材としており、剥片剥離技術として石刃技法の範疇でとらえられる。この接合資料をみる限り、単設打面より石刃生産が展開されることが理解できる。A32の資料は折断によって打面部が残っていないが、A36をみると打面部に打面調整の痕跡が認められる。

表13 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層A地点 接合資料の器種組成

接合資料 No	石材	形状	器種				総計	
			大きさ	ナイフ形石器	二次加工ある剥片	剥片		微細剥離痕ある剥片
1	黒色頁岩	凹礫	-	1			1	2
2	黒色頁岩	凹礫	-			2		2
3	黒曜石	凹礫	-		1		1	2
総計				1	1	2	2	6

接合1・黒色頁岩



接合3・黒曜石

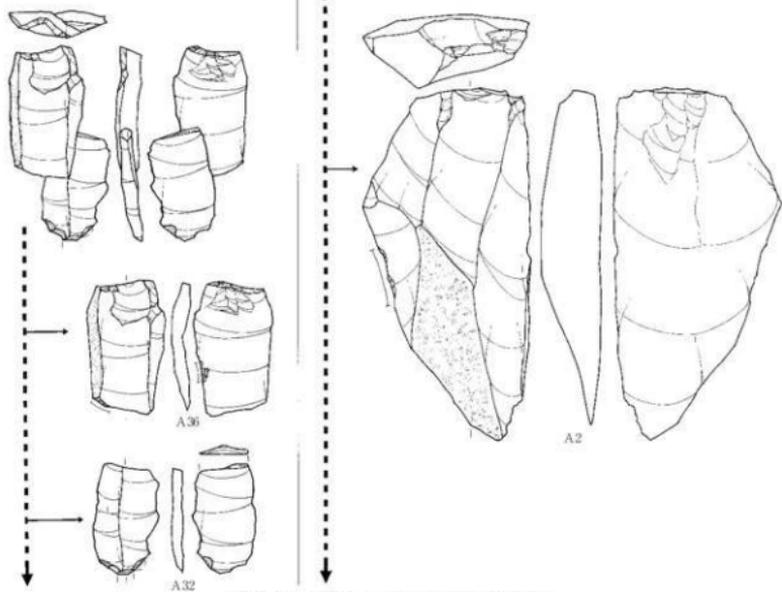


図40 荻野Ⅱ遺跡 第4文化層A地点(縮尺2/3)

接合2・黒色頁岩

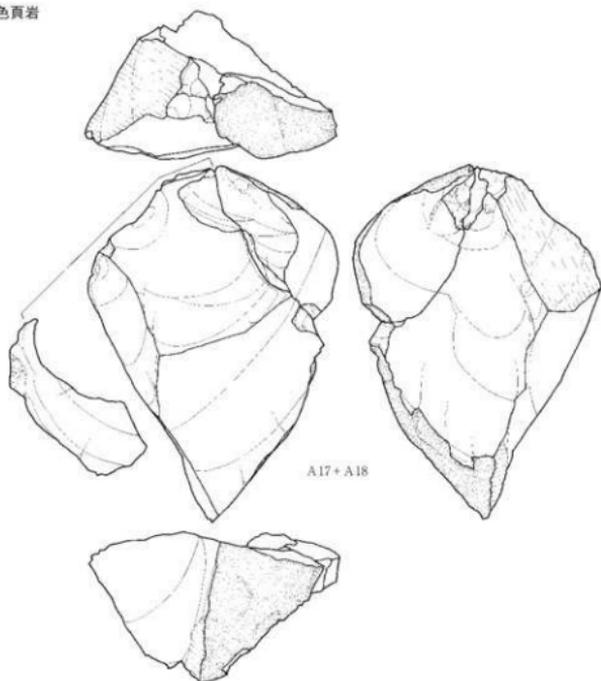


図41 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層A地点(縮尺2/3)

II. 石器の分布

第4文化層A地点の石器群は、南東に向かって緩やかに傾斜した地点より出土した(図7)。

石器分布状況(図42) 石器の平面的な分布状況を見ると、明確な集中地点をもたず全体的に散漫な分布を示す。

接合資料の分布状況(図43) 接合資料は3点確認された。接合2と接合3では近接した地点間での接合が確認されるが、接合1については約15m離れた地点で出土した石器どうしが接合している。

器種別石器の分布状況(図44、図45) 製品類の分布状況を見ると(図44)、特定器種が特定の場所に偏在する傾向は認められない。剥片・微細剥片の分布状況を見ると(図45)、剥片が石器分布域全体にわたって分布の様子が認められる。このことと、接合1や接合3など剥片剥離に関する接合資料が存在することを考え合わせると、石器製作活動が展開していたものと考えられる。

石材別石器の分布状況(図46、図47) 使用石材の主体となる黒色頁岩製の石器は、分布域全体に広がっている(図46)。黒曜石製の石器は6点出土し、2点が信州諏訪産、4点が信州和田産と同定されている(第8章考察参照)。この石器分布状況を見ると、原産地別に石器分布がまとまる傾向が認められる(図47)。諏訪産は分布域の北部分にまとまり、和田産は南部分にまとまる状況が観察される。

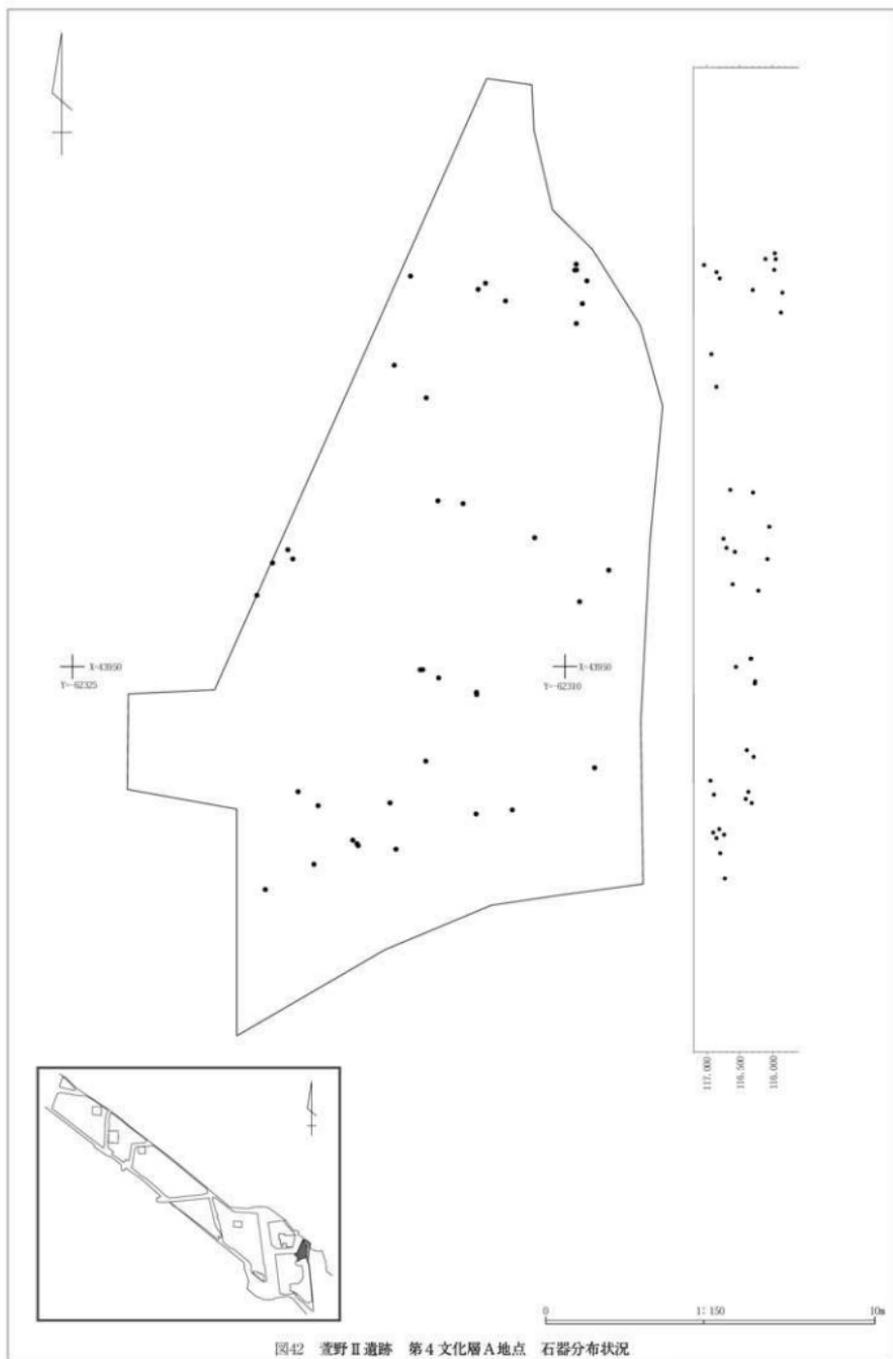


图42 壹野Ⅱ遺跡 第4文化層A地点 石器分布狀況



図43 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層A地点 接合資料の分布状況

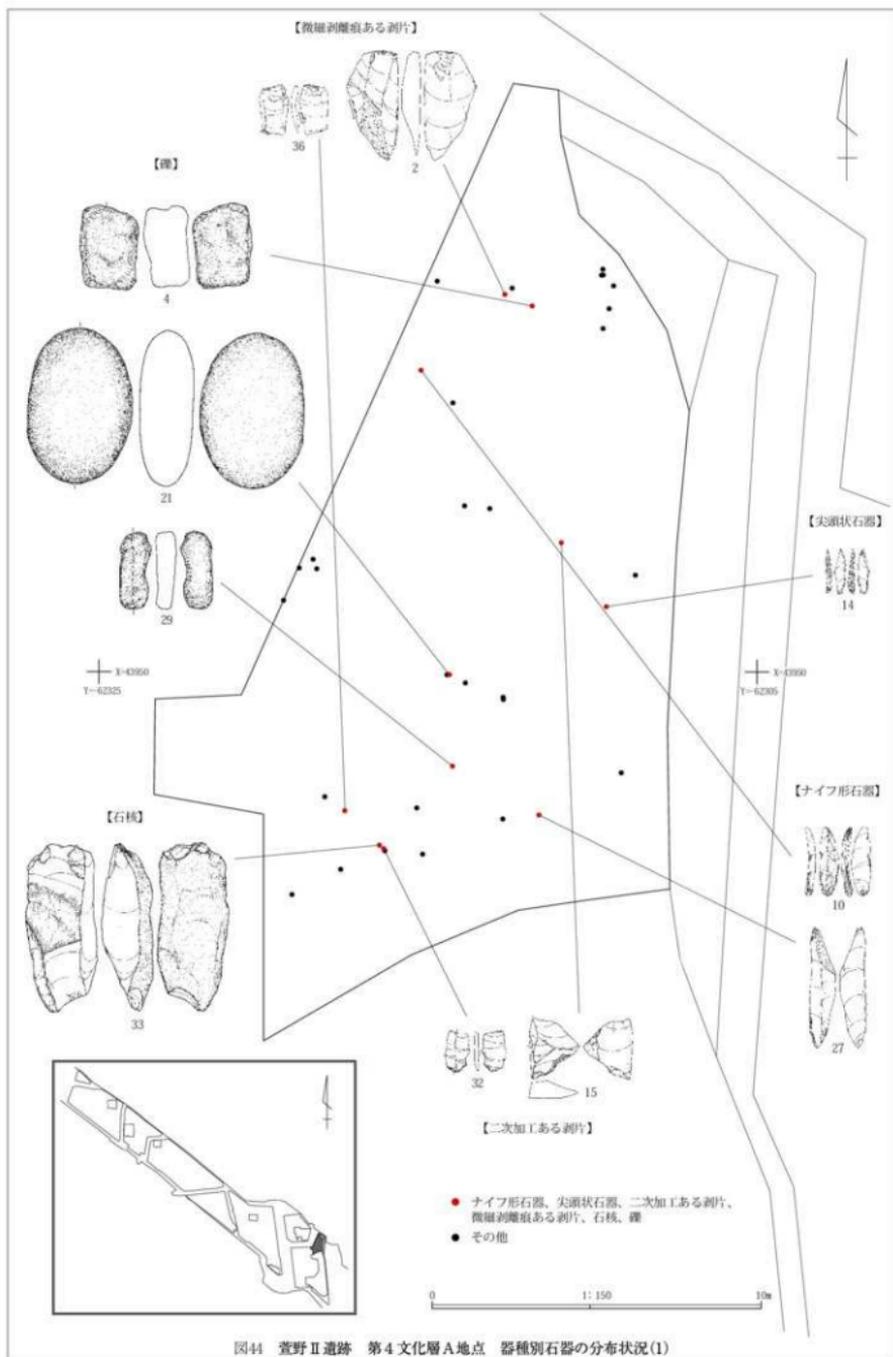


図44 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層A地点 器種別石器の分布状況(1)

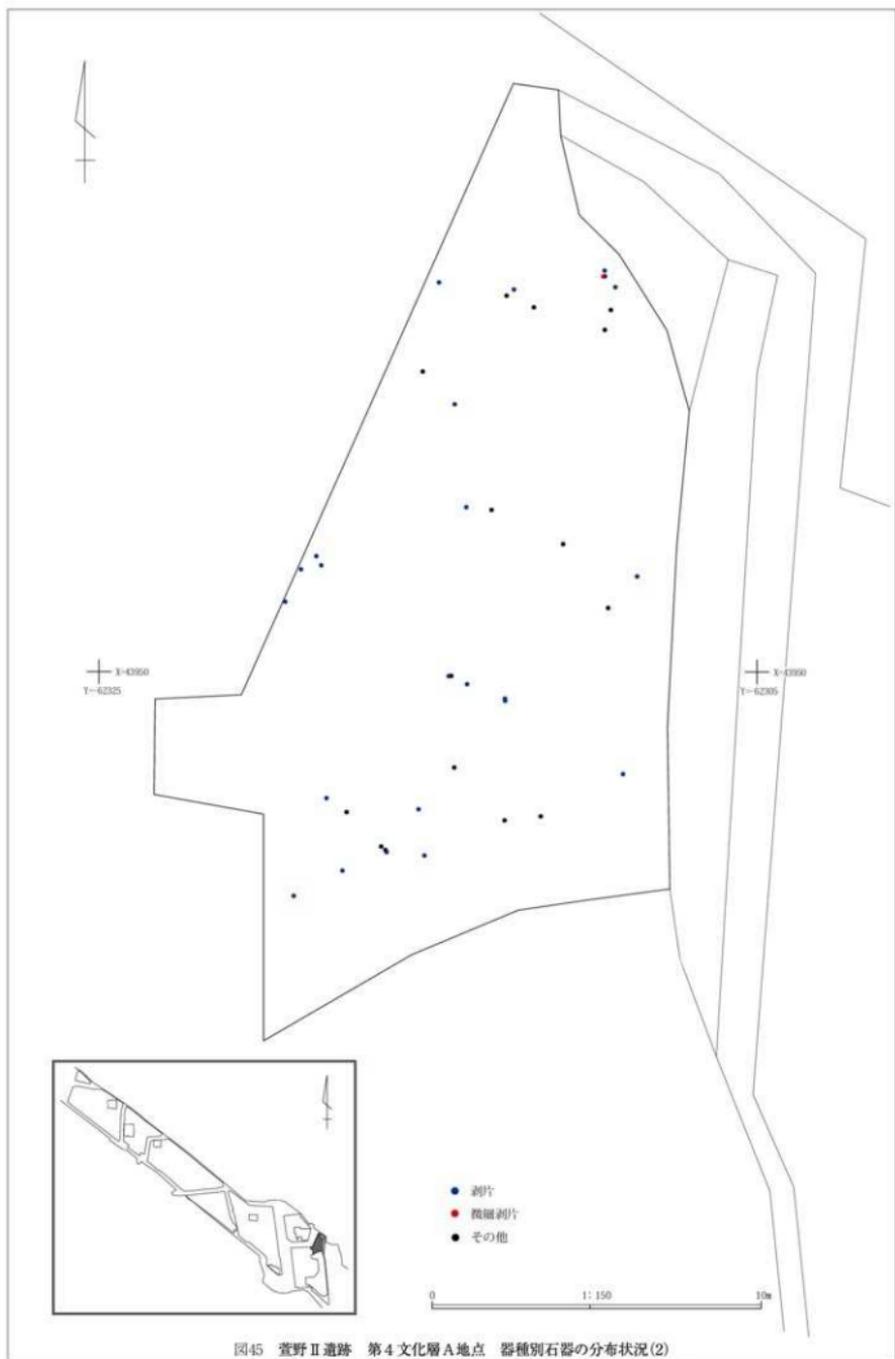


図45 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層A地点 器種別石器の分布状況(2)



図46 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層A地点 石材別石器の分布状況(1)



図47 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層A地点 石材別石器の分布状況(2)

6. 萱野Ⅱ遺跡・第4文化層B地点

I. 出土石器

第4文化層B地点の石器群は、南西に向かって緩やかに傾斜した地点より出土した(図7)。この石器群は410点の石器からなる。出土層位をみると、VI・VII層から多くの石器が出土しており、AT下暗色帯に属する石器群と考えられる。定形的な製品類は認められず、剥片・微細剥片が数多く認められる。剥片剥離に関する接合資料も多数認められ、剥片生産活動を色濃く反映した石器群と評価できる。使用石材については、雲母石英片岩製の資料が1点出土した他は、全て黒色安山岩製のものである。

石器の分布状況から判断すると、発掘区域外に分布が広がる可能性が高く、石器群の全体を検出していないと考えられる。発掘調査時に、IVb層・V層(AT極大層)・VI層・VII層を対象として微細遺物検出のため土壌の乾燥ふるい選別を実施した。全出土石器410点中、185点はふるい選別作業により検出したものである。

表14 萱野Ⅱ遺跡
第4文化層B地点
層別出土点数

層位	点数
V	49
VI	213
VII	141
VIII	1
不明(試掘)	6
総計	410

表15 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点 器種と石材

器種	石材		総計
	黒色安山岩	雲母石英片岩	
二次加工ある剥片	6		6
微細剥離痕ある剥片	2		2
剥片	174		174
微細剥片	206		206
石核	21		21
礫片		1	1
総計	409	1	410

(1) 各器種

二次加工ある剥片(図48-B80・B107・B37+B78+B86+B88+B89+B90+B91+B92・B173+B175+B198) 6点出土(折断面で接合することによって個体としては4点確認)。B107は黒色安山岩製。接合9に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図68)、剥片素材の石核から生産された剥片を素材としている。この素材剥片を折断したものに二次加工を加えている。B80は黒色安山岩製。接合12に含まれる資料である。両側縁に、主要剥離面側からの二次加工痕が認められる。B37+B78+B86+B88+B89+B90+B91+B92は黒色安山岩製。接合6に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図66、図67)、大形剥片を素材としており、縁部に散発的な二次加工を加えた後、8個体に折断している。B173+B175+B198は黒色安山岩製。接合19に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図72)、大形剥片を素材としており、側縁部に背面側からの二次加工痕が認められる。二次加工が施された後、この個体はいくつかに折断され、そのうちの1個体は石核として利用されており、小形剥片(図72-B198)を生産している。この個体からの石核は認められない。

微細剥離痕ある剥片(図49-B122+B130+B170+B192) 2点出土(折断面で接合することによって個体としては1点確認)。黒色安山岩製。この接合体だけで接合7を構成する資料である。縁部に微細な剥離痕が集中する。この個体には折断が認められ、微細剥離痕の形成と折断の先後関係が定かではない。しかし、折断痕をまたいで微細剥離痕が連続することから、微細剥離痕の形成の方が先である可能性が高いと判断できる。

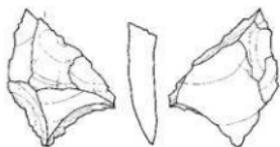
石核(図49-B13+B208・B66・B94、図50、図51、図52) 21点出土(折断面で接合することによって個体としては17点確認)。B13+B208は黒色安山岩製。接合2に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図57、図58)、打面の位置は一定せず、打面転移を繰り返して、大形剥片、小形剥片、縦長剥片など様々な形態の剥片を生産させていることが理解される。B66は黒色安山岩製。接合2に含まれる資料である。接合資料

での展開をみると(図57)、この石核は大形剥片を素材としており、小形剥片(図57-B44+B73、B57)を生産している。その後、剥片剥離は進行することなく、石核は放棄されている。B94は黒色安山岩製。拳大の円礫を利用している。大形剥片を生産していることがうかがわれるが、剥片剥離を進行させることなく石核を放棄している。B51+B84は黒色安山岩製。接合1に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図53、図54、図55、図56)、剥片剥離工程の中で分割と折断によって生じた大形剥片を石核の素材とする行為が頻繁にみられる。この石核もその様な過程で生じた大形剥片を素材としている。打面を固定することなく、打面転移を繰り返すことで小形剥片を生産する様子が観察される。B117+B145、B111、B149、B155+B159はいずれも黒色安山岩製。全て接合1に含まれる資料である。接合資料での展開をみると、いずれの資料も大形剥片を石核の素材としている。

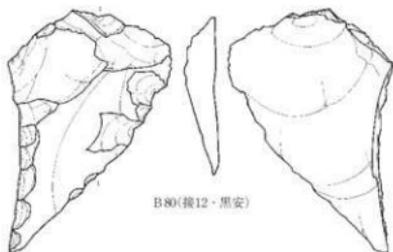
B157は黒色安山岩製。接合4に含まれる資料である。打面位置を固定することなく打面転移を繰り返すことで剥片を生産している。B18+B22は黒色安山岩製。接合17に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図71)、大形剥片を素材として、小形の剥片数点(図71-B42など)を剥離している様子が観察される。B115+B128+B172+B185+B408は黒色安山岩製。接合4に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図61)、大形剥片を素材として、小形剥片を数点(図61-B167+B201、B255など)を生産している。B221は黒色安山岩製。接合9に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図68)、剥片剥離工程で生じた大形剥片を素材とする石核からさらに生産された剥片を素材としている。素材剥片の主要剥離面を打面として小形剥片(図68-B143、B127)を生産している。

B6+B212は黒色安山岩製。接合8に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図69)、大形剥片を素材としている。素材剥片の主要剥離面を作業面として小形剥片(図69-B32、B229、B210)を生産している。この石核は二つの個体に折断されるが、そのうちの1個体は折断後の剥片剥離痕が認められる(図69-B6)。B126+B332は黒色安山岩製。接合3に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図60)、大形剥片を素材として、素材剥片を裁ち折るような剥離によって小形剥片(図60-B9、B7)を生産している。B195+B200+B350は黒色安山岩製。接合5に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図64)、大形剥片を素材として、素材剥片を裁ち折るような剥離によって小形剥片(図64-B349、B272+B278)を生産している。B189+B352は黒色安山岩製。接合5に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図64)、大形剥片を折断した個体を石核の素材としている。器体を裁ち折るような剥離によって小形剥片を生産する様子がうかがわれる。B202は黒色安山岩製。接合5に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図63、図64、図65)、この石核は、剥片剥離の初期段階で分割された個体に起源が求められる。石核の上・下端に打面を設定することで剥片剥離を進行させる様子が観察される。

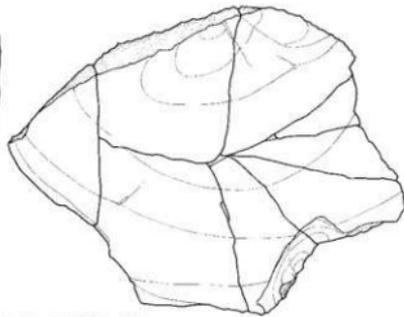
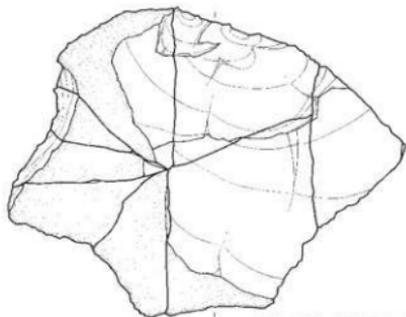
礫片(図48-B414) 1点出土。雲母石英片岩製。いずれも粗粒で軟弱な石質であり、剥片石器の石材としては適さないものである。結晶片岩類は、群馬県南西部の三波川帯に主産地があり自然的要因で赤城山南麓地域に混入することは考えられない石材である(津島2008)。



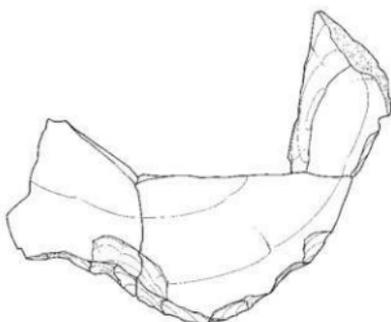
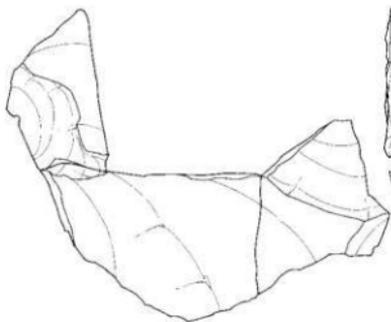
B107(接9・黒安)



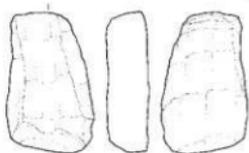
B80(接12・黒安)



B37 + B78 + B86 + B88 + B89 + B90 + B91 + B92(接6・黒安)



B173 + B175 + B198(接19・黒安)



B414(雲母片)

図48 壹野II遺跡 第4文化層B地点(縮尺4/5)

6. 荳野Ⅱ遺跡・第4文化層B地点

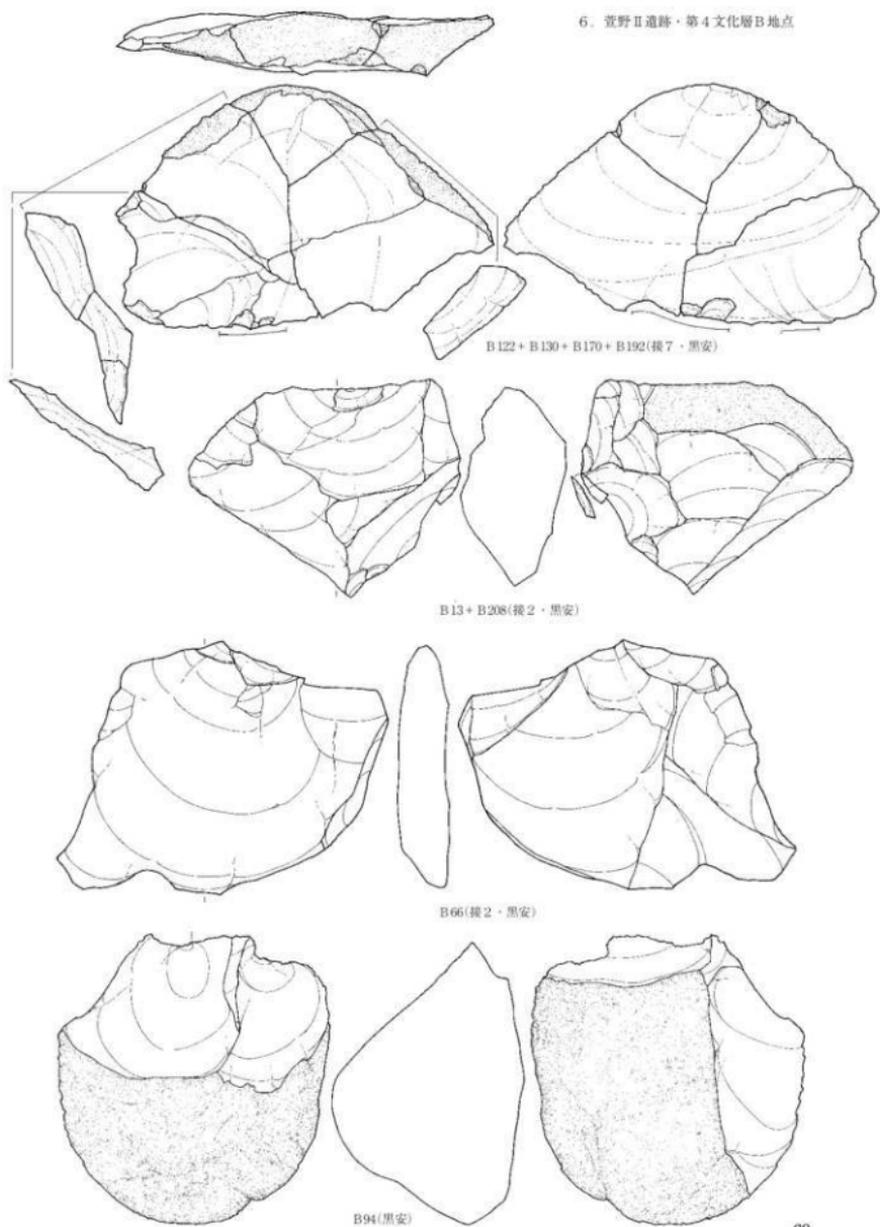


図49 荳野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺2/3)

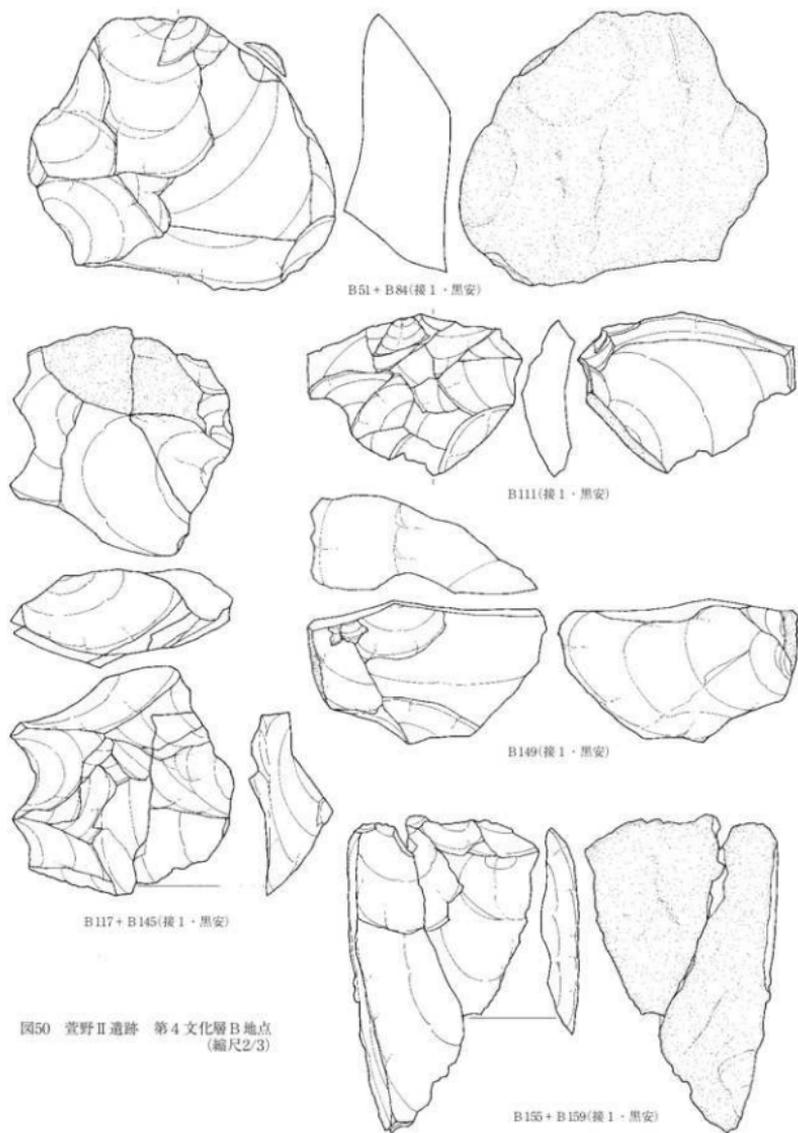


図50 荻野II遺跡 第4文化層B地点
(縮尺2/3)

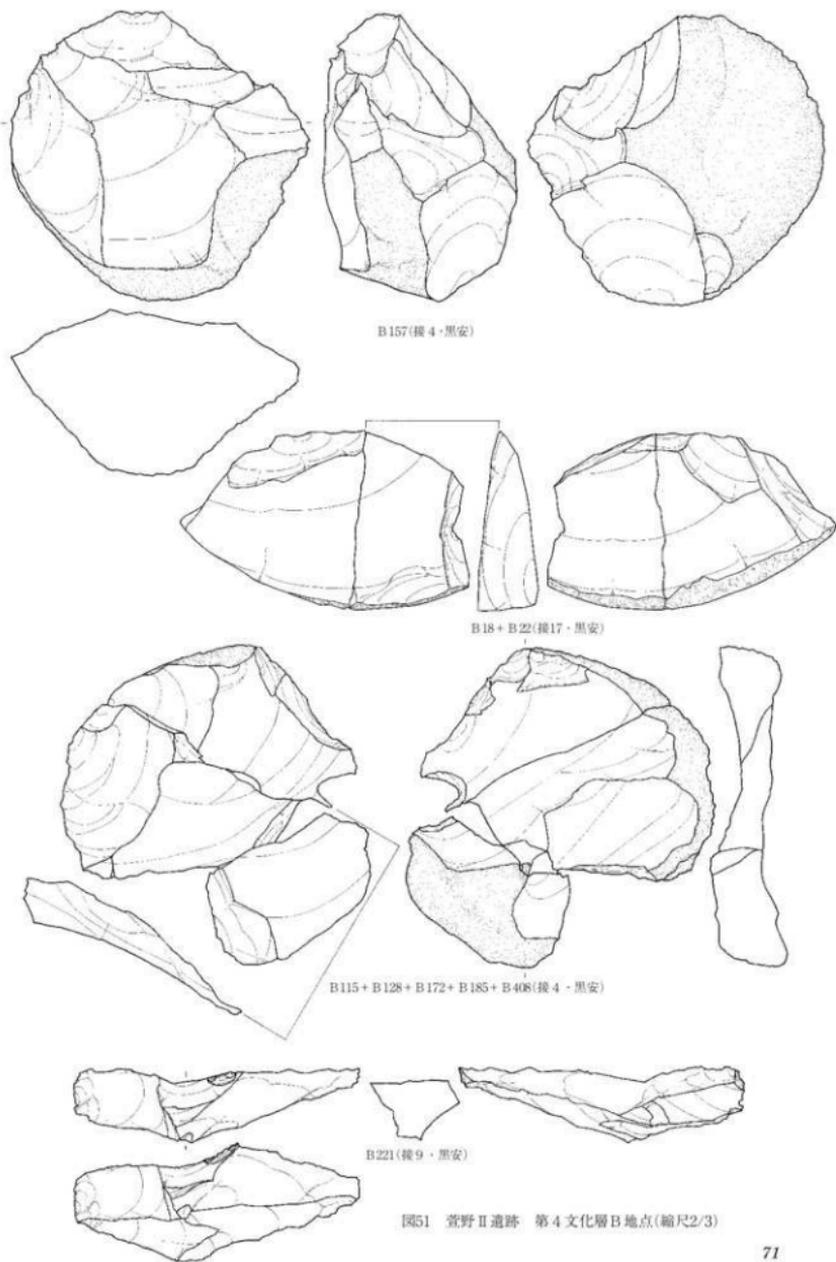
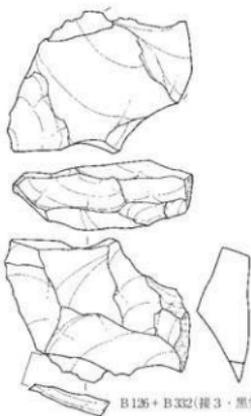


圖51 壹野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺2/3)

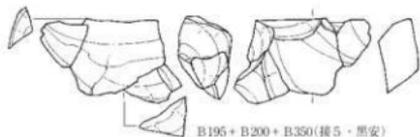
第3章 荻野Ⅱ遺跡



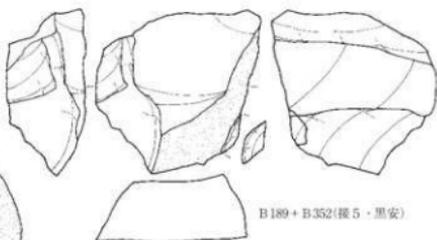
B6 + B212(接8・黒安)



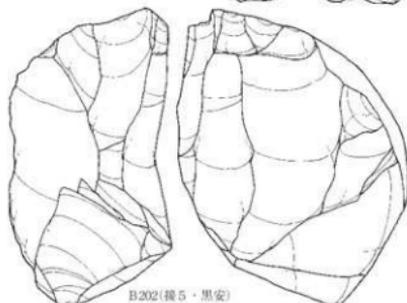
B136 + B332(接3・黒安)



B195 + B200 + B350(接5・黒安)



B189 + B352(接5・黒安)



B202(接5・黒安)

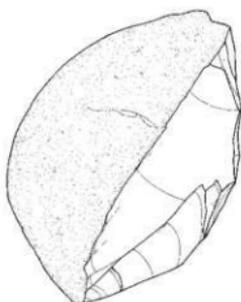


図52 荻野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺2/3)

(2) 接合資料

接合資料は22個体認められた。接合資料に含まれる石器は、合計で222点である。本文化層から出土した石器は黒色安山岩製が主体であり、視覚的特徴から分類することは困難であることから母岩分類は不可能と判断した。

接合1 (図53～図56) 黒色安山岩製。幼児頭大の円礫を利用している。剥片25点、微細剥片20点、石核7点の合計52点の資料が接合。原石にかなり近い状態から二個体に分割されている。そのうちの一個体分の工程が遺跡内に残されており、残りの一個体は認められない。その分割された個体をさらに二個体に折断し、それぞれの個体で剥片剥離を進行させている(図53※1と※2)。※1の展開では、多くの剥片が生産されており、大形剥片は石核の素材として利用されている(図54-B111)。この展開では、最終的に石核が1点(図56-B117+B145)残されている。また※2の展開では、やはり生産された大形剥片が石核に利用されている様子が観察できる(図54-B149)。※2の展開から生産された大形剥片は2個体に折断されており、それぞれの個体で剥片剥離を進行させている。※3はそのうちの一つの工程に相当し、最終的に石核が1個体(図56-B51+B84)残されている。

接合2 (図57、図58) 黒色安山岩製。大きさは不明であるが円礫を利用している。剥片16点、微細剥片4点、石核2点の合計22点の資料が接合。この剥片剥離の工程からは、最終的に石核が1点残されており(図58-B13+B208)、生産された大形剥片を石核として利用する様子が観察できる。図57-B66は、そのような剥片素材の石核であり、小形剥片(図57-B44+B73、B57)を生産している。また、図58-B60とB31+B68も剥片素材の石核から生産された個体であるが、石核自体は残されていない。

接合3 (図59、図60) 黒色安山岩製。乳児頭大の円礫を利用している。剥片20点、微細剥片2点、石核1点の合計23点の資料が接合。剥片剥離工程の初期段階で分割されており、そのうちの一つの個体に関する展

表16 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点 接合資料の器種組成

接合資料 No	石材	器種		二次加工ある剥片	微細剥離痕ある剥片	剥片	微細剥片	石核	総計	
		形状	大きさ							
1	黒色安山岩	円礫	幼児頭大			25	20	7	52	
2	黒色安山岩	円礫	-			16	4	2	22	
3	黒色安山岩	円礫	乳児頭大			20	2	1	23	
4	黒色安山岩	円礫	乳児頭大			20	8	3	31	
5	黒色安山岩	円礫	幼児頭大			21	10	3	34	
6	黒色安山岩	円礫	-	2		10	1		13	
7	黒色安山岩	円礫	-			2			4	
8	黒色安山岩	円礫	-			1	2	2	5	
9	黒色安山岩	円礫	-	1		3		1	5	
10	黒色安山岩	円礫	-			2			2	
11	黒色安山岩	円礫	-			2			2	
12	黒色安山岩	円礫	-	1		1	1		3	
13	黒色安山岩	-	-			3			3	
14	黒色安山岩	円礫	-			2			2	
15	黒色安山岩	-	-			2	1		3	
16	黒色安山岩	円礫	-			2			2	
17	黒色安山岩	円礫	-			2		1	3	
18	黒色安山岩	円礫	-			2			2	
19	黒色安山岩	円礫	-	2		1			3	
20	黒色安山岩	円礫	-			3	1		4	
21	黒色安山岩	-	-			2			2	
22	黒色安山岩	-	-				2		2	
総計					6	2	142	52	20	222

間が認められる。この工程からの石核は認められない。生産された大形剥片が石核(図60-B126+B332)に利用されており、素材剥片を裁ち折るような剥離によって小形剥片を生産している(図60-B9、B7)。

接合4(図61、図62) 黒色安山岩製。乳児頭大の円礫を利用している。剥片20点、微細剥片8点、石核3点の合計31点の資料が接合。剥片剥離工程で生産された大形剥片が、石核の素材として利用される様子が観察できる(図61-B115+B128+B172+B185+B408)。ここからは小形剥片が生産されている(図61-B167+B201、B255)。最終的には石核が1点残されている(図62-B157)。

接合5(図63～図65) 黒色安山岩製。幼児頭大の円礫を利用している。剥片21点、微細剥片10点、石核3点の合計34点の資料が接合。剥片剥離工程の初期段階で二個体に分割しており、それぞれの工程が認められる(図63※1と※2)。※1の展開では、生産された大形剥片を石核の素材として利用する様子が観察され(図64-B195+B200+B350)、最終的に石核が1点残されている(図65-B202)。また※2の展開では、やはり大形剥片が石核の素材として利用される様子が観察される(図64-B189+B352)。※2の展開からは、最終的な石核は残されていない。

接合6(図66、図67) 黒色安山岩製。大きさは不明であるが円礫を利用している。二次加工ある剥片2点、剥片10点、微細剥片1点の合計13点の資料が接合。剥片剥離工程で生産された大形剥片に対して、縁辺部に散発的な二次加工が加えられている。図66-B333はその二次加工の際に生じた個体である。二次加工を加えた後、この個体はさらに八つ折断されている。

接合7(図73) 黒色安山岩製。大きさは不明であるが円礫を利用している。折断面の接合によって、微細剥離痕ある剥片1点が復元された資料である。縁辺部に微細な剥離痕が集中する。この個体には折断が認められ、微細剥離痕の形成と折断の先後関係が定かではない。しかし、折断痕をまたいで微細剥離痕が連続することから、微細剥離痕の形成の方が先である可能性が高いと判断できる。

接合8(図69) 黒色安山岩製。大きさは不明であるが円礫を利用している。剥片1点、微細剥片2点、石核2点の合計5点の資料が接合。剥片剥離工程で生産された大形剥片を石核の素材としている。素材剥片の主要剥離面を作業面として小形剥片(図69-B32、B229、B210)を生産している。この石核は二つの個体に折断されるが、そのうちの1個体(図69-B6)は折断後の剥片剥離痕が認められる。

接合9(図68) 黒色安山岩製。大きさは不明であるが円礫を利用している。二次加工ある剥片1点、剥片3点、石核1点の合計5点の資料が接合。剥片剥離工程で生じた大形剥片を素材とする石核から、さらに生産された剥片を素材として剥片生産する様子が認められる。素材剥片の主要剥離面を打面として小形剥片(図68-B143、B127)を生産している。この展開から石核が残されている(図68-B221)。

接合10(図70) 黒色安山岩製。大きさは不明であるが円礫を利用している。剥片2点が接合。同一の平坦打面から剥片を連続剥離する様子が観察される。

接合11(図72) 黒色安山岩製。大きさは不明であるが円礫を利用している。剥片2点が接合。自然面を打面として剥片連続剥離する様子が観察される。

接合12(図70) 黒色安山岩製。大きさは不明であるが円礫を利用している。二次加工ある剥片1点、剥片1点、微細剥片1点の合計3点の石器が接合。自然面を打面として剥片を連続剥離する様子が観察される。二次加工ある剥片(図70-B80)は、両側縁に主要剥離面側からの二次加工痕が認められる。

接合13(図72) 黒色安山岩製。大きさ、礫形状ともに不明である。折断面の接合によって、剥片1点が復元された資料である。

接合14(図70) 黒色安山岩製。大きさは不明であるが円礫を利用している。剥片2点が接合。いずれの剥

片も末端部に自然面を取り込んでおり、器体の中央に折断痕が認められる。

接合15(図71) 黒色安山岩製。大きさは不明である。礫形状ともに不明である。剥片2点、微細剥片1点の合計3点の資料が接合。同一打面より小形剥片を連続剥離する様子が観察される。

接合16(図71) 黒色安山岩製。大きさは不明であるが円礫を利用している。剥片2点が接合。この接合資料は、剥片2点が分割面で接合した資料である。いずれの剥片も、主要剥離面と反対側の背面どうしが接合しており、この接合面は剥片剥離工程の分割面にあたると考えられる。

接合17(図71) 黒色安山岩製。大きさは不明であるが円礫を利用している。大形剥片素材の石核から小形剥片(図71-B42)を生産する様子が観察される。この石核には、最終的に二個体に折断される(図71-B18+B22)。

接合18(図73) 黒色安山岩製。大きさは不明であるが円礫を利用している。折断面の接合によって、剥片1点が復元された資料である。

接合19(図72) 黒色安山岩製。大きさは不明であるが円礫を利用している。二次加工ある剥片2点と剥片1点の合計3点の資料が接合。剥片剥離工程で生産された大形剥片に対して、側縁部に背面側からの二次加工痕を加える。二次加工が施された後、この個体はいくつかに折断され、そのうちの1個体は石核として利用されており、小形剥片(図72-B198)を生産している。この個体からの石核は認められない。他の2つの個体はそのまま放棄されている(図72-B173、B175)。

接合20(図73) 黒色安山岩製。大きさは不明であるが円礫を利用している。折断面の接合によって、剥片1点が復元された資料である。

接合21(図73) 黒色安山岩製。大きさは不明である。折断面の接合によって、剥片1点が復元された資料である。

接合22(図73) 黒色安山岩製。大きさは不明である。折断面の接合によって、微細剥片1点が復元された資料である。

接合1・黑色安山岩

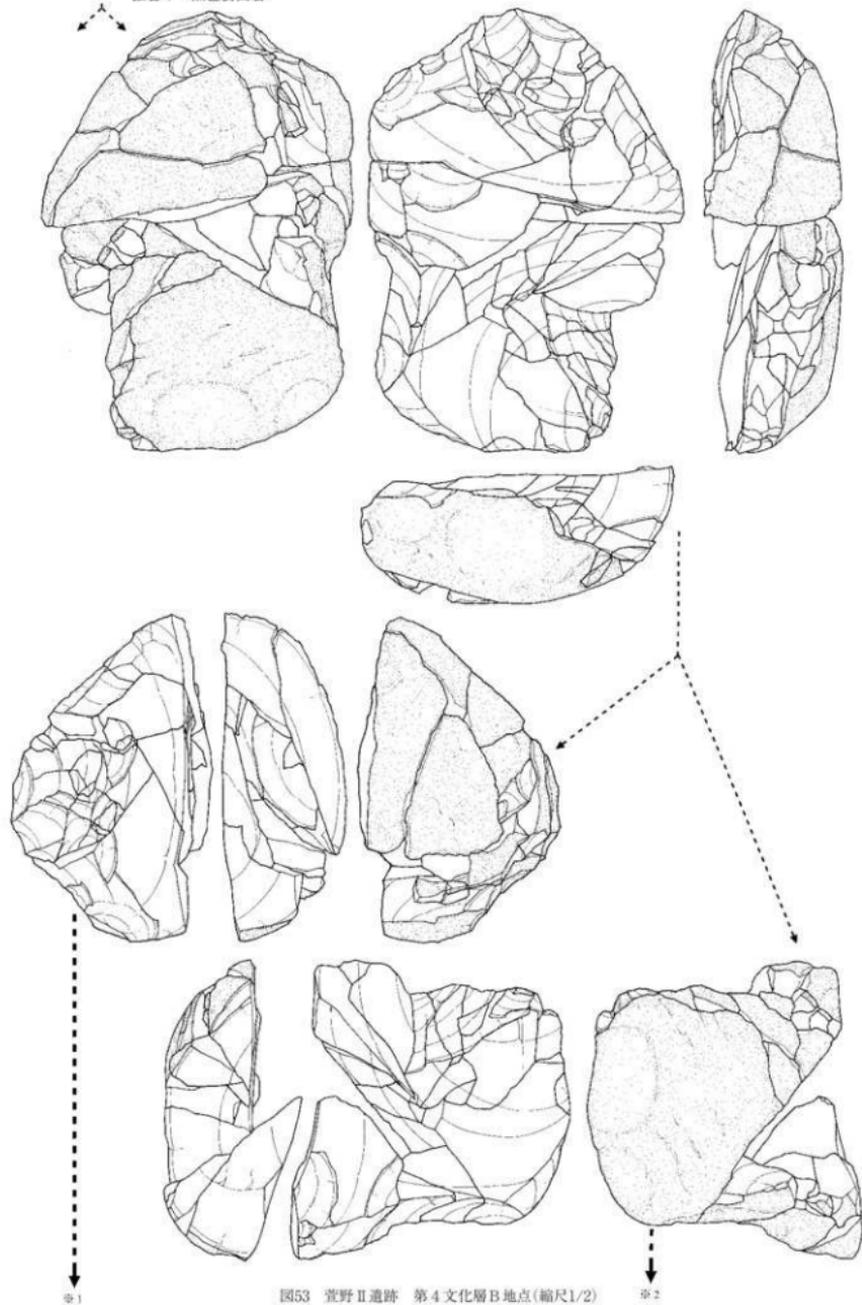


图53 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺1/2)

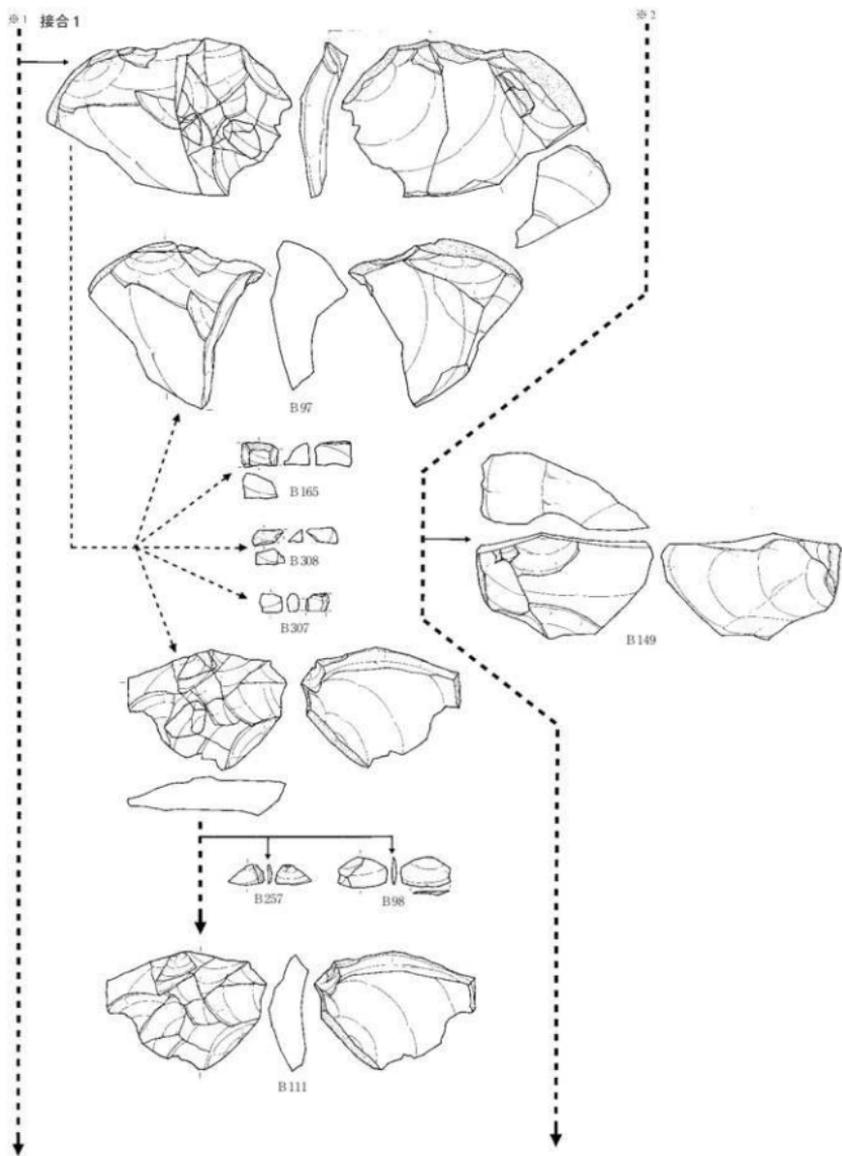
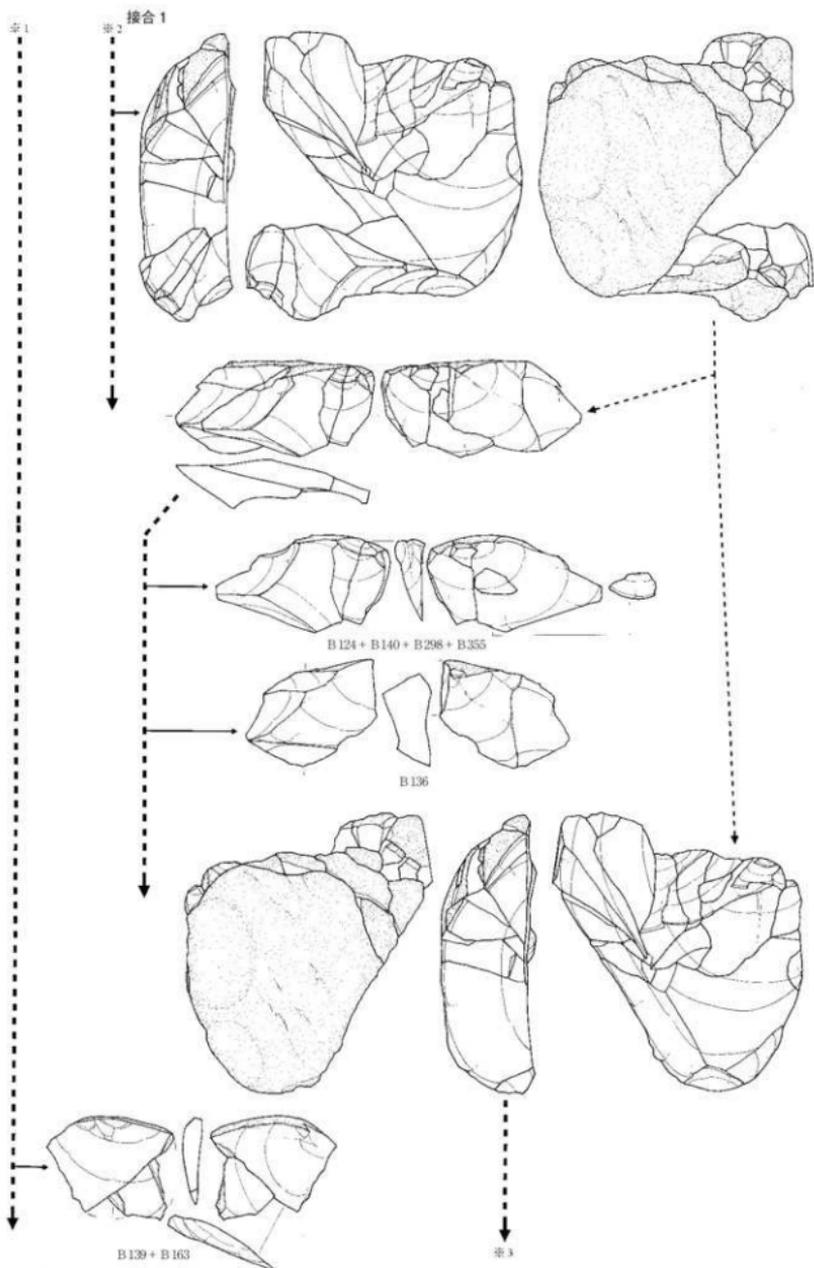


图54 荻野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺1/2)



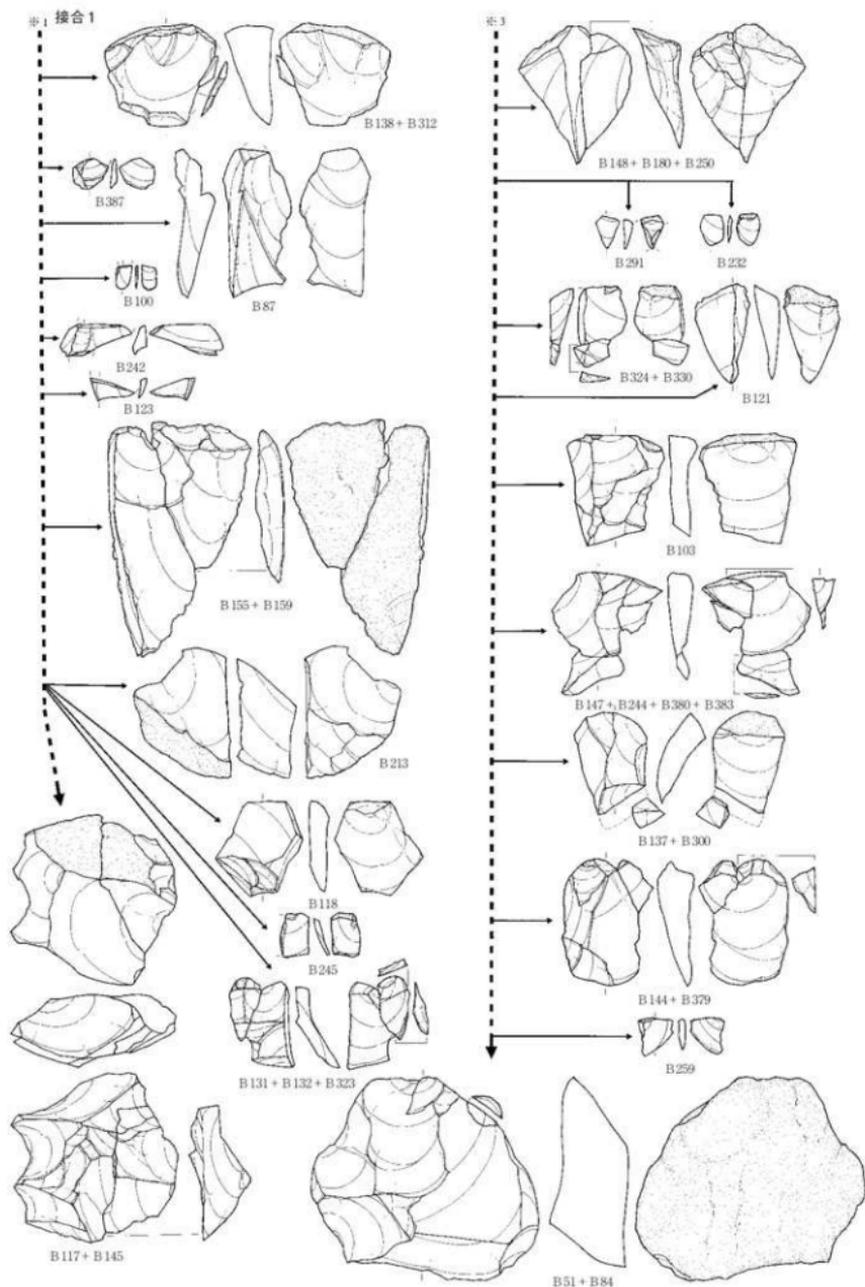


图56 荳野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺1/2)

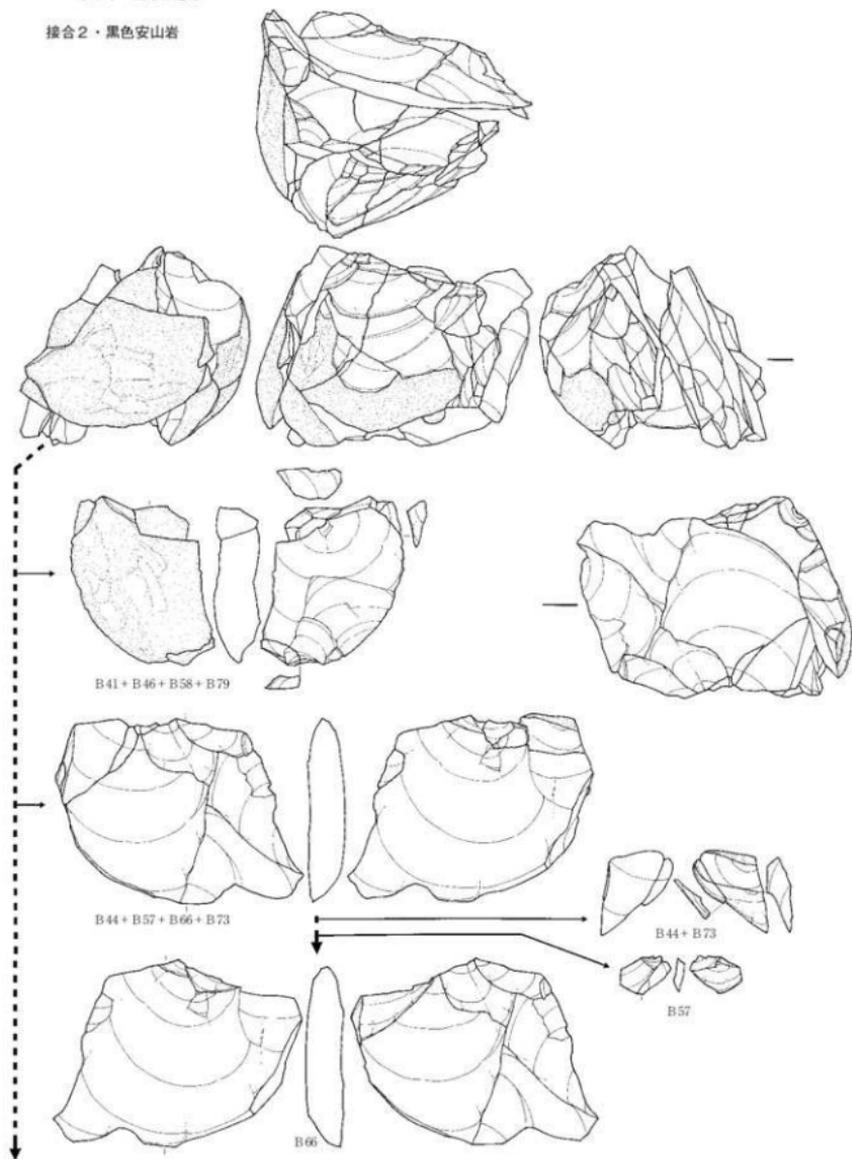


図57 荻野II遺跡 第4文化層B地点(縮尺1/2)

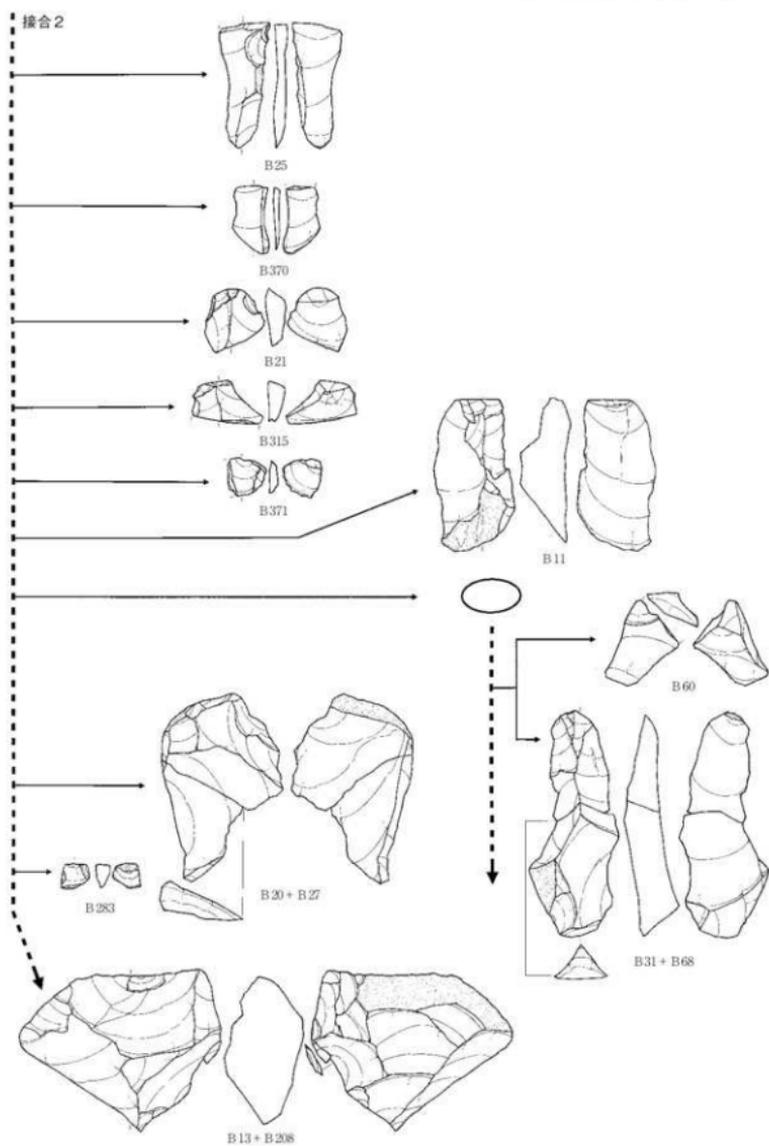


図58 荳野II遺跡 第4文化層B地点(縮尺1/2)

接合3・黒色安山岩

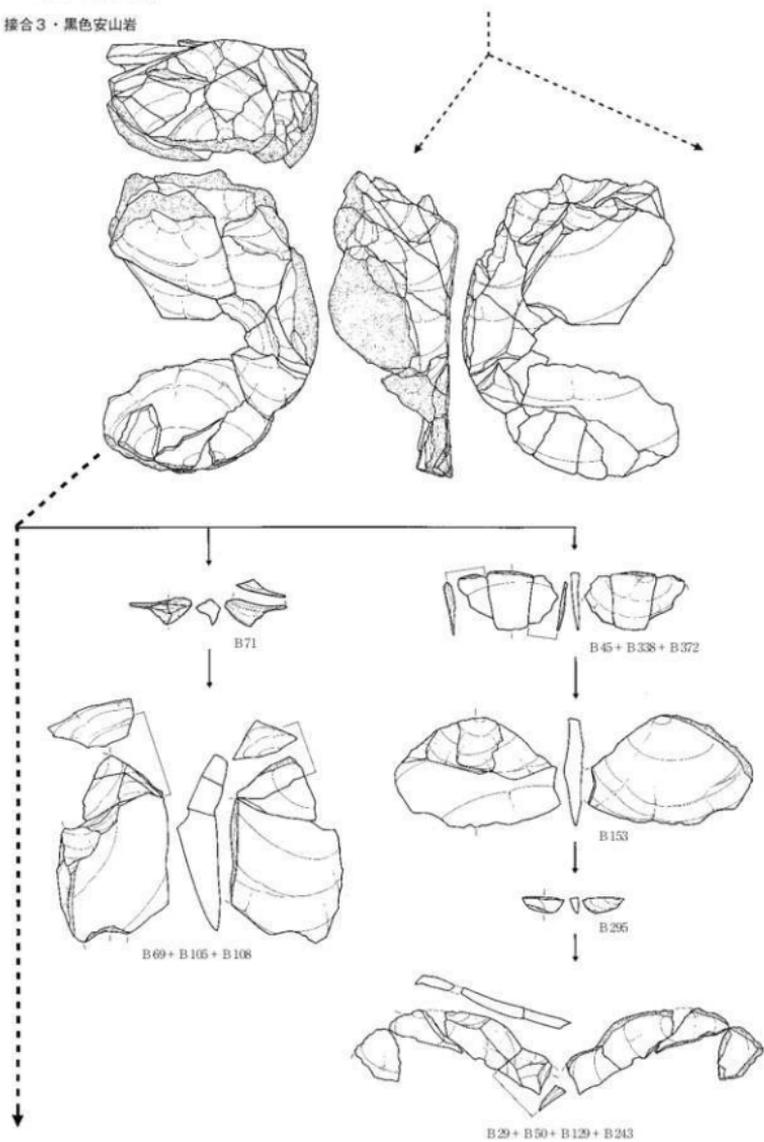


図59 荻野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺1/2)

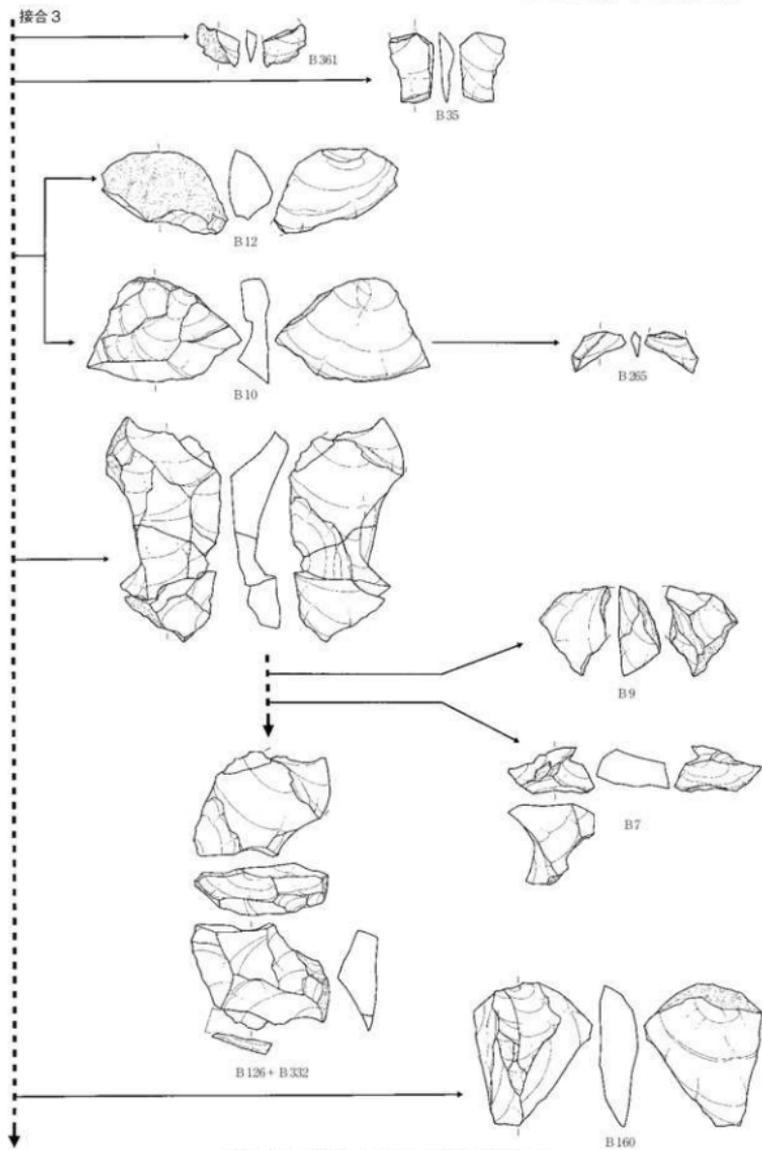
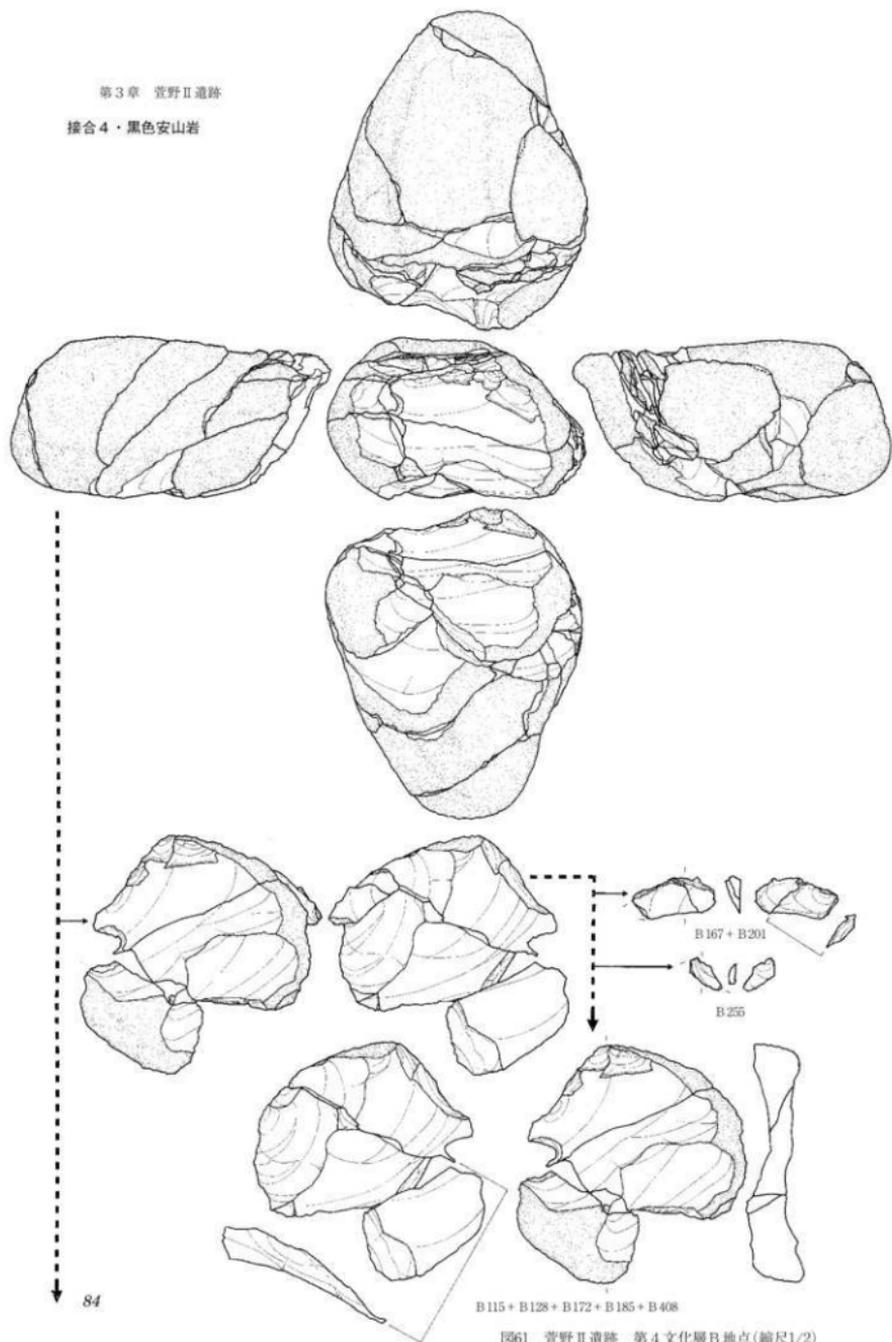


図60 荻野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺1/2)



接合 4

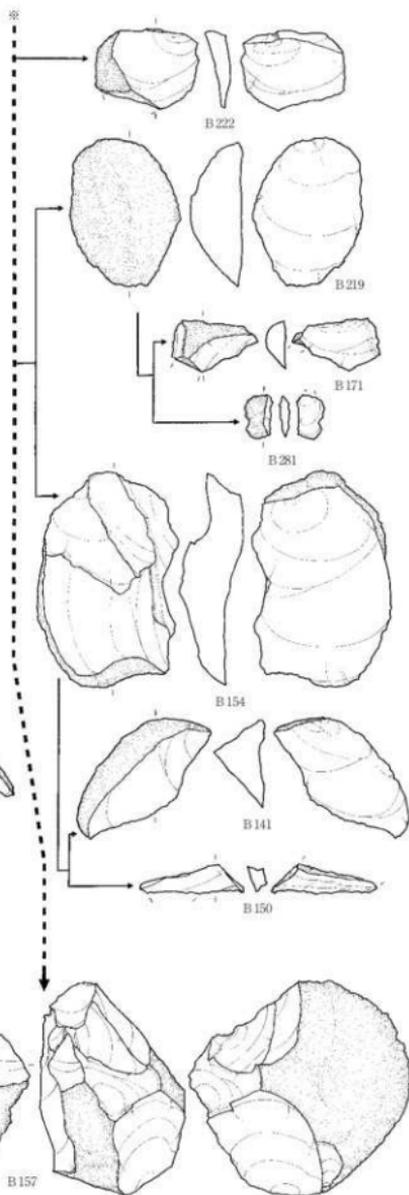
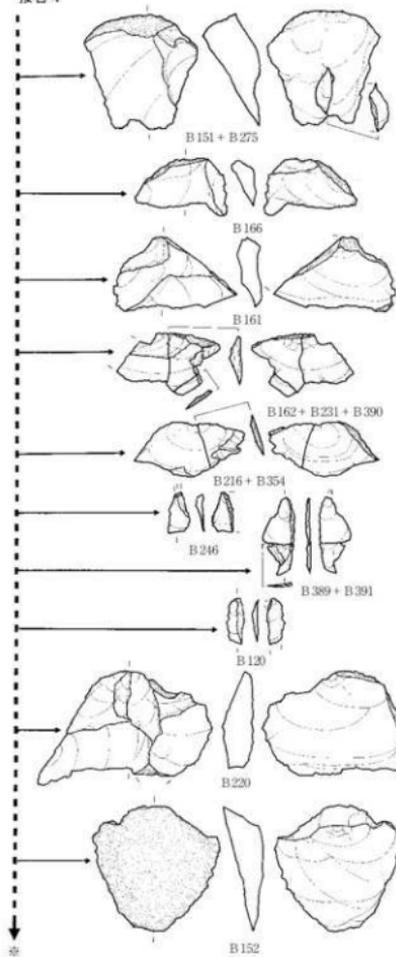


图62 萱野 II 遺跡 第 4 文化層 B 地点(縮尺 1/2)

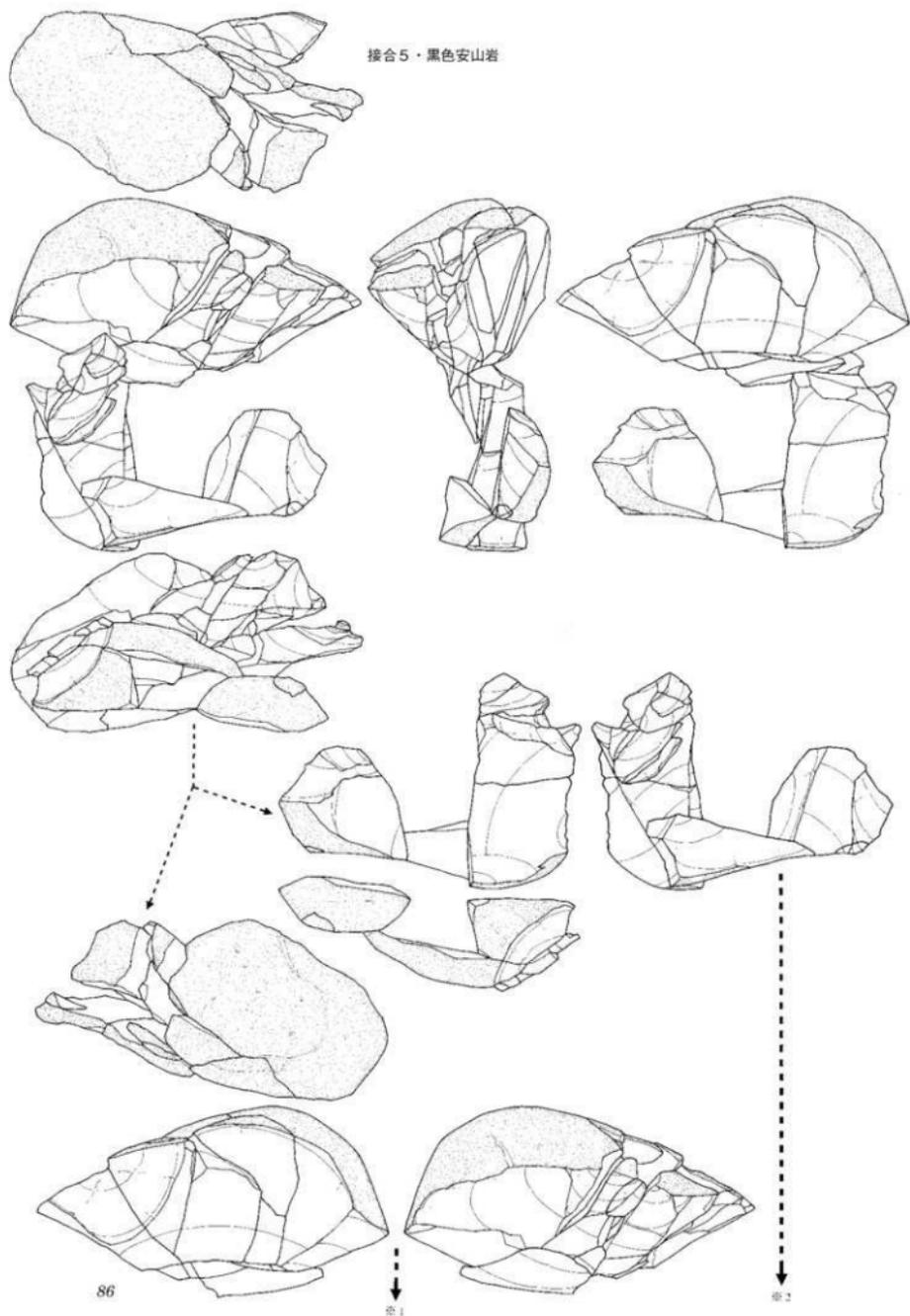


图63 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺1/2)

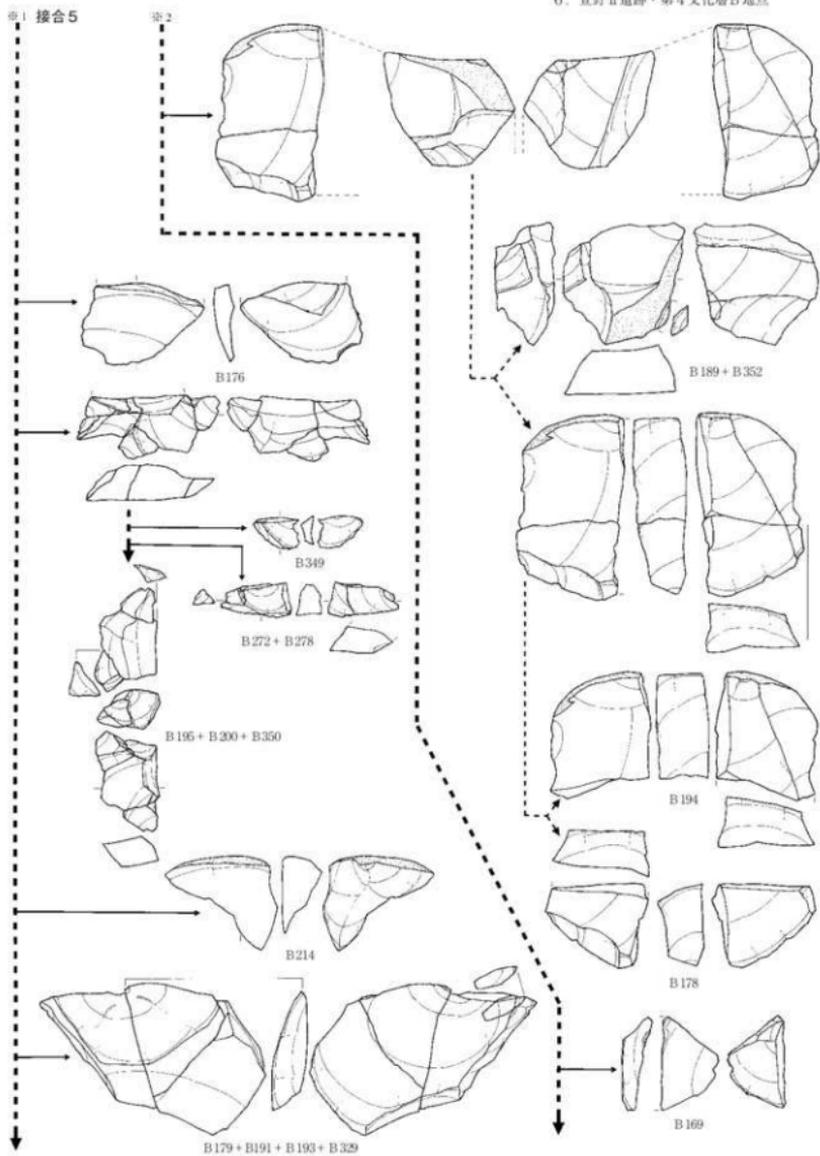


図64 荻野II遺跡 第4文化層B地点(縮尺1/2)

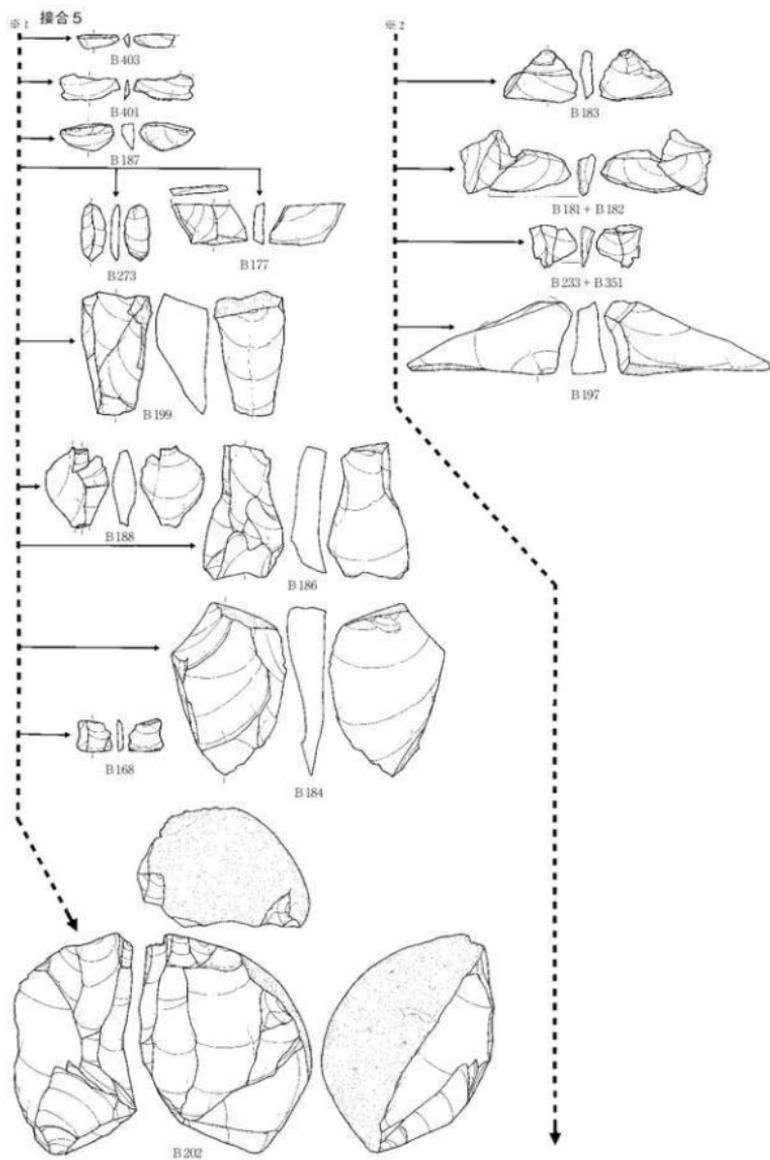


图65 荻野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺1/2)

接合6・黑色安山岩

6. 萱野II遺跡・第4文化層B地点

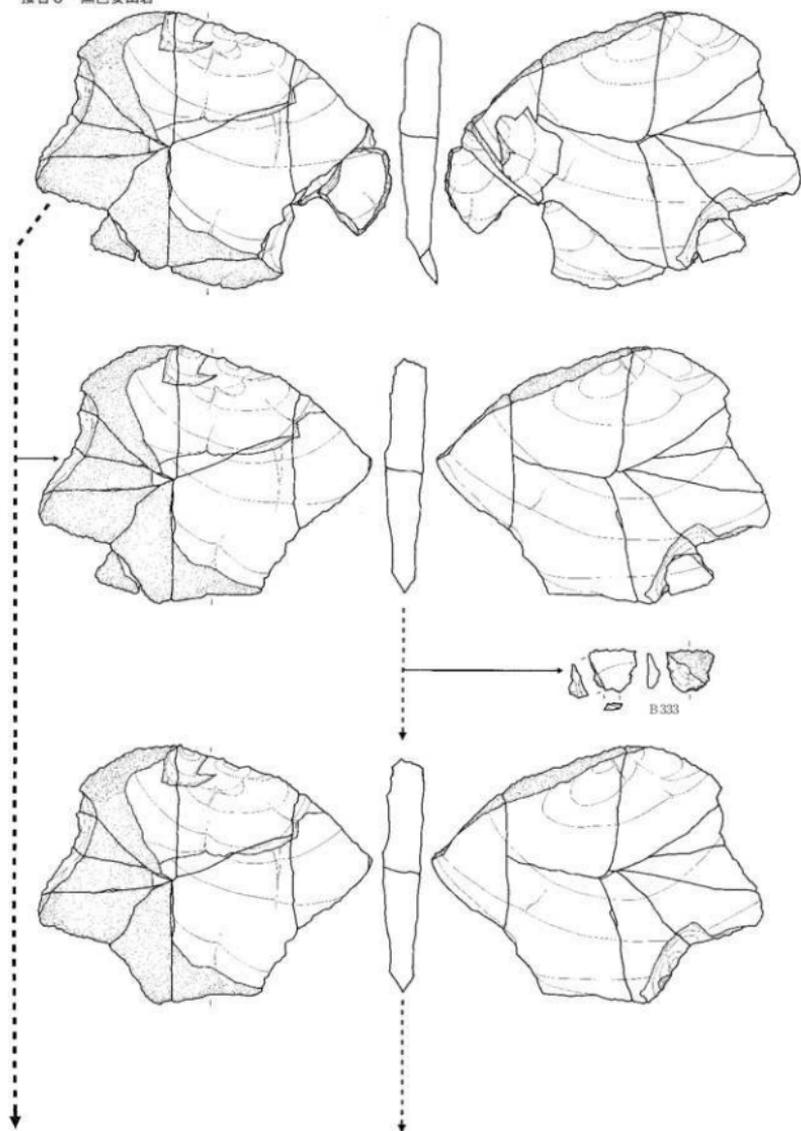


図66 萱野II遺跡 第4文化層B地点(縮尺2/3)

接合6

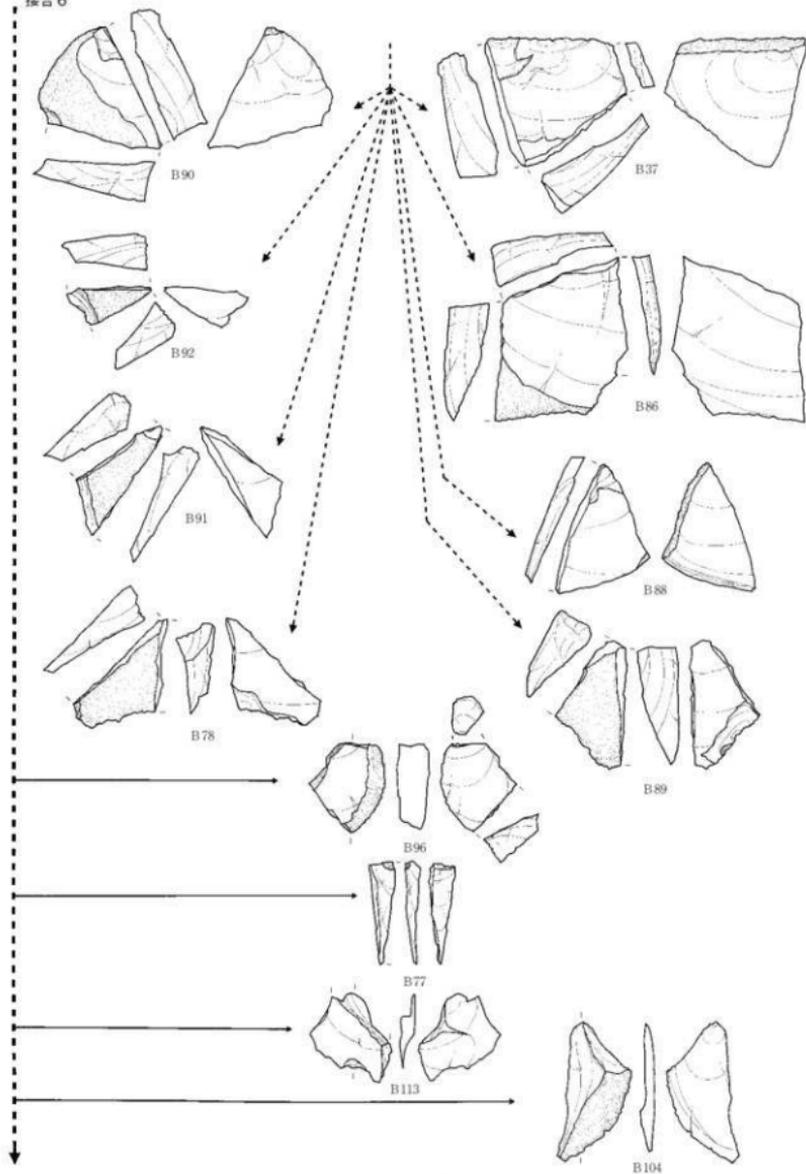


図67 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺2/3)

接合9・黒色安山岩

6. 荒野II遺跡・第4文化層B地点

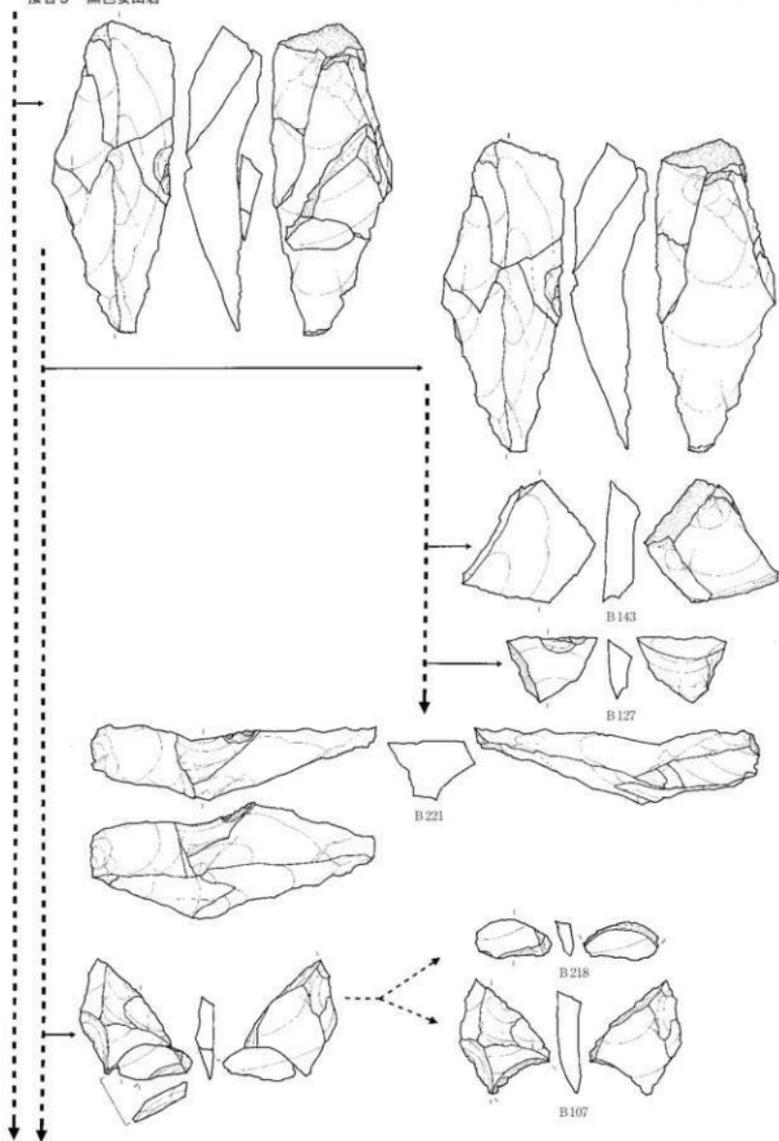


図68 荒野II遺跡 第4文化層B地点(縮尺2/3)

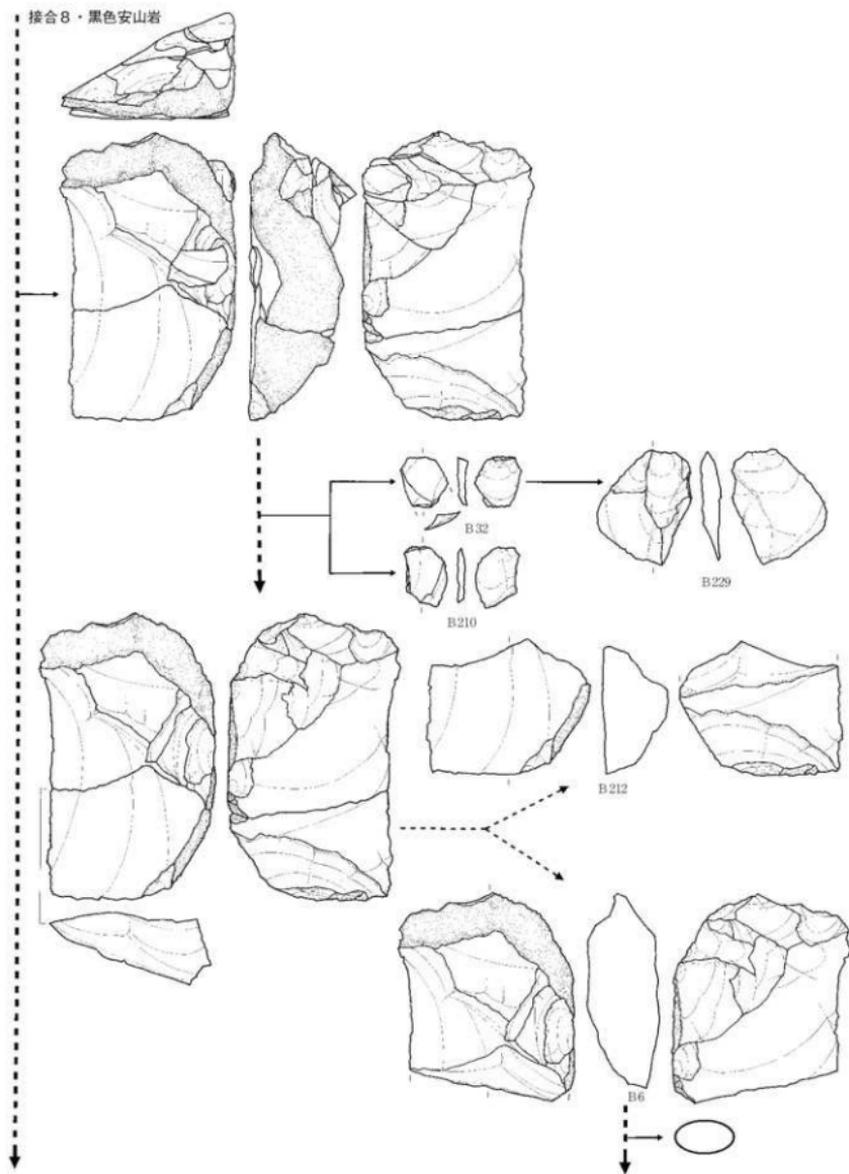


图69 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺2/3)

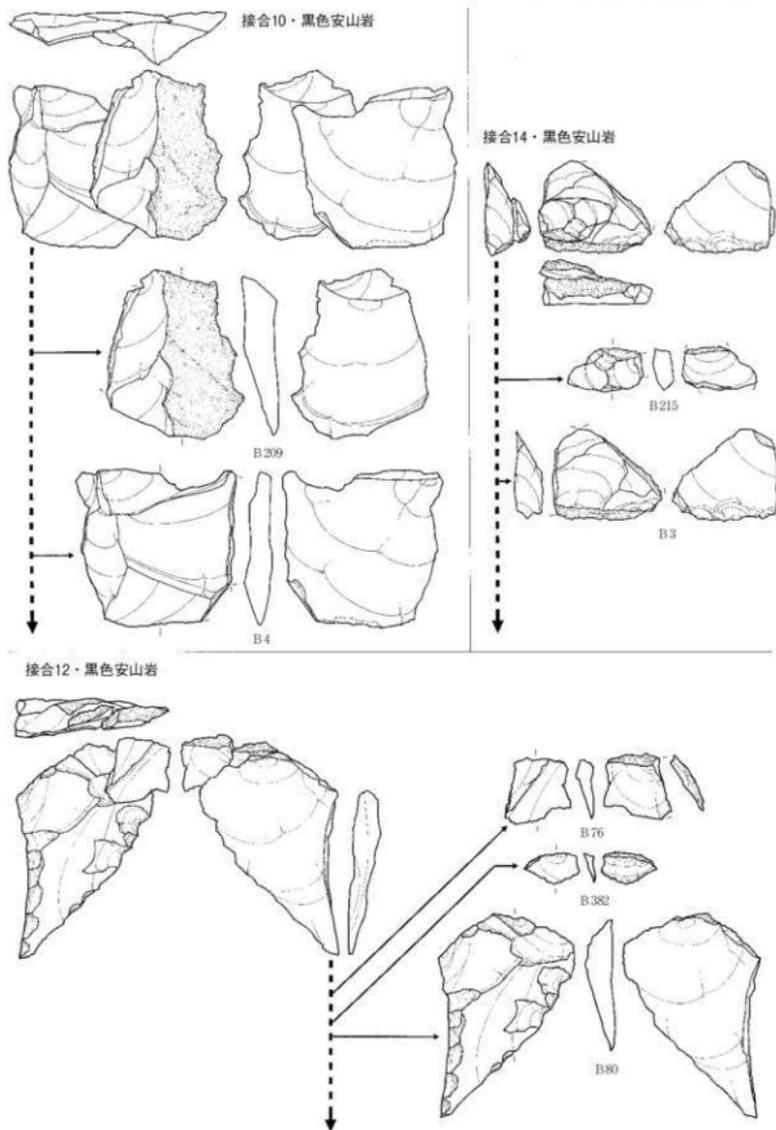
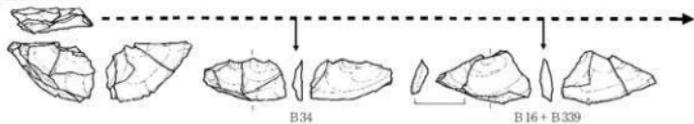
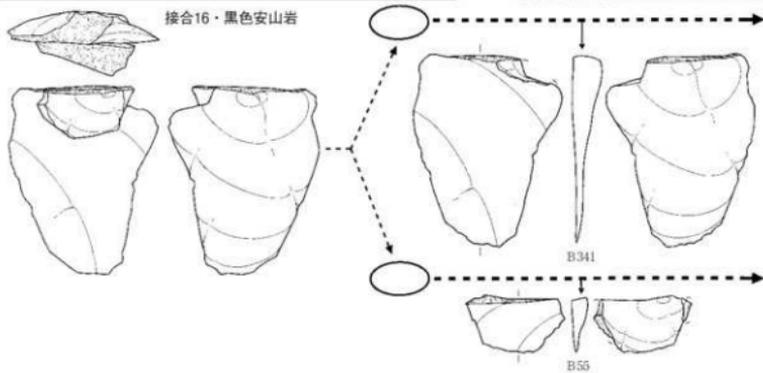


図70 荻野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺2/3)

接合15・黑色安山岩



接合16・黑色安山岩



接合17・黑色安山岩

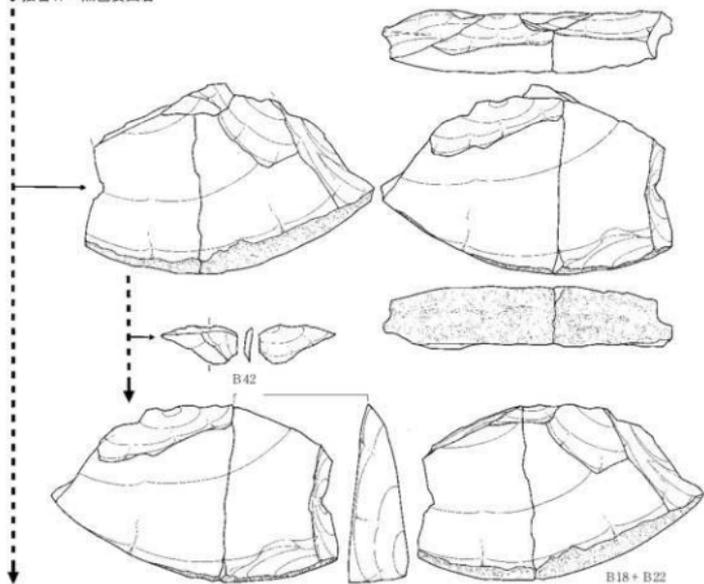
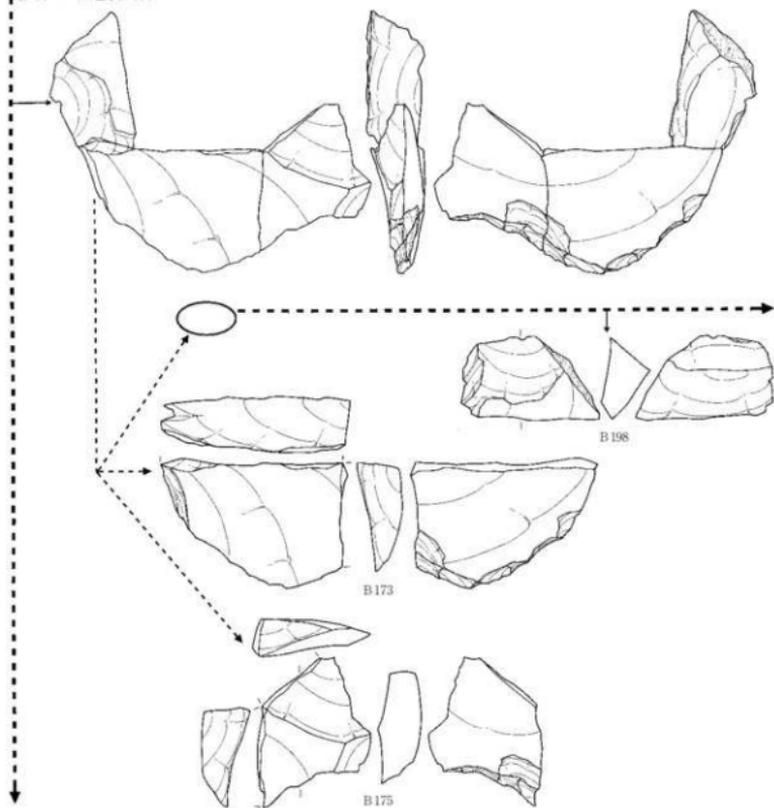
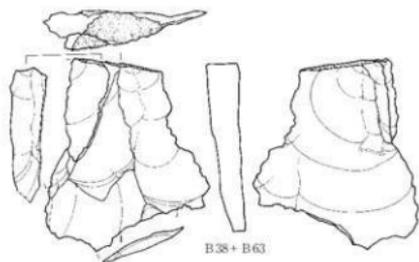


图71 荻野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺2/3)

接合19・黑色安山岩



接合11・黑色安山岩



接合13・黑色安山岩

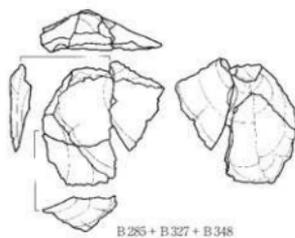
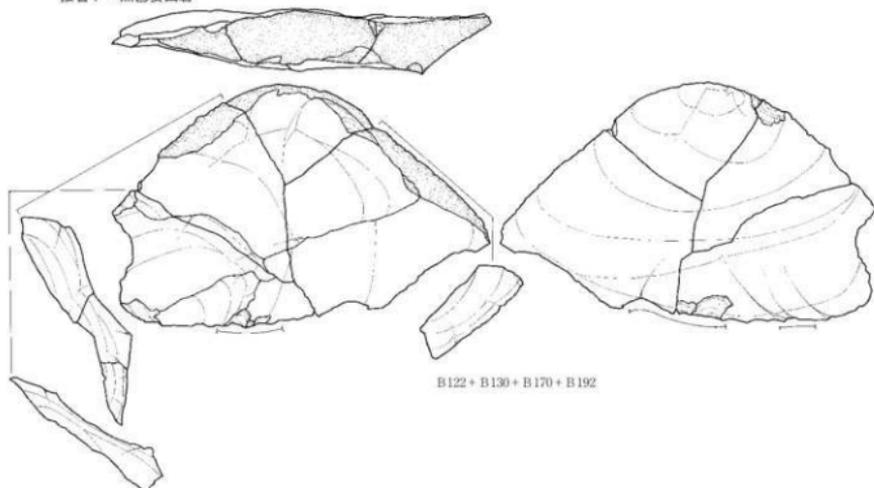
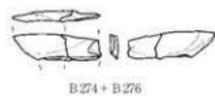


図72 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺2/3)

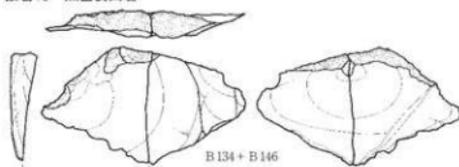
接合7・黑色安山岩



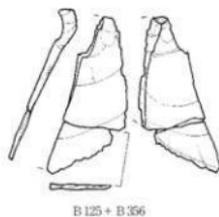
接合22・黑色安山岩



接合18・黑色安山岩



接合21・黑色安山岩



接合20・黑色安山岩

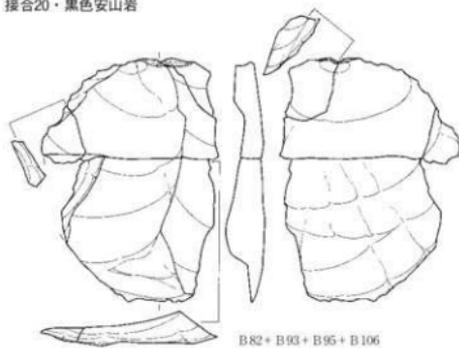


図73 荻野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点(縮尺2/3)

II. 石器の分布

第4文化層B地点の石器群は、南西に向かって緩やかに傾斜した地点より出土した(図7)。

石器分布状況(図74) 石器は長径約15mの長楕円形の範囲に分布しているが、その分布状況から判断すると、発掘区域外の南西方向に分布が広がる可能性が高い。よって、石器群の全体を検出していないと考えられ、全体的な分布の様相については不明な部分が多い。

乾燥ふるいによる微細遺物の検出状況(図75) IVb層・V層(AT極大層)・VI層・VII層を対象として微細遺物検出のため土壌の乾燥ふるい選別を実施した。全出土石器410点中、185点はふるい選別作業により検出したものである。やはりVI層より最も多くの遺物が出土しており、AT下暗色帯中に生活面があるという判断を支持するものとなっている。

接合資料の分布状況(図76) 接合資料は22点確認された。おおよそ約5m内の範囲に分布する石器どうしが接合する例がほとんどであるが、接合1に関しては、約10m離れた石器どうしが接合する状況が観察される。

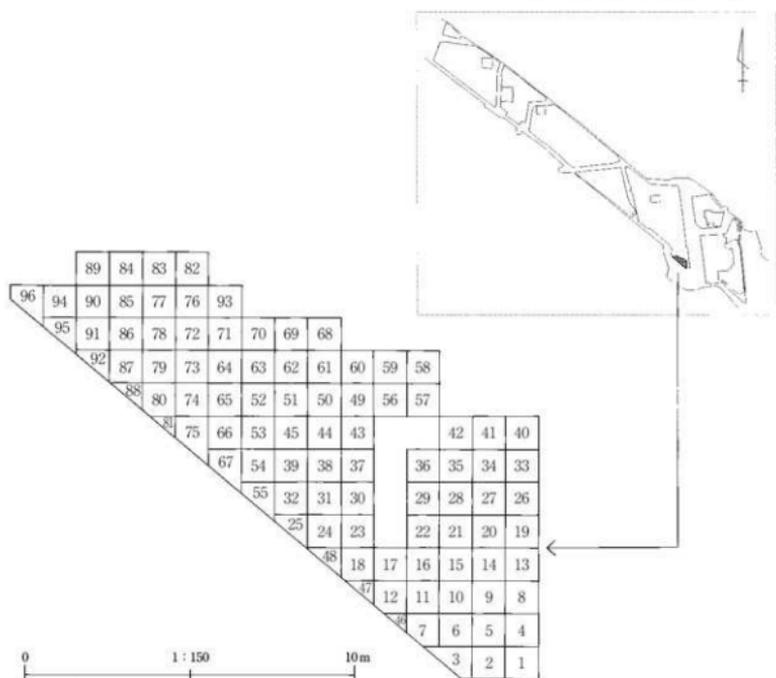
器種別石器の分布状況(図77、図78) 製品類の分布状況を見ると(図77)、特定器種が特定の場所に偏在する傾向は認められない。剥片・微細剥片の分布状況を見ると(図78)、剥片が石器分布域全体にわたって分布する様子が認められる。また、乾燥ふるいによる出土状況をも(図75)、微細剥片が全体にわたって分布する傾向が認められる。このことと、剥片剥離に関する接合資料が多数存在することを考え合わせると、本石器群の石器分布域は、剥片剥離作業を主な活動として形成されたものと考えられる。

石材別石器の分布状況(図79) 本石器群に関しては、乾燥ふるいによって雲母石英片岩製の資料が1点出土しただけで、他は全て黒色安山岩製の石器である。



图74 堂野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点 石器分布状況

6. 荒野Ⅱ遺跡・第4文化層B地点



ふるい調査区	器 種			総 計
	剥片	微細剥片	礫片	
6		1		2
7	1	5	1	6
10		1		1
11		6		6
12		3		3
15		1		1
16		3		3
17	1	5		6
18	1	7		8
23	1	9		10
24		7		7
25	2	3		5
31	1	5		6
32	2	3		5
38		2		2
39	2			2
43		1		1
45	1	1		2
46		1		1
47	1	2		3
48	2	9		11
52	1	6		7
53		6		6

ふるい調査区	器 種			総 計
	剥片	微細剥片	礫片	
54		7		7
55		5		5
58		1		1
65	1	1		2
66	2	8		10
67	1	1		2
72		2		2
74	1	7		8
75		5		5
77		1		1
78	1	6		7
79	3	9		12
80	1	2		3
81		1		1
82	1			1
85		1		1
86		2		2
87	1	4		5
88	1	2		3
91		2		2
95		1		1
総 計	16	87	1	185

※礫片1点は雲母石英片岩 他は全て黒色安山岩

図75 荒野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点 乾燥ふるい調査区と出土石器一覧

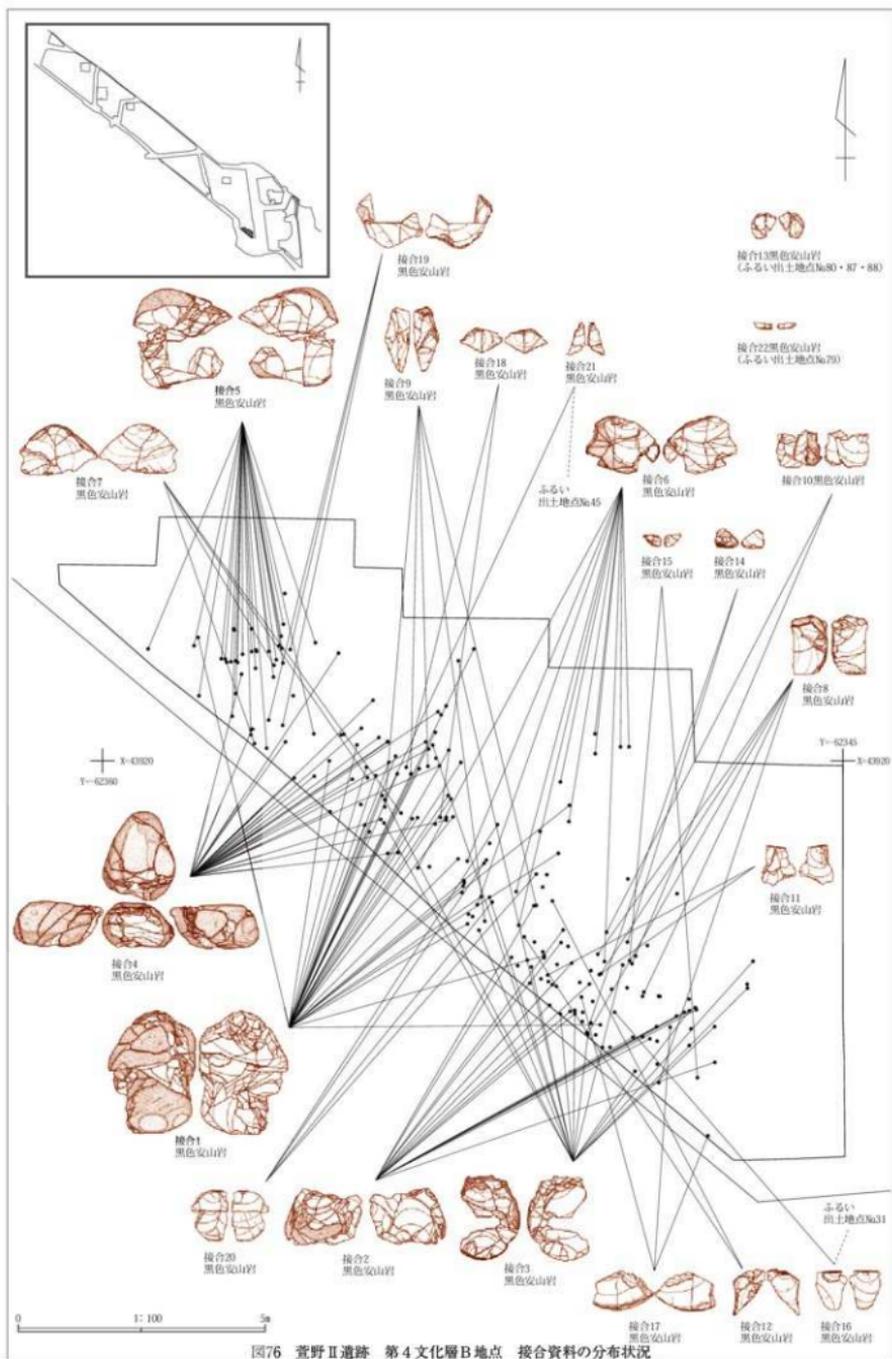


図76 荻野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点 接合資料の分布状況

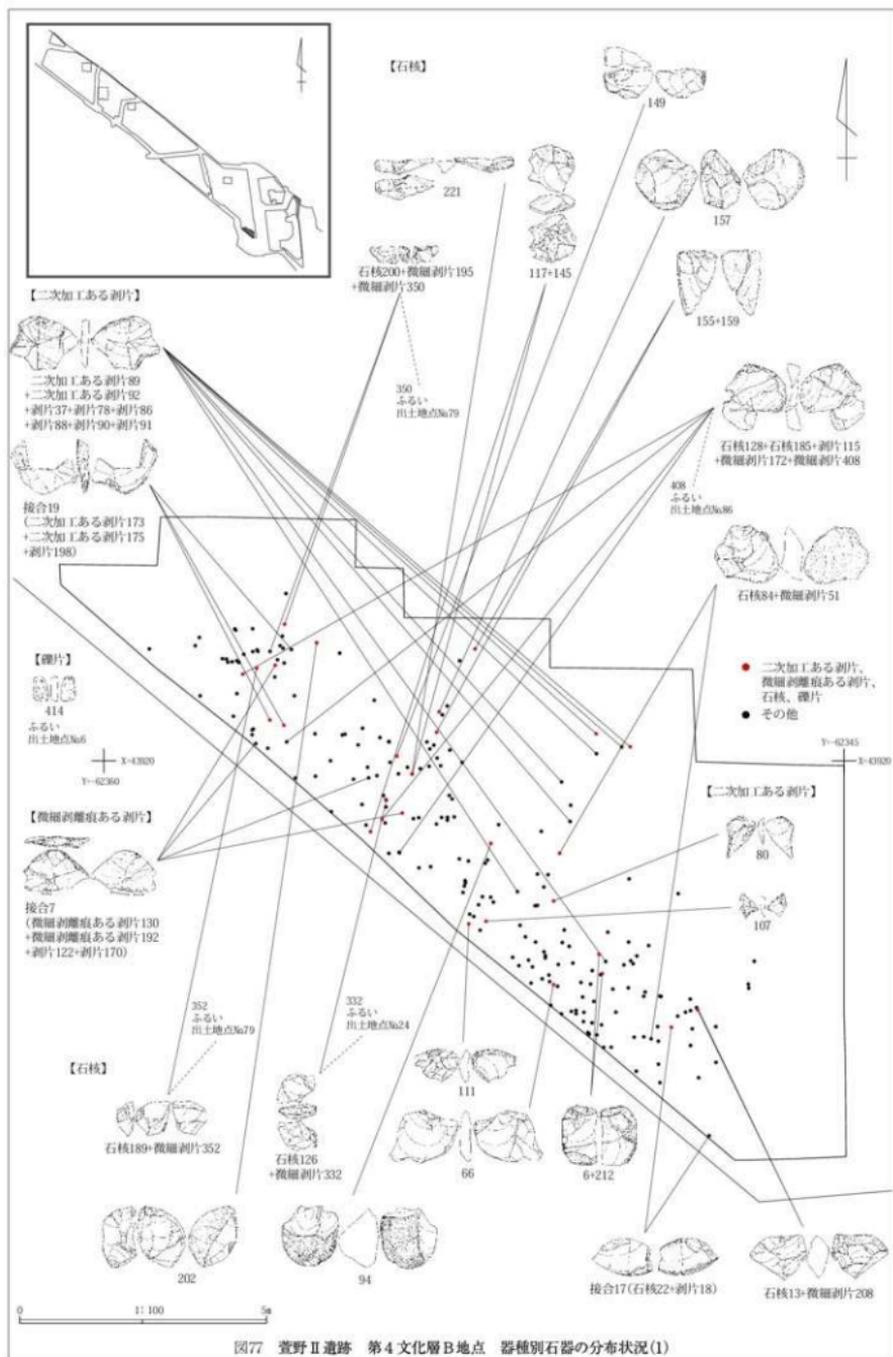
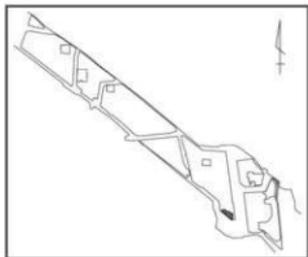
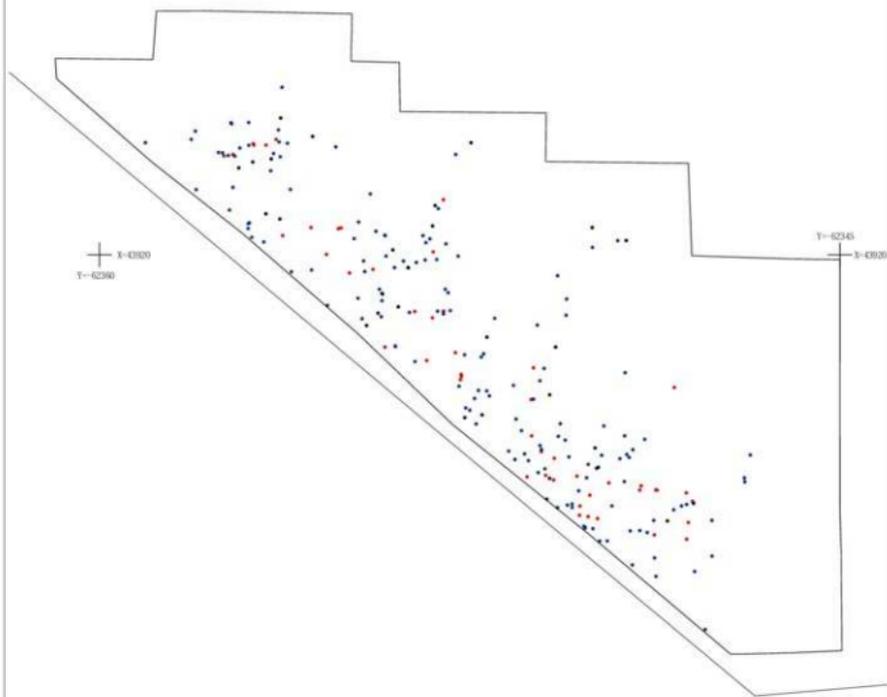


図77 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点 器種別石器の分布状況(1)



- 剥片
- 舊細剥片
- その他



0 1:100 5m

図78 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点 器種別石器の分布状況(2)

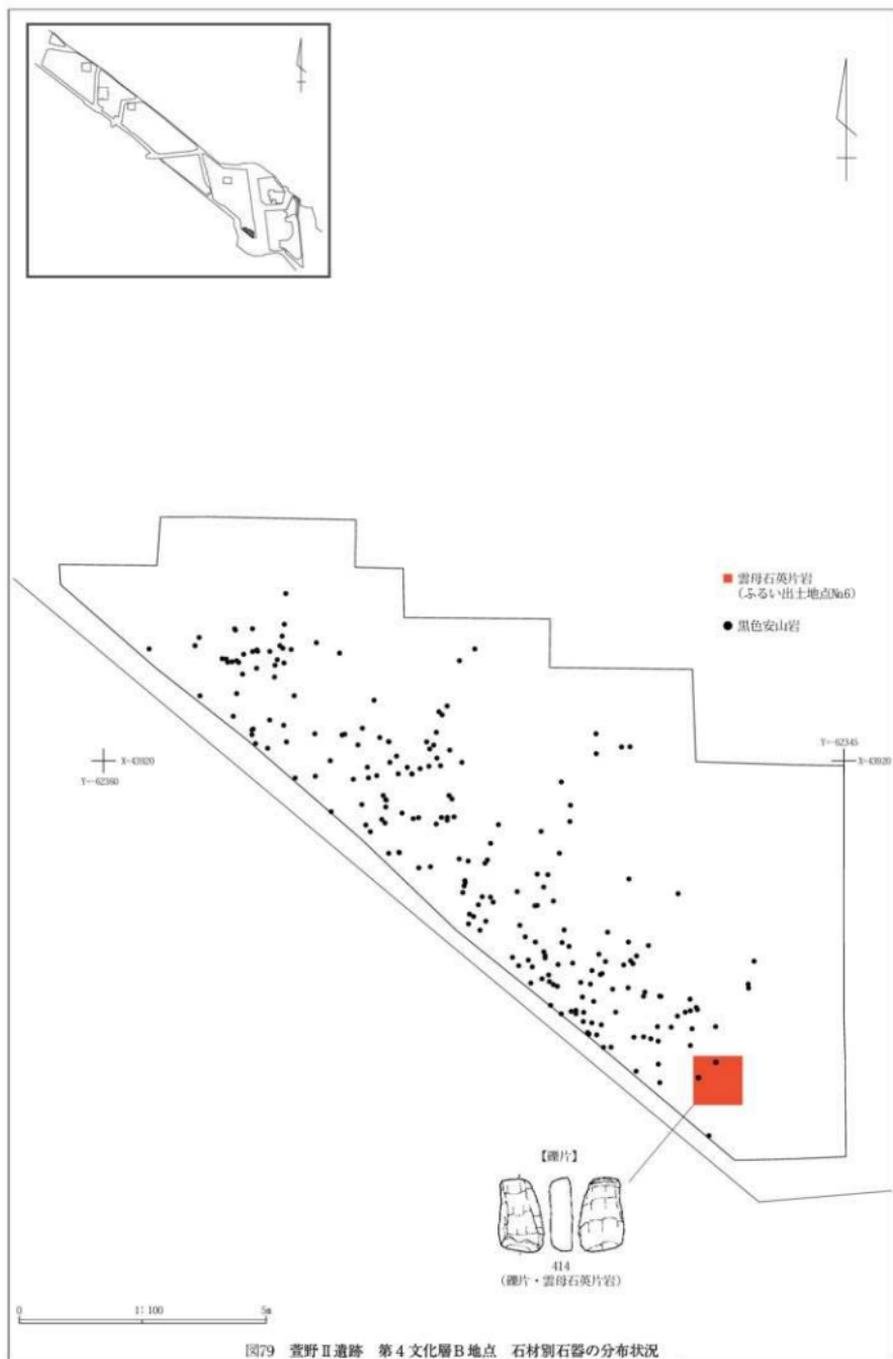


図79 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層B地点 石材別石器の分布状況

7. 萱野Ⅱ遺跡・第4文化層C地点

I. 出土石器

第4文化層C地点の石器群は、南西に向かって緩やかに傾斜した地点より出土した(図7)。この石器群は3点の石器からなる。出土層位をみると、Ⅵ・Ⅶ層から石器が出土しており、AT下暗色帯に帰属する石器群と考えられる。

表17 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層C地点
層位別出土点数

層位	点数
Ⅵ	1
Ⅶ	2
総計	3

表18 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層C地点 器種と石材

器種	石材		総計
	黒色安山岩	雲母石英片岩	
ナイフ形石器	1		1
礫片		2	2
総計	1	1	3

(1) 各器種

ナイフ形石器(図80-C415) 1点出土。黒色安山岩製。石刃を素材として、基部付近に主要剥離面側からの二次加工が認められる。

礫片(図80-C416・C417) 2点出土。ともに雲母石英片岩製。いずれも粗粒で軟弱な石質であり、剥片石器の石材としては適さないものである。結晶片岩類は、群馬県南西部の三波川帯に主産地があり自然的要因で赤城山南麓地域に混入することは考えられない石材である(津島2008)。

II. 石器の分布

石器分布状況(図81) 直径約5mの不正円形の範囲から出土している。

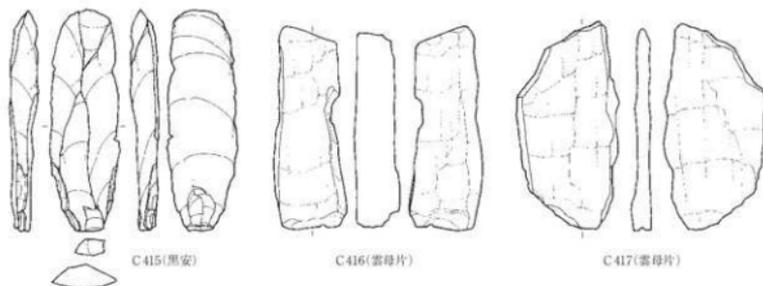


図80 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層C地点(縮尺4/5)

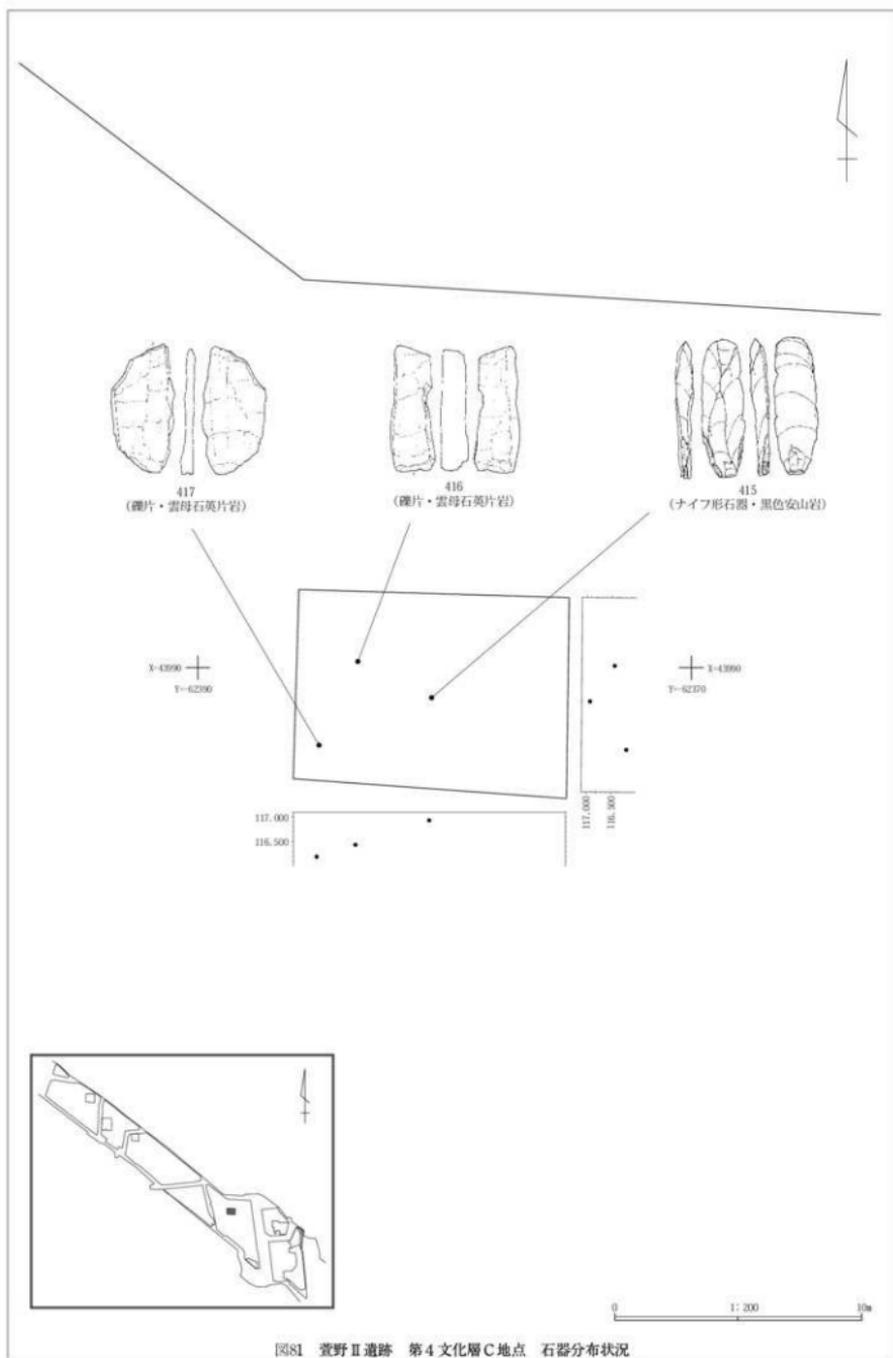


图81 荻野Ⅱ遺跡 第4文化層C地点 石器分布状況

8. 萱野Ⅱ遺跡・第4文化層D地点

I. 出土石器

第4文化層C地点の石器群は、南西に向かって緩やかに傾斜した地点より出土した(図7)。出土石器はチャート製のナイフ形石器1点である。出土層位をみると、VI層から石器が出土しており、AT下暗色帯に帰属する石器群と考えられる。

表19 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層D地点
層位別出土点数

層位	点数
VI	1
総計	1

表20 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層D地点
器種と石材

器種	石材	チャート	総計
ナイフ形石器		1	1
総計		1	1

(1) 各器種

ナイフ形石器(図82-D1) 1点出土。チャート製。縦長剥片を素材として、二側縁に二次加工が認められる。素材剥片を剥離する段階の打面部分を残す。

II. 石器の分布

石器分布状況(図83) 南西に向かって緩やかに傾斜した地点より出土した。

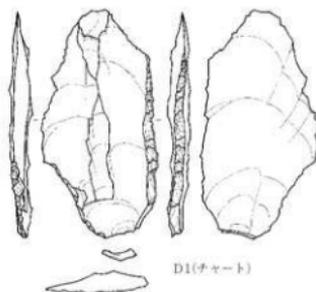


図82 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層D地点(縮尺4/5)

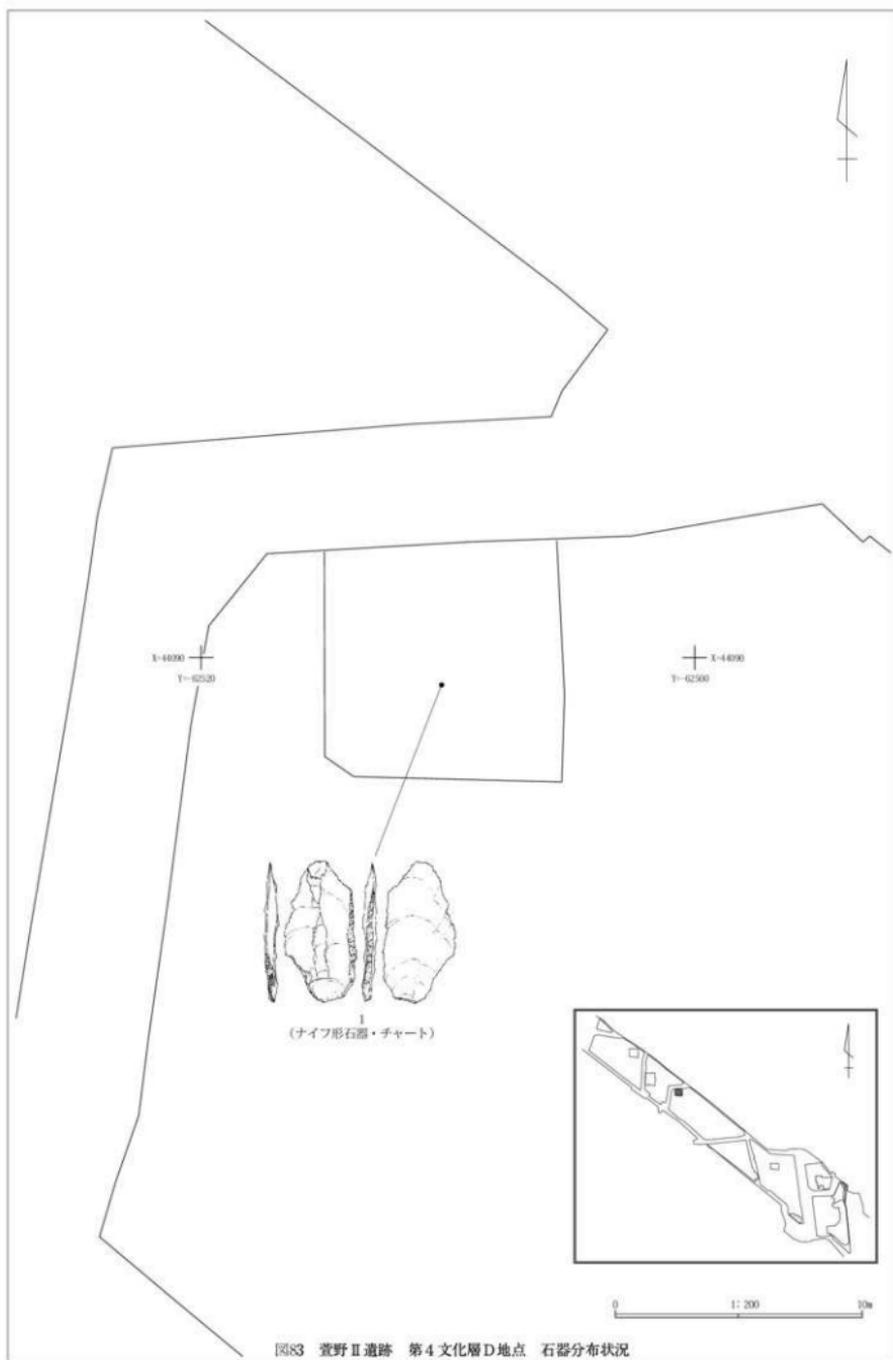


図83 萱野Ⅱ遺跡 第4文化層D地点 石器分布状況

第4章 堤沼上遺跡

1. 概要

堤沼上遺跡は、赤城山南麓の標高約121mの地点に立地する。赤城山の南麓地域では低地とローム台地が混在する様相をみせるが、遺跡はそのような二つの低地域に挟まれたローム台地上に立地する（図85、図86）。旧石器時代の石器は、このようなローム台地上から出土した。出土石器は、2つの文化層に分類された。

第1文化層は、As-Ok1を含むローム層中に帰属層位をもつ。出土点数は、黒曜石製のナイフ形石器1点である。このナイフ形石器は、原産地分析の結果、信州和田産と同定された（第8章考察参照）。

第2文化層は、AT下暗色帯に帰属するものである。黒色安山岩を使用石材の主体とする。全体の出土点数は113点であり、ナイフ形石器や石刃を少量組成する。



図84 堤沼上遺跡の文化層



遺跡遠景



調査風景

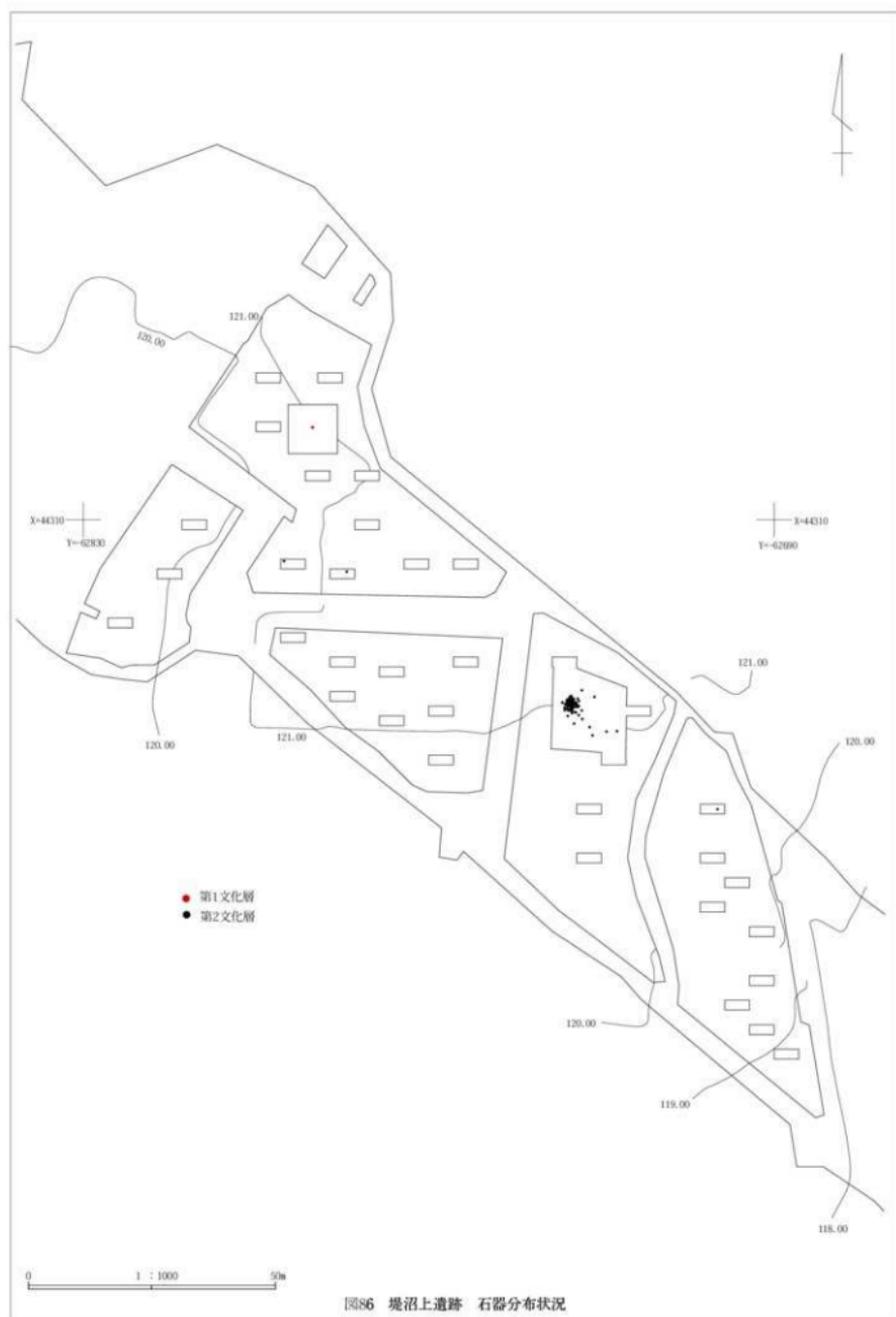


图86 堤沼上遺跡 石器分布状況

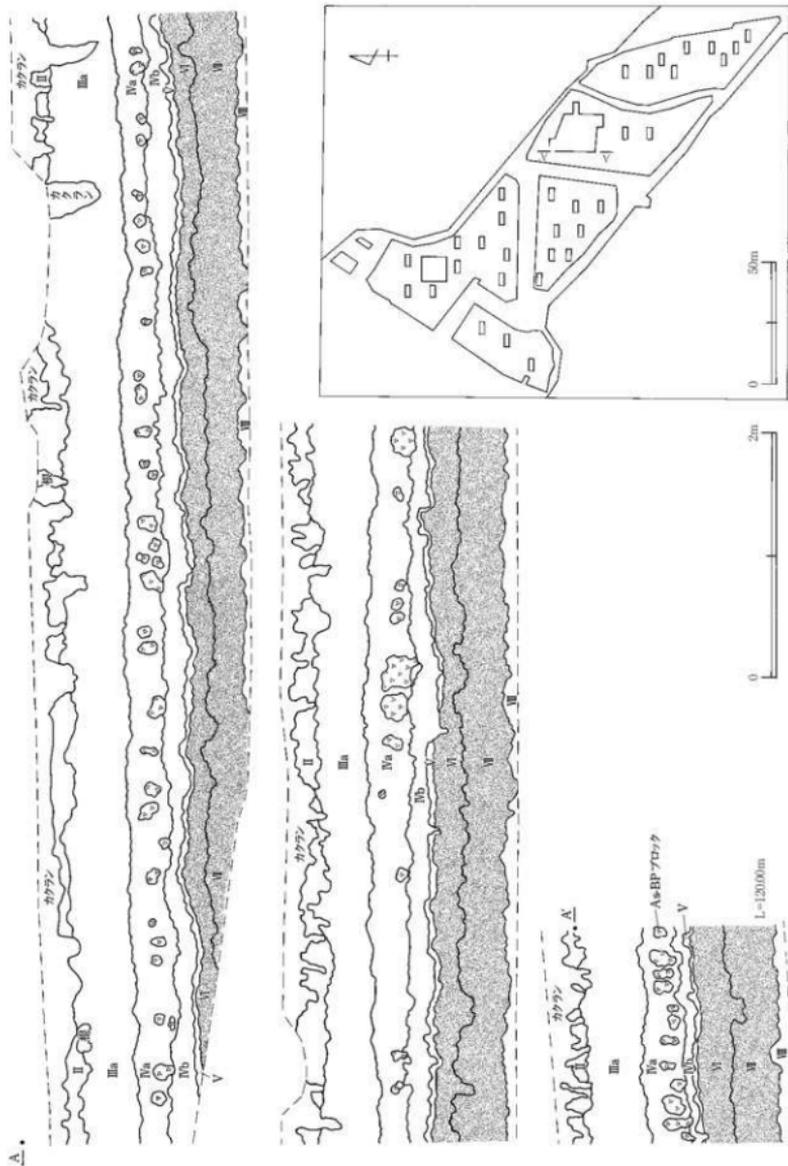


図87 塚沼上遺跡 土層堆積状況

2. 堤沼上遺跡・第1文化層

I. 出土石器

第1文化層の石器は、南西方向に向かって緩やかに傾斜した地点より出土した(図86)。出土石器は、黒曜石製のナイフ形石器1点である。石器は、As-Ok1を含むⅢ層から出土していることから、As-Ok1降下を相前後する時期に形成されたと考えられる。

表21 堤沼上遺跡 第1文化層
層別別出土点数

層位	点数
Ⅲa	1
総計	1

表22 堤沼上遺跡 第1文化層
器種と石材

器種	石材	黒曜石	総計
ナイフ形石器		1	1
総計		1	1

(1) 各器種

ナイフ形石器(図88-33)

1点出土。黒曜石製。石刃あるいは縦長剥片を素材として、二側縁に二次加工が認められる。主要剥離面側の基部付近にも二次加工が観察できる。先端部付近から右側縁部にかけて、折断痕とも判断される剥離面が認められるが、これは先端刺突による衝撃剥離の可能性も想定される。

この資料は、原産地分析の結果、信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

II. 石器の分布

石器分布状況(図89) 石器は、南西に向かって緩やかに傾斜した地点より出土した。

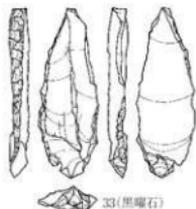


図88 堤沼上遺跡 第1文化層(縮尺4/5)

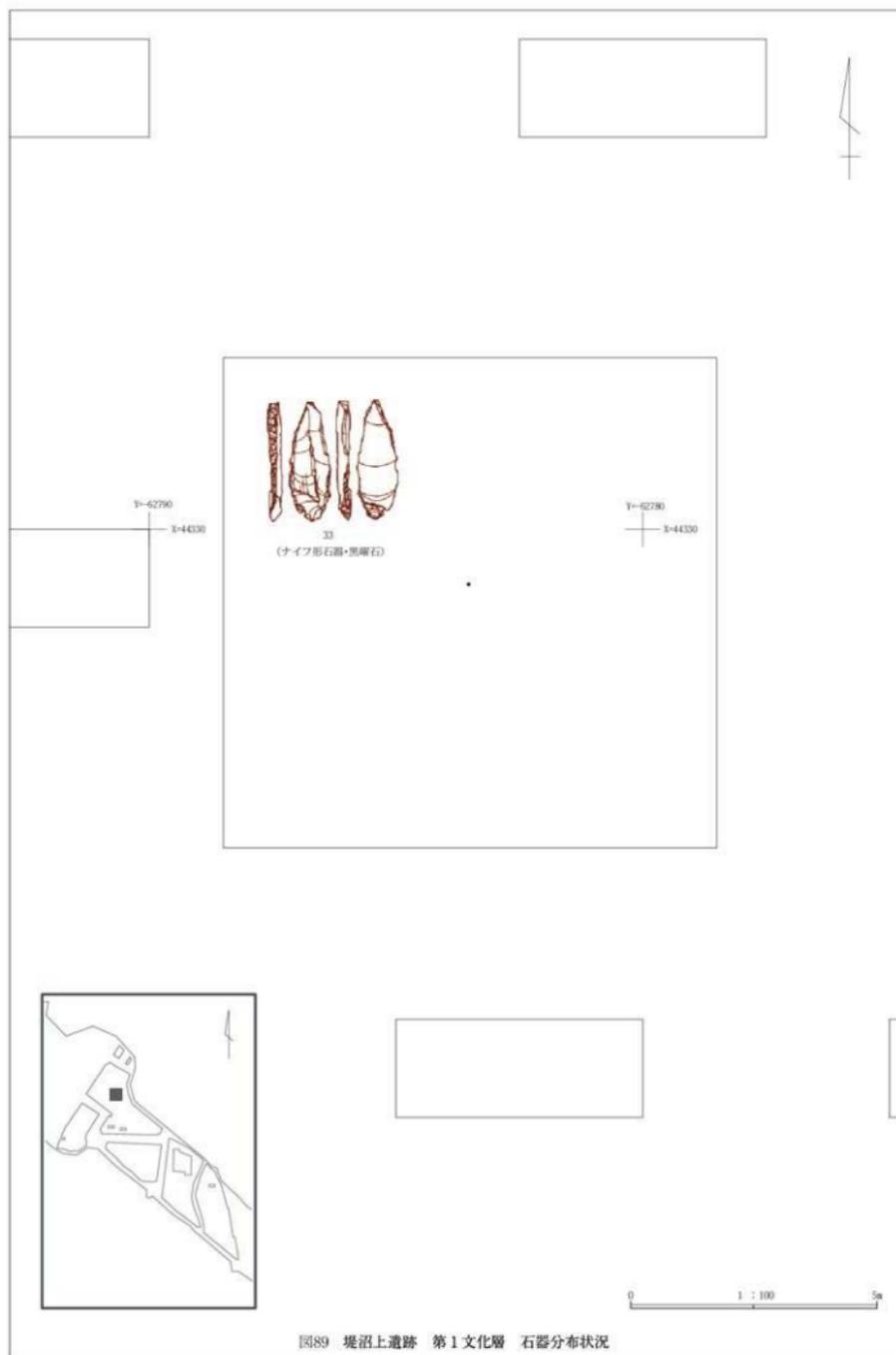


図89 埴沼上遺跡 第1文化層 石器分布状況

3. 堤沼上遺跡・第2文化層

I. 出土石器

赤城山南麓地域においては、いくつもの低地域がほぼ南北に樹枝状に延びる。第2文化層の石器群は、このような低地域に挟まれたローム台地上のほぼ頂部にあたる地点より出土した(図86)。南に向かって緩やかに傾斜した場所から石器の出土が確認された。第2文化層は、113点の石器からなる。石器はVI層より最も多く出土しており、AT下暗色帯に生活面を設定することができる。主要な器種としては、ナイフ形石器が上げられる。使用石材は黒色安山岩が中心であり、それに黒色頁岩・珪質頁岩などが若干加わる。接合資料は1点確認された。

表23 堤沼上遺跡
第2文化層
層位別出土点数

層位	点数
IVa	2
IVb	23
V	10
VI	54
VII	22
VIII	2
総計	113

表24 堤沼上遺跡 第2文化層 器種と石材

器種	石材	黒色安山岩	黒色頁岩	珪質頁岩	雲母石英片岩	緑色片岩	粗粒輝石安山岩	総計
ナイフ形石器				1				1
二次加工ある剥片		3						3
石刃			1					1
剥片		46		1				47
微細剥片		51	1					52
石核		1						1
礫							1	1
礫片					3	3	1	7
総計		101	2	2	3	3	2	113

(1) 各器種

ナイフ形石器(図90-118) 1点出土。珪質頁岩製。素材剥片の具体的な形態は不明であるが、縦長剥片である可能性が高い。主に主要剥離面側からの二次加工によって器形を整形しているが、一部に背面側からの二次加工痕も認められる。

二次加工ある剥片(図90-37・61・137) 3点出土。いずれも黒色安山岩製であり、接合1に含まれる資料である。No.61は小形剥片を素材として、折断面よりも新しい二次加工痕が認められる。No.137は折断面に二次加工痕が認められる。No.37は折断面を打面とする二次加工痕が認められる。

石刃(図90-56) 1点出土。黒色頁岩製。背面の先行剥離痕をみると、単設の石刃石核より剥離されたと考えられる。打面は平坦打面である。

石核(図91-83) 1点出土。黒色安山岩製。接合1に含まれる資料である。円礫を利用している。打面を固定することなく、小形剥片を生産する様子が観察される。

礫(図91-135) 1点出土。粗粒輝石安山岩製の円礫。粗粒輝石安山岩は赤城火山を起源とする石材であることから、遺跡の立地を考慮すると、遺跡周辺の河川流域で採取されたものと考えられる。

礫片(図90-30・32・69・115・117・139) 7点出土。そのうちの結晶片岩類製の6点を図示した。No.30・69・139は雲母石英片岩製。No.32・115・117は緑色片岩製。飯島静男氏は、上武道路・旧石器時代遺跡群で確認された結晶片岩類を、「雲母石英片岩」「黒色片岩」「緑色片岩」の三つに分類している。これらの結晶片岩類は、群馬県南西部の三波川帯に主産地がある。しかし、「緑色片岩」に限っては、群馬県北部の片品川上流部にも小規模ながら産出地がある(飯島静男氏のご教授)。結晶片岩類については、自然状態で遺跡地のある赤城山南麓地域に混入することは想定しがたく、人の手を経ている人工物として判断した(津島2008)。

3. 堤沼上遺跡・第2文化層

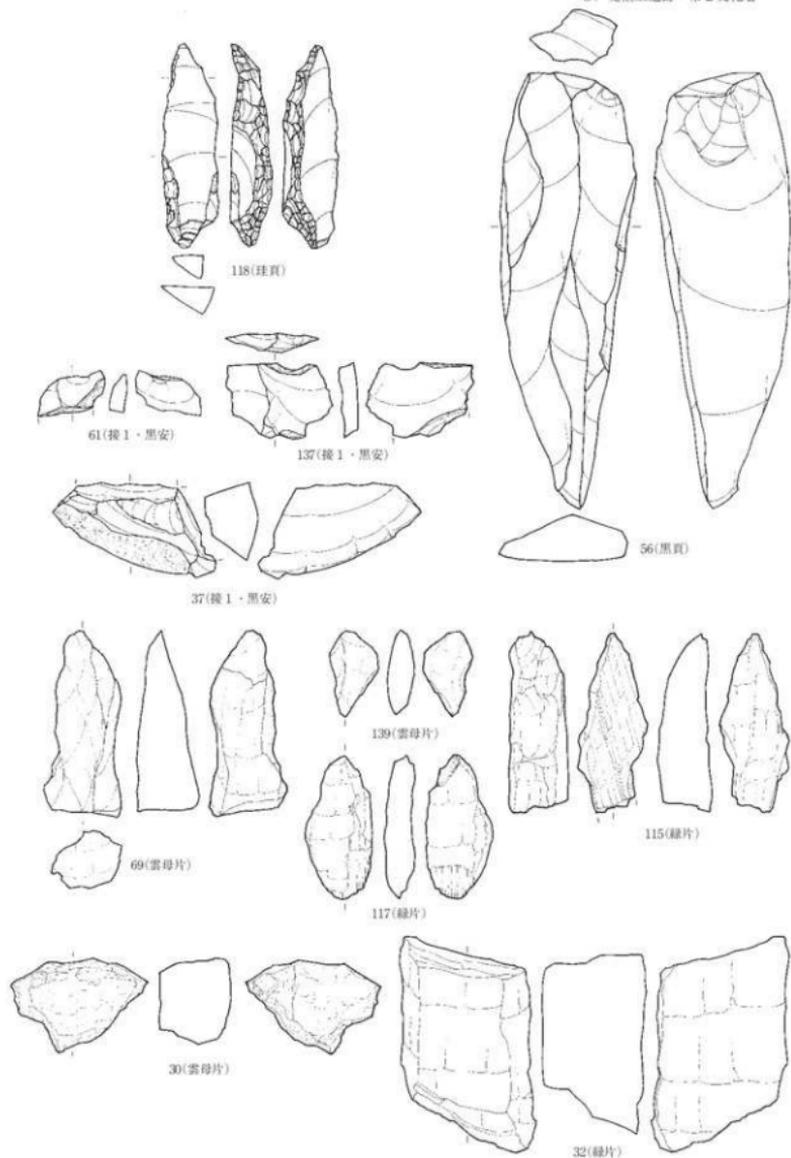


图90 堤沼上遺跡 第2文化層(縮尺4/5)

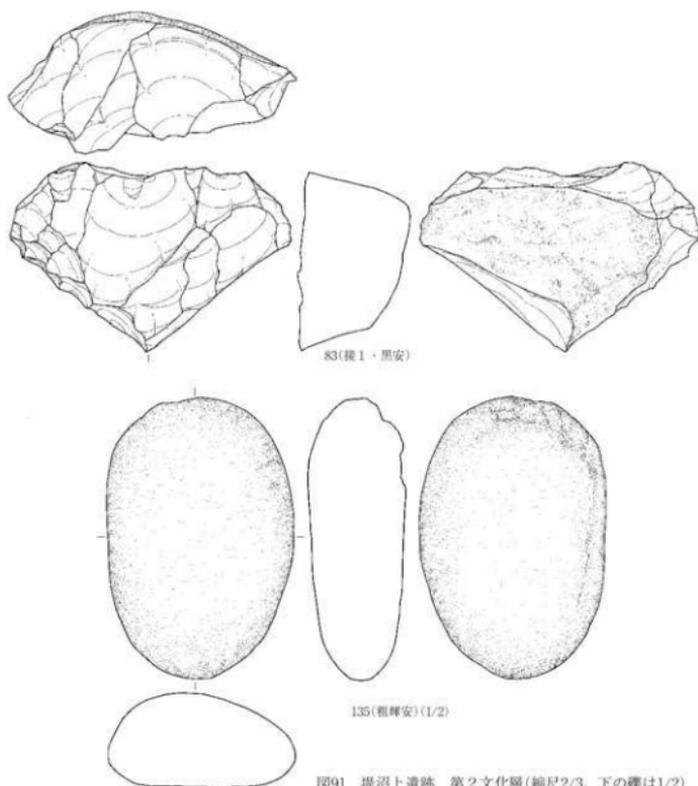


図91 堤沼上遺跡 第2文化層(縮尺2/3、下の礫は1/2)

(2) 接合資料

接合資料は1個体認められた。接合資料に含まれる石器は、合計で65点である。本石器群は黒色安山岩製石器が主体であることから、視覚的特徴から母岩分類は不可能と判断した。

接合1(図92～図94) 黒色安山岩製。乳児頭大の円礫を利用している。石核1点、二次加工ある剥片3点、剥片43点、微細剥片18点の合計65点の資料が接合。打面を固定させることなく打面転移を繰り返し、多くの小形剥片が生産されている。剥片剥離工程の最後に石核が1点(図94-83)残されている。

表25 堤沼上遺跡 第2文化層 接合資料の器種組成

接合資料		器種			石核	二次加工ある剥片	剥片	微細剥片	総計
No	石材	形状	大きさ						
1	黒色安山岩	円礫	乳児頭大	1	3	43	18	65	
総計					1	3	43	18	65

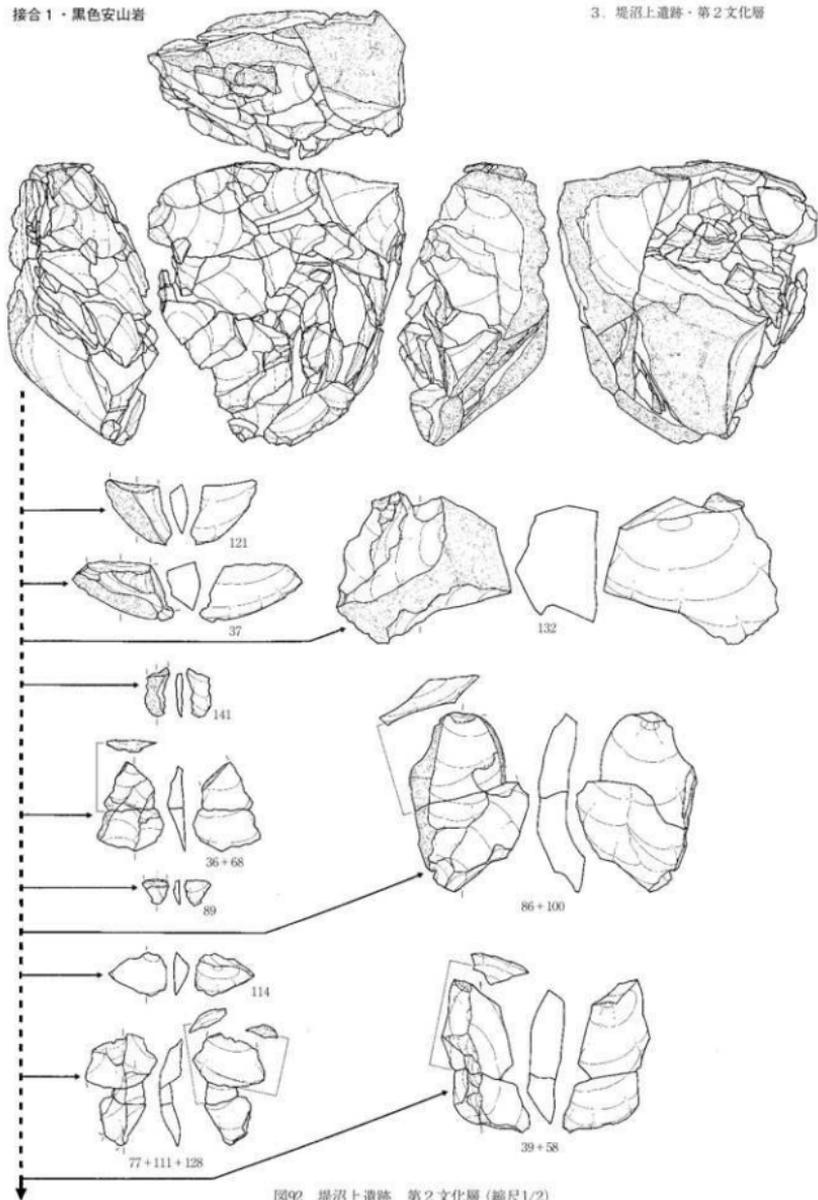


图92 堤沼上遺跡 第2文化層 (縮尺1/2)

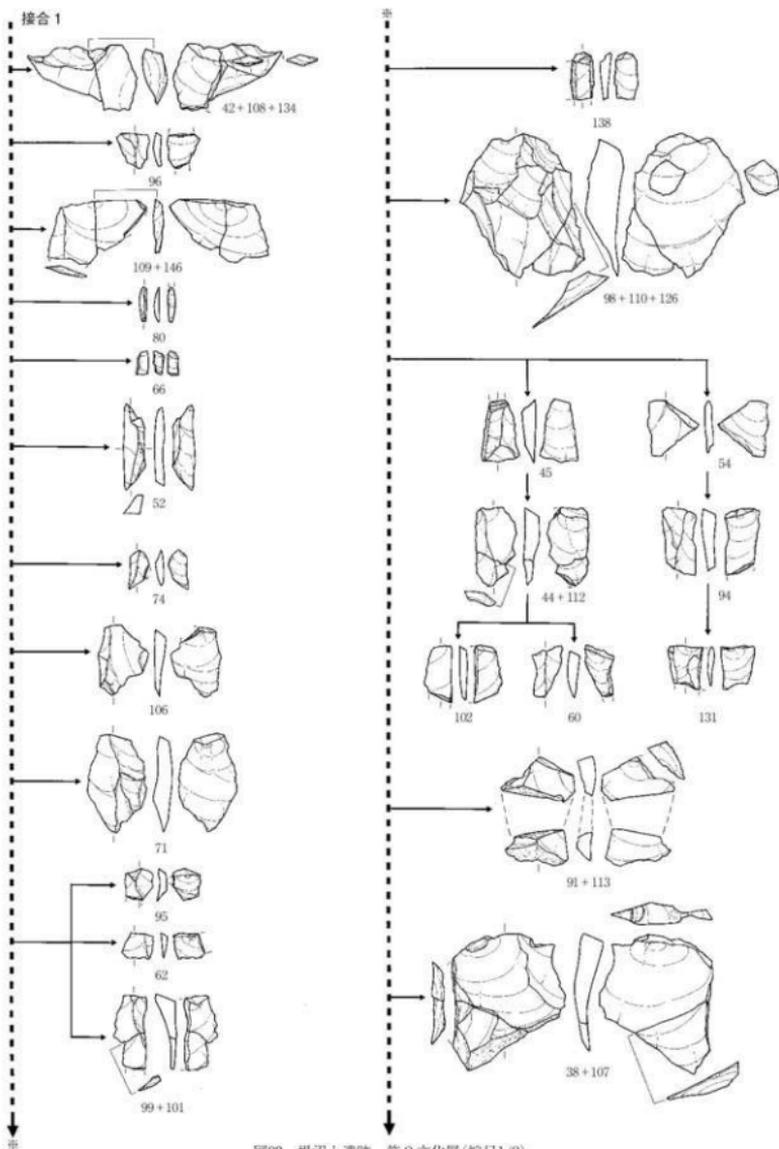


図93 堤沼上遺跡 第2文化層(縮尺1/2)

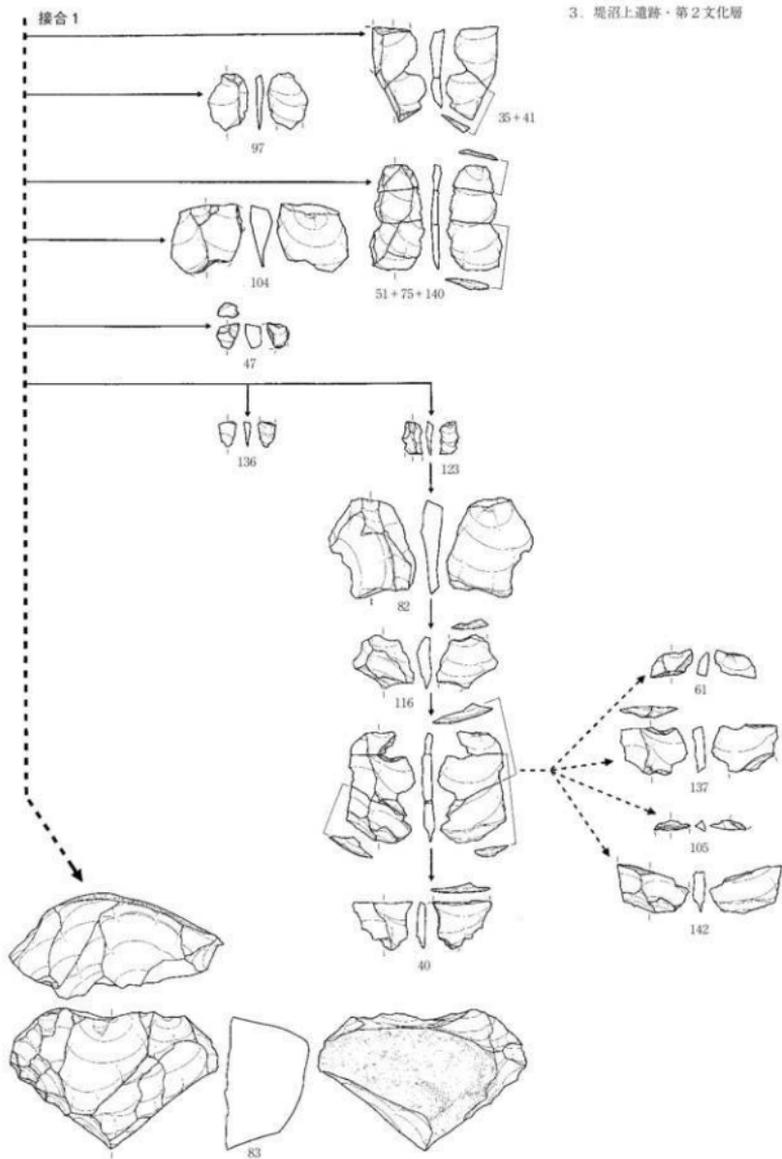


图94 堤沼上遺跡 第2文化層(縮尺1/2)

II. 石器の分布

赤城山南麓地域においては、いくつもの低地域がほぼ南北に樹枝状に延びる。第2文化層の石器群は、このような低地域に挟まれたローム台地上のほぼ頂部にあたる地点より出土した(図86)。南に向かって緩やかに傾斜した場所から石器の出土が確認された。

石器分布状況(図95) 石器の平面的な分布状況を見ると、三つの地点で石器の出土が確認されている。そのうちの二つの地点は、散発的な出土である。石器の出土が集中する地点では、直径5m程度の範囲に石器が集中する様子が認められる。また、その集中域周辺に少量の石器が分散する様子が観察できる。

接合資料の分布状況(図96) 接合資料は1点確認された。接合1を構成する石器は、石器集中部を中心として分布している。

器種別石器の分布状況(図97～99) 製品類の分布をみると(図97、図98)、特定の器種の偏在傾向は認められない。ナイフ形石器や石刃などの製品類は、石器集中域の周辺部から出土する傾向が認められる(図97)。結晶片岩類の資料もまた、周辺地域に散在する傾向がある(図98)。剥片、微細剥片の分布をみると石器集中域に集中しており(図99)、接合1の分布状況を考え合わせると、この集中域は剥片剥離活動と密接に関係した痕跡と判断できる。

石材別石器の分布状況(図100、図101) この石器群は黒色安山岩を主要な使用石材としており、一つの集中地点には黒色安山岩製石器が集中する。黒色頁岩製石器と珪質頁岩製石器は、その石器集中域の周辺に散在する様子が観察できる。

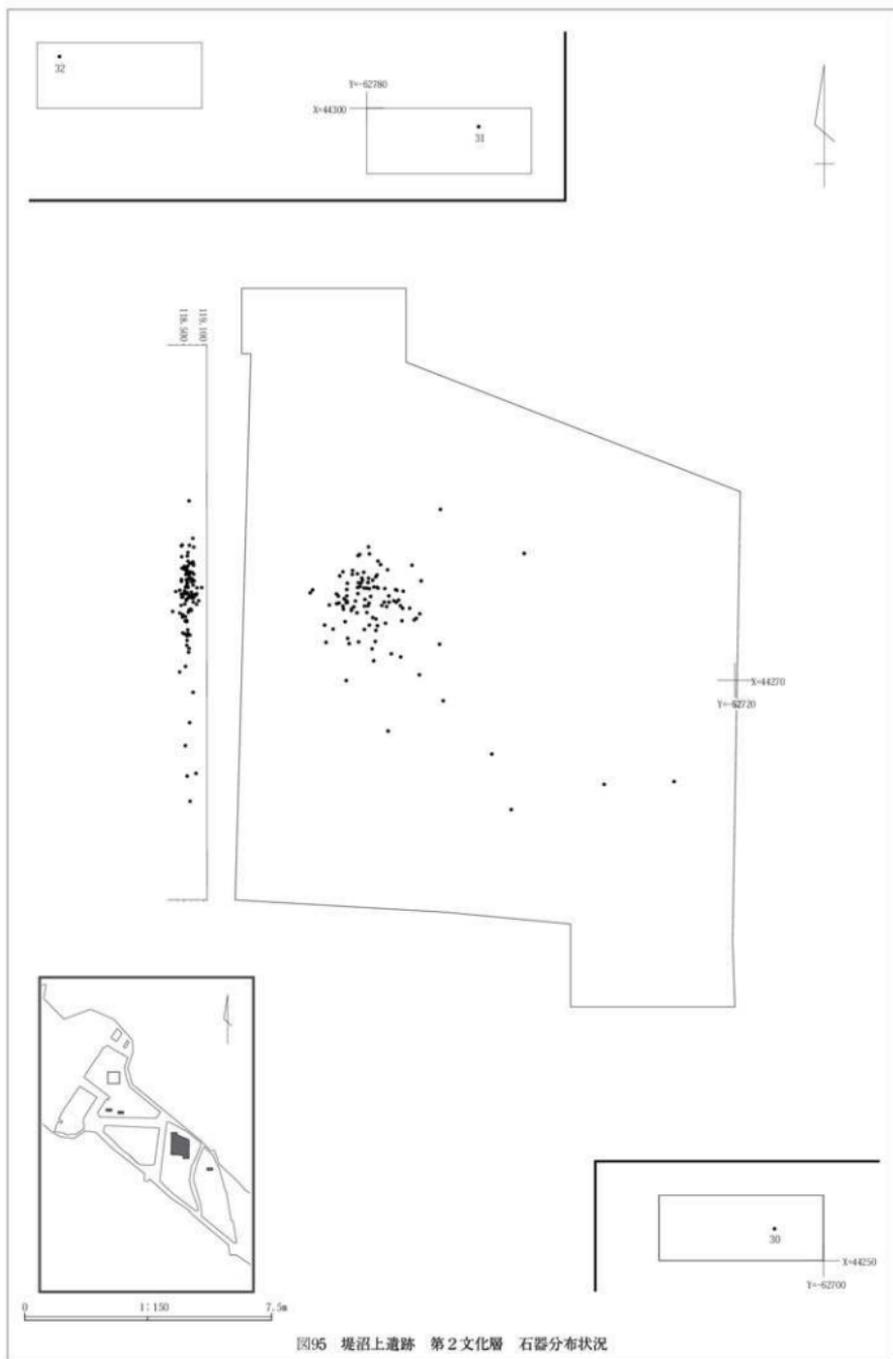


图95 堤沼上遺跡 第2文化層 石器分布狀況

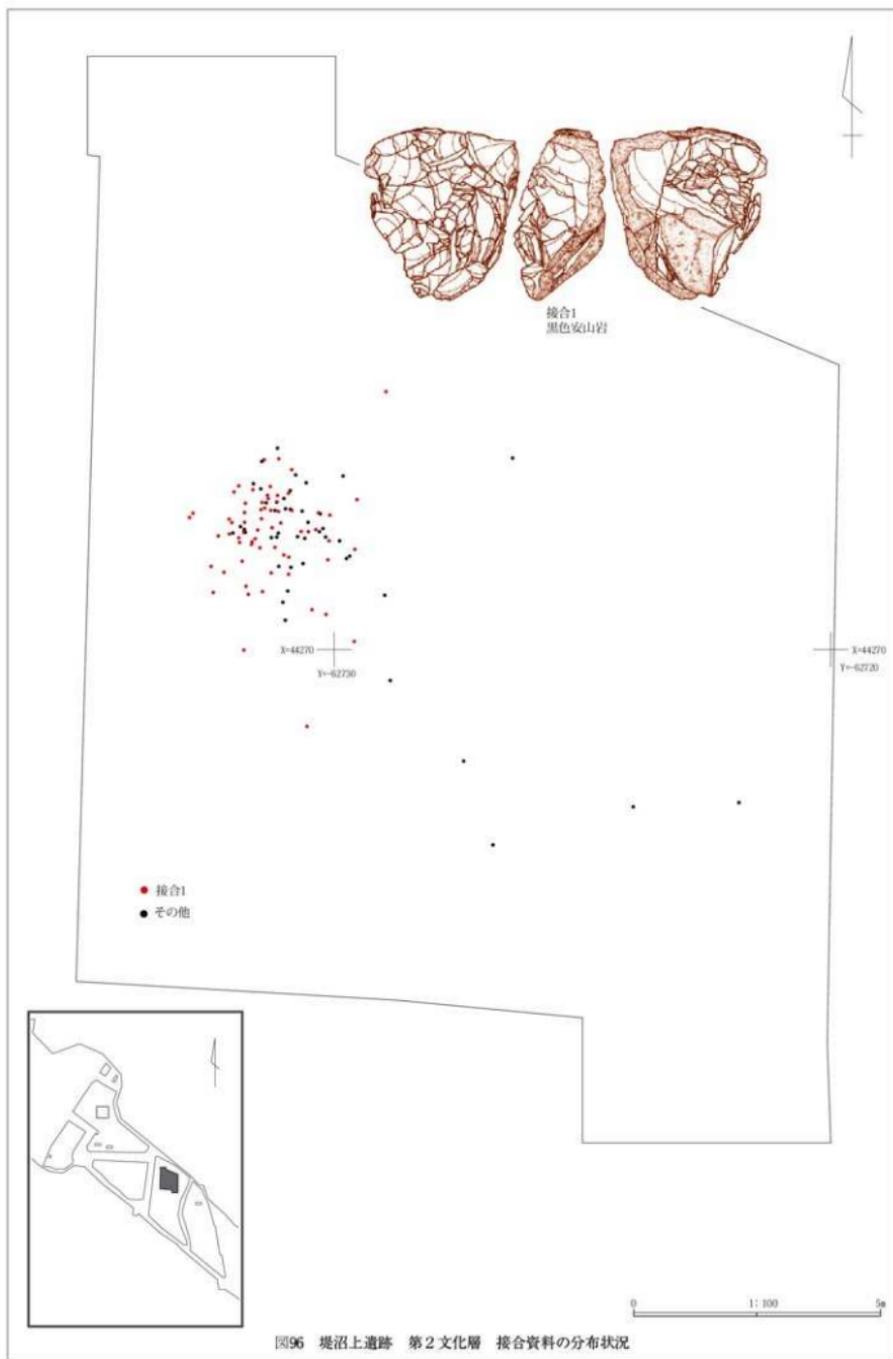


図96 堤沼上遺跡 第2文化層 接合資料の分布状況

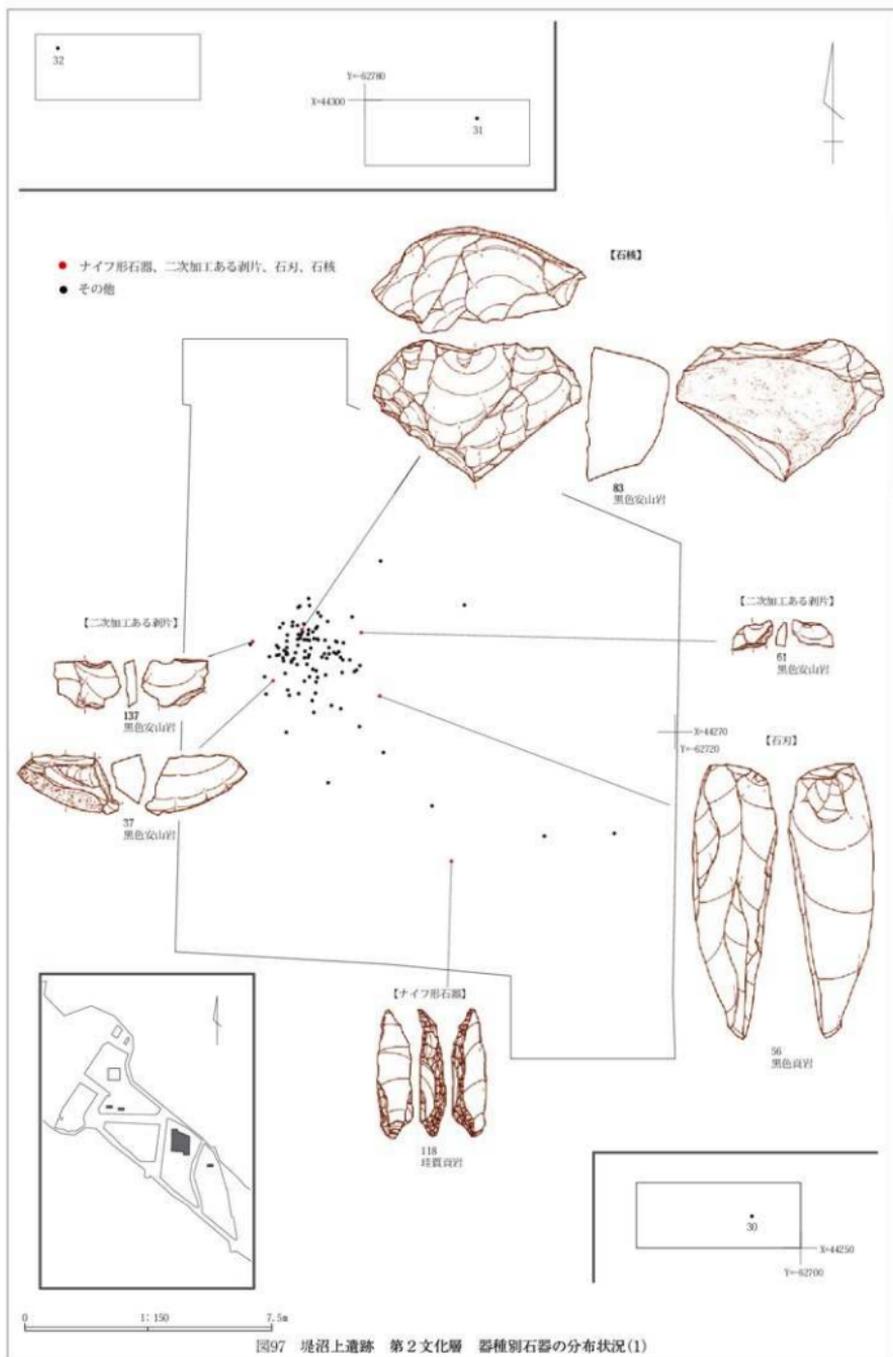


図97 堤沼上遺跡 第2文化層 器種別石器の分布状況(1)

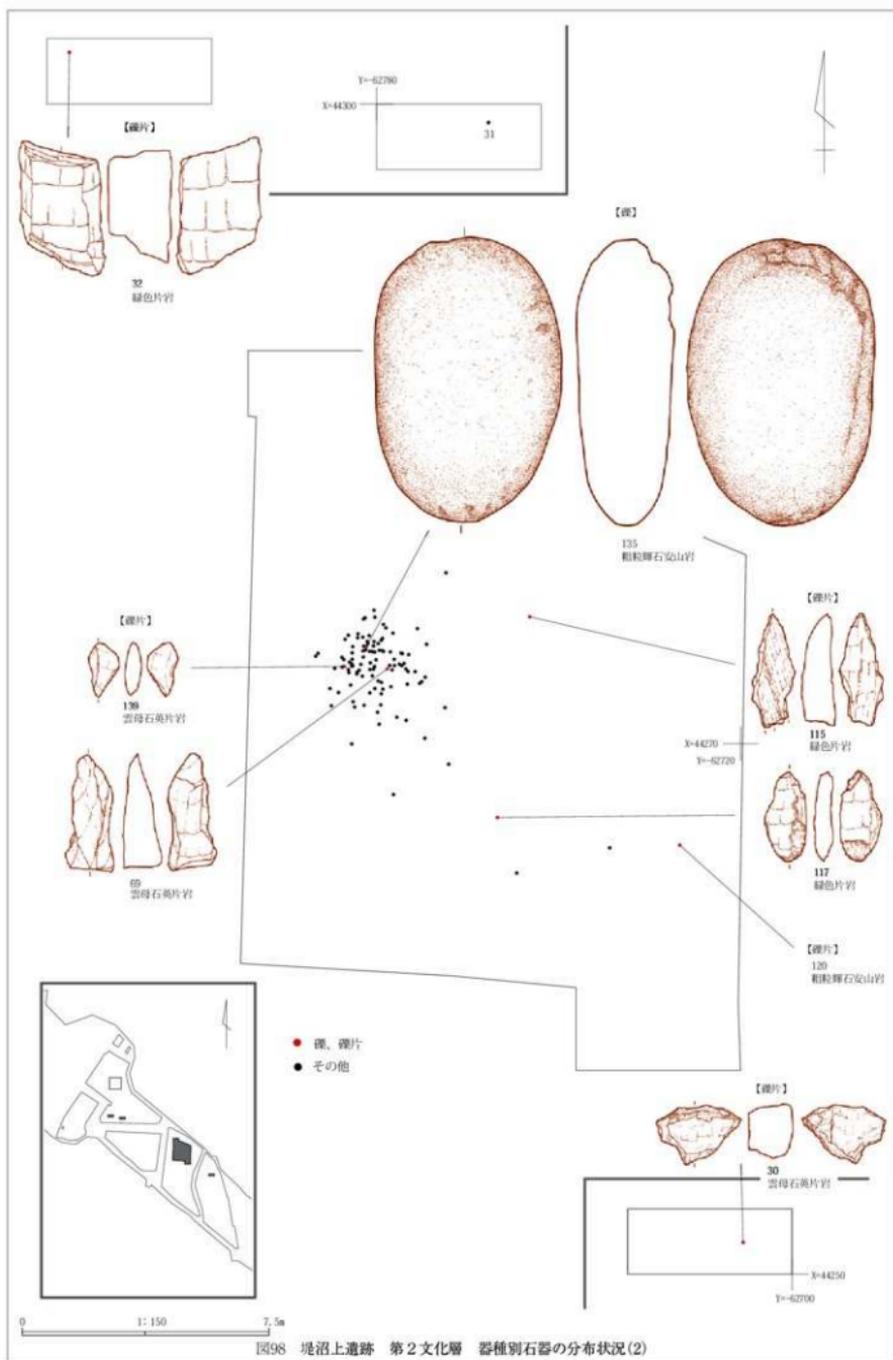


図98 堤沼上遺跡 第2文化層 器種別石器の分布状況(2)

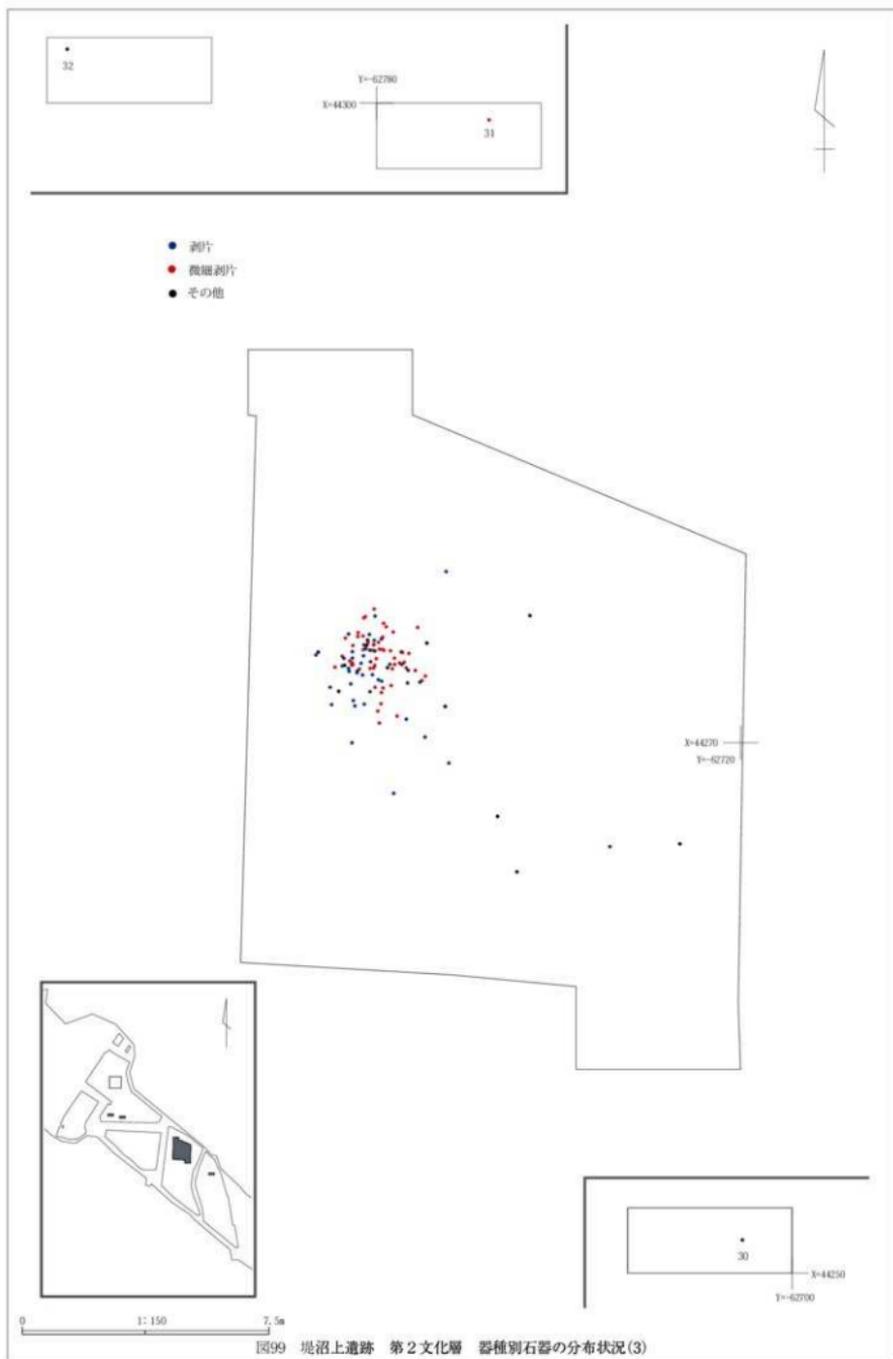


図99 堤沼上遺跡 第2文化層 器種別石器の分布状況(3)

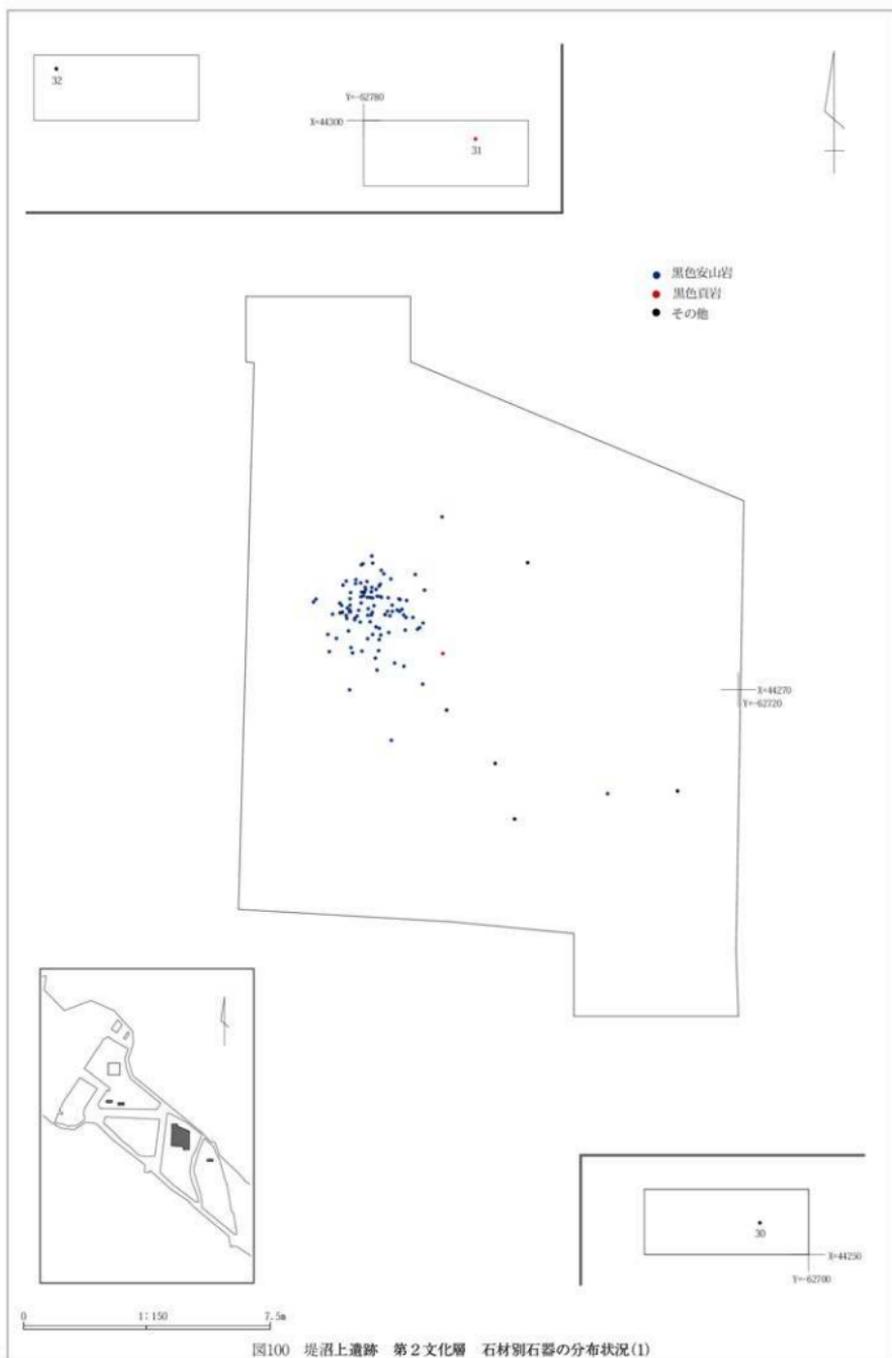


図100 堤沼上遺跡 第2文化層 石材別石器の分布状況(1)



第5章 亀泉坂上遺跡

1. 概要

亀泉坂上遺跡は、赤城山南麓の標高約121mの地点に立地する。赤城山の南麓地域では低地とローム台地が混在する様相をみせるが、遺跡はそのような二つの低地域に挟まれたローム台地上に立地する(図103、図106)。旧石器時代の石器は、このようなローム台地上から出土した。出土石器は、3つの文化層に分類された。

第1文化層は、As-Ok1を含むローム層中に帰属層位をもつ。出土点数は少ないが、黒曜石製の尖頭器を1点組成する。原産地分析の結果、この石器は信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

第2文化層は、时期的にはAT降下前後に帰属する石器群である。黒曜石を使用石材の主体として、黒曜石製の石刃を数多く組成する。黒曜石製石器の接合資料は16点確認されており、原産地分析の結果、これらの接合資料は全て信州和田産と判定された(第8章考察参照)。また、この石器群には、受熱によると考えられる赤化礫の集中分布域が1箇所確認された。

第3文化層としては、結晶片岩製の資料と粗粒輝石安山岩製の礫・礫片が、AT下暗色帯(VI・VII層)より下層のVIII・IX層から出土した。これは、出土層位からすると後期旧石器時代を遡る可能性も想定され、かつて房谷戸遺跡第III文化層で確認された結晶片岩製の資料(財)群埋文1992b)と同様な内容をもつものと評価できる。



図102 亀泉坂上遺跡の文化層



遺跡遠景



調査風景

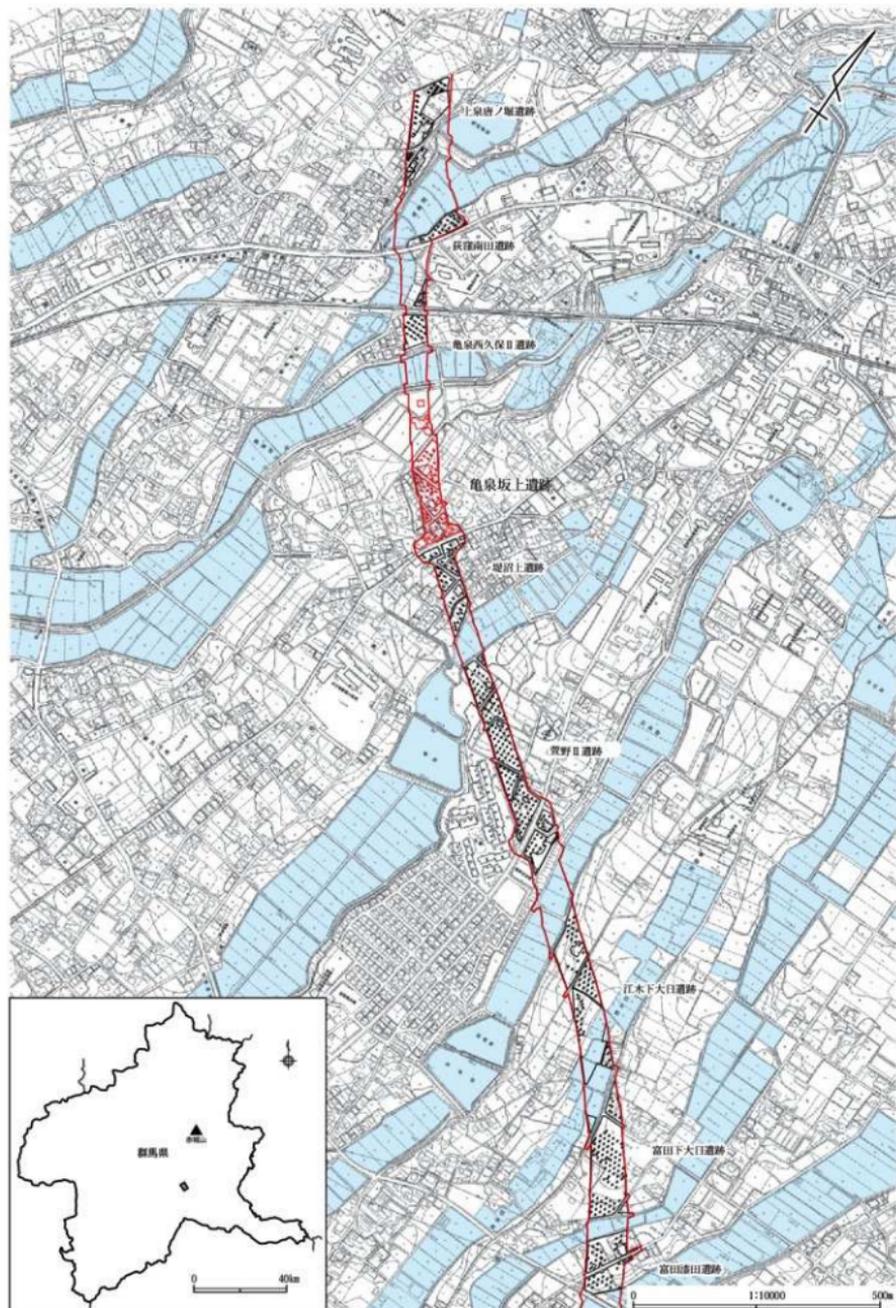


図103 亀泉坂上道路の位置

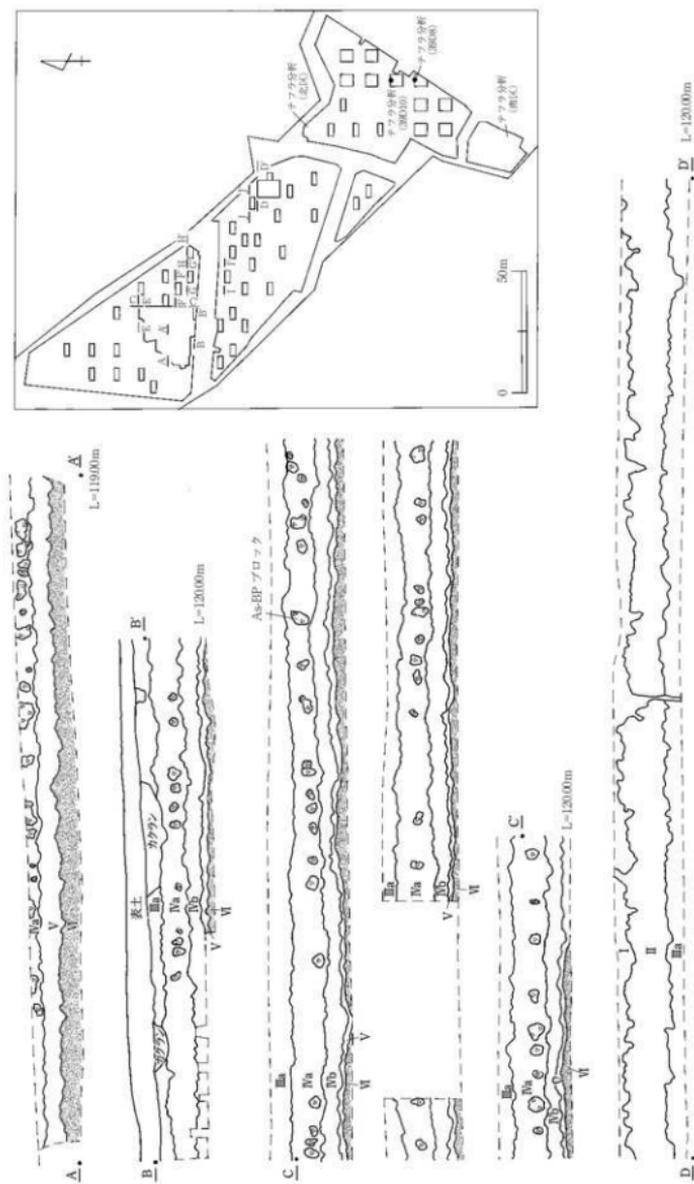
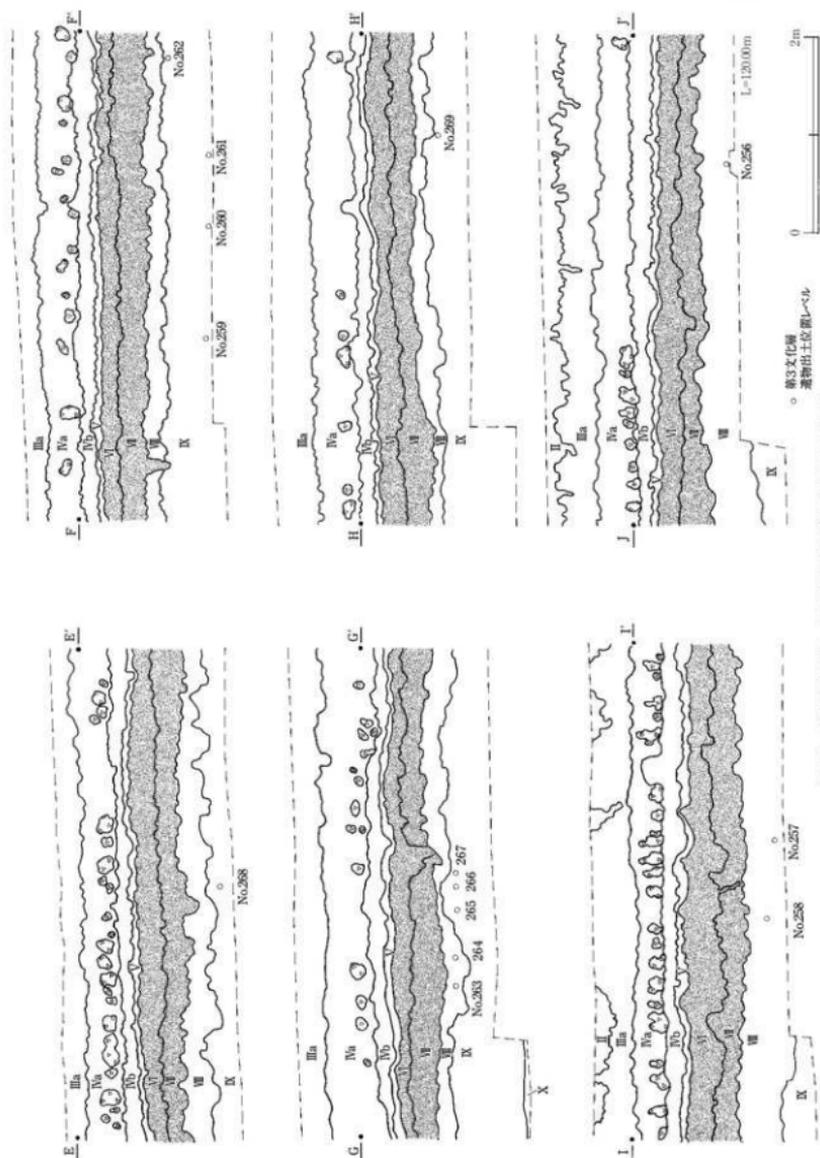


図104 亀泉坂上遺跡 土層堆積状況



1. 概要

○ 第3文化層
○ 土層出土位置レベル

120.0m
L=120.0m

0 2m

图105 龜泉坂上遺跡 土層堆積状況(第3文化層出土地点)

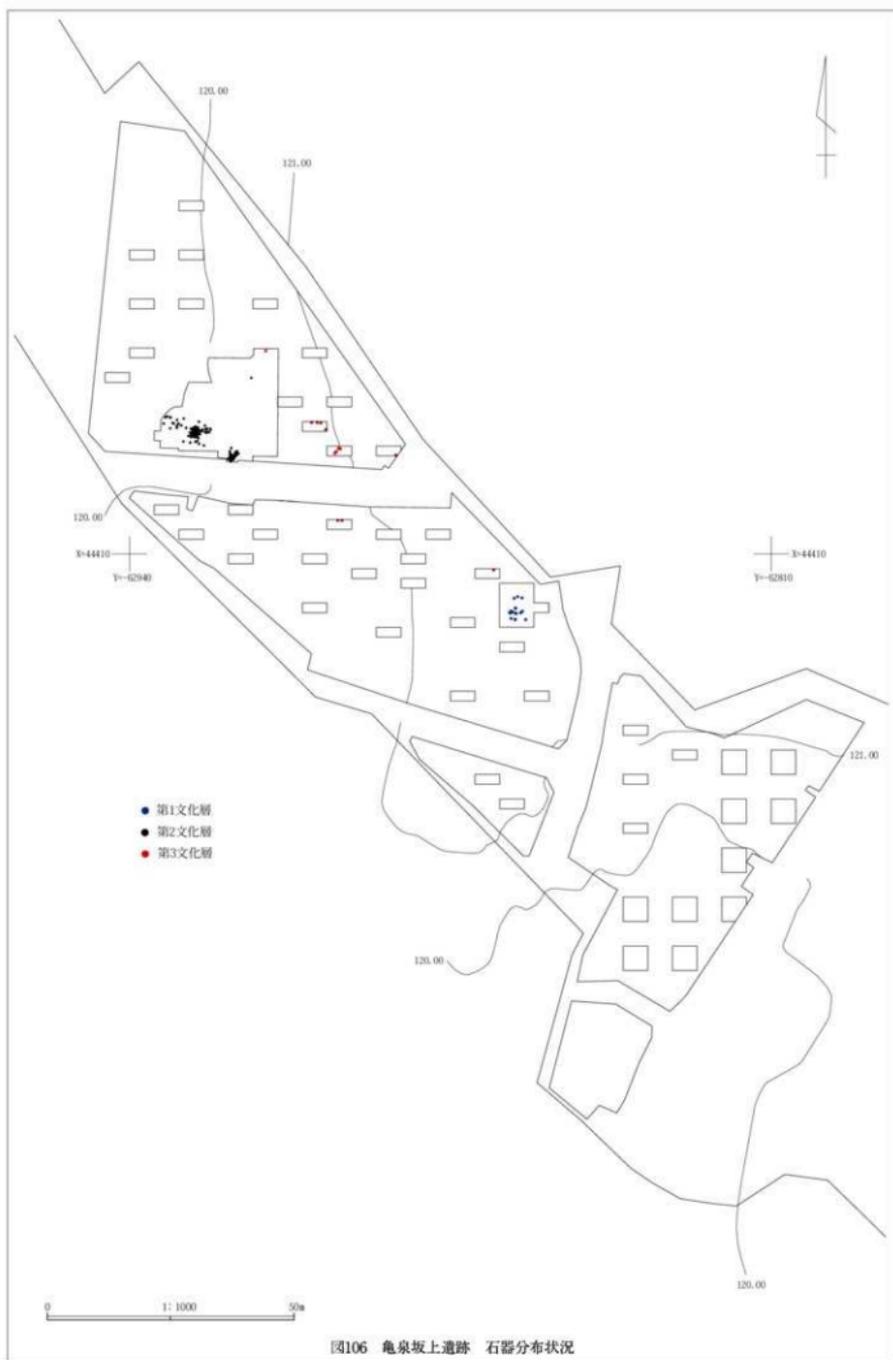


图106 亀泉坂上遺跡 石器分布状況

2. 亀泉坂上遺跡・第1文化層

I. 出土石器

第1文化層の石器群は、ローム台地のほぼ頂部の南に向かって緩やかに傾斜した地点より出土した(図106)。この文化層は18点の石器からなる。接合資料は確認できなかった。石器群はAs-Ok1を含むⅢ層に帰属すると考えられ、黒曜石製の尖頭器を1点組成する。この尖頭器は原産地分析の結果、信州和田産と想定された(第8章考察参照)。

表26 亀泉坂上遺跡
第1文化層
層別出土点数

層位	点数
Ⅱ	8
Ⅲa	10
総計	18

表27 亀泉坂上遺跡 第1文化層 器種と石材

器種	石材					粗粒輝石安山岩	総計
	黒色安山岩	黒色頁岩	珪質頁岩	黒曜石	ホルンフェルス		
尖頭器				1			1
二次加工ある剥片		2			1		3
剥片	2	5	1				8
微細剥片	1						1
礫						4	4
礫片						1	1
総計	3	7	1	1	1	5	18

(1) 各器種

尖頭器(図107-164)

1点出土。黒曜石製。素材剥片の形態は不明である。縁辺部を中心に二次加工痕が両面に認められる。器種中央に二次加工が及ばない箇所が認められ、器種両面に素材剥片段階の剥離面を大きく残している。原産地分析の結果、信州和田産と同定された(第8章考察参照)。

二次加工ある剥片(図107-156・161・165) 3点出土。No.156は黒色頁岩製。小形剥片を素材として、背面側と主要剥離面側の両方に二次加工痕が認められる。No.165は黒色頁岩製。厚手の大形縦長剥片を素材として、一側縁に集中した二次加工痕が認められる。No.161はホルンフェルス製。側縁部に散発的な二次加工痕が認められる。

礫(図107-167、図108-168・170、図109-171)

4点出土。亜円礫～円礫の形状を呈する。いずれも粗粒輝石安山岩製である。この石材は赤城火山に由来する石材であることから、遺跡の立地場所を考慮すると遺跡周辺で採取されたものと考えられる。

礫片(図109-169)

1点出土。粗粒輝石安山岩製。円礫の形状を呈する。この石材は赤城火山に由来する石材であることから、遺跡の立地場所を考慮すると遺跡周辺で採取されたものと考えられる。

II. 石器の分布

第1文化層の石器群はローム台地のほぼ頂部の南に向かって緩やかに傾斜した地点より出土した(図106)。石器分布状況(図110) 石器の出土状況を見ると、明確な集中地点をもたずに石器が散在する様子が観察される。

器種別石器の分布状況(図111) 特定の器種が特定の地点に偏在する現象は認められない。

石材別石器の分布状況(図112、図113) 黒色安山岩製、黒色頁岩製、珪質頁岩製、黒曜石製、ホルンフェルス製の石器が混在する状況が観察される。

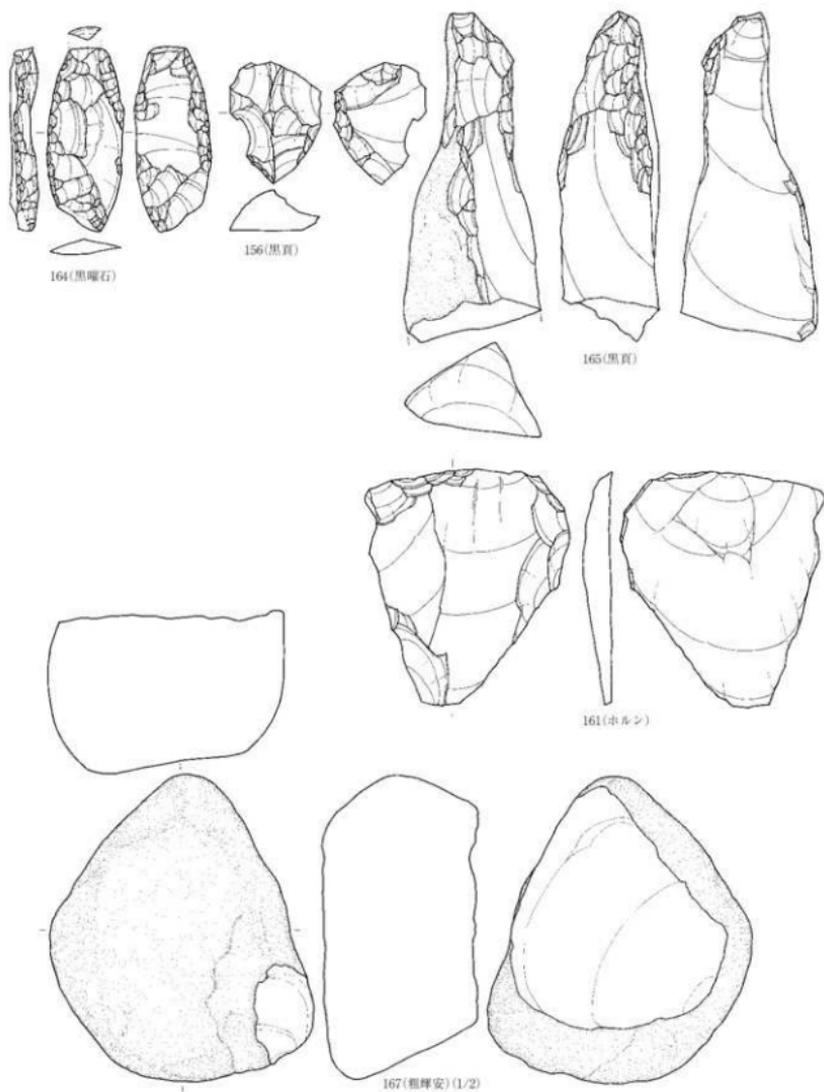


図107 亀泉坂上遺跡 第1文化層(縮尺4/5、下の礫は1/2)

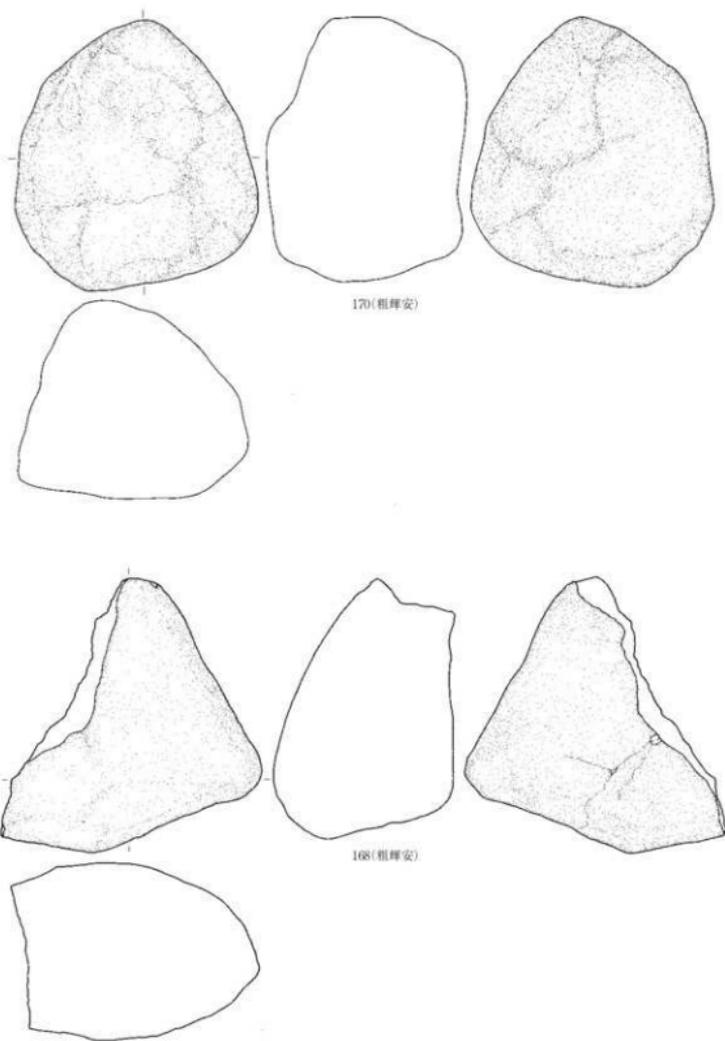


図108 亀泉坂上遺跡 第1文化層(縮尺1/2)

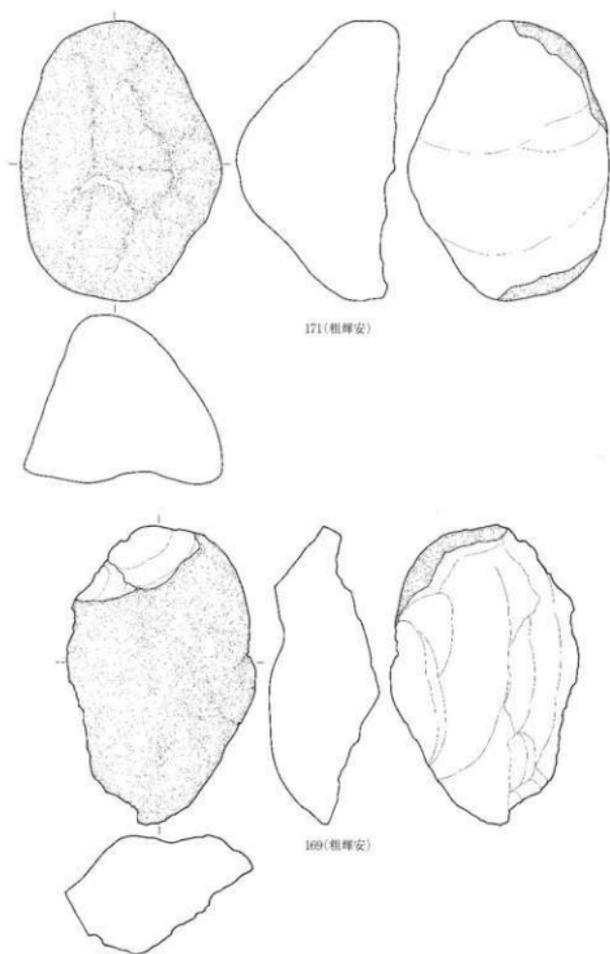
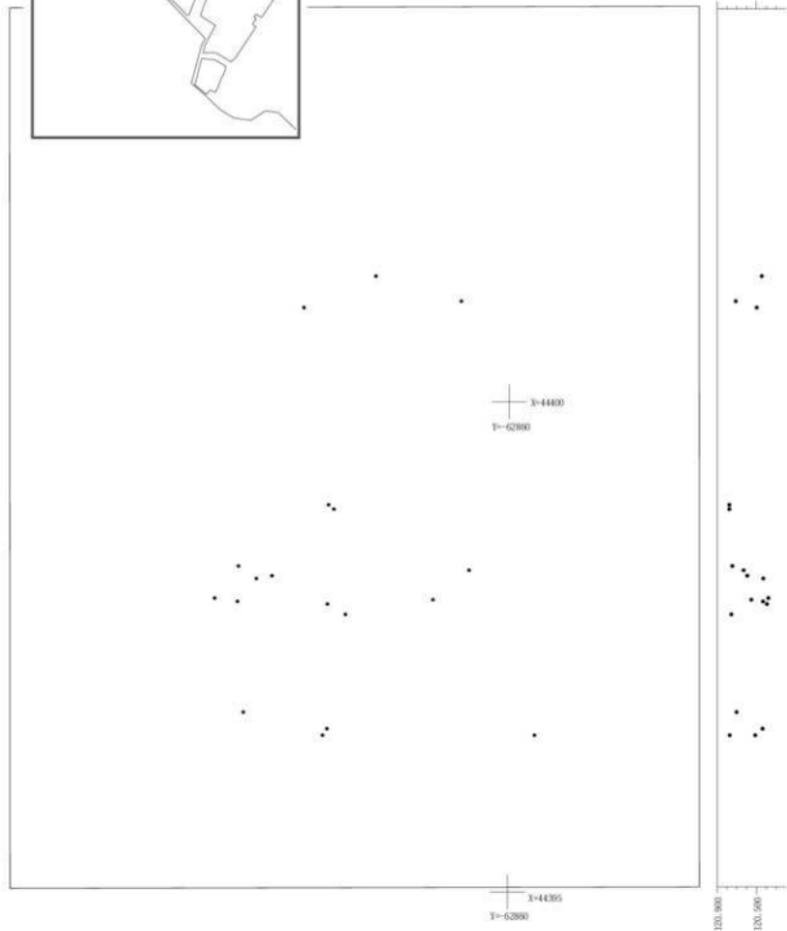
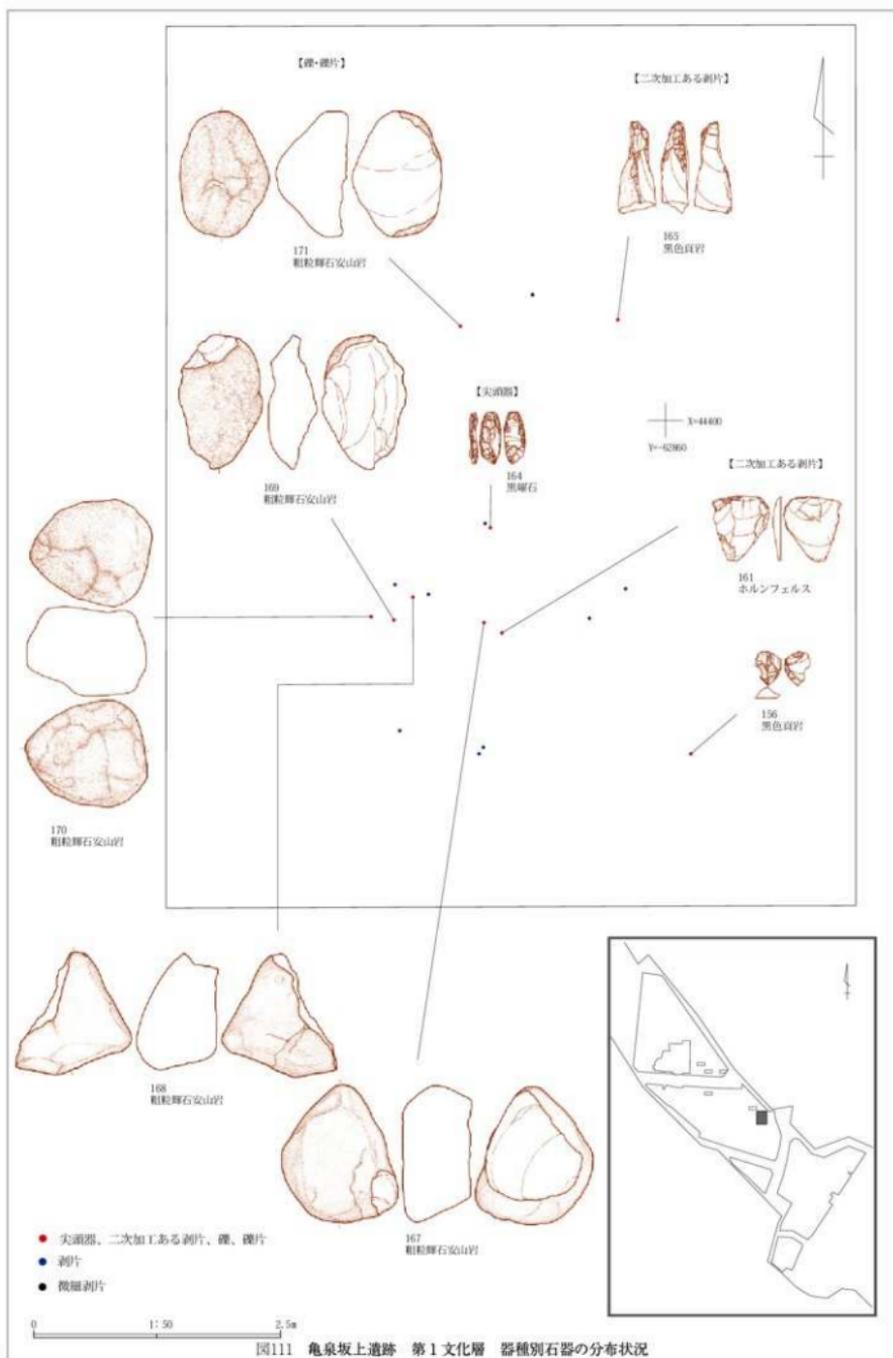


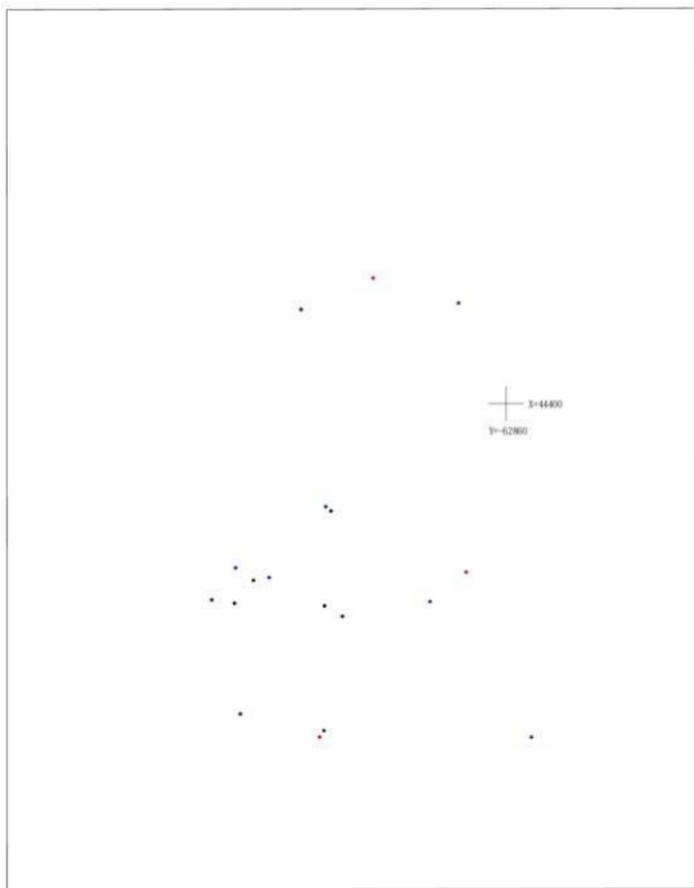
图109 龜泉坂上遺跡 第1文化層(縮尺1/2)



0 1:50 2.5m

图110 龟泉坂上遺跡 第1文化層 石器分布状況



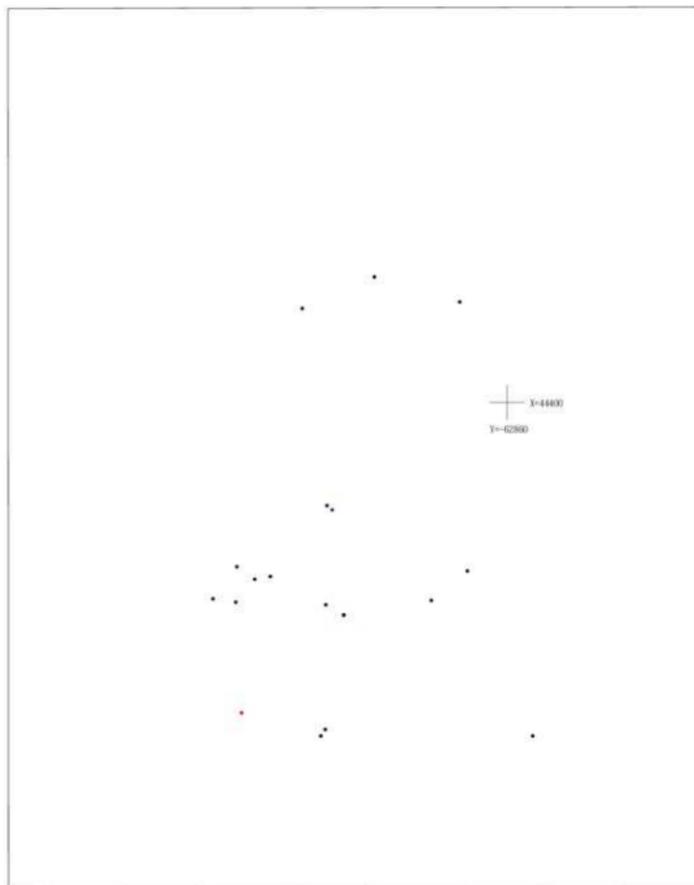


- 黒色安山岩
- 黒色頁岩
- その他

0 1:50 2.5m



図112 亀塚板上遺跡 第1文化層 石材別石器の分布状況(1)



- 珪質頁岩
- 黒曜石
- ホルンフェルス
- その他

0 1:50 2.5m



図113 亀泉坂上遺跡 第1文化層 石材別石器の分布状況(2)

3. 亀泉坂上遺跡・第2文化層

I. 出土石器

赤城山南麓地域においては、いくつもの低地域がほぼ南北に樹枝状に延びる。第2文化層の石器群は、西に向かって緩やかに傾斜した地点より出土した(図106)。第2文化層は、234点の石器からなる。石器はAT極大層であるV層より最も多く出土しており、AT降下前後に生活面を設定することができる。黒曜石を使用石材の主体として、黒曜石製の石刃を数多く組成する。黒曜石製石器の接合資料は16点確認されており、原産地分析の結果、これらの接合資料は全て信州和田産と判定された(第8章考察参照)。また、この石器群には、受熱によると考えられる赤化礫の集中分布域が1箇所確認された。

表28 亀泉坂上遺跡
第2文化層
層位別出土点数

層位	点数
IVa・b	63
V	140
VI	31
総計	234

表29 亀泉坂上遺跡 第2文化層 器種と石材

器種	石材			総計
	黒色頁岩	黒曜石	粗粒輝石安山岩	
二次加工ある剥片		4		4
微細剥離痕ある剥片		3		3
石刃		11		11
剥片	1	75		76
微細剥片		81		81
石核		1		1
礫			46	46
礫片			12	12
総計	1	175	58	234

(1) 各器種

二次加工ある剥片(図114-1・71・130・211) 4点出土。全て黒曜石製。No.211は、石刃または縦長剥片を素材として一個縁に集中した二次加工が認められる。打面付近の主要剥離面側にも集中した二次加工が認められる。ナイフ形石器の基部である可能性も考えられる。No.1は、石刃または縦長剥片を素材として先端部の主要剥離面側に二次加工が認められる。接合1に含まれる資料である。No.130は、石刃または縦長剥片を素材として散発的な二次加工が認められる。接合1に含まれる資料である。No.71は小形剥片を素材として、打面付近の主要剥離面側に散発的な二次加工が認められる。

微細剥離痕ある剥片(図114-83・2+145・70+111) 3点出土。全て黒曜石製。No.70+111は縦長剥片を素材として、側縁の一部の背面側に微細剥離痕が認められる。接合1に含まれる資料である。No.2+145は縦長剥片を素材として、背面側先行剥離痕の後縁の一部に微細剥離痕が認められる。これは、特に微細剥離痕が集中することから稜線上に形成された微細剥離痕と判断した。接合1に含まれる資料である。No.83は石刃または縦長剥片を素材として、折断面に微細剥離痕が形成される。接合1に含まれる資料である。

石核(図114-150) 1点出土。黒曜石製の亜円礫を利用している。接合4に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図137)、打面再生剥片と考えられる資料も接合しており(図137-19・140)、石刃技法に関する石核と判断される。

石刃(図115) 11点出土。全て黒曜石製。No.75+147は接合1に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図133~図135)、準大の亜円礫を利用している。180度の打面転移が認められ、打面再生・打面調整はわずかに観察される。この石刃は自然面を打面としており、先行剥離痕から180度方向の打面転移がうかがわれる。No.78+82+95、No.9、No.65は、いずれも接合1に含まれる資料である。No.55は接合4に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図137)、亜円礫を利用している。打面再生と打面調整が認められ、単設打面より石刃を剥離している。No.201は接合5に含まれる資料である。接合資料での展開をみる

と(図137)、円礫を利用している。石刃技法に関する調整技術の存在については不明な点が多いが、石刃に残される先行剥離痕をみる限りでは、単設打面より石刃を剥離した様子がうかがわれる。No.48+118+129は、この資料だけで接合6を構成する資料である。自然面の様子から重円礫を利用している。打面調整痕が認められ、先行剥離痕から単設打面より石刃を剥離した様子がうかがわれる。No.26、No.77は、この2点で接合7を構成する資料である。打面調整痕が認められ、先行剥離痕から単設打面より石刃を剥離した様子がうかがわれる。No.60は接合8に含まれる資料である。接合資料での展開をみると(図136)、円礫を利用している。石刃技法に関する調整技術の存在については不明な点が多いが、石刃に残される先行剥離痕をみる限りでは、単設打面より石刃を剥離した様子がうかがわれる。No.12+14+119は、この資料だけで接合12を構成する資料である。打面調整痕が認められ、先行剥離痕をみる限りでは、単設打面より石刃を剥離した様子がうかがわれる。

礫・礫片(図116～132) 礫46点、礫片12点出土。全て粗粒輝石安山岩製。粗粒輝石安山岩は赤城火山を起源とする石材であることから、遺跡の立地を考慮すると、遺跡周辺で採取されたものと考えられる。形態は亜角礫～重円礫であり、受熱により赤化した資料が多数存在する。本石器群では、礫の集中地点が1カ所検出されており、これらの礫のほとんどはその集中地点からの出土である(Ⅱ・石器の分布参照)。

上武道路遺跡群の富田下大日遺跡第1文化層では槍先形尖頭器を伴う石器群が検出されたが、そこではやはり礫の集中域が1カ所検出されている。その礫を観察すると、自然面に相当する部分が強く赤化し、割れた部分にはそれよりも弱い赤化が認められ、赤化現象について段階差が認められた。このような赤化現象の段階差は、受熱した時間差によるものと考えられる。つまり、基本的には、礫は自然面の状態で受熱した状況にあり、その状態で相対的に長時間にわたり受熱し、部分的に割れた箇所が短い時間受熱したものと考えられた((財)群埋文2008)。

本石器群で確認された礫に関しては、前述するような赤化の段階差は2つの資料で観察された(図126・194・218)。やはり、自然面に相当する部分が強く赤化し、割れた部分には弱い赤化が認められた。

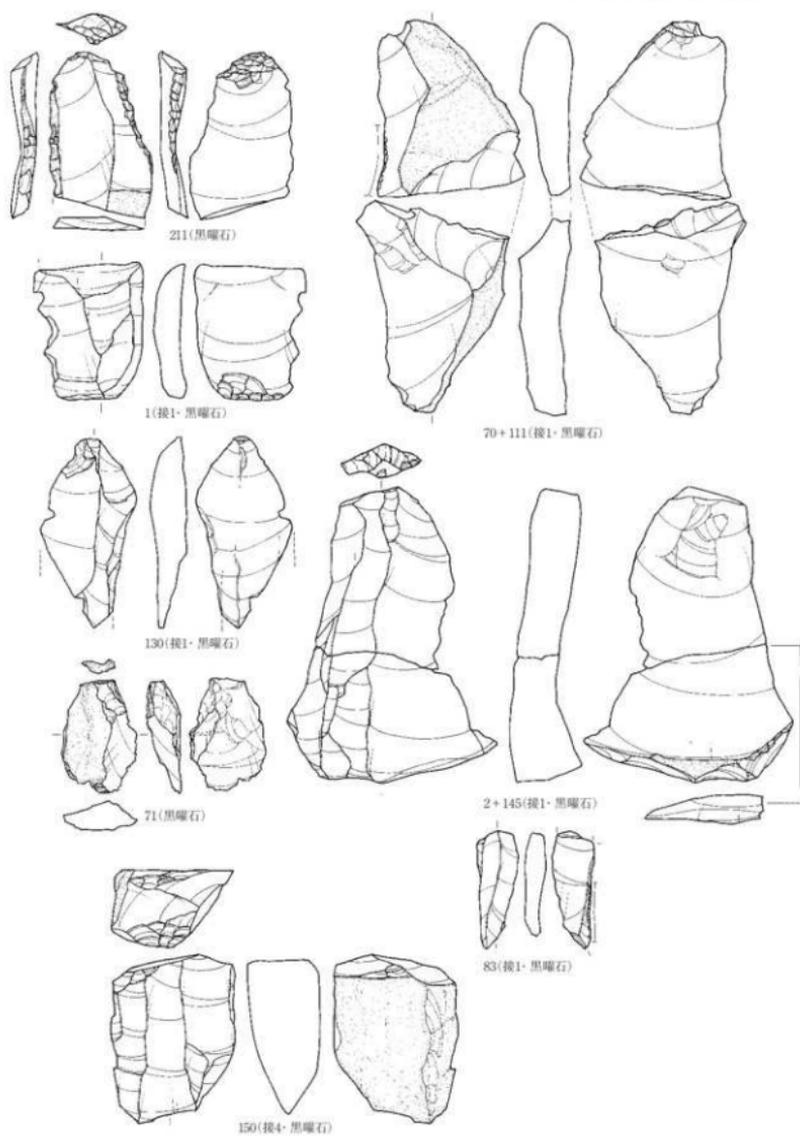


図114 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺4/5)

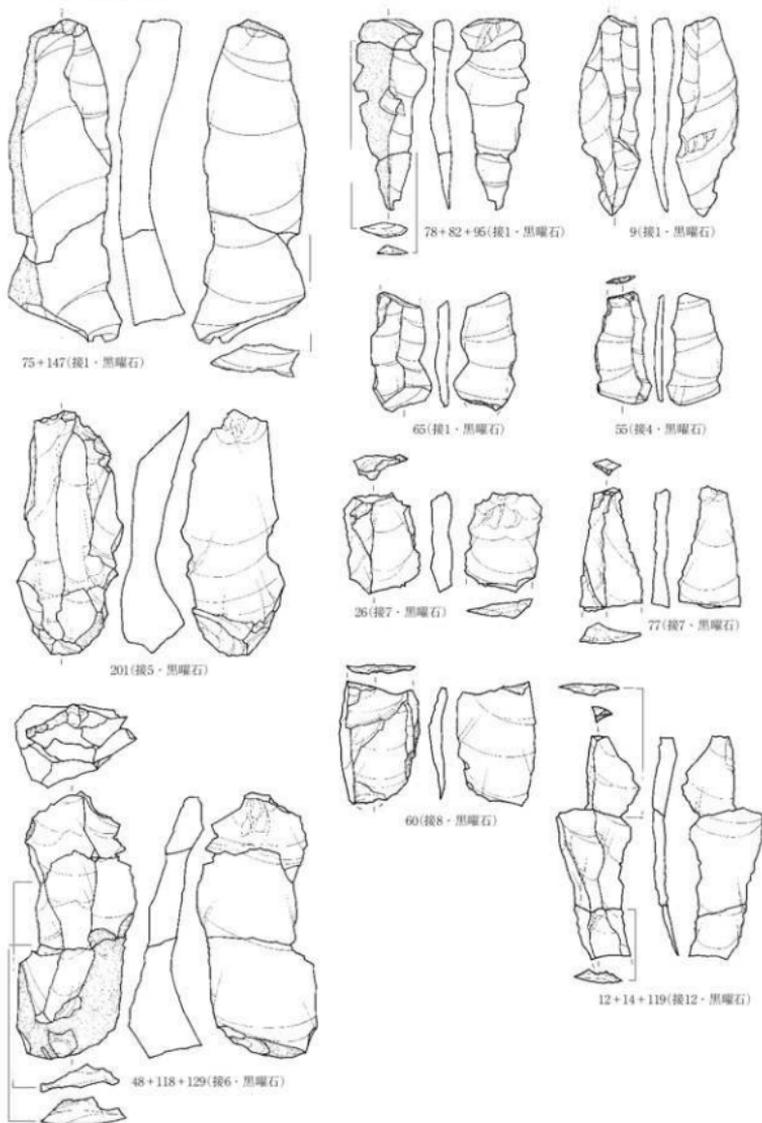


図115 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺4/5)

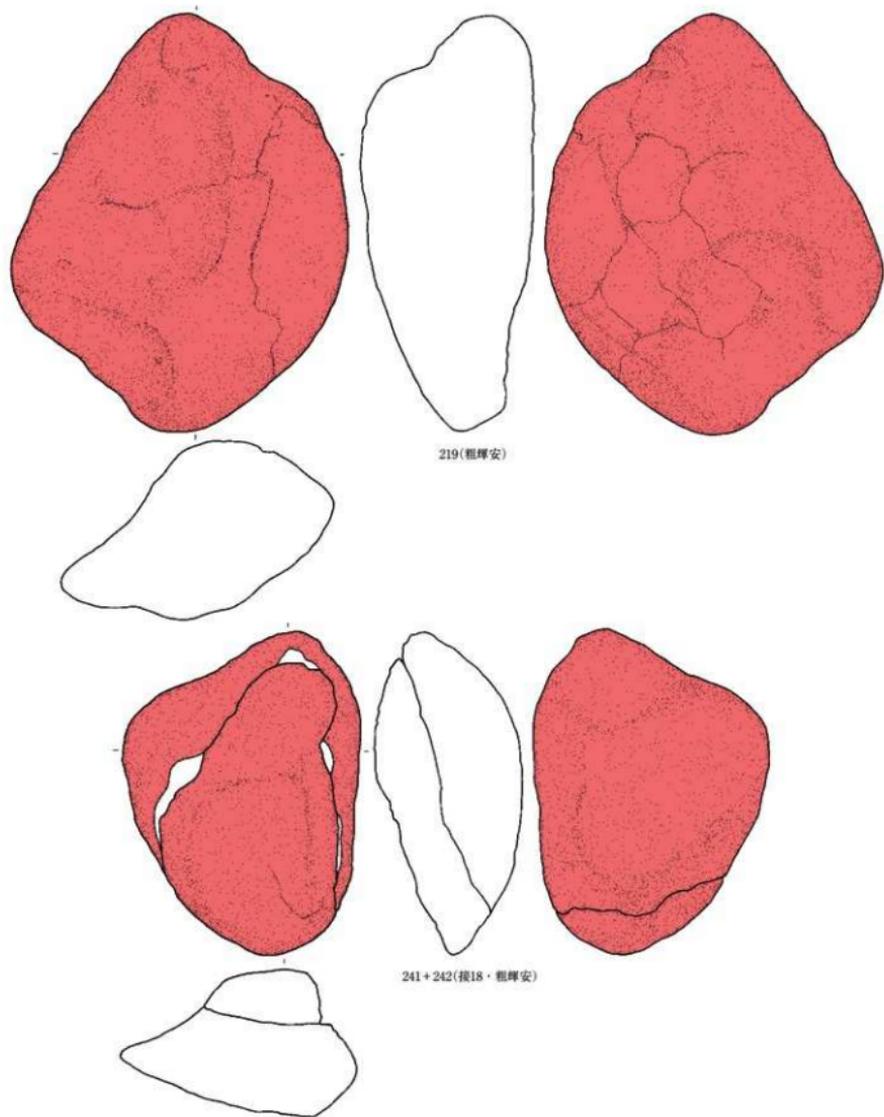


图116 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

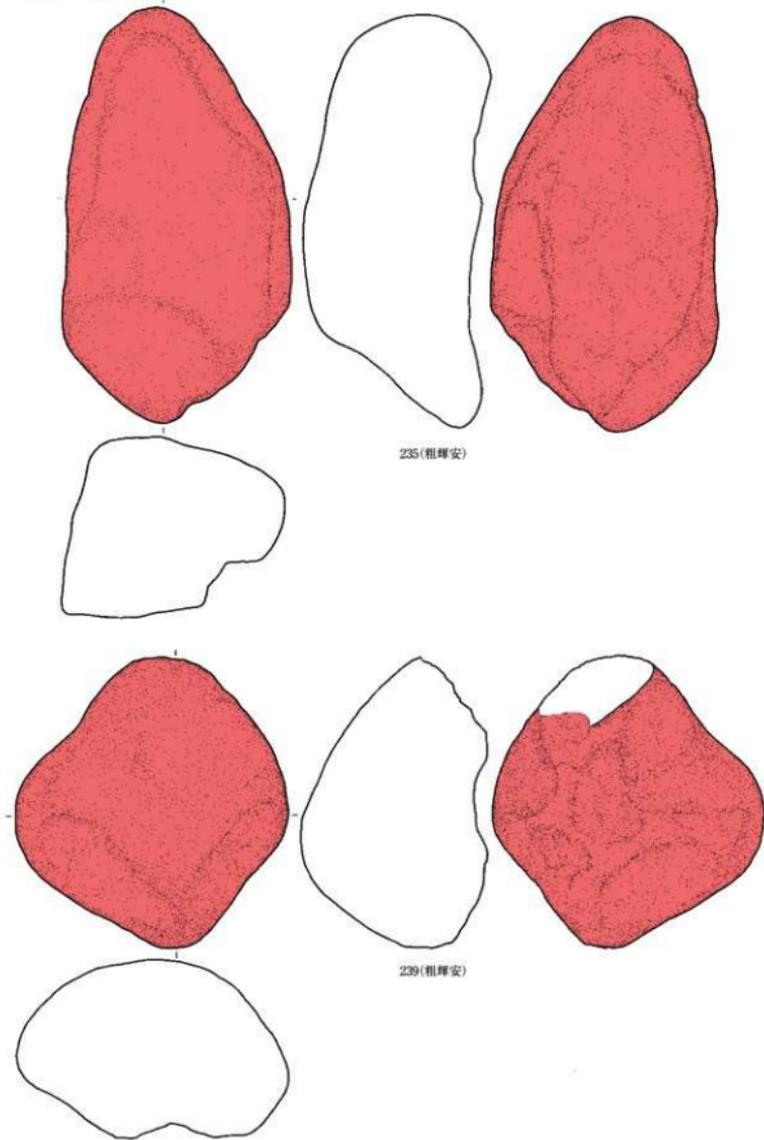


图117 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

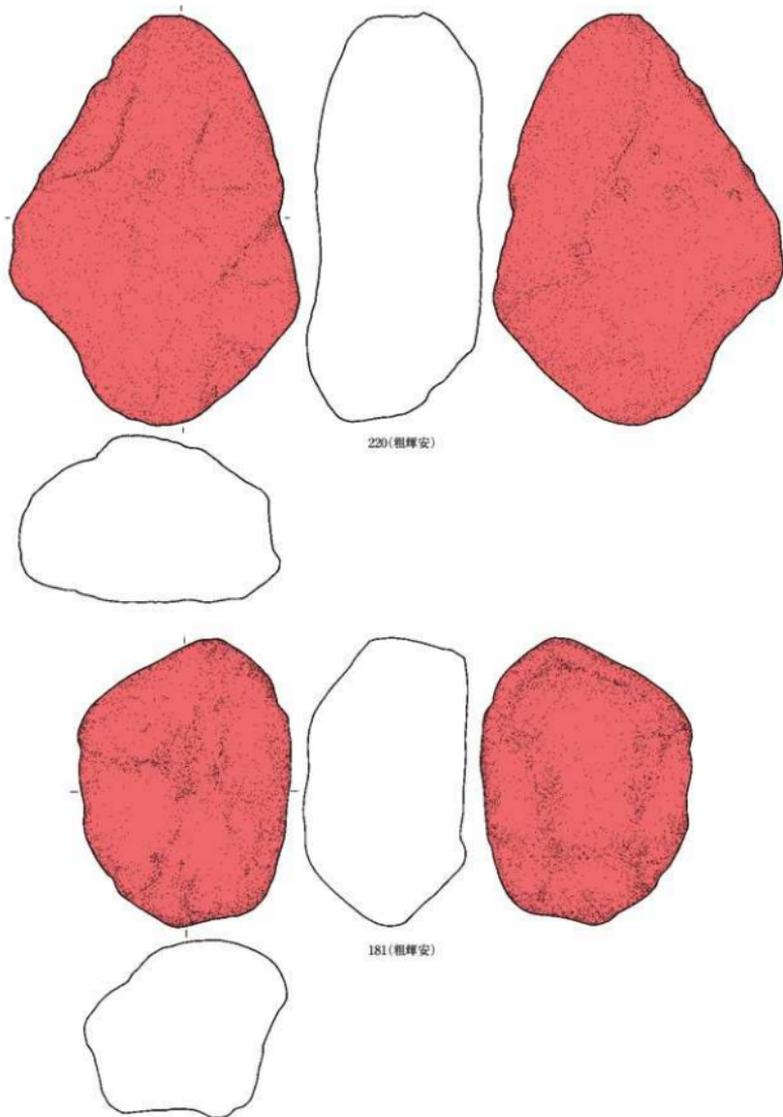


图118 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

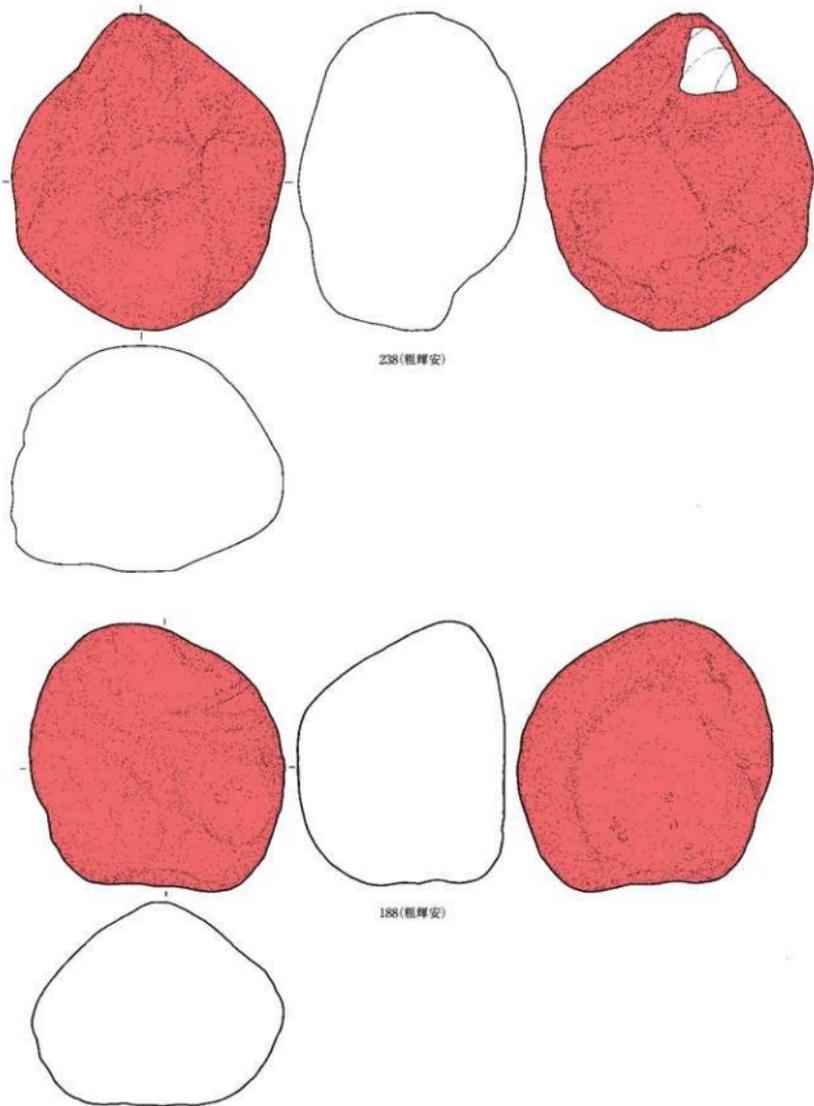


図119 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

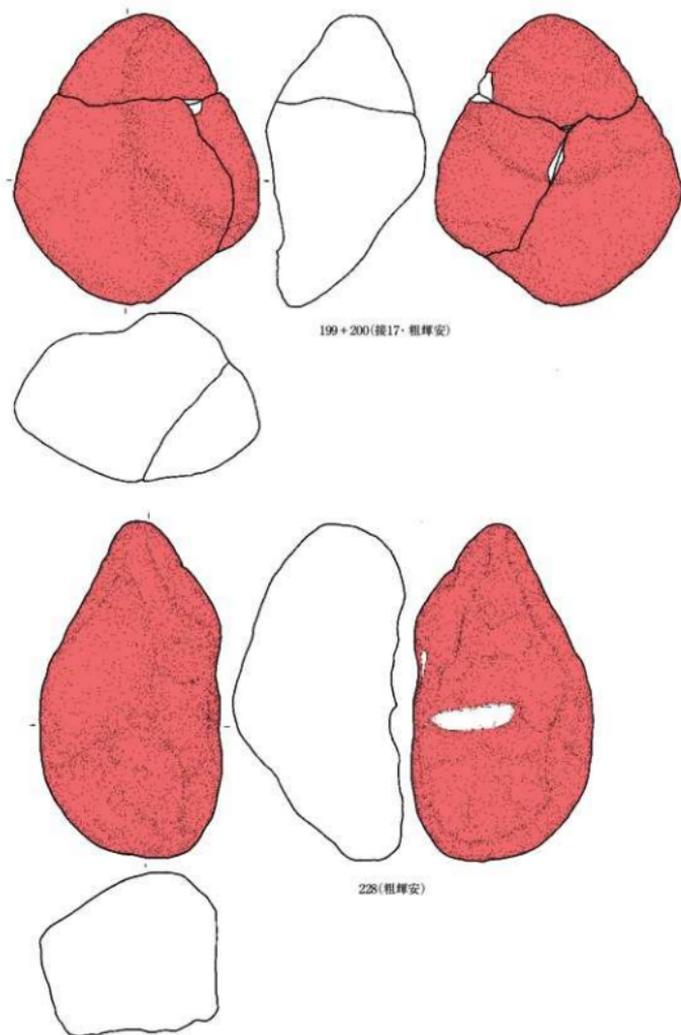


图120 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

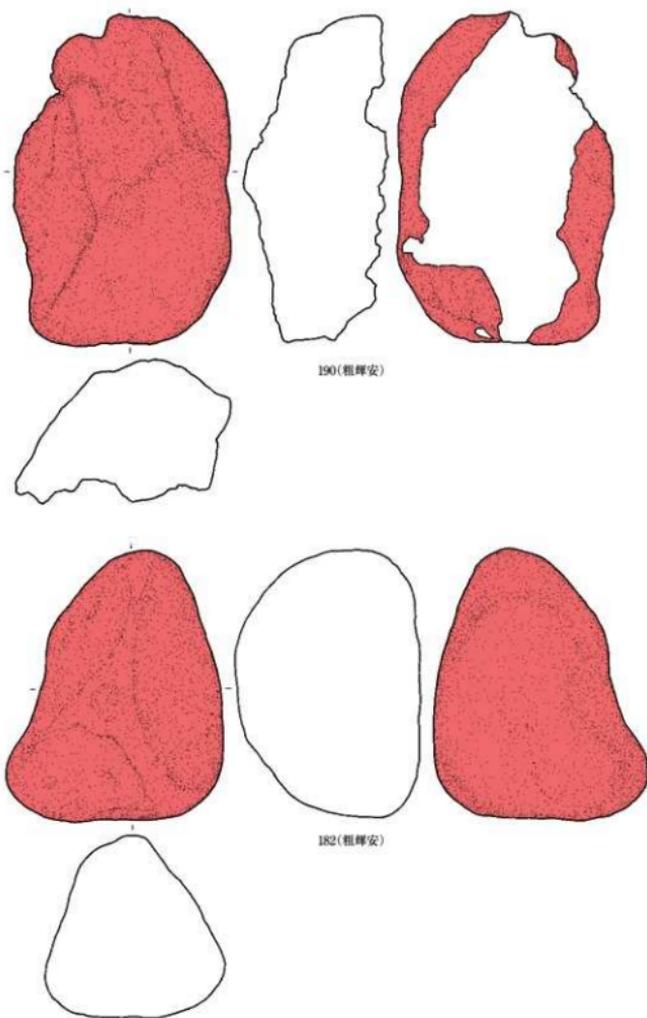


図121 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

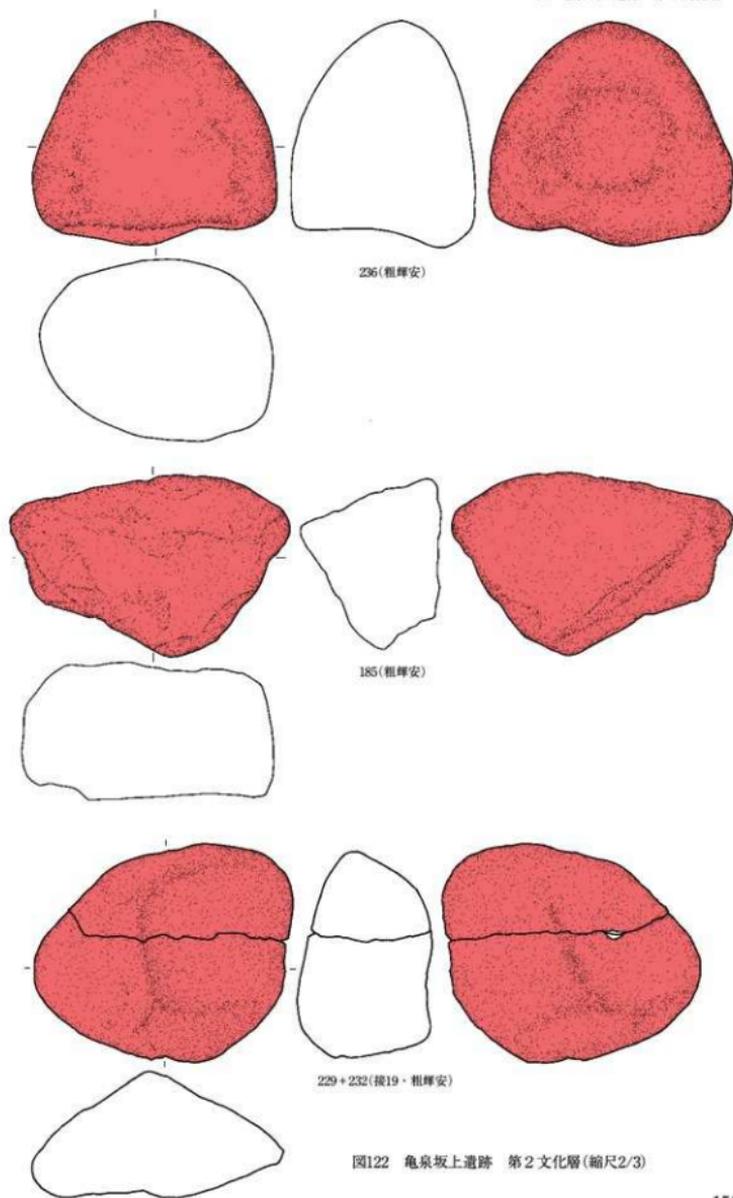


图122 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

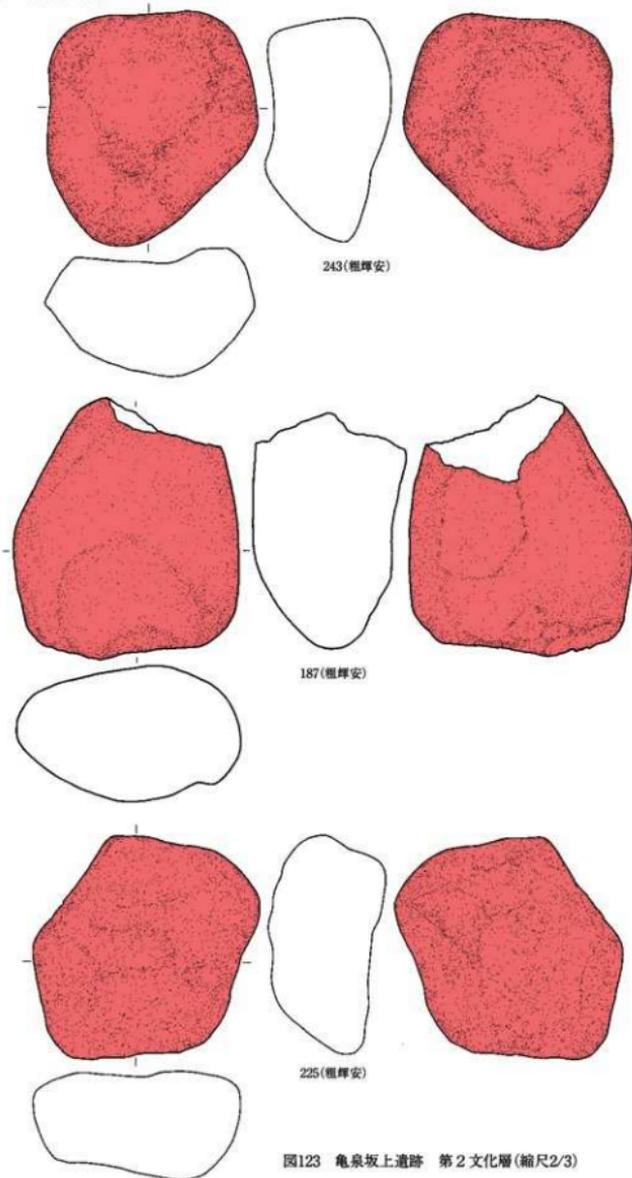


图123 龜泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

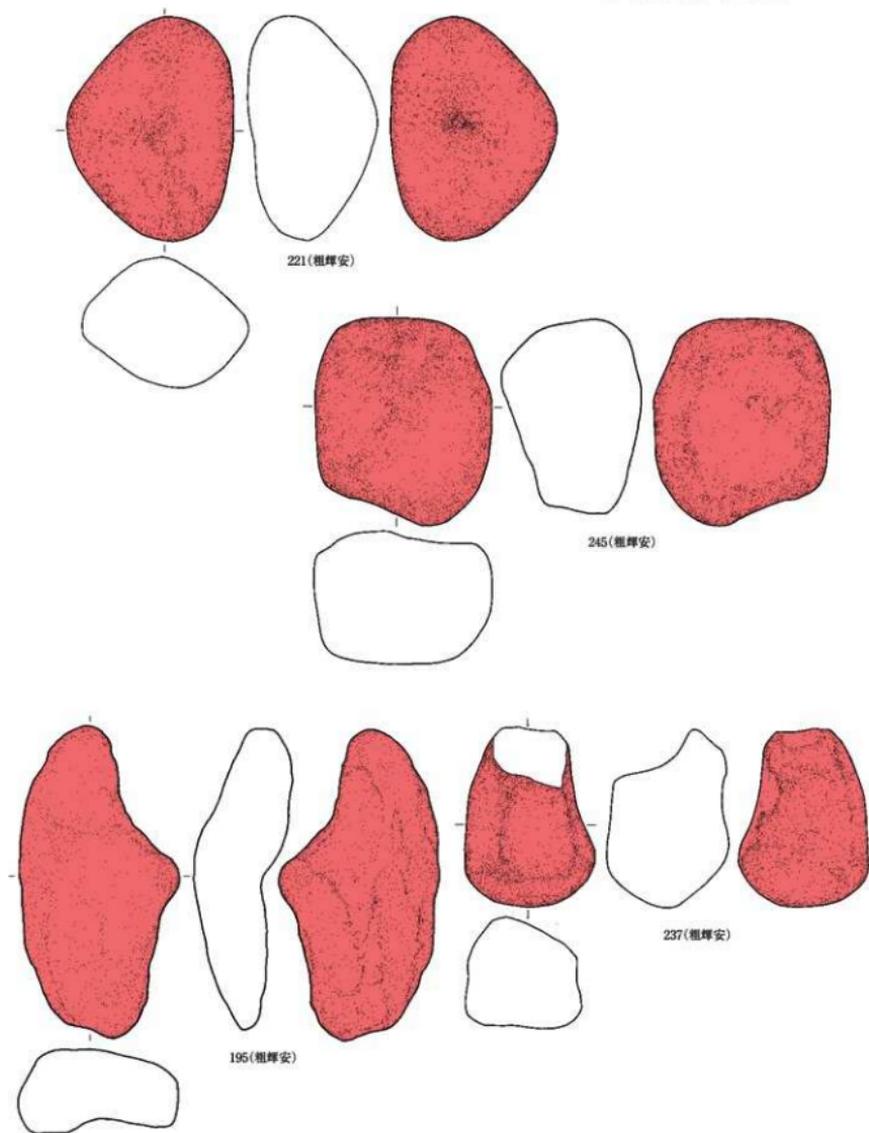


图124 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

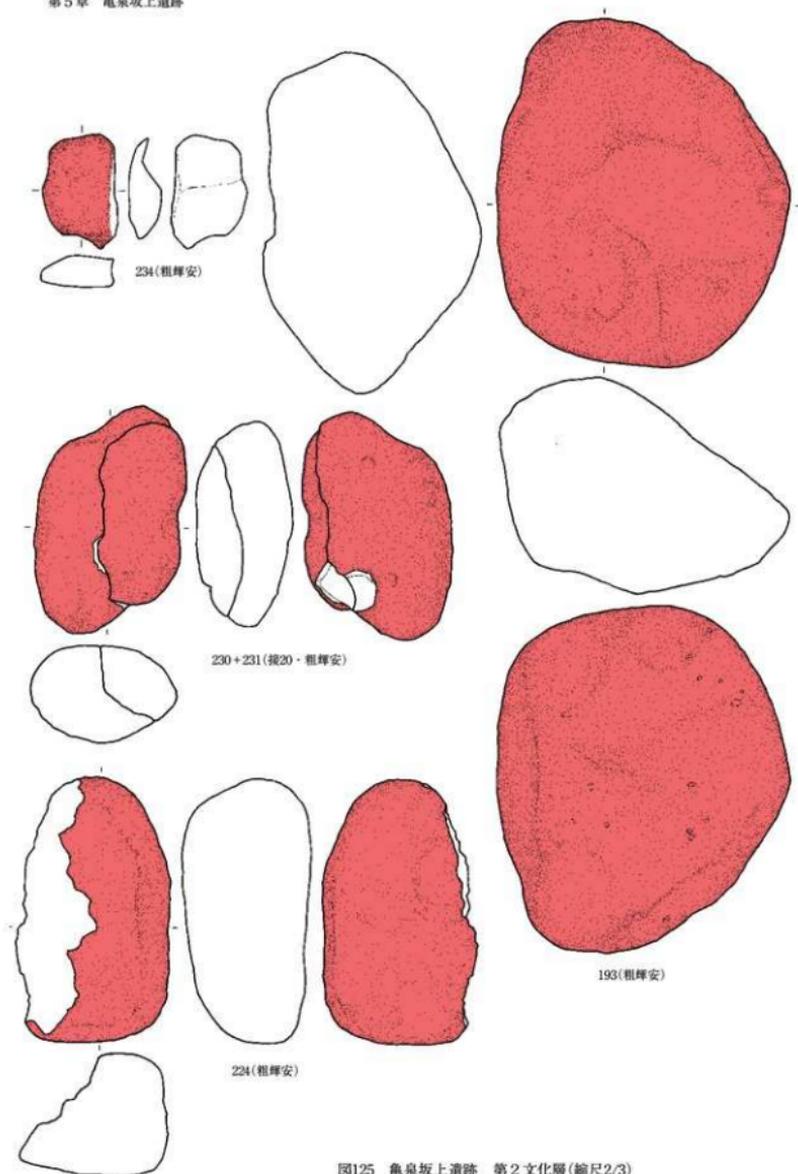


図125 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

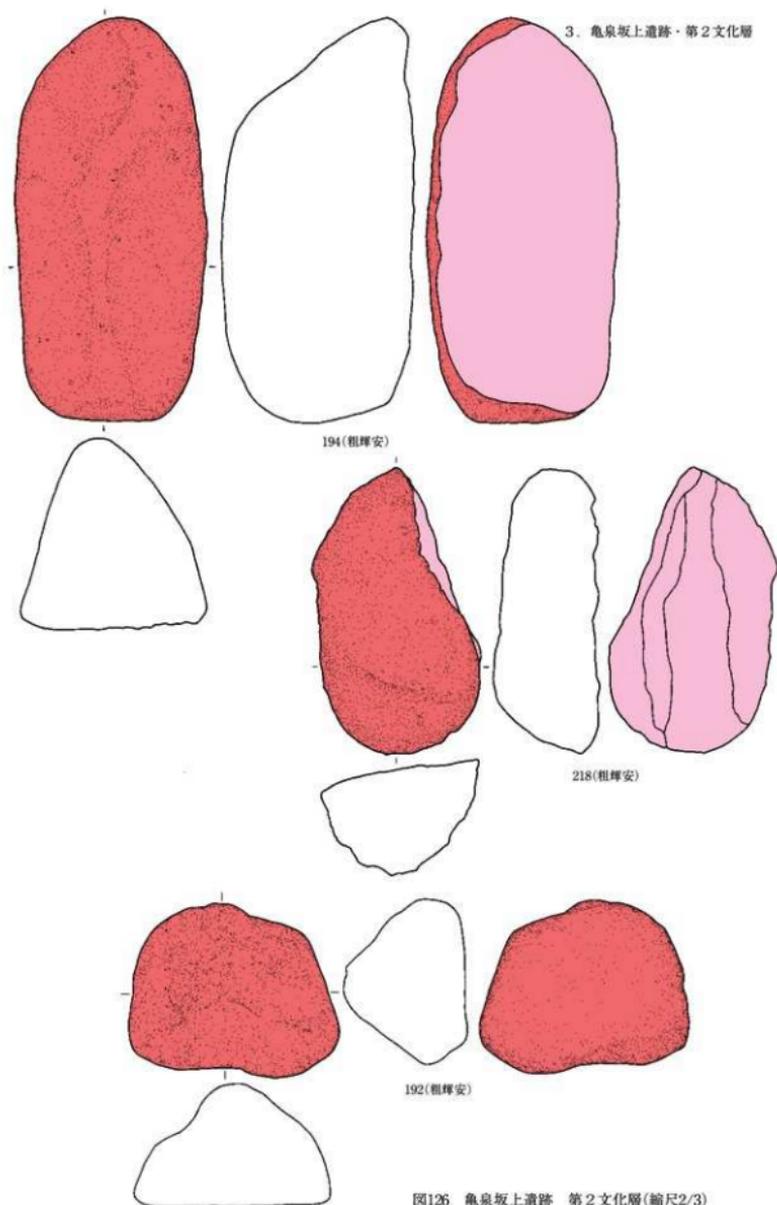
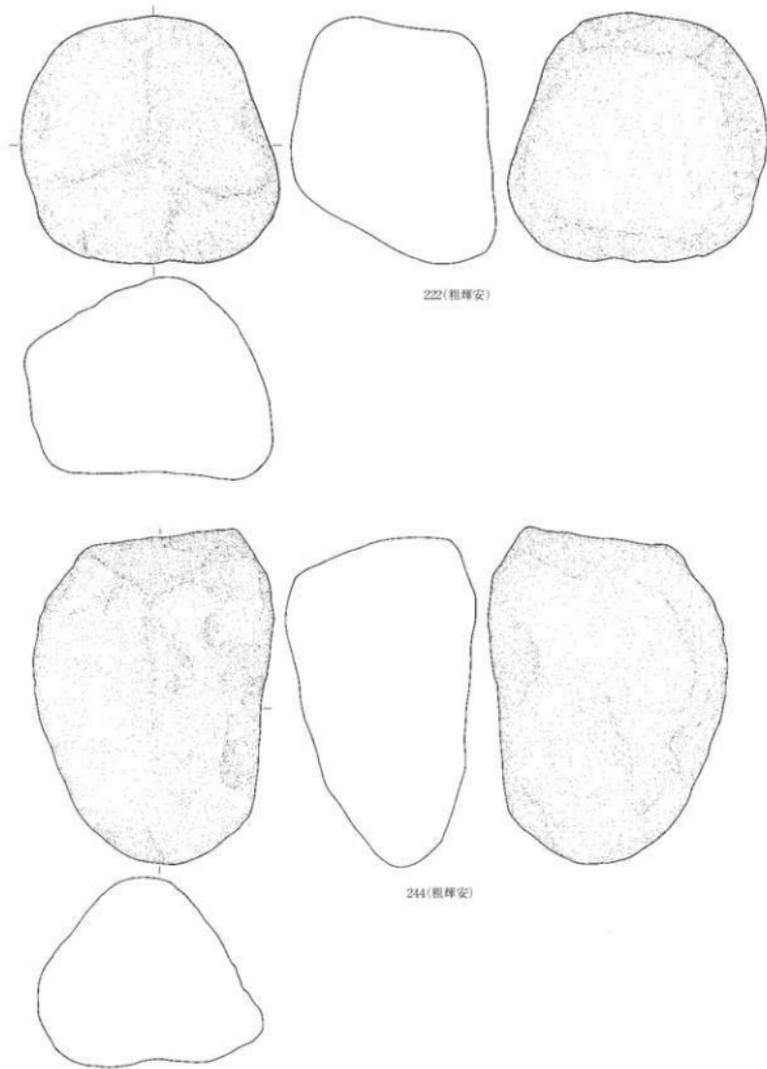


图126 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)



22(粗輝安)

24(粗輝安)

图127 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

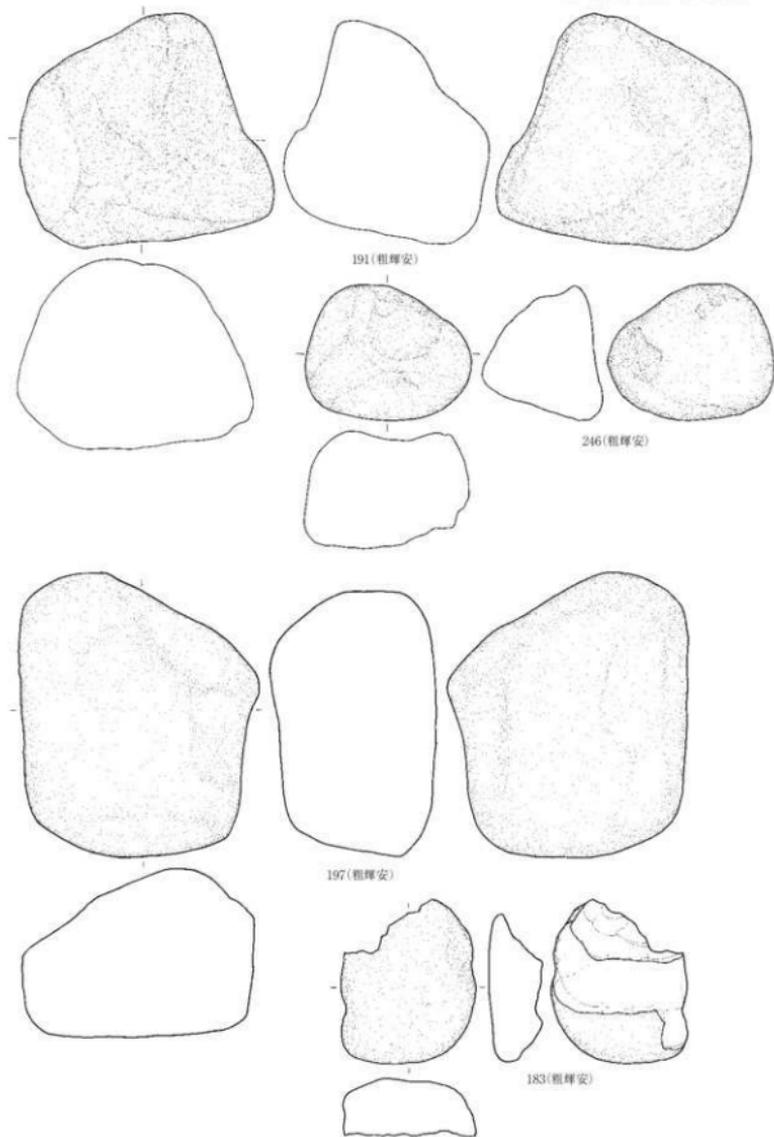


图128 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

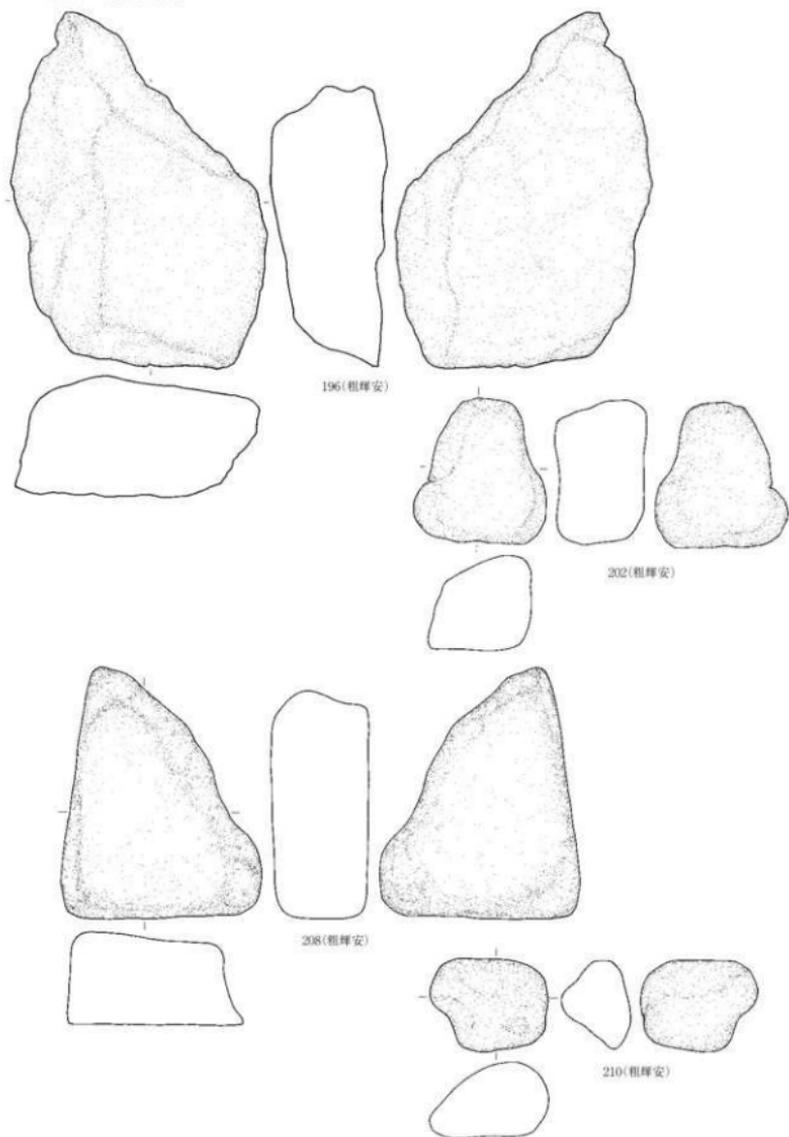


图129 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

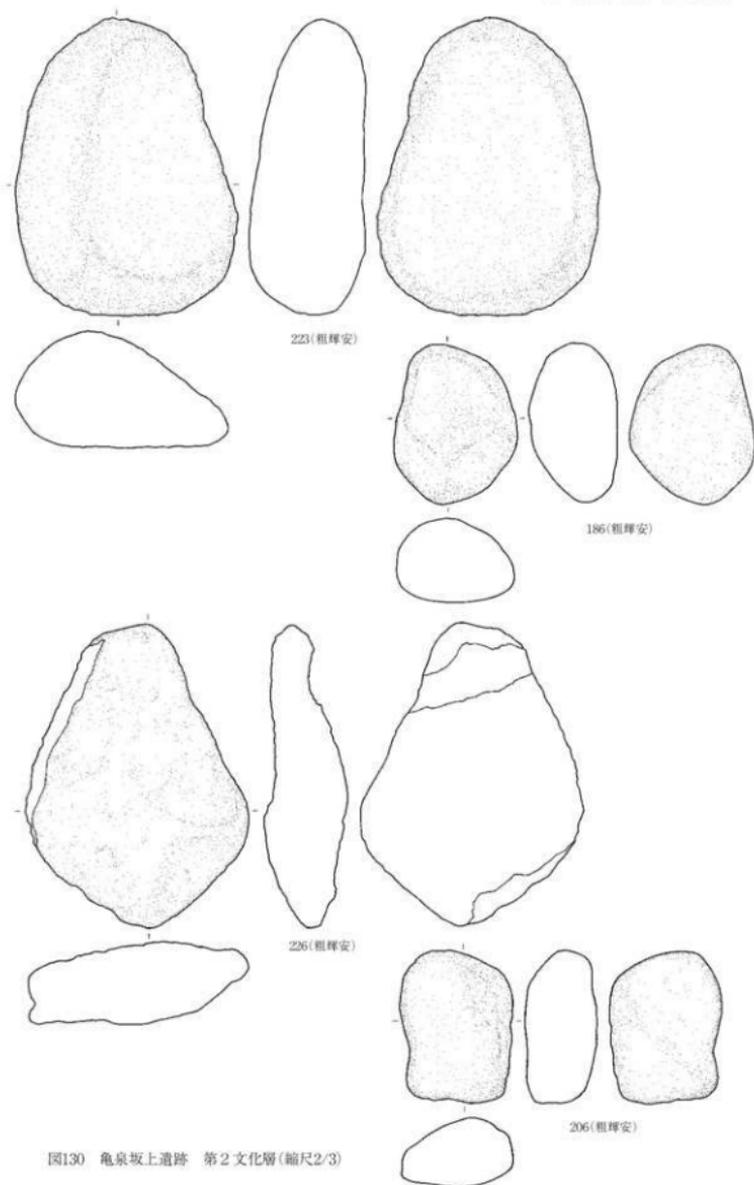


図130 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

第5章 亀泉坂上遺跡

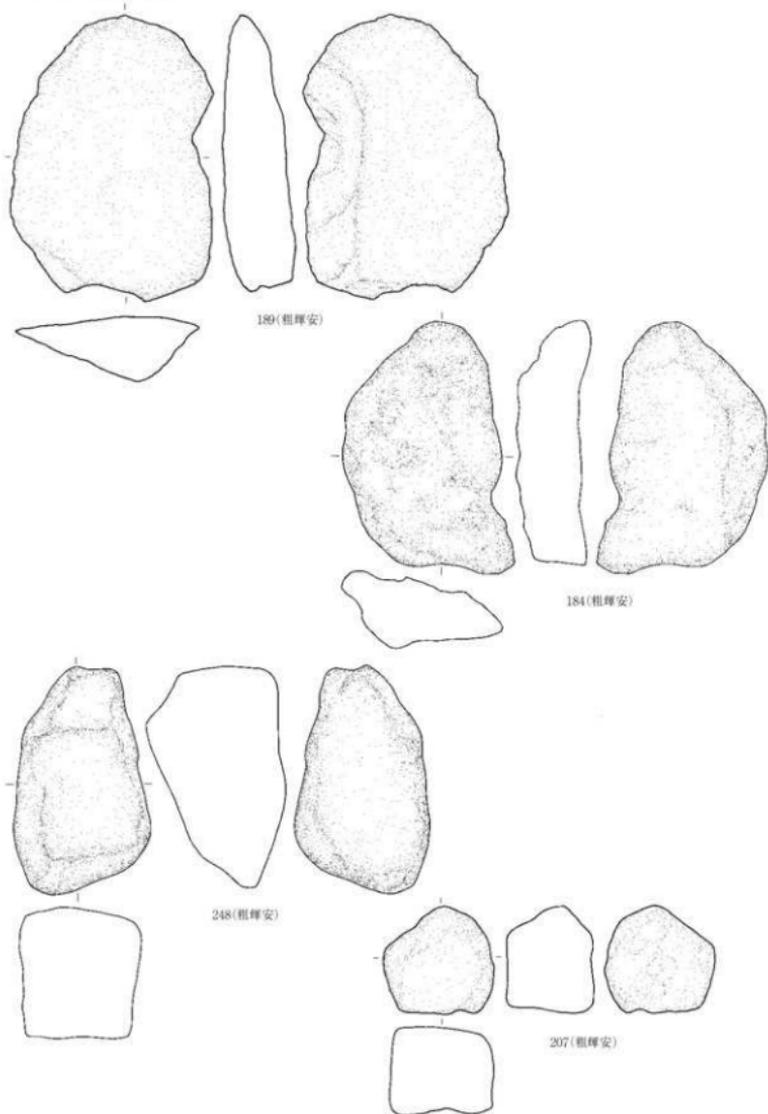


図131 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

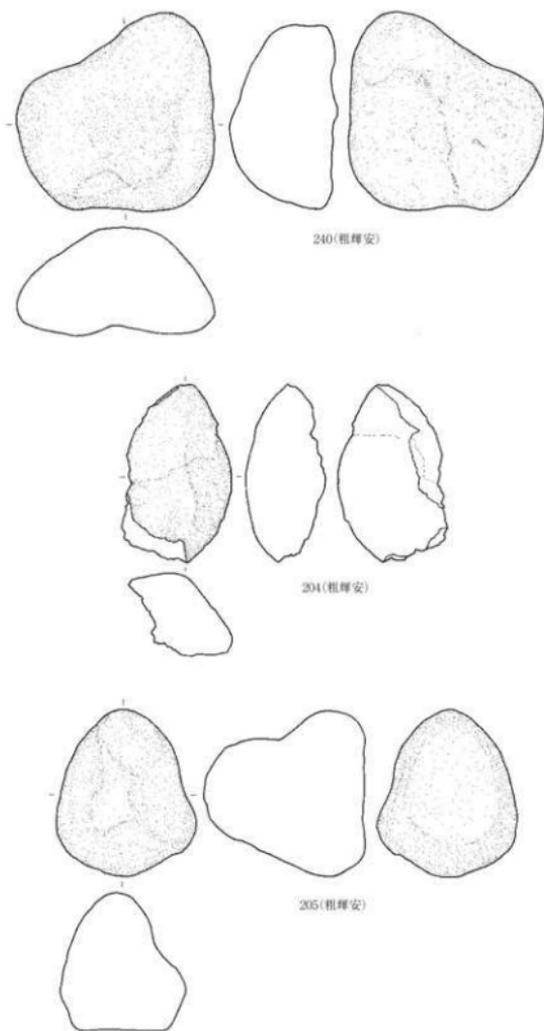


图132 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

(2) 接合資料

接合資料は21個体認められた。接合資料に含まれる石器は、合計で109点である。本石器群は黒曜石製石器が主体であり、視覚的特徴から母岩分類は不可能と判断した。

接合1 (図133~図135) 黒曜石製。二次加工ある剥片2点、微細剥離痕ある剥片3点、石刃4点、剥片29点、微細剥片11点の合計49点の資料が接合。準大の亜円礫を利用している。石刃技法に関する接合資料と評価できる。両設打面の石核より石刃を剥離する様子がうかがわれる。わずかに打面再生と打面調整の痕跡が認められる。石刃石核は残されていない。この接合資料は原産地分析の結果、信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

接合2 (図135) 黒曜石製。剥片4点が接合。準大よりやや小さい亜円礫を利用している。自然面を除去するように90度の打面転移によって剥片を剥離している。石核は残されていない。原産地分析の結果、信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

接合3 (図136) 黒曜石製。剥片5点と微細剥片3点が接合。大きさは不明であるが円礫を利用している。平坦な打面を作成して、打面を固定することで縦長剥片を連続剥離する様子が観察される。石刃技法に類する資料と評価できる。原産地分析の結果、信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

接合4 (図137) 黒曜石製。石刃1点、剥片1点、微細剥片2点、石核1点の合計5点の資料が接合。大きさは不明であるが亜円礫を利用している。打面を固定し小形石刃を連続剥離する様子が観察できる。図137-19・140は打面再生剥片と考えられ、打面再生がおこなわれたといえる。また、No.19の背面には、打面調整痕とも判断できる剥離痕が認められる。No.150の石核の打面部にも打面調整の痕跡が観察される。この接合資料は、原産地分析の結果、信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

接合5 (図137) 黒曜石製。石刃1点と剥片1点が接合。大きさは不明であるが円礫を利用している。No.203は剥片に分類しているが、器種中央に折断が認められ、本来は石刃に分類できる資料である可能性がある。これら2点の資料の背面にみられる先行剥離痕からは、単設打面の石刃石核より石刃を生産する工程がうかがわれる。原産地分析の結果、信州和田産の可能性が想定されるという結果を得た(第8章考察参照)。

接合6 (図137) 黒曜石製。折断面の接合によって、石刃1点が復元された資料である。大きさは不明で

表30 亀泉坂上遺跡 第2文化層 接合資料の器種組成

接合資料		器種		二次加工ある剥片	微細剥離痕ある剥片	石刃	剥片	微細剥片	石核	礫	總計			
No	石材	形状	大きさ											
1	黒曜石	準円礫	準大	2		3	4	29	11		49			
2	黒曜石	準円礫	準大よりやや小				4				4			
3	黒曜石	円礫	-				5	3			8			
4	黒曜石	準円礫	-			1	1	2	1		5			
5	黒曜石	円礫	-			1	1				2			
6	黒曜石	準円礫	-			1	2				3			
7	黒曜石	-	-			2					2			
8	黒曜石	円礫	-			1	1				2			
9	黒曜石	円礫	-				3	1			4			
10	黒曜石	円礫	-				2	4			6			
11	黒曜石	-	-				1	1			2			
12	黒曜石	-	-			1	1				3			
13	黒曜石	-	-					2			2			
14	黒曜石	-	-					2			2			
15	黒曜石	-	-					2			2			
16	黒曜石	-	-					2			2			
17	粗粒輝石安山岩	円礫	準大							1	1	2		
18	粗粒輝石安山岩	円礫	準大							1	1	2		
19	粗粒輝石安山岩	円礫	準大							1	1	2		
20	粗粒輝石安山岩	円礫	準大よりやや小							1	1	2		
21	粗粒輝石安山岩	準円礫	-								3	3		
総計						2	3	11	50	31	1	4	7	109

あるが凹円礫を利用している。打面調整痕が観察され、背面の先行剥離痕からは単設打面の石核より石刃を剥離する様子が見られる。原産地分析の結果、信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

接合7(図136) 黒曜石製。石刃2点が接合。原石の大きさ形状ともに不明である。2点の石刃には、いずれも打面調整の痕跡が認められる。また、背面の先行剥離痕からは、単設打面の石核より石刃を剥離する工程が見られる。原産地分析の結果、信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

接合8(図136) 黒曜石製。石刃1点と剥片1点が接合。大きさは不明であるが凹円礫を利用している。背面の先行剥離痕からは単設打面の石核より石刃を剥離する様子が見られる。原産地分析の結果、信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

接合9(図137) 黒曜石製。剥片3点と微細剥片1点が接合。大きさは不明であるが凹円礫を利用している。原産地分析結果、信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

接合10(図138) 黒曜石製。剥片2点と微細剥片4点が接合。大きさは不明であるが凹円礫を利用している。原産地分析の結果、信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

接合11(図138) 黒曜石製。剥片1点と微細剥片1点が接合。原石の大きさ形状ともに不明である。原産地分析の結果、信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

接合12(図138) 黒曜石製。折断面の接合によって、石刃1点が復元された資料である。原石の大きさ形状ともに不明である。打面調整痕が観察され、背面の先行剥離痕からは単設打面の石核から石刃を剥離する様子が見られる。原産地分析の結果、信州和田産の可能性が想定されるという結果を得た(第8章考察参照)。

接合13(図138) 黒曜石製。折断面の接合によって剥片1点が復元された資料である。原石の大きさ形状ともに不明である。原産地分析の結果、信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

接合14(図138) 黒曜石製。折断面の接合によって剥片1点が復元された資料である。原石の大きさ形状ともに不明である。原産地分析の結果、信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

接合15(図138) 黒曜石製。微細剥片2点が接合。原石の大きさ形状ともに不明である。原産地分析の結果、信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

接合16(図138) 黒曜石製。折断面の接合によって剥片1点が復元された資料である。原石の大きさ形状ともに不明である。原産地分析の結果、信州和田産と判定された(第8章考察参照)。

接合17(図138) 粗粒輝石安山岩製。礫1点が復元された資料である。礫は拳大の凹円礫であり、自然面に相当する部分が赤化している。この赤化は受熱によると考えられる。割れた面には赤化は認められない。粗粒輝石安山岩は赤城火山を起源とする石材でもあることから、遺跡の立地を考えると、この礫は遺跡周辺の河川流域で採取されたものと考えられる。

接合18(図139) 粗粒輝石安山岩製。礫は拳大の凹円礫であり、自然面に相当する部分が赤化している。この赤化は受熱によると考えられる。割れた面には赤化は認められない。粗粒輝石安山岩は赤城火山を起源とする石材でもあることから、遺跡の立地を考えると、この礫は遺跡周辺の河川流域で採取されたものと考えられる。

接合19(図139) 粗粒輝石安山岩製。礫は拳大の凹円礫であり、自然面に相当する部分が赤化している。この赤化は受熱によると考えられる。割れた面には赤化は認められない。粗粒輝石安山岩は赤城火山を起源とする石材でもあることから、遺跡の立地を考えると、この礫は遺跡周辺の河川流域で採取されたものと考えられる。

接合20(図139) 粗粒輝石安山岩製。礫は拳大よりやや小さい円礫であり、自然面に相当する部分が赤化している。この赤化は受熱によると考えられる。割れた面には赤化は認められない。粗粒輝石安山岩は赤城火山を起源とする石材でもあることから、遺跡の立地を考えると、この礫は遺跡周辺の河川流域で採取されたものと考えられる。

接合21(図139) 粗粒輝石安山岩製。礫の大きさは不明であるが重円礫である。自然面に相当する部分が赤化しており、この赤化は受熱によると考えられる。割れた面には赤化は認められない。粗粒輝石安山岩は赤城火山を起源とする石材でもあることから、遺跡の立地を考えると、この礫は遺跡周辺で採取されたものと考えられる。

接合1・黒曜石

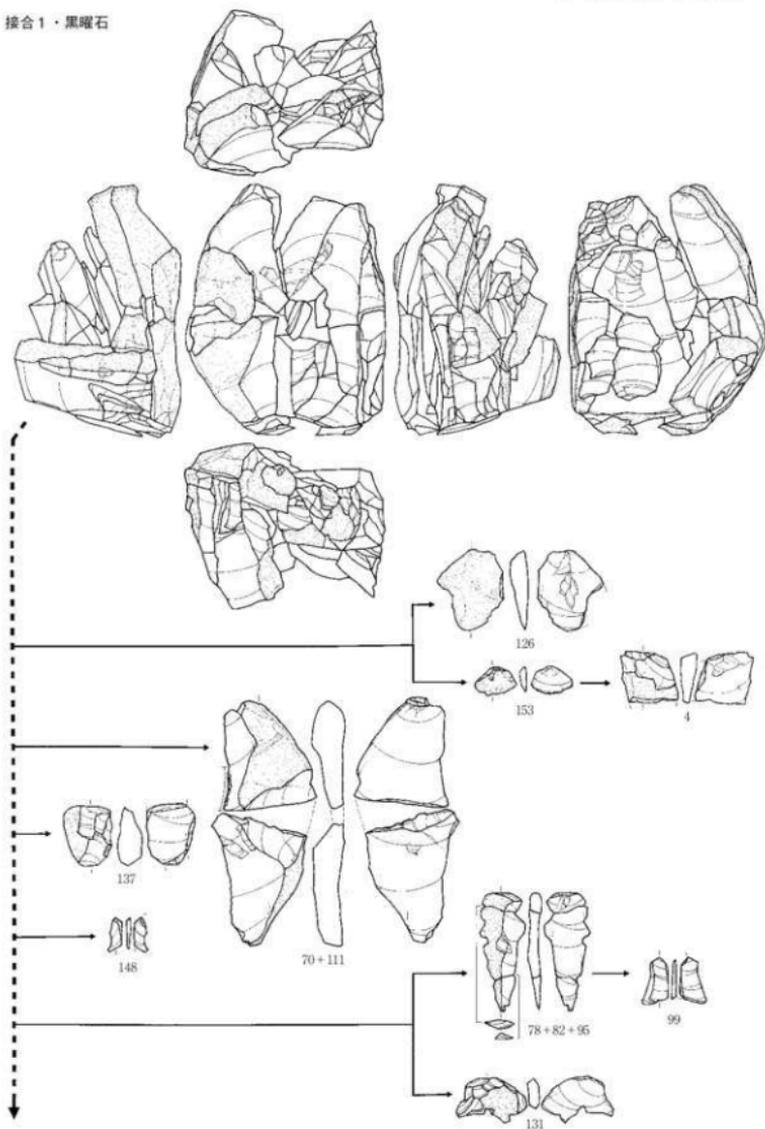


图133 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺1/2)

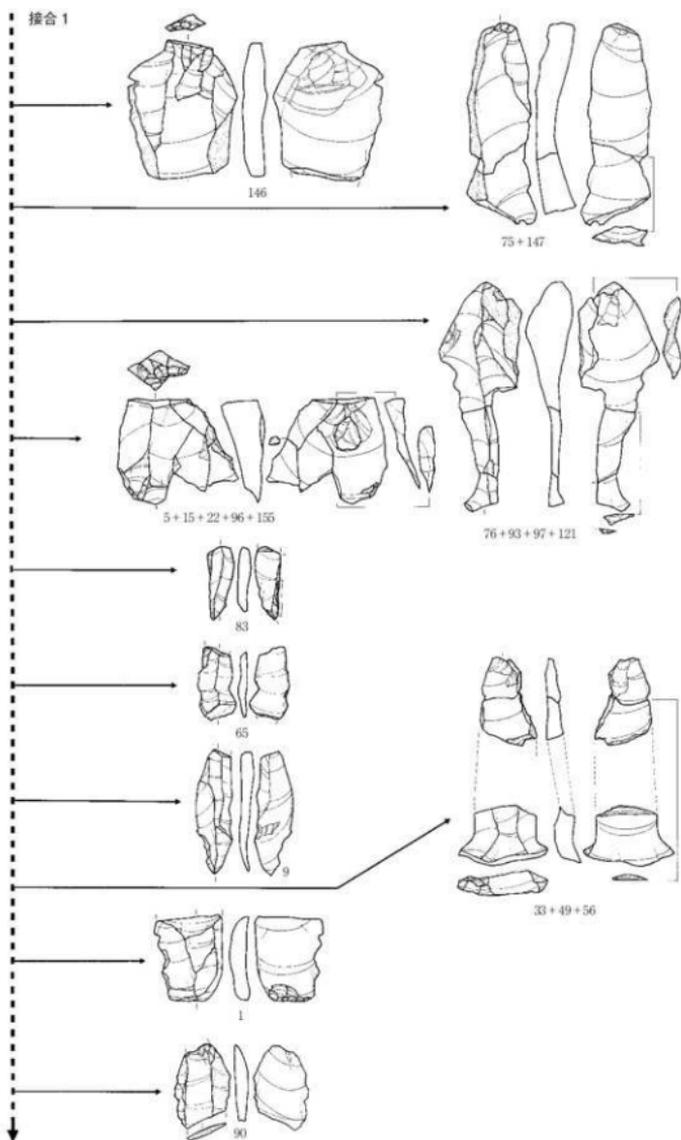


图134 龟泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺1/2)

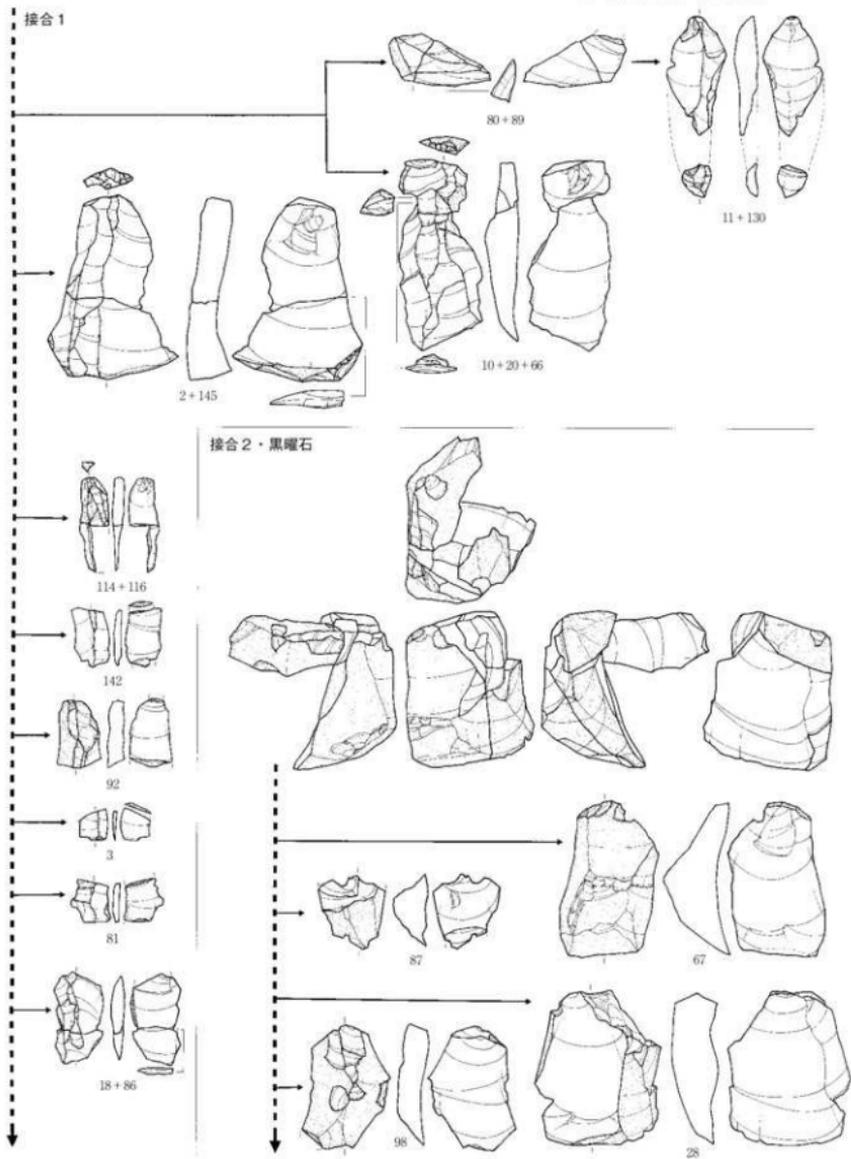
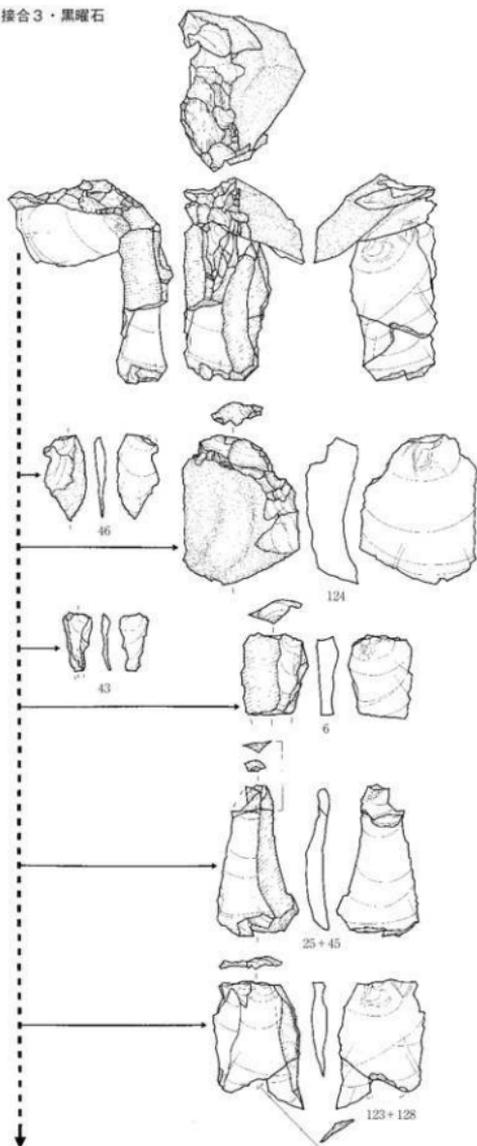
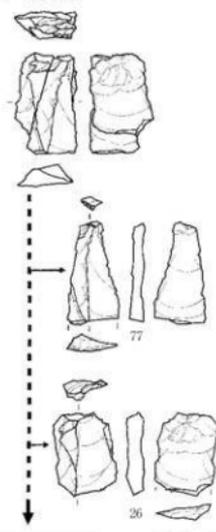


图135 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺1/2, 接合2は2/3)

接合3・黒曜石



接合7・黒曜石



接合8・黒曜石

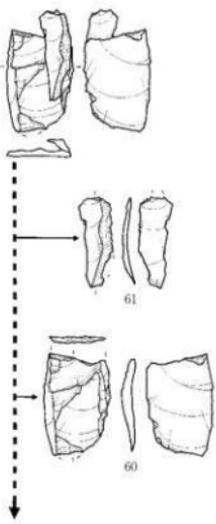
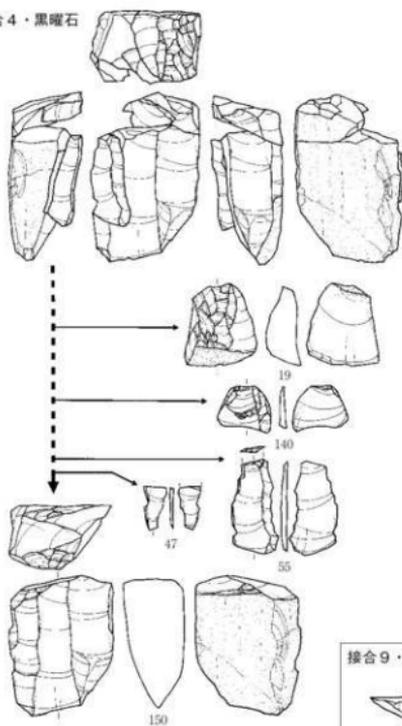
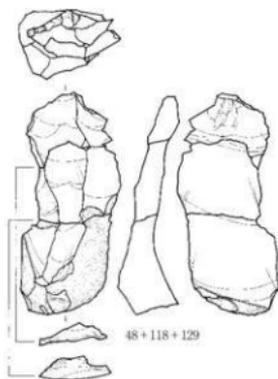


图136 龜泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

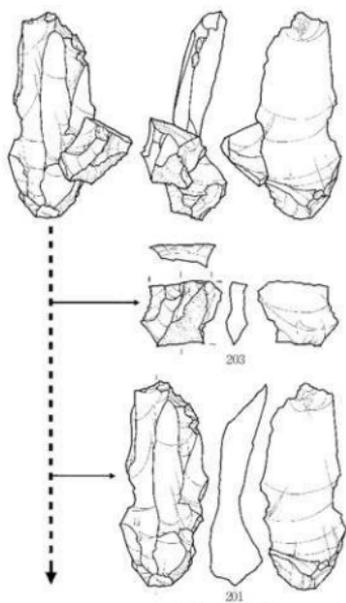
接合4・黒曜石



接合6・黒曜石



接合5・黒曜石



接合9・黒曜石

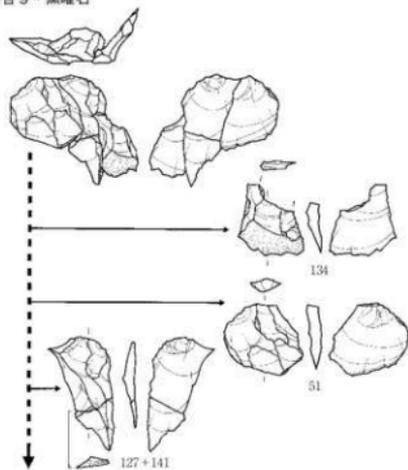
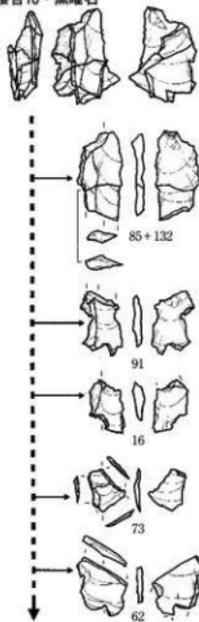
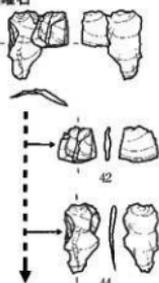


图137 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

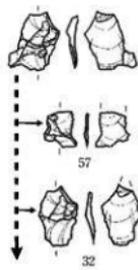
接合10・黒曜石



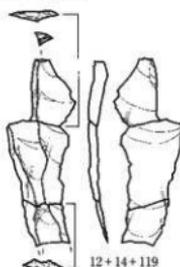
接合11・黒曜石



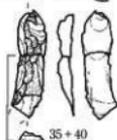
接合15・黒曜石



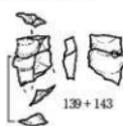
接合12・黒曜石



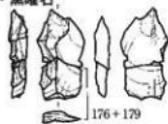
接合13・黒曜石



接合16・黒曜石



接合14・黒曜石



接合17・粗粒輝石安山岩

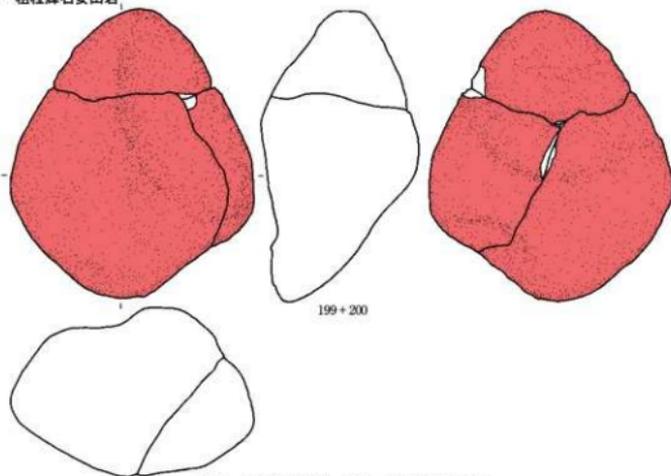
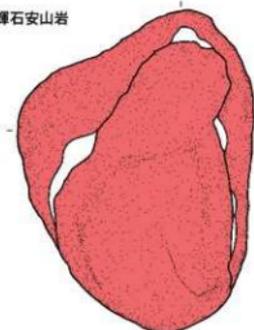


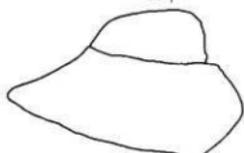
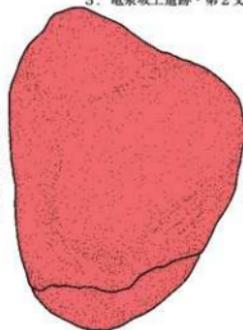
图138 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

接合18・粗粒輝石安山岩



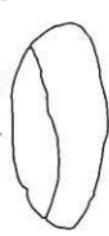
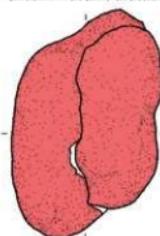
241 + 242

3. 亀泉坂上遺跡・第2文化層

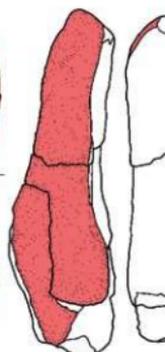
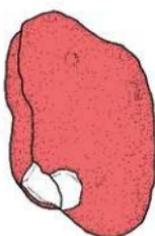


接合21・粗粒輝石安山岩

接合20・粗粒輝石安山岩

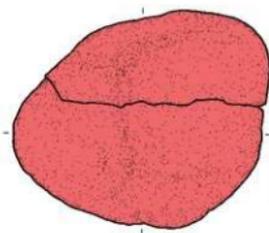


230 + 231



227 + 233 + 247

接合19・粗粒輝石安山岩



229 + 232

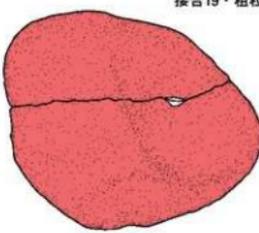


図139 亀泉坂上遺跡 第2文化層(縮尺2/3)

II. 石器の分布

赤城山南麓地域においては、いくつもの低地域がほぼ南北に樹枝状に延びる。第2文化層の石器群は、このような低地域に挟まれたローム台地上の西に向かい緩やかに傾斜した地点より出土した(図106)。

石器分布状況(図140) 石器の平面的な分布状況を見ると、大きく二つの集中域に分別して理解できそうである。これらの石器集中地点はおおよそ10m離れている。

接合資料の分布状況(図141～図143) 接合資料は21点確認された。接合資料は、二つの石器集中域のそれぞれの地点に集中して分布している。この二つの石器集中域を橋渡しするような接合資料は認められない。接合資料の分布をみる限りでは、二つの集中域はそれぞれが独立的な存在として理解できる。西側の集中域に関しては、黒曜石製石器の剥片剥離についての接合資料が集中分布する(図142)。一方、東側の集中域に関しては、黒曜石製石器の接合資料も少量認められるが(接合5・接合14)、粗粒輝石安山岩製の礫及び礫片についての接合資料が集中分布している(図143)。これらの粗粒輝石安山岩製資料の多くは、受熱によると考えられる赤化が認められる。

器種別石器の分布状況(図144～図147) 製品類の分布をみると(図144)、西側の集中域に製品類が集中する。東側の集中域には、二次加工ある剥片(No.211)と石刃(No.201)の2点が分布するのみである。東側の集中域には、粗粒輝石安山岩製の礫及び礫片が集中分布する(図145、図146)。これらの礫・礫片の多くは、受熱によると考えられる赤化が認められる。

剥片と微細剥片の分布をみると(図147)、西側集中域に集中する傾向がある。この部分には、黒曜石製石器の剥片剥離に関する接合資料が集中分布することからしても(図142)、西側集中域が剥片剥離を色濃く反映したものと解釈できる。また、東側集中域にも微細剥片が少量ではあるが分布することから、小規模ではあるが剥片剥離に関係した分布であると考えられる。

石材別石器の分布状況(図148) 黒曜石を使用石材の主体とする石器群であることから、全域にわたり黒曜石製石器が分布する様子が観察できる。粗粒輝石安山岩製の資料が東側集中域に集中する現象が観察できる。これらの資料は礫及び礫片であり、その多くは受熱によると考えられる赤化が認められる。

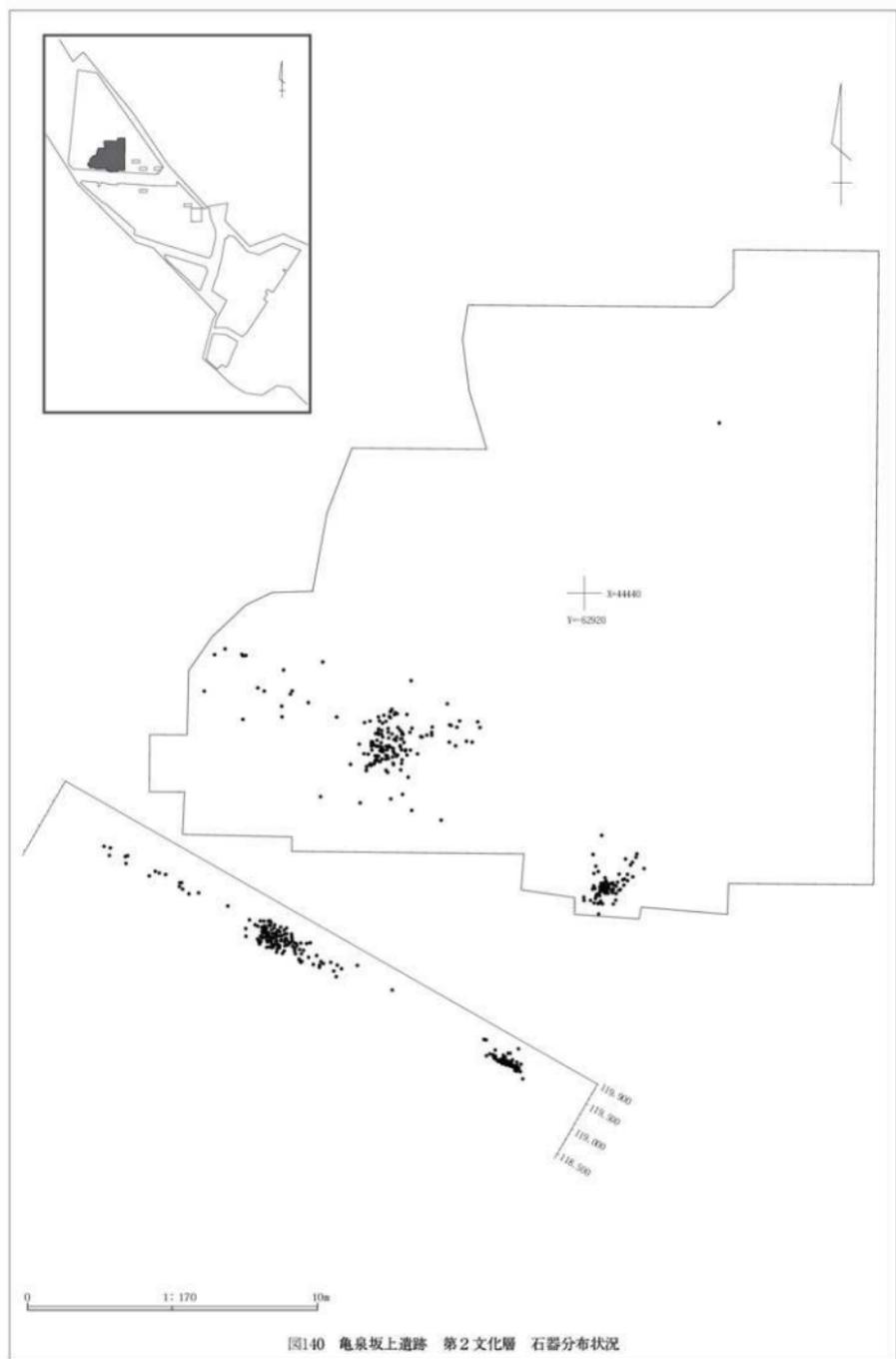


图140 龟泉板上遺跡 第2文化層 石器分布状況

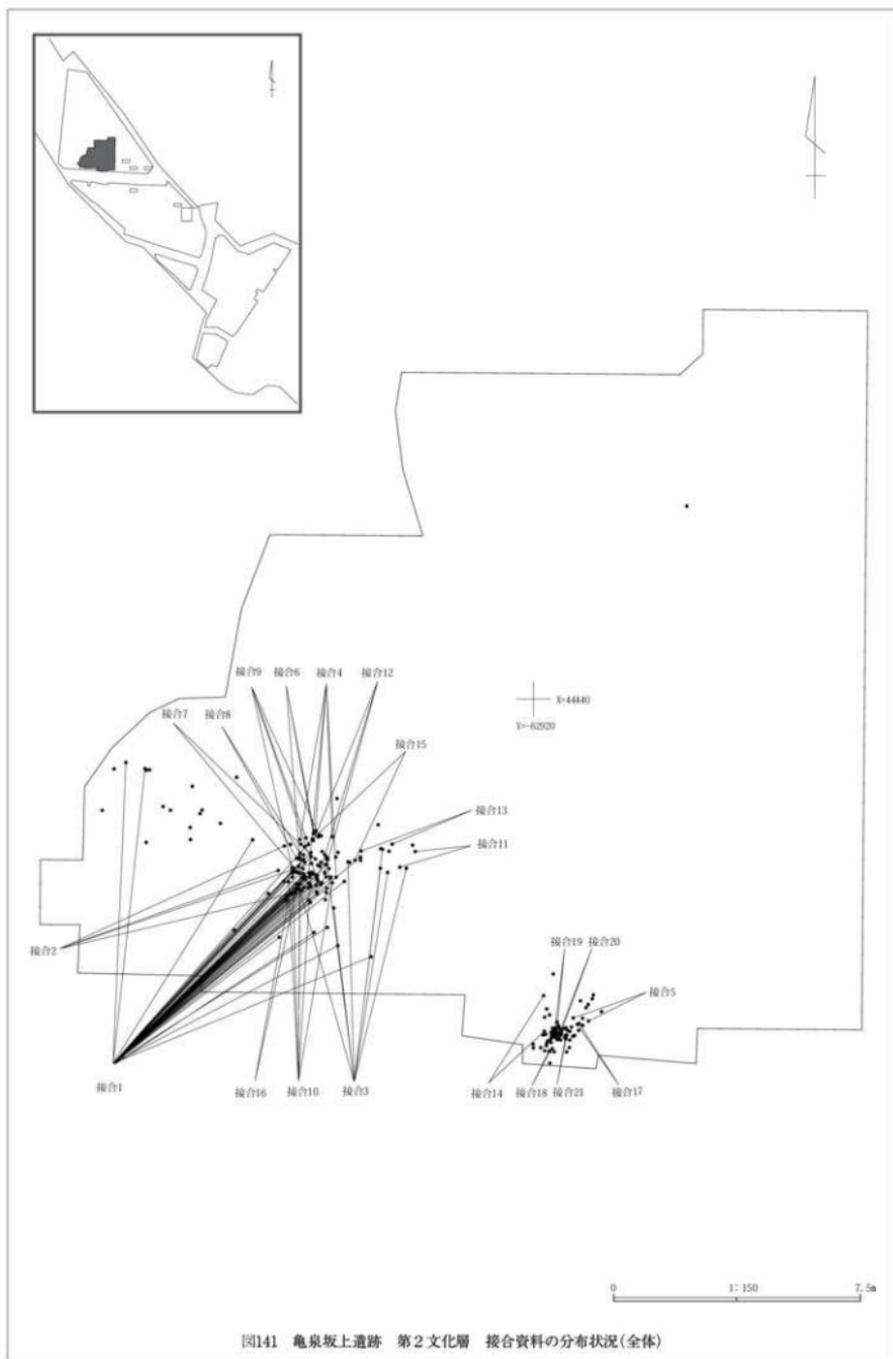


図141 亀泉坂上遺跡 第2文化層 接合資料の分布状況(全体)

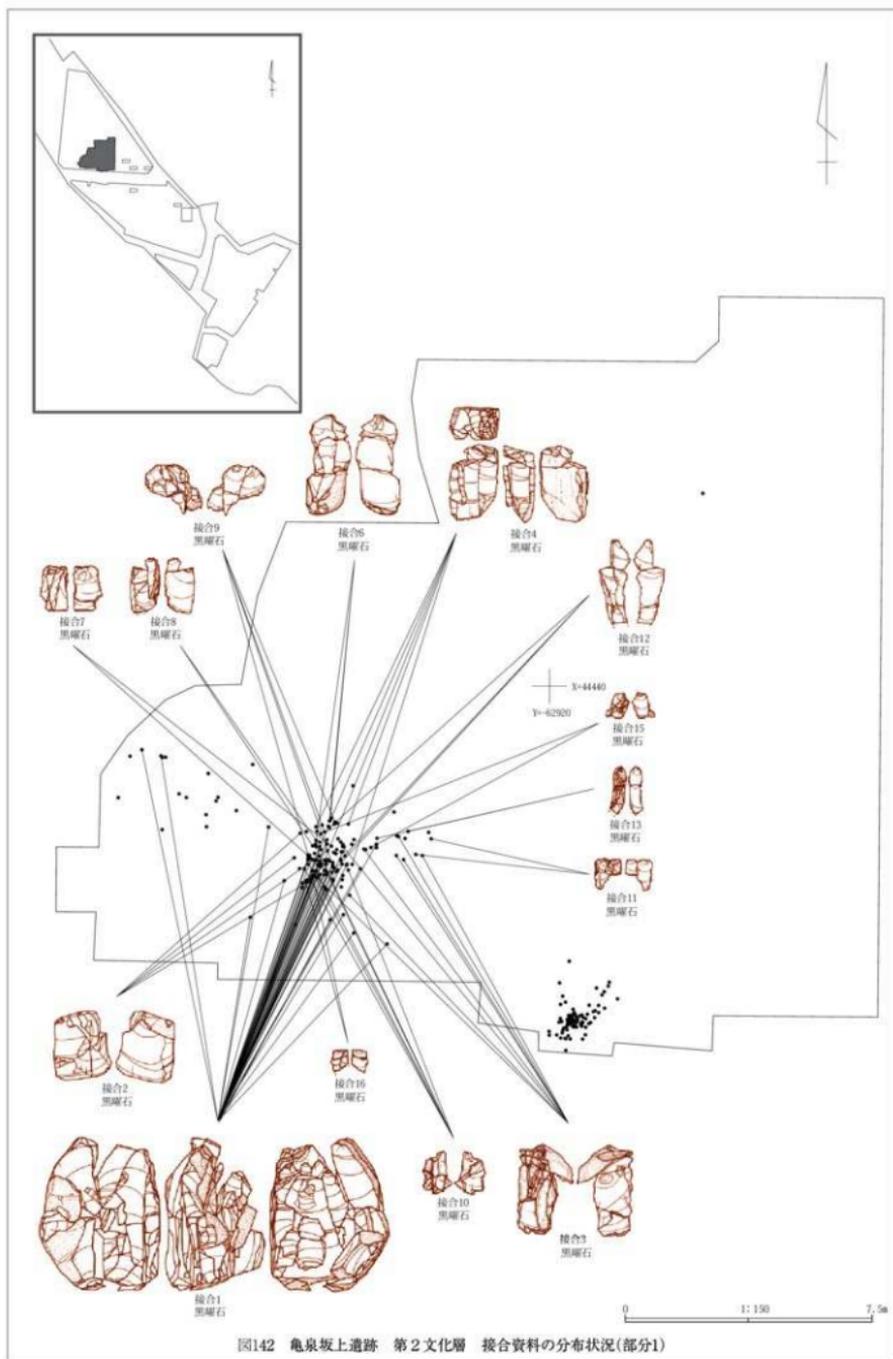


図142 亀泉坂上遺跡 第2文化層 接合資料の分布状況(部分1)

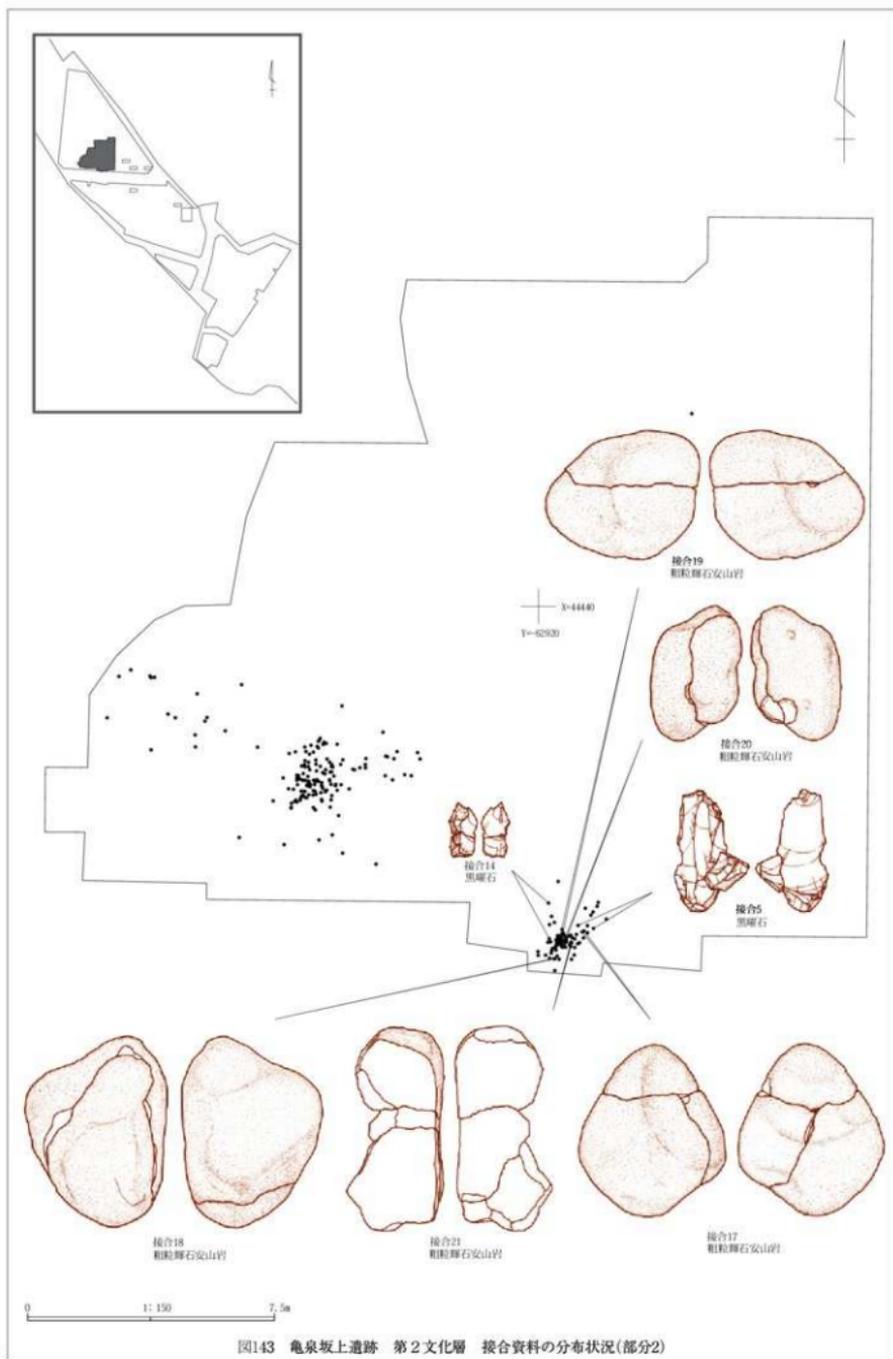


図143 亀泉坂上遺跡 第2文化層 接合資料の分布状況(部分2)

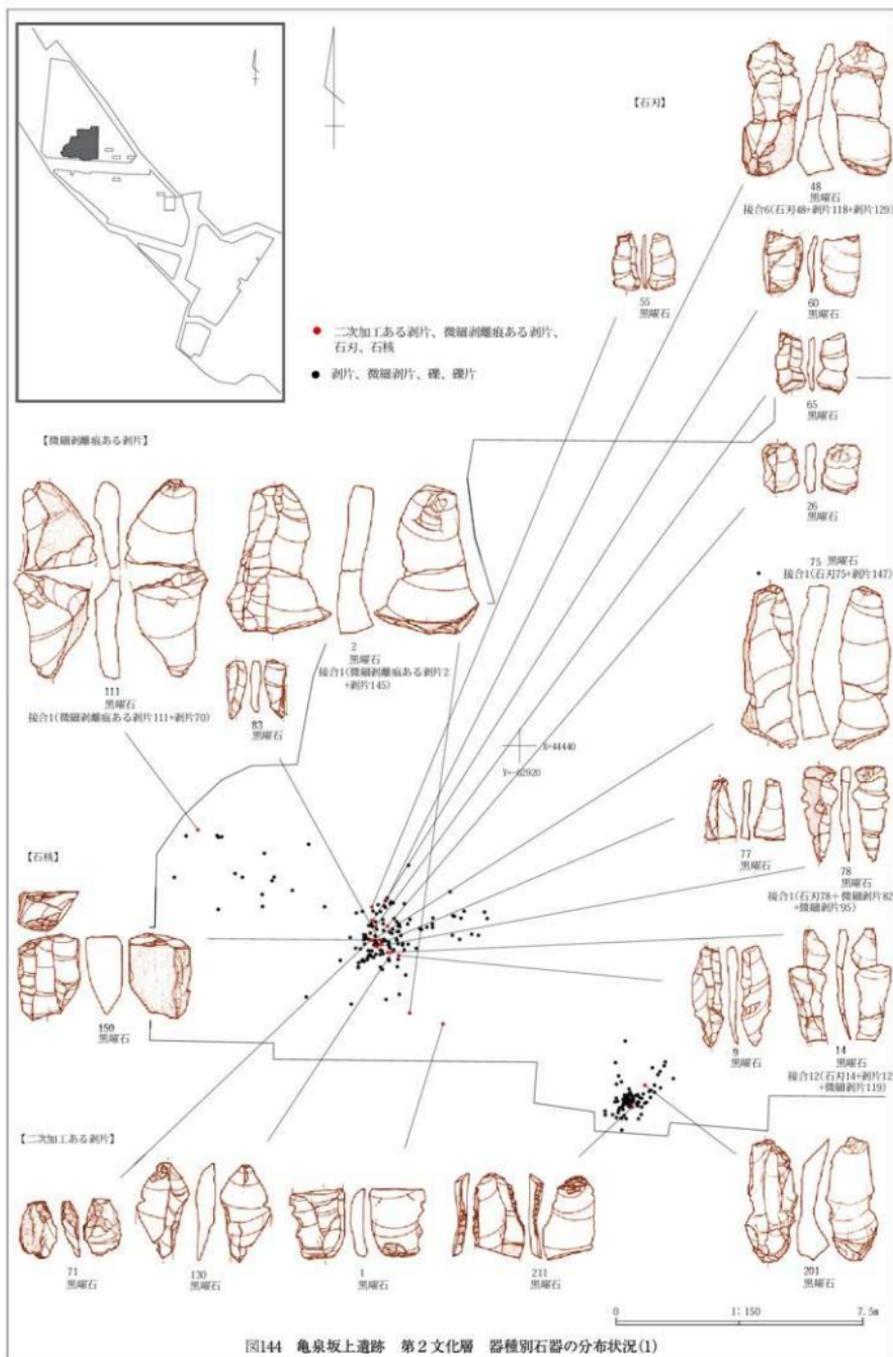


図144 亀泉板上遺跡 第2文化層 器種別石器の分布状況(1)



- 礫、礫片
- その他

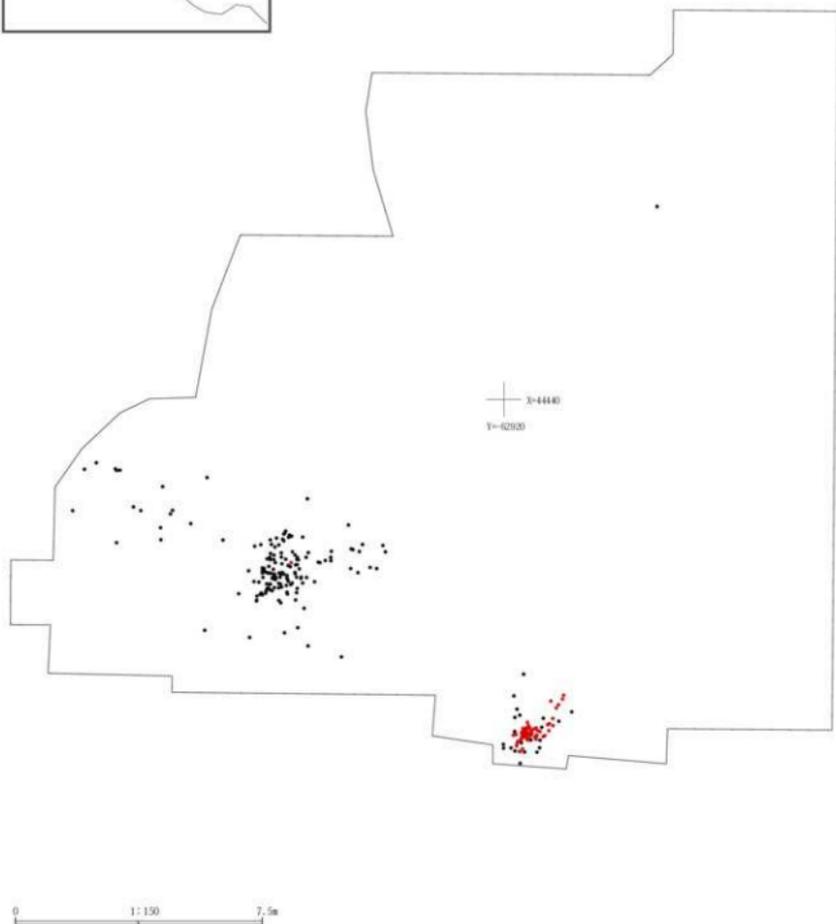


図145 亀泉坂上遺跡 第2文化層 器種別石器の分布状況(2)

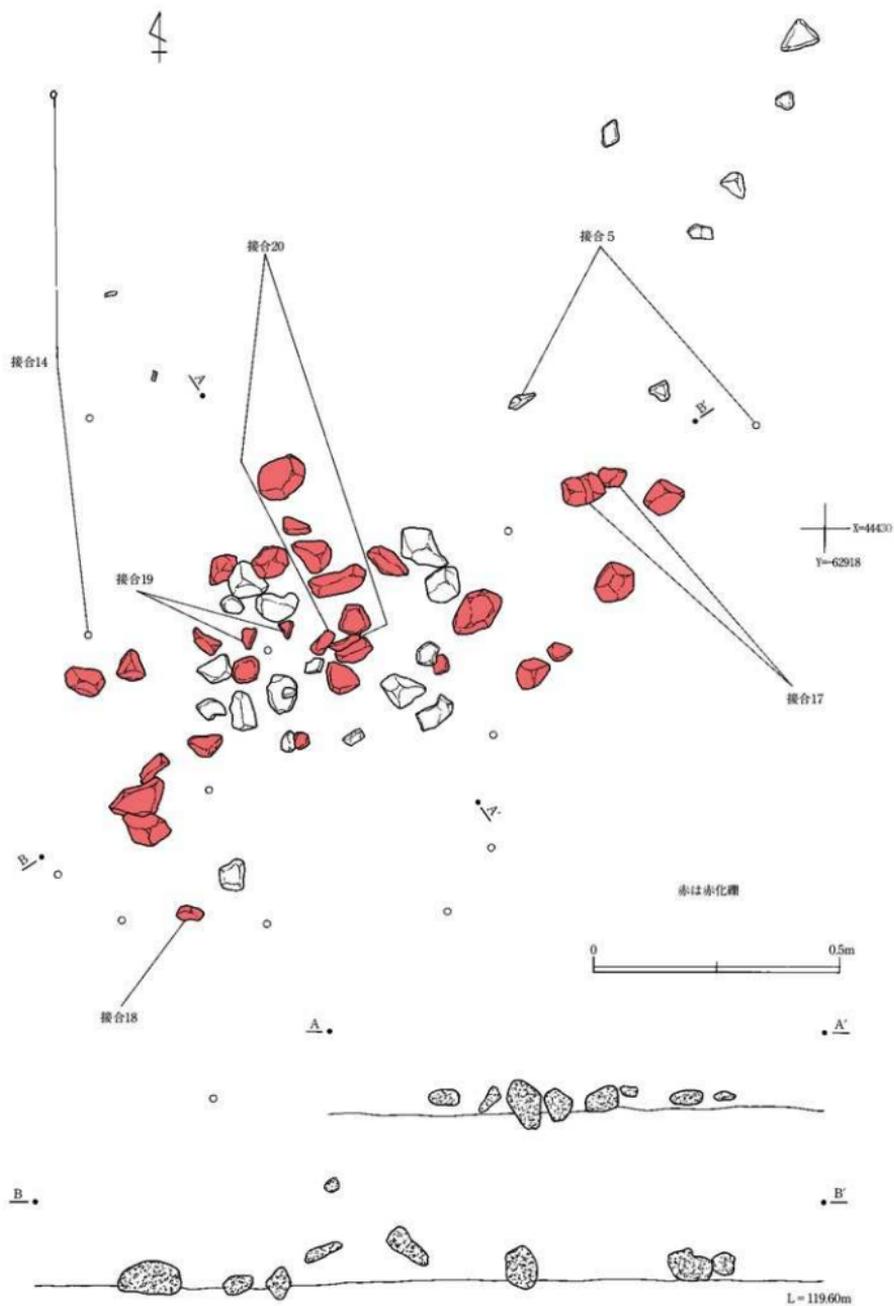
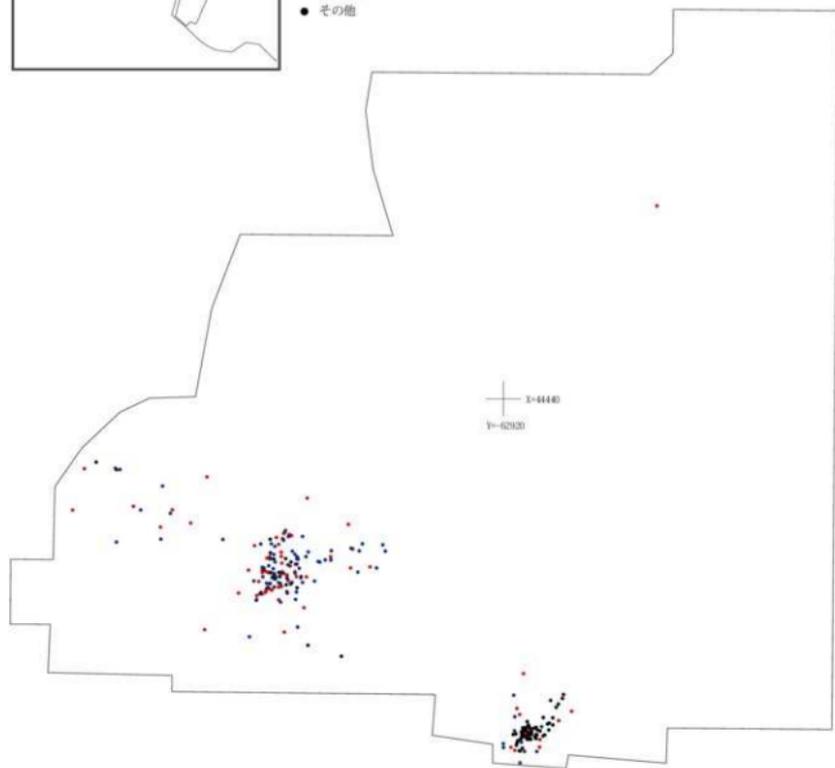


图146 亀泉坂上遺跡 第2文化層 礫・礫片出土状況

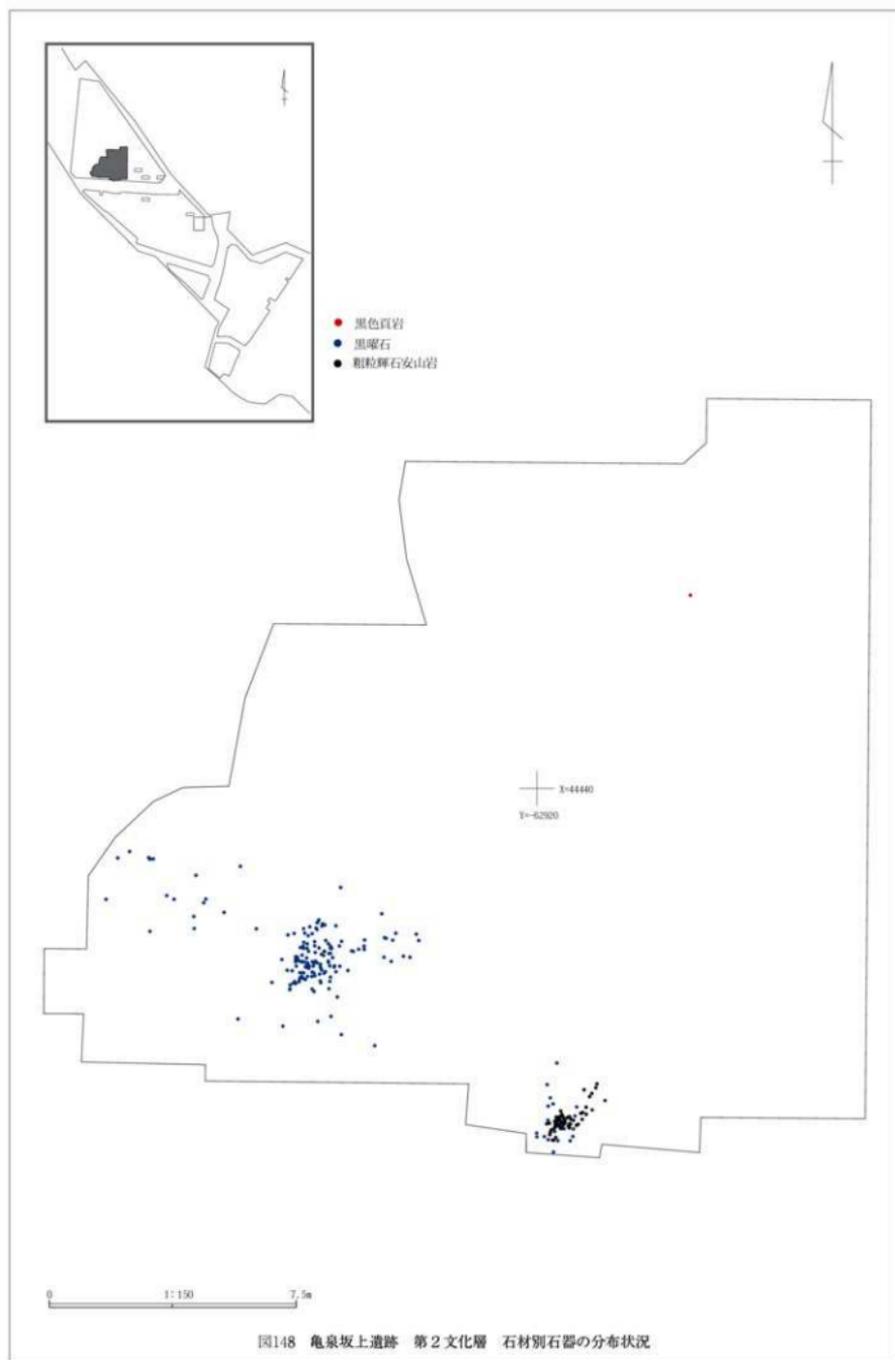


- 湖片
- 微細剥片
- その他



0 1:150 7.5m

図147 亀泉坂上遺跡 第2文化層 器種別石器の分布状況(3)



4. 亀泉坂上遺跡・第3文化層

I. 出土石器

第3文化層は、ローム台地の頂部から西に向かって緩やかに傾斜した場所より出土した(図106)。この文化層は14点の資料からなる。出土層位をみると、Ⅶ層とⅧ層からの出土であることから、後期旧石器時代の初頭あるいはそれを遡ることが考えられる。結晶片岩類の資料とその他の石材の礫及び礫片から構成されるものであり、かつて房谷戸遺跡第Ⅲ文化層で確認された結晶片岩製の資料((財)群理文1992b)と同様な内容をもつものと評価できる。

表31 亀泉坂上遺跡
第3文化層
層位別出土点数

層位	点数
Ⅶ	6
Ⅷ	8
総計	14

表32 亀泉坂上遺跡 第3文化層 器種と石材

器種	石材				総計
	雲母石英片岩	緑色片岩	ホルンフェルス	粗粒輝石安山岩	
礫				4	4
礫片	1	1	1	7	10
総計	1	1	1	11	14

(1) 各器種

礫片(図149、図150) 10点が出土。そのうち2点が結晶片岩類製。No.262は雲母石英片岩製、No.257は緑色片岩製。いずれも粗粒で軟弱な石質であり、剥片石器の石材としては適さないものである。結晶片岩類は、群馬県南西部の三波川帯に主産地があり、現在までのところ自然的要因で赤城山南麓地域に混入することは考えられない石材である(津島2008)。No.261はホルンフェルス製。粗粒な石材であり、剥片石器の石材としては適さないものである。その他の資料は、全て粗粒輝石安山岩製の礫片である。粗粒輝石安山岩は赤城火山を由来とする石材であり、赤城山麓で非常によく認められる石材である。ここでは、人工物として取り扱っているが、なんらかの自然的要因で混入した可能性も否定できない。

礫(図151) 4点が出土。いずれも粗粒輝石安山岩製。粗粒輝石安山岩は赤城火山を由来とする石材であり、赤城山麓で非常によく認められる石材である。ここでは、人工物として取り扱っているが、なんらかの自然的要因で混入した可能性も否定できない。

II. 石器の分布

石器分布状況(図152) 資料の分布状況を見ると、全ての資料が集中して分布する様子は観察できない。一つのグリッドに数点の資料がまとまる傾向はあるが、全体とすると広範囲に散在する状況が認められる。

4. 亀泉坂上遺跡・第3文化層

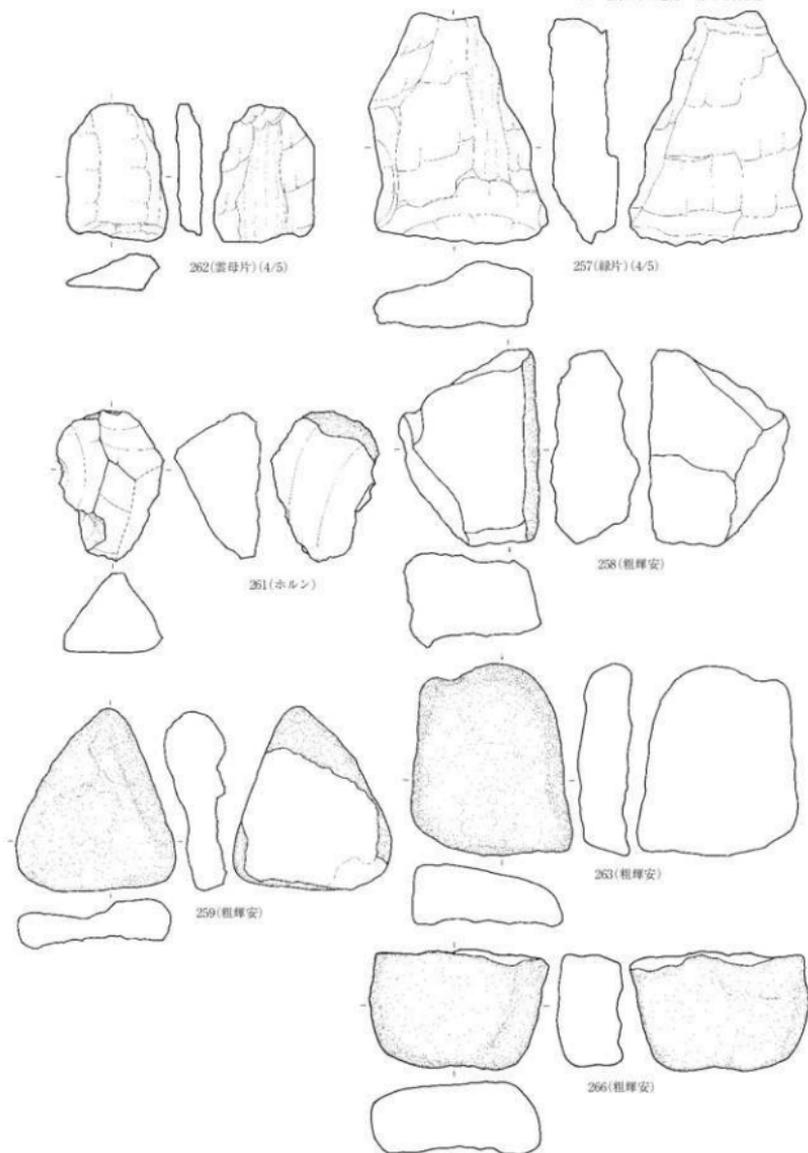


図149 亀泉坂上遺跡 第3文化層(縮尺2/3, 上の2点は4/5)

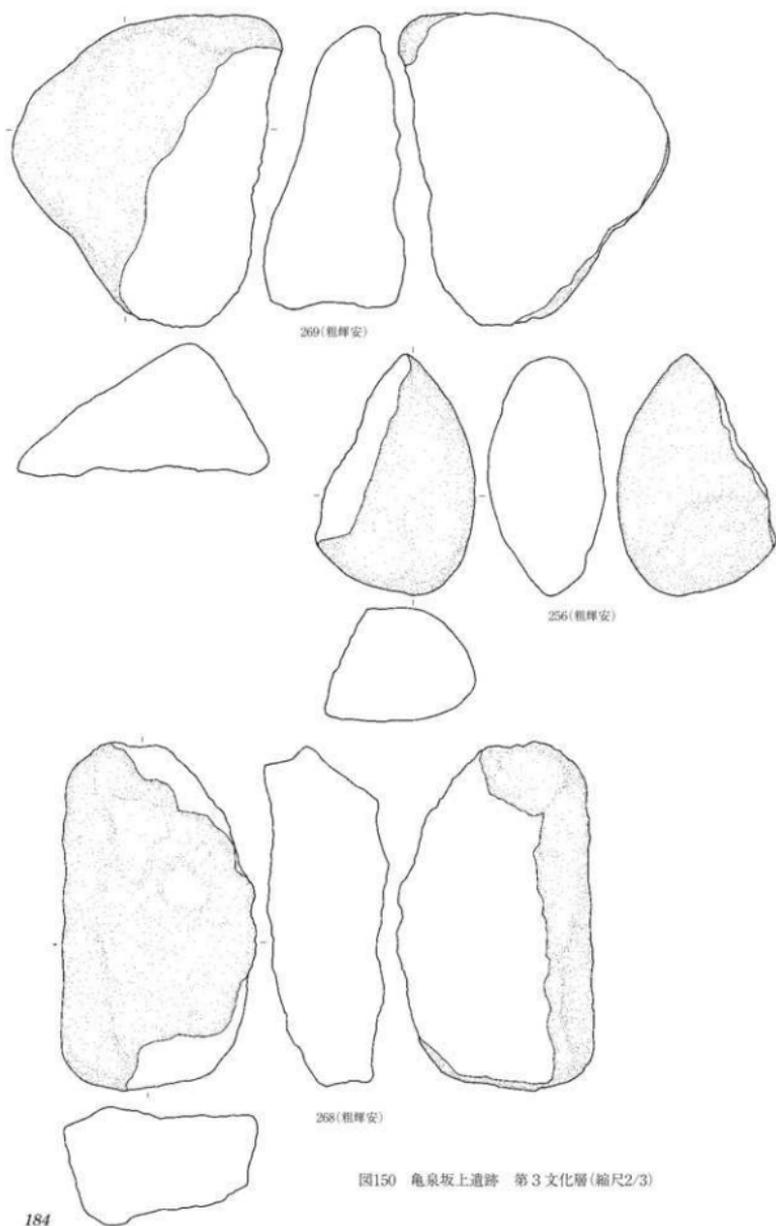


图150 龟泉坂上遺跡 第3文化層(縮尺2/3)

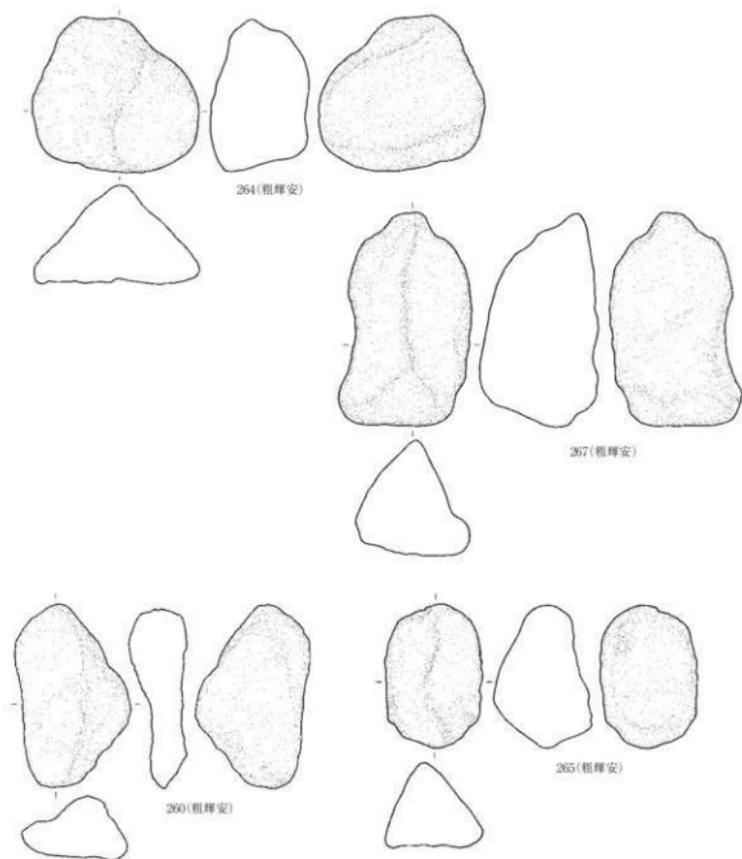


图151 亀泉坂上遺跡 第3文化層(縮尺2/3)

